THE CENTRAL REVIEW

大正二年七月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

七月號

第廿八年第七號 第貳百九拾参號

○現代の呪はれたる生は何を夢み、何を要求するか？曰く單純!!

曰くシンプル、ライフ!!

シヤルル、ワグネル原著　文部省譯（再版將に盡きんとす!!）

單純生活

四六版總洋布製
函入　裝釘優美
定價金四拾五錢
郵稅金八錢

○本書の內容は人生の眞義の總量にして現代生活が要求する全體なり本書の上梓さるゝや旬日ならずして再版を見るに至れり。而も再版將に盡きんとす。如何に本書が複雜なる現代生活の要求に適應したるか以て識らる可く著者の自序に曰く『單純は特に經濟又は社會的情態に關するものにあらず寧ろ大相違ある各種階級の生活を生動せしめ且之を改善するを得べき精神なり余は斷言す精神の單純は吾人の力なき愛惜を以て之を追隨するに終るが如きことなく之を以て吾人決心の主題及び力行の目的となすを得るなり』と。

發行所
東京市日本橋區新右衞門町一六
振替貯金口座東京三三九六番
株式會社國定教科書共同販賣所
大阪市西區阿波座上通一丁目一
振替貯金口座東京一五〇三五番
同　大阪出張所

○本書は各地特約販賣店及著名書肆にあり

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學講義錄



本會員帽章



本會員徽章

第四回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ!!!

「本會に入會すれば」

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之本會員の常に多とする所なり

講義錄見本附き
無代進呈
規則書申込次第

初等科 五ヶ月卒業

教授科目

論文、小說、新體詩、和歌、俳句。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科

高等科 五ヶ月卒業

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町（電話本局四五四七番 振替東京五二一九番）

大日本文學會

ショー傑作集

文學博士坪内逍遙譯

第壹

ウォーレン夫人の職業

譯者逍遙博士我が文壇の泰斗たるもの卅年、而も未だ曾て現代社會を寫したるものに筆を染めず、翻譯を試みたることすらあらず其之あるは實に本譯を以て嚆矢と爲す、劇文學にも劇術にも精通したる博士にして今新に處女譯を試む、何等か特殊の用意あり工夫あり特色あるべきは絮説を要せず、原作は世界的大家ショーが傑作中の傑作社會問題を提供して海外文壇を騷したる名篇なり。

洋装全一冊
挿圖數葉入
正價六拾錢
郵税四錢

イプセン作
島村抱月譯

人形の家（ノラ）

好評再版

總洋布製全壹冊
挿圖數葉入
正價金九拾錢
郵税金八錢

文學博士坪内逍遙 市川又彦共譯

第貳

武器と人

世界文壇の毒罵王、現代社會の辛辣なる批評家、眞面目の嘲嚯家、一種無類の喜劇作家G、B、Sが傑作中の傑作――西歐文明の浸漸によつて俄に面目を變せんとする新文明國民の裏面の消息――エセ愛國、エセ尙武、エセ義俠、エセ高等戀愛、エセ文明、エセ禮儀、エセ體裁等――を解剖的に描寫し來つて骨を抉り嘲罵を剔る――原作の妙も譯文の洗練も前譯に優る一等、

洋装全一冊
挿圖數葉入
正價六拾錢
郵税四錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一二三番 早稻田大學出版部

（發賣所 東京日本橋本町 振替東京二四〇番 博文館）

七月文壇の權威

文章世界

七月號 廿錢

一日發行　正價　郵税二錢　郵税共十四冊二圓七十三錢

小説

◎雛罌粟　鈴木三重吉

◎鰻　青木健作

◎裏門　中村星湖

六月の小説を讀んだ感……田山花袋

外國文學の翻譯振……片上伸

木の葉の茂み……水野葉舟

パリー印象記……ブランデス

△虚子の平生……杵島山　△セザンヌの風景畫　齋藤與里

⊙私の文學を愛する心持……中澤臨川

⊙藝術と職業との交渉……平出修

⊙「生の要求と文學」を續む……本間久雄

△俳人と旅……沼波瓊音　△モウパッサンと云ふ人……

獨創力の養ひ方……三井甲之

青鉛筆……長谷川天溪

文壇暗流誌……生方敏郎

六月の文壇……白石實三

△甘酒の句……內藤鳴雪

△ハルビンより……土岐哀果

東京日本橋區本町　博文館　振替東京二四〇番

新粧八版出來

歐洲の表裏歷々如睹

伯爵 大隈重信序
農學博士 法學博士 新渡戸稻造序
櫻井鷗村著

天覽

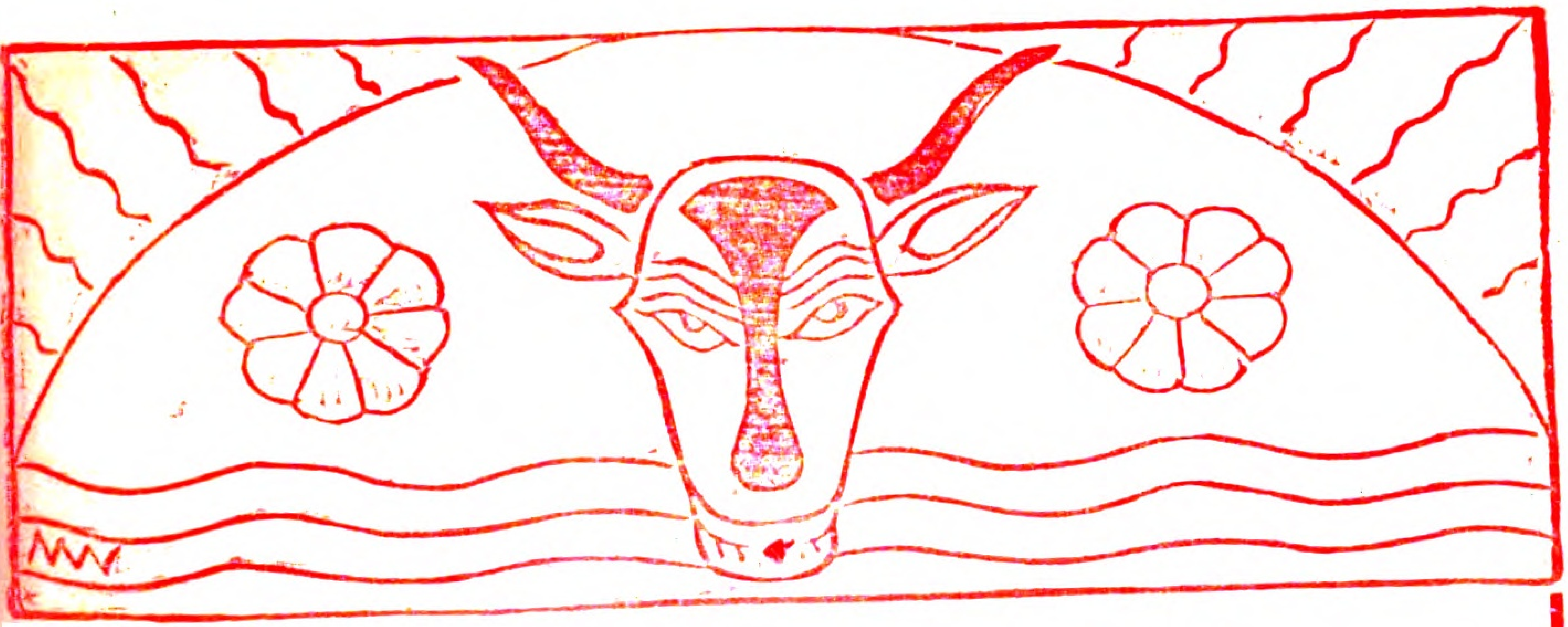
歐洲見物

菊判全一册●最上製美本●挿入寫眞壹百餘枚●定價壹圓七拾錢●郵送料十二錢

新渡戸博士評言 官命にあらず學術研究にあらず特殊の「システム」を立てずして海外に遊歷し目に觸れ耳に達したる地理、歷史、人情、風俗を捉へて文章に託したるものの中にて櫻井君の「歐洲見物」は實に秀拔てある多くの外遊者の看過する微細の事實をも遺憾なく我が藥籠中に捉へて縱橫圓轉の筆に現はし而も一道の精神が脈絡貫通してゐる

綠蔭楊下唯一の侶伴

東京麹町二丁目 丁未（ていび）出版社 振替口座七八四七



中央公論第廿八年七月號目次

▼公論

▼說苑



三都の夏の趣味と印象

人物評論

外交界の人物


營業品概目
○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
D.K.
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話(長)新橋 一一〇三 二一〇七
振替口座七八〇七

EVA GONZALÈS



MANET

中央公論



七月號
廿八年第八號
第二百九十三號

支那民族及び政局の前途

（一）

吾人が支那の時局を觀察し其歸趨を研究せんとするに當り、先以て決定を要する一大問題あり、他なし支那人民は果して老朽民族なりや否やと云ふ是れなり、支那が四千載に亙る古き歴史を有し其曾て同時代に當り覇を一方に稱せしアッシリヤ、バビロン、埃及、羅馬、希臘諸邦の孰れも遠き昔時に亡滅に歸せし關はらず、獨り尙ほ四億の民衆を擁して今日に至れるは東西歴史の一大奇觀にあらずや、而して其近代に至り國勢の頗る振はざるを見るもの多くは支那民族の老朽を思ふに至れる亦已むを得ざるなり、世人支那を稱して老大國と云ふ、自ら殆んど元氣消耗して獨立を全うし能はざるの狀を聯想せしむ

るものなくんばあらず、嗚呼支那人民は果して老朽せりや、彼等は今や中華民國を創立し、又は國家改造を企圖するも其想像徒らに誇大にして意氣實力遂に之に伴ふ能はず、其偉圖雄略も終に一の大なる幻想に過ぎざらんとするや否や、吾人は刻下問題となれる袁世凱と孫黄の關係に就てのみ之を云はず、袁派遂に統一の鴻圖を成すを得べき乎、孫黄一派其志を遂ぐるを得べき乎、或は又兩派とも遂に志を成す能はざる乎、目下の問題は如何に解決せらるゝとするも、若しも支那人にして老朽民族たらざるに於ては支那の前途は決して悲觀を容れず自ら洋々春海の如きものあらん、之に反し支那民族遂に老朽して、雄圖を大成するの壯心手腕なしとせん乎、假令今日統一の業成り共和の形式成立すべしとするも、是れただ外形の成功に過ぎずして、老大國の末路は到底免る能はざるべし、嗟呼支那人民は果して老朽せりや否や、其解決の如何は我邦の前途にも自ら一大影響なくんばあらず、是れ吾人が先決問題として聊か之を論ぜんとする所以なり。

歴史の古きと近代支那の頗る振はざりしとよりして漢民族を老朽視したるものは、最近の支那の形勢に對して頗る奇異の感なきを得ざるべし、卽ち一昨年革命勃發と共に支那の政權は乍ち壯年有爲の人士に歸し、其多くは近世の學に通じ一種の理想を抱きて責任の衝に當るの狀頗る敬重に値するものあり、宛も五十年前の我邦維新前後の光景に彷彿たり、仔細に評論すれば近時隣邦の出來事にして滑稽に値するものあり、又非難すべきものありと雖も、我維新の前後の事亦た往々兒戲に類することなきに非ず、兎に角最近の支那は老朽國としては餘りに元氣旺盛なるに似たり、加藤高明男が近頃支那漫遊より歸朝

して語る處に依れば、同氏も亦一種の感に打たれたるものゝ如し。曰く、

私が明治三十二年に漫遊せし時清國は官民共に老人を以て重要地位を占め我々は子供扱ひにせらるゝの感ありしも今や朝野の重要人物は多くは三十臺より四十臺にあり日本は却て老人國と指目せられんとする有樣となれり彼等は我々を迎へて先進國の先輩來れりと歡待至らざるなく日本の制度文物を擧げて模倣せんとす私は支那の政治は前途如何に成行くべきやは容易に判斷し能はざるも此の如く個人として學識あり知識ある立派なる人物の發憤努力を以てせば政治も相應に進歩すべしと信ず少なくとも私は之を希望す云々

吾人は親しく刻下の形勢を觀ずと雖も蓋し加藤氏の感覺は能く眞相を寫し得たりと思ふ、然らば即ち支那人民は未だ老朽せざるか、五千載の古き歷史は如何に之を說明すべきか、米國の碩學ドレパー曾て『民族も個人と同じく滅亡を免れず』と喝破せしが、素より幾多の例證に基ける推定たるは否むべからず、アッシリヤ、バビロン、埃及、希臘、羅馬等皆なドレパーの格言を支持するに似たり、然らば支那は當然老朽ならざるべからず、近世の新民族たる日本を始め、英、佛、獨、露、伊、米等亦當然衰亡を免るべからず、嗚呼ドレパーの推定は果して歷史の眞相を盡せりと云ふべき乎、想ふに是れ眞理の一半を喝破するに過ぎずして、若し他の幾多の事情を參酌して觀察すれば民族は必ずしも個人の如く必然衰朽せざるべからざるの理由なきに似たり、蓋しドレパーの推定は一民族が他の民族と混和同化せず、新血液を注入するを努めず、又は一民族中一階級が永久政權を專有して新陳代謝を杜絕し自然に衰朽老廢を來す場

合に適用するを得べきも、若しも之に反して近世國家組織の理想に從ひて各方面の階級に參政權を許るし、又たは益々異人種雜婚の道を啓くに於ては必ず民族の元氣を永久に維持するを得べきなり、羅馬、希臘が近代に至りて再び勃興し北歐の新民族と共に文明の途上に驅馳するに至れるは中古時代に大に北狄蠻人の新血液を注入せられし結果にして、爲めに一時は國亡び文明の光消えたるの觀あるも老朽者遂に一變して新進氣鋭と爲れるもの亦た之に基因せり、而して支那民族が五千年の歷史を有しながら、幾度か朝を代へ興亡治亂の變を經たるに關はらず、今日尙ほ元氣消磨せず新興の機運に接するが如くなる所以のもの亦た他の理由あるに非ず、古來殆んど間斷なく北方蠻族の侵略に遭ひて血液を新鮮にするを得たるが故に由れり。

（二）

漢人種の支那に入るや、其最初に征服するを要せしは、已に之に先んじて此土を有せし苗族なりとす、斯くて堯舜の時より征代に從事し夏殷周に至り本土の大部分は漢族の統治に服したれば復た苗族の寇を虞るゝを要せず爲れるも、同時に更に北方に於て新たなる邊寇に備へざるべからざるに至れり、秦の始皇帝が天下を取るに及び(西曆紀元前三世紀)戎狄の侵害頗る甚だしく萬里長城を築きて之を防ぎしは事蹟の證明する所たり、蓋し蠻族の運動は東西略ぼ時期を同うするもの〻如く、歐洲方面に於ても宛も紀元前二世紀の頃にはフランク、チウトンの諸族盛んに北歐の天地に跋扈し、一〇四年には羅馬の精兵八萬人はローン河畔に於てチウトン民族と戰うて大敗を招けり、絶世の英雄チュリオスシーザーが盛名を揚

げしも、ゴール(今の佛國)、ブリトン(今の英國)を征服して邊境の寇を一掃したるに由れり、支那方面に於ても匈奴の侵迫益々甚だしく、漢の高祖が精兵三十萬を率ゐて疆場を掃除せんとし却て平城に於て冒頓單于の精騎四十萬に繞圍せらるゝと一週間に及び、僅かに陳平の謀により冒頓の寵姫閼氏に厚賄して免るゝを得たるは有名なる話ならずや、降りて晉代(三世紀)に入れは所謂五胡の亂あり、即ち黄河南北の地は亂れて麻の如く十六國の分立を見たりしが、就中漢人種に屬するものは三國に過ぎずして他の三國は匈奴、氐、羯、鮮卑、羌の五族(即ち五胡)に屬したり、更に下りて南北朝の時に至れば支那を二分し北方一半は皆な蠻族の跋扈跳梁に委せられたり、即ち司馬光之を論じて『晉氏馭を失し五胡雲擾し、宋魏以降南北分治し、各々國史有り、相互に排黜し、南は北を謂ひて索虜(辮髮の蠻族の意)と爲し北は南を謂うて島夷と爲せり』と云ふもの能く當時の光景を描出せるものと云ふべきなり、而して眼を轉じて歐洲を觀れば此頃に至り羅馬帝國の邊寇亦た益々熾にして、匈奴アチルラは伊太利を殘賊し、ヴンタル族は北部亞弗利加を占略し、ウィシゴースは西班牙の主人公と爲り、遂に西羅馬帝國は紀元後四百七十六年を以て滅亡せり、同時支那方面の邊寇は毫も緩和するに至らず、第七世紀に入り唐代に至れば北蠻の來寇愈々熾にして征戍の艱難は當時の詩人の最も痛切に歌ひし所なり、即ち『天山雪後北風寒、横笛偏吹行路難、磧裏征人三十萬、一時回首月中看』の如き實に其一なり、然れども當時蠻族の勢甚だ猖獗にして到底漢人の力のみを以て之を防ぐと能はず、茲に於て宛も羅馬政府の政策と符節を合する如く一部蠻族を綏撫して他の新來蠻族の防備に當らしめたり、玄宗皇帝の世を亂りし安祿山の如き蓋し蠻族の曾て寵

用せられしものなり、斯くて支那の首府長安は此時代には種々の民族雜居せしもの丶如く、中には白皙人種の藝者などもありて大に嬌名を擧げしに似たり、即ち李白の詩に『五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風、落花踏盡遊何處、笑入胡姬酒肆中』と云ふ、其所謂胡姬とは恐らく匈奴の醜婦に非ず白人種に屬する蠻族の美人なりしなるべし、降りて宋代に入れば蠻族契丹の壓迫愈々猛烈にして到底兵力を以て禦遏すべからず眞宗皇帝は毎年絹三十萬匹銀二十萬兩を贈りて其侵入の勢を緩和せり、而かも金の遼を亡ぼすや勢に乘じて宋の朝廷を虜にし中國の北部一半を占領し、宋は南宋の起るに依り僅に江南に殘骸を存し得たるも、蒙古族大擧し來るに遭ひ金も南宋も共に亡び四百餘州は元の有に歸せり、是れ實に支那が蠻族に征服統一せられし第一回なり、二百年にして朱明興り元を亡ぼし天下を漢族の手に回復せしも、四百餘年の後ち復た滿淸の天下と爲りて近時の政變に及びたりき。

（三）

斯くて漢人種が一たび中國の主人公と爲りし以降已に四五千載の久しきを經過したるも、此間新血液は終始蠻族の侵入により供給せられ、爲めに爭亂の慘禍を見しこと幾回なるを知らずと雖も、之が爲めに一方には幾回か淫蕩軟弱の風を一洗し代ふるに一種強健の氣象を以てしたるは否むべからず、然れば今日の漢人は決して黃帝時代の民族の純粹なる子孫に非ずして、滿、蒙、匈奴、契丹、或は幾多白人種[redacted]の血液を雜へて出來上りたる混種民族にして、其未だ老朽せず尚ほ國家の建設に堪ふべき元氣を有する所以のもの亦た實に其混成人種なるが故に因らずんばあらず、然り而して其混成人種なるに關はらず

尚ほ多く漢民族の特質を保持し、四億の民衆をして世界に向ひ黄帝堯舜の子孫たるを誇ることを得しむる所以のものは何ぞや、思ふに是れ漢民族の同化力の旺盛なるに歸すべきは勿論のことなるも、亦た實に支那本部の地形自ら混成統一に利するものあるに因らずんばあらず、支那本部の面積百五十三萬方哩にして、其廣袤約そ歐洲露西亞に匹敵すべきも、北は蒙古の大沙漠に、西は西藏の高原に、南は暹羅安南の峻嶺嶮山に、東は太平洋の波濤に其の境域を限定せられて、自ら別乾坤を爲す、且つ其無盡藏の富源は以て數億の民衆を養ふに足れり、而して其地形上高山峻嶺の以て中原を分隔して國家分立に便にするなきことは最も多く人種の混成統一を助けたりと云はざるべからず、例せばアルプスの伊太利と獨逸を分割し、ピールニーズの佛西を分裂し、近東歐洲の峻嶺嶮山自らボヘミヤ、匈牙利、巴爾幹諸邦の分立を促せるが如きは支那に於て見るべからざるの形勢に屬す、卽ち黄河長江の二大流域は支那平原の大部分を占め、之を南北又は東西に二分する高山脈のなき一事は永久に支那は一統治の下に服すべき運命あるを示すものに非ずや、故に古來幾多の蠻族が中國に侵入し一時各方面に小邦の分立を見しことあり、又は政爭の結果蜀、魏、吳の三國或は南北朝分立を見たるの例あるも、此等は單に一時的の現象にして到底永久の事實たること能はず、終には必ず統一的國家の樹立を見ざれば止まず、爲めに新來の民族等は遂に個性の發達を見る能はずして多數の爲め併呑し混和し盡さるゝを常とせり、是れ歐洲と大に形勢を異にする所以なり。

世人或は揚子江一帶を以て南北分界と爲すの利を說くものあり、一昨秋革命勃發の當時我民間政客に

して南方に同情ある某氏は長江を界として南北分立を當路に建策せしことありと聞けり、揚子江は延長三千哩、武昌より江口まで約六百哩、其幅員廣きは十哩に及び武漢の間尙ほ一哩を下らず、水流の速力ナイル又はアマゾンより急なること二倍にして、印度ガンヂエスに比すれば三倍の速力を有す、六百年前マルコ、ポーロが始めて之を觀て驚歎し、「是れ河と言はんよりは寧ろ海と云ふを以て至當とす」と云ひしや實に宜なり、魏の曹操亦た曾て長江の北岸に立ち波濤の洶湧するを眺めて、「嗚呼固と天の南北を限る所以なり」と云へり、然れども曹操曩きに赤壁の大敗に懲りて此の歎聲を發したるものにして、當時魏と吳は境を接し中原を二分したれども(蜀は一方に偏在す)其境界は長江の流に從はず、寧ろ西は巴山より東は漢水口に到り、長江より遙に北方にありき、其後南北朝の分界、金と南宋の分界の如き更に一層北方に偏して劃され、即ち西は秦嶺に起り東は淮水口に達せしを知るなり、往時水運の便開けざるに際してすら曾て長江を以て南北分界線と爲せしことなし、況んや蒸汽渡江の便大に開けたる今日に於てをや、知るべし揚子江を以て南北分立の境界と爲すべしと云ふが如きは政客一夜の夢幻に外ならざるを、而して支那中原に何等南北を分つべき自然的境界なきは、自ら支那民族の混成統一に多大の影響ありしこと亦明白ならずや。

(四)

以上論じ來れる所に依り支那人は老朽民族に非ずとせば、支那政局の現在及將來を研究せんとするに際して吾々邦人の反省を要すべきことは是より益々十分の敬意と同情を以て支那の政局に對せんこと是

れなり、回顧すれば維新の際我邦が開國進取の國是を定めて歐米文物の輸入に專念するに際し支那は自負尊大の夢尙ほ酣にして我邦を冷嘲するの風あり、我亦た彼を罵りて頑迷固陋と爲し、事毎に感情の背馳を來し終に日淸の戰役を構ふに至れり、日露の役了り我邦が南滿洲に於ける露國の權利を繼承するに至れるや、支那人は我邦の眞意を誤解して以て侵略に在りと爲し心中頗る平ならざるものあり、蓋し淸朝の衰勢遂に極東の保全を保證する能はざるが爲め我は止むを得ず南滿の事に當り遂に朝鮮の合併をも斷行するに至れるも、淸朝の臣僚は遂に之を解し能はざりしなり、斯くて彼我の間幾多の難問題を生じ同文同種の關係上最も親密なるべくして却て意志の疎隔を見たるは雙方識者の久しく遺憾とせし所ならずんばあらず、近來に至り南北孰れの黨派に關はらず均しく我邦に對し頗る釋然たるものあるが如く、亦た信賴の意を暗示するに至れるは吾人の頗る滿足する所なり、同時に我邦人亦た支那の眞價を評量して誤らず、老朽國視するの慣習を脫却し、十分の誠意を以て新支那の前途を祝福せずんばあるべからず、卽ち前段論ずるが如く支那人民は古き歷史あるに關はらず未だ老朽せず、所謂舊邦なりと雖も其命維れ新たなりと謂ふべく、但し新元氣の程度如何は今後の實蹟に就きて判ずるの外なからん、兎に角老朽民族にはあらず、少なくとも一昨年の革命以來の領袖株の行動は概して人意を强うするに足れりと云ふを妨げずと思ふ、例せば革命戰爭中南方の首領中幾多感情の行違あり又は意見の衝突ありたるべきも、能く隱忍して協同の態度を持し以て滿洲朝廷を倒するに至れるが如き吾人の感歎禁じ能はざりし所なり、袁世凱が始め滿洲朝廷に起用せられ立憲君主制を標榜しつゝ中間志を飜へし隱に革命黨と共謀し、假大總

統たるの內約の下に清帝の退位を餘儀なくせしめしは、識者の淸議を免れざる所なるも、兎に角清廷を遇するに厚禮を以てせしが如き、又爾來至難の政局に處して悠々迫らず自然の平定を待つの趣ある、自ら大政治家の風ありと謂ふべき乎、袁は素と諸葛孔明に非ず寧ろ魏の曹操の典型に屬し、我邦の人物中にては足利尊氏に比すべく、清議は清議として、袁亦た今の時に無かるべからざる第一人たるを失はず、其他孫、黃、黎、吳、程、岑、李、柏等已に定評ある人物の外、參議院議長張繼、衆議院議長湯化龍を初め進步黨首領章丙麟、廣東の郡頭陳炯明、廣西の龍濟光、香港の李昱堂、上海の陳錦濤、湖南の王天縱、其他曰く何某、曰く何某、算へ來れば實に多士濟々の感なくんばあらず、支那の前途は決して人材なきを憂へず、要は適材を適處に配置すべき政界の境遇と形勢を作り出すに在らん耳。

（五）

南北の軋轢が刻下の政局を拾收する上に於ける一大病根たるは否むべからず、袁世凱氏と孫黃諸氏とは南北紛爭の代表的人物たるに相違なきも眞の軋轢は雙方人民の氣象の相違に淵源することは見遁すべからざる事實なり。前段述べたる如く古來北方卽ち黃河の南北に於ける諸州は蠻族の血液を混和すること頗る多く自ら强健頑僻の風あるに對し南方は寧ろ知識に長じ稍ゝもすれば輕佻浮華の弊なきに非ず、古來北方の强と南方の强とは自ら其性質を異にせしが如く、今日に於ても兩者の相違は容易に一致協力を見るべからずして、相互に猜疑憎惡の因たるなきこと能はず、例せば伊太利に於ける南北氣風の相違の如く、又印度に於ける回敎人種と印度敎徒の相違に似たり、印度に於て回敎人種と印度敎徒の反目嫉

視は國家の統一を妨害し遂に千萬里外の英國をして漁夫の利を占めしむるに反し、伊太利に於ては却てサルヂニアの强健とローマの知識と相協力するの雅量を示せしがため新伊太利王國の創立を見るを得たり、即ちカヴールの政略とガルバルヂー、マジニーの宏量と雙々相和したるが爲め、佛、墺の隱謀野心も遂に手を着くるの間隙を發見するを得ざらしめたり、若しも試に袁世凱を以てカヴールに比せば孫逸仙はマジニーにして黄興はガリバルヂーなり、今の千歳一遇の秋に當り果して袁世凱はカヴールの忠誠に倣ひ孫、黄はガリバルヂー、マジーニーの度量を學ぶを得べき乎、支那の友人を以て任ずる我邦の政客若しくは支那通なるもの果して活眼遠識に由り指導誘掖の功を立つるを得べき乎、或は又彼等は全然支那化し了し南方に與みするものは孫黄よりも其心狹量となり、北方に味方するものは袁世凱よりも隱險となり、南北の睽離反目をして是より日一日と益々激甚ならしむべき乎、袁と孫黄は遂に印度の覆轍を踏まんとする乎、或は能く伊太利建國の故智に習ひ時局を平和に收めて以て中華民國百歳の基を築かんとするか、是れ實に獨り支那自身の安危に關する耳ならず、亦實に東洋の禍亂平和の分る所たらずんばあらず、宋敎仁の暗殺は最も悲しむべきとに相違なく、徐寶山の横死亦た惜むに堪へたり、然れども其責任の何人に歸すべきかは最も嚴正なる法庭の宣告に待たざるべからずして、徒らに私憤に驅られて大局の打算を誤るが如きは識者の取らざる所なり、『宋敎仁をして國家の犧牲たらしむるは可なり、國家をして宋の犧牲たらしむべからず』とは黎元洪の岑春煊に答へたる言なりと聞く、吾人は此一言を以て黎副總統の頗る大局の明あるを認め、南北の首領輩をして此識量に則とりて協定に努めんことを勸告せざ

るべからず。

五國借款を成立せしめたるを以て時を得ずとなし當局を責むるものあり、吾人は强ひて政府を庇護せんとするに非ずと雖も斯の如き非難の極めて失當たることに關しては一言辯ぜざるべからず、該一派の論者は曩きに南京假政府を公認すべしと帝國政府に迫りしことあり、爾後南北協和して袁推されて假大總統となるや、彼等は亦た帝國政府の一日も速に之を公認せんことを希望せり、之に反して吾人は未だ曾て彼等が借款の時機を速かにすべからず須らく正式大總統の選擧後を待つて實行すべしと論じたるを聞かず、且つ袁の人物に對しては人々各〻見を異にすべしと雖も、孫黄亦た最近に至るまで之を推して正式大總統と爲すに異議なきことを表白せりき、過般孫逸仙の來朝するや自らは毫も袁と大總統を爭ふに意なきを言明し、袁をして政局を拾收せしめ、自らは實業方面に處して富强の基を立てんとするの意あるを告げたり、是れ尙ほ吾人の耳に新たなる處なり、然るを何事ぞ、彼等は一朝宋教仁の暗殺せらるゝや乍ち態度を一變し、袁を斃さずんば革命の目的終に達すべからずと爲し、袁の手に借款を許すは袁が帝王たらんとする野心を助長するものなりと論じ、我政府の五國と共に借款を成立せしめしを攻擊せり、五國借款の進行は豫定の方針に從ひしのみ、宋暗殺の事件に依り南方領袖の態度一變せりとて帝國は豫定の對支那方針を變更すべきに非ざるなり、帝國政府が袁に偏頗なりと論ずる人は、則ち却て自　孫黄に偏頗なるを言表するものにして、帝國政府は借款問題に關して只だ支那國の爲めに謀つて最善の力を致せるのみ、寧ろ夫の南方の態度の變ずる毎に其態度を變ずるものこそは、好む處に僻して冷靜公明の

見地を失へるものと謂はざるべからず、殊に況んや袁に帝王たるの野心ありと云ふを理由として之を助くべからずと論ずるが如きは思はざるの甚だしきものなり、帝國は果して隣邦の政體問題に干渉すべしと爲す乎、隣邦に共和政體の樹立せらるゝは帝政の樹立せらるゝよりも望ましきことと爲す乎、吾人は其共和たると帝政たるとを問はず、支那が唯だ一日も速に立國の基礎を堅固にし、以て極東の平和に貢する處あらんことを切望するのみ、豈復た他意あらんや。

（六）

吾人が隣邦の事局に對する毎に頗る人意を強うするの感あるものは支那人民の近時の覺醒なり、曾て英國公使が某支那人に向ひ中華民國とは何ぞやと尋ねたりしに、某之に答へて滿洲朝廷去り袁皇帝之に代はれるものなりと云ひしとて支那人頑迷の一笑話として傳へらるゝも、吾人は革命以來支那人間に思想上多大の變動あり又此變動は今日を以て停止せず是より日に益々廣く且つ深く波及すべきを疑はず、曾て我邦及び歐米に遊びし青年輩が今や革命の風雲に際會し一躍して要路に立ちて意氣得々たるの光景は、必ずや他の幾多の青年を刺戟して新學の研究に從事せしむるなるべく、而して新學の研究は自ら日支兩國民の同情及び提携を深厚ならしむべきは吾人の最も滿足する所なり、政治經濟法律の術語の如き我邦慣用のものは擧げて之を移用し、新聞紙に掲載する小說の如き總て皆な我國小說の翻譯なりと云ふが如き、貿易の關係の外、別に精神上同情を醸成すべく、而して貿易の關係亦た益々親密ならんとするの傾向あるに於て、吾人は轉た兩國の爲め慶賀せざるを得ず、想ふに人種の問題は廿世紀の一大問題に

して、近時黄人種排斥の聲の益々太平洋沿岸に盛ならんとするは見逃がすべからざる事實なり、我邦に於ては夙に黄色人種同盟の理想を唱ふるものありしも人道の立脚地より之を排し、從來寧ろ英米諸國と提携して支那人の頑迷を破り來りしは事蹟の着々證明する處なり、明治三十二年北清事變に際し帝國が歐米諸邦と全然歩調を一にし團匪の頑迷を懲らすに努力せしは蓋し世界の寧ろ稍々意外とせし處なるべく、吾人は今日以後に於て毫も帝國の人道主義を變更せんことを勸告せんとするものに非ず、然りと雖も支那自ら今や將に文明の民たらんとし、且つ人道主義を標榜して起たんとするに際して、人種問題の解決上日支兩國は一大責任の其雙肩に繫がるを覺悟せざる可らず、白皙人種は果して世界の最高人種なる乎、黄色人種は白皙民族の間に處して遂に平等の取扱を受くること能はざるの筈のものなりや、是れ實に今後國際關係の益々繁多ならんとするに當り事毎に喚起さるべき問題たらんこと火を見るより明白なり、讀者よ誤解する勿れ、是れ決して人種の僻見憎惡を我より挑發せんとするに非ず、寧ろ吾人は一部の白人に挑まれて自衛の法を講ぜんとする耳、吾人が日支聯合して人種問題解決の衝に當るべしと云ふは、曾て獨帝カイゼルの夢幻に現はれしと云ふ『黄禍』の實行に非ず、吾人の主張する聯合は攻撃同盟に非ずして徹頭徹尾防守同盟を意味するなり、世の論者或は大和民族を以て蒙古人種に非ずとの理由を主張して白皙人種の仲間入りを謀らんとするものあるが如きも、吾人は斯の如きは最も姑息の解決法にして一顧の値なきものと思惟す、之を地形の關係に鑑み之を色相の類似に照せば日本人は到底亞細亞的たるを脱すべからずして又た支那人と同一種に加へらるゝことを避くる能はざるべし、然れば此際寧ろ

覺束なき拔驅の功名を期せんより斷然支那人民と運命を共にし、四億五億の多數の力に由り遂に人道の勝利を期せんことを要す、支那人民は既に今より二十餘年前に米國に於て一切新勞働者の入國を禁ぜられ、濠洲に於ても身を容るゝに餘地なく、而して彼等は從來無神經なりしも今や其覺醒と共に漸く恥辱を感知するに至らんと疑ふべからず、日支兩國民は玆に於て唇齒輔車の關係益〻適切なるを解するなるべく、五億民衆の力を擁して人種上の權利を主張せんとするに於て遂に宿望を達し得べきこと誰か復た疑を容れんや。

（七）

終に一言したきは支那の國情なり、刻下の政局に關しては形勢朝暮に變じ頗る豫言するを躊躇すれども、支那の國情は到底革命戰爭の再開を許さざるに似たり、國情とは他なし各派各地の頭目を始め民間の有力者孰れも亂を厭ひ平和を熱望すると卽ち是れなり、支那の將來に最も深き利害の關係を有する列强亦た孰れも內亂の再發を欲せざるの情決して支那人に劣らざるものあり、內外の事情已に斯の如しとせば南北如何に睽離疾視するも到底兵戈に訴ふることなかるべきは想像するに餘あり、孫黃の如き南派の代表人物に相違なきも、容易に刻下の國情を無視する能はざるべく、然れば頗る容易ならざる刻下の時局も終に日月の緩和的作用により何かの形を以て無事に解決さるべきを疑はず、大總統の選擧や憲法の制定や急は卽ち急なりと雖も悠々上下五千載の歷史ある民族に取りては必ずしも一月二月を爭ふの要なからん、殊に四億の民族を打て一大國民と爲すの大業は決して短日月の能する所に非ざるは吾人の諒

察すべき所なり、吾人は只偏に南北の先輩が能く冷靜に大局を達觀し以て事局に處して毫も遺漏なからんことを切望するものなり。

制度整理の發表

年來朝野の宿題にして第二西園寺内閣の鋭意遂行を期したりし行政財政の整理は舊臘の政變により實行を見るに至らず、第三桂内閣亦た多大の整理額を標榜したるに關はらず短命にして功を成すに至らざりしが、山本内閣は成立以來前々内閣の成案に基き鋭意その事に當りしが終に去る十三日を以て其成績を發表せり、即ち發表せる所に因り之を見るに行政及財政の整理遂行に必要なる法律の新たに制定せられたるもの十二件、官制定員俸給等に關する勅令の改廢せらるゝもの百六十六件にして、之に依りて事務の系統を正し簡捷の實を擧げんが爲め局課の廢合を爲し節約の旨に副ひ、冗員を除かんが爲め定員の減少を行へり、其數高等官は百六十八人判任官四千四百八十二人合計五千三百人なり、其財政に及ぼす結果に至りては大正二年度歳入歳出豫算に對する增減標準金額を示せば一般會計の歳出整理減額と歳入增額を合算すれば三千八百四十七萬二千餘圓にして、之に特別會計の分約三千一百九十萬圓を加ふれば、歳入歳出整理總計七千三十七萬三千四百三十三圓を得るものにして、是れ則ち今次の整理に對する標準的結果なり、若夫れ大正二年度に於ける實際の結果に至りては已に年度中三箇月を過ぎて實行し且つ退官

者に對する一時賜金を要する等の理由により實際の所六千六百五萬九千四百三十圓と爲るものなり。

今此の整理の結果に對する批評に至りては殆んど十人十色にして、政友會の如く全然滿足して歡喜措く能はざるものあり、政府反對黨の如く頗る贊辭に吝にして功績を成るべく微細せんと努むるあり、然れども公平に之を觀察すれば假令全然滿足し能はざるまでも、兎に角山本内閣の勞を多しとし、多年の宿題の茲に一段を告げたるを喜ばざるを得ず、國民黨は曰く吾等をして局に當らしめば一億五千萬圓を減じ得べしと、桂黨は曰く第三桂内閣を存續せしめば一億一千萬圓を整理し得べかりしならんと、唯惜むべし犬養氏一派は日に益々政權に遠ざかり遂に其空論を實にするの機會なからんとするを、桂内閣亦た非立憲の攻擊に遭ふて土崩瓦解せり、吾人は不幸にして桂公若槻氏の手腕の程を見るを得ざりしを遺憾とす、然れども大凡世間の事言ふは易くして行ふは難し、籠裏の一羽の雀は深叢中にある二羽よりは却て重寶なり、吾人は我國民が山本内閣の整理の結果に向つて大體に滿足すべきことを疑はず、但し今次の成功に對し山本内閣が獨自ら功に居らんとせず、第二西園寺内閣以來の準備と世間新聞紙の援助に向ひ一半の功を分たんとするは極めて穩當の態度と云ふべく、蓋し首相及閣僚の誠意と手腕あるも、若しも上下國論の一致の援勢あるに非ずんば、焉ぞ能く今日の功を見ることを得んや、殊に陸海軍大臣官制改正の如き又文官任用令改正の如き、假令其改正は多少糊塗彌縫の跡あるを免れずとするも、此しきの改正すら政界の一局部に蟠まれる頑迷派の妨害を思へば、決して容易の業に非ず、然れども彼等をして遂に閉息して輿論の前に屈服せしむるを得たるは偏に時勢の力なり、吾人は此點に於て現内閣の勞を認め、國

論の進歩を喜ぶものなり。

斯くて山本内閣は第三十帝國議會に於ける言質の多分を贖得て大に其信用を加へたるの觀ある耳ならず、本年度の節約額四千三百萬圓に加ふるに大正元年度の歳入超過額四千萬圓を以てし、更に三年度の自然增收入を宛込むに於ては來年度の豫算編成の事素より易々たるべく、前途亦た一の憂ふべきものなきに似たり、然れども陸軍增師問題は果して如何、大凡政界の事毫も油斷を許さゞるは宛も飛行前の空模樣に似たり、何日何時如何の珍事發生すべきや圖るべからず、殊に增師案の始末に至りては最も關心に値すると謂つべし、首相の辯明する所に據り察すれば今次の整理は首として行政整理に力を致たし、財政の整理經濟の調節は之を後日に讓れるもの丶如し、即ち已に斷行せる所得税の減税、朝鮮米移入税の撤廢、鹽價の引下の以外に於て、更に營業税織物税等を輕減し以て民力を休養するは刻下の急務にして更に製鐵所、製絨所等官業を民間に移すが如きは經濟調節の一方法として大に考究の價値あるべし、首相は去十三日の披露會に於て「此上は進んで產業の振興貿易の伸張を圖らんとす」と告げたり、其計畫なるものに關しては未だ成案に接せざるを以て批評す可らずと雖も、吾人は政府が慈父母を氣取り種々に干涉を試み又は保護奬勵の法を講ぜんよりも寧ろ人民の負擔を輕減し實業家の個人的飛躍を自由ならしむるの却て大に優れるを思ふものなり、航路補助法の如きも亦た機會に應じ改正を施こし以て國庫の負擔を輕減し同時に自由競爭の路を開くと可たらん、吾人は山本内閣が是より制度整理の結果を收めんとするに當り施設の方法を誤ることなく、能く其功を全うせんことを希望するものなり。

政界默示錄



宇鈴山人

何れの宗教にも未來を暗示する默示錄がある。基督教のバイブルにジョンの默示錄と云ふものがあるが如くてある。之を見ると、其事過去にありしが如く、或は未來にあらむとするが如く、或は現に幻しの如く眼前に見えつゝある現象なるかの如く見える、之を現在と見、過去と見、未來と見るは、見る人の境遇、心識如何に依て定まるのであるが、予は今最も公平に、最も冷靜なる位地に立ち得る人であるが故に、政治社會の爲に一の默示錄を書かむとするものである、予は自ら僭僞して政治上の豫言者とは言はぬ、併ながら上は九天に昇り、下は九地に入り得る便宜を有つて居る者なるが故に、豫言者の使者ぐらゐは勤まる積りてある。

余の見る所に依れば、今や我政治界は一大變動の時期てあつて、變動は更に變動を生まむとするの徵候歷歷として見える、但し未來の默示錄を書かむとすれば、過去に溯つて來歷を考へねばならぬ。抑ゝ昨年の政變以來の事を考へれば茫として一夢の如く、殆ど隔世の感がある。これは何から來たかと言へば薩長の政治上の陥力が新に勃興する民衆の勢力と相衝突したと云ふに外ならぬ、從來は斯の如きことと屢ゝありしに拘らず、

薩長の勢力意外に強く、民衆の勢力案外に弱きが爲に物にならずして終つたのであるが、今や民衆の勢力意外に強く、薩長の勢力案外に弱かりしが爲に、彼の波瀾を惹起したものである。此波瀾の由來に就いては世間種々なる說明を試みる者があるが、予の聞く所に依れば世間傳ふる所は多く事實に違ふ。抑も事の起りは二個師團問題であるが、此二個師團問題は、當初相當に、平和に解決する望みがあつたるに拘らず、之を使嗾して非常なる紛亂を來さしめたる者は、山縣、桂の二人であつたことは今更言ふまでもない。併ながら此二人が利害相反對するに拘らず、此問題を捉へて政界紛更の基とならしめむと云ふことに付ては、互に意思を合はしたる如く見えるものは何であるか、事頗る奇怪である。予が聞く所に依れば先づ　先帝崩御の後、桂を內大臣に封じたのは卽ち山縣派が桂を挫かむが爲めであると云ふことに說明せられて居る。少なくとも山縣派は斯く說明して居る。併ながら是は伊蘇普物語の所謂『葡萄は青き』ものである。伊蘇普物語に、狐が月の下に葡萄を見て、之を食べむと欲して屢々飛びついたけれども、丈低くして屆かなかつた、此に於て狐は獨語して曰く、此葡萄はまだ青い、と言つたと云ふことがあるが、世間の政治家、往々にして葡萄の青さを獨語することがある、卽ち山縣なる狐が、內大臣、侍從長なる葡萄を食はむと欲して食ふこと能はざりしが故に、此葡萄は青きが故に之を桂にやつたと言つて居るのである、予の聞く所に依れば　先帝崩御の後、山縣派の一大野心は、山縣を內大臣たらしめて、淸浦を侍從長たらしむるにあつたことは疑ふべからざる事實である。而して其理由として言ふ所は頗る理窟のあるもので、新帝年歯未だ若く在ますが故に、國事に老練にして一世に威望を有つて居る者が左右に在つて啓沃の任に當らねばならぬ、故に今日は須く宮中の人を入れ替へて、元老、長者より內大臣、或は侍從長を出さねばならぬと云ふ議論であつた、其言ふ所如何にも御尤てあつて何人も異議のないことである、然るに驚くべし、此御尤の議論の後ろは、山縣入つて內大臣たり、

而して侍從長の官は繁劇にして、其煩に堪へざるが爲に之を清浦に授ける、而して山縣派を以て宮中の權を執らむとするのであつた。山縣派は元來岡澤侍從武官長を以て其代表者として、宮中にかける大小の事、悉く電話を以て山縣に知らしめて、殆ど權臣の威々恣にして居つた、然るに岡澤侍從武官長は不幸にして市谷の監獄の裏門に於て馬車より落ちて死んだ。それより宮中に於ける山縣派のテレホンは一時斷絕し、山縣をして頗る不便を感ぜしめた、其後間もなく伊藤不慮の兇變あり。而して後　先帝の崩御あり、遂に右申すが如き陰謀を企つるに至つたのである、然るに此事に付ては他の國老等は頗る躊躇して居つた、と云ふのは山縣が國老として然るべき一人であることは申すまでもないが、其徒黨をして宮中の權力を握らしめるは頗る考へものであると云ふが爲めである、而して此事に付て最も憂へたる者、少なくとも憂ふるが如き氣色のあつた者は桂公であつた、桂は露西亞に於て　先帝崩御の報に接して、何等か政治上に不慮の變が起きはせぬかと思うて急いで歸つて來た矢先きに、山縣派の陰謀を聞きたるが故に、最も之を排せむと欲した一人であつた、而して愈々宮中會議となつて、何人を以て内大臣たらしむべきかと云つた時に、山縣は口を開いて、桂こそ最も適任なるべしと言ひ出した、是は當時の元老中最も年少なる桂を、最も年長なる山縣が推したのであつて、山縣の眞意は桂を推すにあらずして、年少なる元老を年長なる元老が推した結果は、一度は最も年長なる山縣に返して來ると云ふとを豫期したものであつたらしい、然るに當時元老等は、殆ど申合はしたるが如く、最も年少なる桂を山縣が推薦したるを宜き言ひ草として、御説御尤であると云つて、直ちに悉く之を贊成し、山縣に返上すると云ふことをせなかつた、是が爲に廟議が一決して桂は内大臣となり、而して侍從長を兼ぬることになつた、此事は誰がするともなく出來たことであるが、山縣より見れば、桂と西園寺の謀んだることであつて、己の謀計の裏を搔いたのではないかと思はれるやうな狀態であつた、而して斯の如

きことに付て最も其憤りを受ける者は即ち局に當つて居る西園寺である、予は果して西園寺が企てたことなりや、桂が企てたことなりやを知らぬ、併ながら恐らく桂が企て、而して西園寺が贊成したことであらうと思ふ、併ながら山縣派より見れば、西園寺は恕すべからざる大罪を犯したものと思はれた、是れ即ち西園寺が第一に山縣に睨まれた所以である、西園寺は斯の如き大罪を犯した、而して之に止まらず更に山縣の最も嫌ひなる臨時議會を開くと云ふことを西園寺の一存を以て決斷して仕舞つた、此事に付ては山縣派が陽に陰に、種々西園寺を掣肘したに拘らず、西園寺は國論を容れて開くことゝなつた、西園寺より見れば、是れ上下の意を疏通して、宮室の憂ひは即ち國家の憂ひであると云ふことにすることであると思うたに相違ないが、山縣派より之を見れば、小民をして皇室の家事に立入らしめるものであると云ふが如き感あるを免れぬ、而して其事を斷ずるに專斷を以てして長老に諮らざりしと云ふが如きは、恕すべからざる大罪であると思ふたに相違ない、是等の事が積り積つて山縣をして愈々恕すべからざるものであると思はしめた、勿論是等の事に付て、桂が等しく山縣に怒りを受けたことは申すまでもないが、併ながら是は親類中の不和であつて、全く敵同志の不和とは違ふのであるから、憤りは第一に西園寺に向つて漏らされた、是れ即ち二個師團問題が山縣に依て用ゐられた所以である、而して桂はと云へば、桂は山縣の野心を挫くが爲に、自ら内大臣とはなつたものの、さて種々なる方面より見れば、最早西園寺を倒すべき時機が來たと思ふたから、飜つて山縣派の陰謀の後押しをして、直接に後押しはせぬのであつたが、此陰謀を利用して打つて出ることになつた、其結果が即ち昨年の事變である、斯う云ふのであつて、天下の大事は即ち薩長の老人共の御家騷動である、御家騷動の結果、國民が或は火をつけたり、燒討をしたり、牢へ入れられたりして騷いて居るのである、實に我國民は憫れむべき國民と言はねばならぬ、て今日政府が出來て居り、其周圍の各黨、各派の勢力に消長が

ある、是等は皆お家騒動の結果蠢動して居るものであると思へば情なき事である、然らば此後はどうなるであらうかと云ふことは、右申す如き原因より來るものであつて、一時壯快なる運動となつたが、結局政友會の屈伏となつて終つた、併ながら一たび發したるものは抑へることは出來ぬ、國民が薩長を憤るの火の手はもう一度燃え出すであらうと思ふ、而して燃え出した時は今日の如く姑息なる狀態を保つことは出來ぬ。

世事觀來れば眞に意外の事多し、西園寺が桂等に語らはれて山縣の宮中に入ることを妨げて桂を入れた、而して其桂は山縣と力を協はして、西園寺を倒した、而してそれが爲に國民は起つて山縣を殆ど半死半生の目に遭はして、桂をも叩き潰した、併ながら桂は死際に一人で死なず西園寺と刺違へて死んだ、殆ど悲劇的喜劇、喜劇的悲劇である、然らば西園寺は死ぬであらうか、芝居で言へば奸臣滅びて忠臣榮え、目出度し〳〵と云ふのである、又一般の人事で言へば、奸臣榮えて忠臣衰へ、悲憤慷慨、切腹して死ぬ、見物人は切齒扼腕すると云ふのが多くの事實である、併ながら國家の大事に至つては又自ら道理の力も働くのである、必しも悲劇にあらず、必しも喜劇にあらず、所謂正義公論の力は尙殘つて居る、即ち西園寺は今日詔勅に對する態度に於て勇氣が無かつたと云ふ一點に於て、世論の攻擊を受けて居る、而して餘儀なく政友會の總裁を捨て退隱せねばならぬやうなことになつた、併ながら彼が企てた行政整理なるものは上下の贊同を得たもので今日山本の爲したる整理の如きは、昨年の西園寺の立案を其儘採用したに過ぎぬのである、而して西園寺が企てた三千七百萬圓の行政整理中は、殖民地と鐵道院と陸軍は手が著かなかつた、之を加へて四千五六百萬圓の金を生み出す、是亦西園寺の遺策を行つたに過ぎぬ、即ち西園寺の爲さむとした所は國民の望む所、而して其の結果として彼れは倒れた、其の倒れ際は國民の承知せざる倒れ方であつたが、併ながら是は永久には追賞せられ、功は永久に認められると云ふ譯であるから、今日政治上の未來を見れば、彼の復活の紫雲は

襲いて居る、即ち國民黨は政友會を攻撃すると雖も尙西園寺の爲したことを是とすることは忘れて居らぬ、政治上の便宜として、彼の詔勅を戴いたことに就いての進止を誤つたことは攻撃するが、併しながら彼の位地に立つて見れば、其志は憐れまねばならぬと云ふことを能く了解して居る、而して政友倶樂部の如きは、全然西園寺の定めた位地を守らむとするものであつて其詔勅に對へる所以の道に付ては彼と見る所を異にするに拘らず、其言ふ所、其論ずる所は殆ど西園寺の爲に弔ひ合戰をするが如き位地に立つて居る、而して政友會如何と見れば、驚くべし西園寺とは最も因縁が遠くなつて居る、即ち西園寺の企てた五千萬圓、即ち政費の一割を減ずる案を、今年實行せむと云ふ者があれば、政友會は之を今年實行せざる方に立ち、行政整理、税制整理の結果として、營業税を今年より減らすと言へば、政友會は減らさざる側に立つ、而して山本内閣の行政整理は西園寺以上てあると言つて居る、是れ實に己の首領——世間は西園寺を以て既に辭職したる總裁と見て居るに拘らず、政友會自らは辭職せざる總裁と申して居る、——の企てたよりもより以上の改革てあると云ふが如き口吻を以て、山本内閣を謳歌して居る、此に於て彼は果して西園寺の與黨なりや、山本の與黨なりや、將た山本の握つて居る權力の與黨なりや殆ど疑はしき位地に立つが、併し是は其の黨中に於けるお座なり連中の黨議であつて、敢て怪しむに足らぬが、其黨中には矢張り純粹なる政友會員、純粹に西園寺に心服する連中、純粹に、西園寺が昨年定めた當時の意思を以て邁進せむとする人がないでもない、今日政治上の位地は頗る不思議なる位地であつて、結局純粹の政黨員の志を得る時があるてあらうと思ふ、是等の事を考へて見れば、一旦失脚したる西園寺の再び出て來る時期は、決してない譯ではあるまいと思ふ。

山本内閣は其閣僚に於て決して人を得ないとは言へぬ、山本自身も政友倶樂部員などから言はせれば、閥族てあつて、其位地は桂と相違はないと言つては居るが、併ながら其人物より言へば、中々しつかりして居

る、眞面目に事をしたいと云ふ氣もある、而して桂が口先のペテンでごまかして來た後に出て、幾らか實效を見せて己の政治的生命を維持したい氣もある、是が爲に中々努めて居る、して見れば其人は甚だ不可とは言へない、而して之に次いでは原、原に付ては世間定評がある、人は餘り便宜主義なることを議する人もあるが、併ながら兎に角勇氣あり、兎に角材幹あり、兎に角部下の心を得ると云ふ點もあり、得易からざる才である、松田に至つては老練にして濶達、能く世と共に推移り、志心を得る點は他人の企て及ぶべからざるものである、而して奥田、奥田は行政組織に付ては中中立派な考を有つて居り、大勢の趨く所を見るに付てぬ慧敏であり、而して其世に處するの才も中々侮るべからざるものがある、又山本達雄に至つては、最も眞面目の人間であつて、多年民間に居つたるが故に、其見る所頗る廣い、而して公平である、而して最も利害に迷ひ易い農商務大臣としては最も良き人である、唯外務大臣の牧野に至つては、其無能既に定評があるが、世間其無能を見て恥無きを知らぬ、此男は長い間西園寺の下に文部次官をして居つた、而して長い間西園寺などの心易い人であつた、再び政友會の内閣に大臣となつたが尙政友會に入ることを好まない、其の好まない理由は何であるかと言へば、笑ふべきものである、彼は久しく西洋に居つて見聞は廣いなど丶云ふが、其實、彼も亦薩人である、即ち薩派の勢力が長く續くものであると思ふて、政黨に依頼せず、薩派に依つて其の政治的生命を維持せむと云ふ考を有つて居る、彼が西園寺に用ゐられた所以は、其有爲なるが爲にあらずして、薩人なるが爲めであると云ふことを彼はよく了解して居る、併ながら彼は薩人なるが故に用ゐられると云ふ時代は今回が終りと云ふことを知らぬ呆氣である。而して最も噴飯に堪へざるは、彼が今日に於ても政黨に入らざる理由は、薩派が彼を未來の總理大臣として推戴せむとする其望みに依て、政黨の色を着けず、一身を綺麗にして置きたいと云ふ念願であると云ふに至つては唯驚くの外はない。久しく長州の爲に蹂躙せ

られ、薩派は有れども無きが如き狀態になつて居つたこと、十七八年てある、今回偶然に山本が出て來て、薩派が權力を執つたといふことは一時の現象てある、是が何時までも繰返し〳〵、薩長が互に政權を執るといふやうなことを想像して、政友會員となつて色が着けば、其時に不便利てあると云ふが如きことを考へて、政黨にも入らずに一身を保たんと云ふに至つては、其馬鹿々々しさ加減、其づう〳〵しさ加減、其呆氣さ加減、殆ど言外てある、而して外交の振はぬことどうてあるかといふことは、天下が現に目擊しつゝある所てある、是は此の內閣の最も弱點てあるが、唯此無能漢は、無能を以て無能として、積極的の企てをせざるが爲に、彼から火のつくことはあるまい、併ながら彼が內閣の最も弱點たるは爭ふべからざることてある、其次に最も無能なるは大藏大臣てある、大藏大臣は曾て桂と通謀して西園寺內閣を轉覆せむと企てた男てある而して其財政意見は山本大藏大臣と屢々相扞格して居ると云ふことも天下皆知つて居る、而して昨年西園寺が企てたことに反對した一人てある、然るに今彼はづう〳〵しく西園寺の遺策を奉じて之を說明することに努めて居る、其間にも尙西園寺內閣の案を賞揚せざることだけは努めて居る。西園寺の案に感服せざると云ふ點だけは一貫して居るが、併ながら彼の政治上の議論は左支右梧、大臣になりたい爲に政友會に入つて、而して議會に於て如何なる事をするかと云へば、其厚顏無恥、己の知らざる事を說明し、己の了解せざることを說明し、議會に追窮せられても平然として恥づることを知らぬ、或人は之を蛙の面に水と云つたが、議員の諧謔家は之を河馬の面に水てあると言つた、甚だ人心攻擊に屬するが事實は殆ど斯の如くてある。今後如何なる驚くべきことがあつても、敢て案外でない。其厚顏無恥の致す所てあつて、殆ど豫期せられることてある。恐らく此內閣には彼より火がつくてあらうと思ふ、其他の人々を一々數ふる遑はないが、併ながら恐らく此內閣は或人々の失策より倒れずして、花の自ら散るが如く、實の自ら落つるが如くして倒れるてあら

うと思ふ。其譯は、民衆の勢力の斯く勃發した時に當つて、民衆の勢力を基礎とせざる藩閥が出て、天下の人心を安撫せむが爲に政友會と結託したと云ふに過ぎざるものである。故に天下の人心は背いて居る、而して之を助けて居る政友會は又非常に苦痛であつて、元來薩長政權を恣にすること四十五年、即ち國民より大なる借金をして居る、而して明治四十五年は即ち政治の大晦日であつて、國民は藩閥の門に立つて古借金を催促して居る時であつた、小悧巧なる桂は新政黨を造つて以て、天下と共にすると云ふやうなことゝて、此借金の請求を防がむとしたが、それは恰も小切手を以て借金を拂はむとするが如きものである、要は其小切手の信用如何にあるが、國民は桂の新政黨を不渡り手形と思ふが故に之を受取らなかつた。而して之に代つて出て來て、己が四十五年間一文も使はざりし借金に付て、門前に立つた借金取に言譯をするといふのが政友會の今日の位地である。癡と言はむか將た愚と言はむか、論外である、斯の如き位地は長く保つべきものてない、必ずや一變するの時期が來る。一變するの時期が來る時は何て來るかと言ふことは豫言の限りてない併ながら攻め道具は既に備つて居る。地震、火事、雷、是れ國家亡滅の攻め道具である。腐敗、不義、狐疑、不安、是等は或團體亡滅の攻め道具である。政友會今日の位地如何と云ふに甚だ不自然である。自ら安んぜざるものである。黨員が相疑うて居る。而して國民に對して如何にも言譯がない、此言譯のないことに對して、驚天動地の大業を行へば或は人心を一轉することが出來るが、今日の所では左樣なることもない。結局人心も分れつゝある、人心も分れつゝあることは有數なる識者は之を知つて居る、がや／＼連、鐘太鼓て騷いて居る人達は知らぬが、識者は展開の途を考へて居る、而して世間の大勢は、展開をせざるべからざる方に向きつゝある。恐らく展開するてあらう。而して展開する時は、是と同時に山本内閣は花の散る如く、實の落ちる如くに墜ちる時である、而して政友會が再び元の道に歸る時は、即ち黨中に於ける政權に浴し、利

益に浴せむとする人々の新政黨に走る時てある。政友會が少數に落ちる時てある。此に於てか所謂民黨合同なる議論が起きて、國民黨も、政友俱樂部も、政友會の殘つた分子も相合同する時てある、而して其合同の首領としては西園寺が再び出る幕になる。是は何人にも能く見える所てあらうと思ふ。而して其後は？　而して桂は？　而して山本は？　是れ來世のことてあつて豫言の限りてない。

政治と政黨

江木翼

一

近頃の立憲政體なるものは所謂三權分立を基礎にして居るといふことてある。此三權分立なるものは架說するまでもなく、立法權は行政權に干與せず、行政權は司法權に干涉せず、此等の國家の三個の作用が互に相獨立して各〻其權能を發揮するといふ事を精神として居るのてある。之は今更ら事新らしく說明する迄もなく、モンテスキユー等が首唱した所てあつて、今日に至るまて立憲政體に於ける通有の原則の如くせられて居る所てある。

然しながら實際の運用に於ては此精神を以て憲政を實際に行つて居る國といふものは極めて稀てあるといつてよいのてある。モンテスキユーの生れたる佛國の如きに於ても、司法權は行政權より獨立して居ることは實際てあるけれども、行政權と立法權に至ては非常なる混淆が存在して居る有樣てある。

世間ては英吉利の政體を以て恰かも立憲政治の模範てあつて、モンテスキユーの如きも此制度を以て所謂

立憲政體の精神を得たものとして說いたかの觀があるけれども、英吉利の政體なるものは其實に於て、所謂三權分立といふ事がないのである。英吉利の政體は三權分立といはんより國會萬能の政治である。國會といふのは何をいふかといへば、國王、上院及び下院の三者を包容したるものを稱するのであつて、議會といふ事とは違ふのである。而して英吉利に於ては國會が立法もなし、又行政の基礎も定め、又國會に於て多數を占めて居るものが政府を組織して、國會の意思に基て行政をなし、又國會に於て最高の司法權を行ふのである。かるが故に英吉利の國體は三權分立といはんよりは、國會に三權歸一して居つて、而して分立の實際は寧ろ存して居らぬといふを以て適當とすると思ふ。

獨逸の政治はどうであるかといふに、之は稍々三權分立の實を擧げて居るに近いかと思はるゝ。立法は國會之に參與し、行政は立法府たる議會の多數と關係なき政府に於て之を取扱ひ、司法は全然兩者と獨立した裁判所に於て之を行ふといふ狀態になつて居る。て三權分立の實を擧げて居る所は、之を獨逸に於て求むることが出來るといふのを適當とする。

斯くの如く近世の立憲政體を採つて居る所の國と雖も、其精神を一にして居るといふ譯には行かないのであつて、其國情により、其發達により、其組織に於て異りたるものが存するといふ事は固より免るゝことの出來ない數である。

二

次に近世の立憲國では所謂三權の一つといふ政府の組織即ち行政の組織はどういふやうな具合になつて居るかといふに、大略二樣の種類を分けることが出來やうと思ふ。其一つは所謂政黨內閣の組織を採つて居る所の國であつて、他の一つは所謂官僚的內閣の組織を採つて居る所の國である。それで政黨內閣の組織を採つて居る國の模範ともいふべきは英吉利である。

英吉利の政府の組織を大體話して見ると、政府の首腦となるべき所の政務官は、下院に於て多數を占めて居る所の政黨の者を以て組織して、而して此政務官の

下には永久的の事務官の組織が確然として存在し、此事務官なるものは政變によつて何等の移動を受けぬ。而して此事務官なるものは終生事務に當るの天分を有するものであつて、事務官より出てゝ政務官となることがない。政務官は必らず兩院の議員を以て之に充つることになつて居り、政府の更迭と共に位を退くものである。簡略にいへば英吉利の政府の組織は、下の方に官僚の組織があり、秩序整然たる官僚の組織があり、其上に之を指揮する政務官の組織があり、其政務官は立法府たる議院に其席を置いて居つて同時に國民の代表機關たる下院に於ける多數政黨に籍を置くものである。言葉を換へていはゞ、立法の實權を握つて居るものが政府に立つて行政の實權を取るといふ組織になつて居る。而して官僚は之が手足となつて、其技術的の知識を供給して居るのである。斯くの如くにして英吉利の政治といふものは、其事務の繼續を失はず、同時に國民の輿論を實現し得る實力を備へて居つて、極めて健全なる發達を遂げ來つたのである。

佛國及び米國等の政府の組織も大體英吉利の組織を模倣し又は模倣せんと考へつゝあるのである。只米國は憲法上所謂三權分立の主義を採つて居るが故に、議院に籍を有するものも政府に入りたる場合に於て其職を退くを原則として居る。大統領たり將た又國務卿たるものは必らず議院に席を有せざることを要件とするのを憲法の常則とする。是れ一に立法權と行政權は相互に干與し混淆すべからざるの主義に基いたに外ならぬのである。近頃は米國に於ても英吉利の官僚の組織の極めて完全なることを模倣して、文官の試驗を施し、永久的の事務官を漸次作つて、而して政務官と事務官の區劃を判然たらしむることに努めて居るが未だ其目的を達しないやうである、然し實際は多數を擁する政黨が政府を組織する結果となるのである。

次に官僚内閣の組織を採つて居る所の國に就いて見るに、獨逸が最もよい手本である。獨逸の組織に於ては、立法府は行政府と全然獨立すべきものであつて、立法府は單に立法、豫算に干與するに止つて居る。行

政府は自ら獨立の地位を保たざるべからざるものてあるが故に、行政府を組織するものは必らずしも立法府に籍を有することを要せざるのみならず、寧ろ全然立法府に關係なきものを以て行政府を組織することを根本觀念とする。而して立法府以外に於て最も國家事務に經驗あるものは何てあるかといへば官吏てある。官吏は一定の俸祿を國家より受けて、而して全身を擧げて國家事務に盡すの職責を有するものなるが故に、國家事務に就て最も堪能なるものは官吏てある。かるが故に政府を組織するものは之を官吏の中に求むるのを原則とするのが今日の實際てある。即ち大宰相より國務大臣を初めとし、重要なる職に充つるものは總て官吏の中より之を用ゐ、所謂官僚組織の內閣 作つて居る現狀となつて居るのてある。斯くの如き組織となつて居る國は、或は露西亞の如き、或は墺太利の如きものてあつて、又之に一種の理由も存し、又一通りの利益も存せないてはない。

先づ此等の二つの組織について其利害を考慮して見るに、各〻一得一失なきを得ない。所謂政黨主義の內閣制を採つて居る所では、所謂國民の輿論を代表する所の下院、其下院に於て多數を占めて居る政黨て內閣を組織するが故に、國民の輿論なるものを實行する上に於て便利なる譯てある。けれども所謂國民の輿論なるものが正當なる國論を常に發揮して居るかどうかといふ事は頗る疑はしきものてある。或場合に於て人が多數てあるが爲めに愚なる議論と雖も勢力を得ることがあり、或場合に於て非常に立派なる議論と雖も、之を主張し贊同するもの少きが爲めに實行せられざることもある。かるが故に政黨なるものが常に輿論の眞正なる代表者たることは英吉利の如く發達したる國に於ても、往々にして難い事がある。近頃ローズベリー卿の如きは政黨は眞の國論を代表することに於て適當てないといふ事を主張して、政黨の弊害を痛論して居る次第てあるが、政黨が常に國務に注意して政務を調査し、國論の歸向を謬らざる時には必らずや本當の輿論を代表することと固より疑ないのてある。而し時としては斯

くの如き愼重なる調査も施さず、又觀察も迂なることがあつて、爲めに充分に輿論を代表し且つ指導する所の實際を備へざることがある。之は英吉利に於て、現に政黨を改良すべきことを論ずる人ある程なるが故に政黨内閣組織についても大いに講究せざるべからざる事柄の一と思ふ。

官僚組織の内閣なるものは成程國家事務に全身を捧げ、國家と一致したる所の官吏を以て組織するが故に、國家の目的といふものに合致するが如き有様であるが然し官吏なるものは往々にして民論の歸向を充分に觀察することに迂なるものである。又民間の狀態を緻密に觀察し、之を以て政務施行の基礎にすること甚だ迂なる所あるが故に官僚組織の内閣なるものは、民論を代表するに頗る缺けて居る所がある。

斯くの如く兩者各々利弊相伴うて居る譯である。之は我國の如き憲政の施行未だ深からざる國に於ては、利弊の存する所をよく洞察して、而して憲政の實行を圓滿にして以て其有終の美を濟すことに到着しなくてはならないと思ふ。

三

我國に於ける所の官僚の方から觀察して見るに、矢張り獨逸の官僚など丶等しく、民論の歸向を見ることが迂である。又民間の事情に通ずること淺い。然しながら官僚なるものは國家の政務を以て自己の生命として居つた故に、政務についての見識に至ては敢て他に讓らん所がある。其利も亦認めざるべからずと思ふ。即ち我國の官僚（假りに官僚といふは官吏より出てたる政治家にして政黨に關係なきものをいふ）は一得一失はあるけれども、全然國家の政務を行ふに適しないものとするのは、之は偏見であらうと思ふ。此頃往々にして官僚であるが故に恰も國賊であるが如き態度を以て之に對するものあるのは甚しき偏見といはざるべからずと思ふ。

扨我國に於ける政黨を觀察するに、英吉利の如き國務に訓練を經たる政黨ですら尚且つローズベリー卿の如き非難あるのであるから、我國の政黨に對しても亦

多少の缺點を認めざるを得ざるは固よりてある。即ち我國の政黨なるものは、多くは黨勢の擴張なる事のみを主なる目的とするが故に頗る國務については迂なる所がある。又黨勢の擴張に急なるが爲めに、往々にして眞に國家を導くべき意見を枉げて、或は衆愚に媚びるが如き態度を採るの弊に陷るものがないともいへないのである。政黨の本當の價値といふものは、國民の眞の輿論の歸向を代表し、此歸向を善導して行くといふ事に存しなくてはならぬのであるが、此善導といふ點に於ては或は缺けて居る事がないともいへないのである。然しながら官僚政治家の如く國民の狀況、國民の現狀を洞察すること迂に非らずして極めて鋭利なることは認めらるゝのである。

斯くの如く我國に於ては政黨官僚共に一得あれば一失あつて各々完全の域に達して居るといふことはいへないのである。

四

凡そ一國の實際の政治といふものを圓滿に運用するといふ事については其國の政治上の力といふものが如何に分布されて居るかといふ事を見なければならぬのである。英吉利に於て政黨が政治の中樞になつて居る所以のものは、政黨にあらゆる政治上の力を網羅して居るが故に斯くの如き結果を見るのである。獨逸に於て官僚が行政の中樞となる所以のものは、行政の能力に於て官僚の中に人を集めて居るが故てある。て政治なるものは實際であるが故に、其國の現狀によつて如何なる組織を適當とするかを判斷しなくてはならぬ。

然らば我國に於ける政治の原動力は如何なる所に存するかを洞察して而して組織を定め、若し力及ばざるものあれば之を補ひ強くして而して政治を導くことにならなくてはならぬ。然らば目下の所で、我國に於ける政治の原動力は如何なる所にあるかといふ事を見るに、政黨なるものは固より非常なる力を有つて居つて之が政治原動力の主要なる部分を占むるは固より疑を容れない。何人も異議を挾むものはない。而し政黨のみが現在の狀態に於て原動力であるといふのは少しく

精ならずと思ふ。即ち政黨以外に官僚なるものも政治上の知識も實際の力も持つて居り、又之を行ふ力をも有するが故に、官僚なるものが假りに一つの組織をなして居るものと見るならば、此官僚も一つの原動力なることは疑を容れずと思ふ。

それであるが故に今日の現狀に於て政治をせんと欲するものは、固より政黨を基礎とせざるべからざるは多く絮說を須ゐぬと思ふが、又同時に官僚といふものを全然政治的の地位より排斥して了ふといふ事は之は甚だ偏見に屬して居りはせぬかと思ふ。是は必ずしも官僚を政府の組織に入るゝことを要すと論ずる意ではない。各々其力を量つて其用ゆべき所には用ゐ、改むべきは改めて、而して組織を益々發達せしめ、國家の目的を達せしめざるべからずと思ふ。

五

歐洲各國に於ても、政黨組織を內閣の主義として居る所の國ですらも、尙多少の除外例を置いて居るのである。即ち政黨者以外のものを以て政務官となすといふ例があるのである。又官僚の組織といふものを內閣組織の原則とする國でも、又或は政黨の人を以てし、或は事業界の人を以て國務大臣とするが如き除外例を設ける場合も少くない。是れ皆各々其國情に照して其足らざるを補ひ以て國家の目的を完全に達することを努める結果に外ならずと思ふ。

我國に於ても固より政黨が完全でない以上は大いに之を改め、之を基礎として政府を組織するは固より結構であるが、同時に政黨なるものは、多くの人を之に吸集し、多くの知識、多くの經驗、多くの觀察を之に包容して、一方に於ては民論を代表して之を善導すると同時に、又一方に於ては國家の政務を最も敏活に行ふの力量を備へざるべからずと思ふ。之をなすには政黨は固より門戶を廣くして、出來る丈けの人才を集め、攻究を重ねなければならぬのであるが、一旦政府の組織に當るに際しては我國の現狀に鑑みて政治の實力の存する所を明察して、そして政務を行うて國家の目的と始終することにならなければ眞個の政黨の職分を盡

したといふ事は言ひ難いと自分は信ずるのである。

六

自分の考ふる所では政黨といふものを改善するといふ事が日本の現狀に於ては最も必要なる事と思ふのである。即ち政黨が國務を運用するについての必要なる知識を網羅し盡し、民論を代表し指導し得る所の手段を網羅し盡し得るやうなる方法に改善することが現在に於ける急務と思ふ。從來の政黨は此點に於ては多少缺けたる所がある。此點は其足らざる所を補うて而して之を完全にするといふ事が最も迫つたる必要であると思ふ。如何となれば日本に於ては政黨は政治原動力の最も重要なるものなれば、其重要なる丈けそれ丈け改善の急務なる所以である。若し政黨にして改善せられ、而して國家の經綸を行ひ得る人才を網羅し盡し、國民の輿論を代表し善導し得る方法を盡した曉に於ては、日本に於て完全なる政黨を基礎とする政治が行はるゝ時に至ると思ふのである、而して斯くの如き時機は餘り遠からぬ中に來らざるべからずと信ずるものである。

七

世間では往々にして政黨政治なるものを以て恰かも天皇の憲法上の大權を侵すものゝ如く考ふるものもあるが、之れ亦偏見たることは申すまでもない。固より政黨にある所の人を以て內閣を組織するといふ事は政治の實際である。憲法上の大權と何等交渉はないのである。憲法上の大權の問題は之は憲法の法理論である。政黨員が內閣員たると否とは政治の實際の問題である憲政の運用の問題である。法理論と交渉はない。單純なる法理を以てすれば內閣を組織するものは必らず政黨員なりと論ずるのも偏見であると等しく、政黨員は內閣に列すべからずとなすのも亦偏見である。法理論を以てすれば、天皇の大權は絕對のものである。或は政黨員を以て國務大臣に任じ、或は以外のものを以て任ずる事も全然大權の自由に存する問題である。政黨員を以て內閣の要素となすといふ事柄は、政治の慣例上の問題である。運用の問題である。英吉利の如き所

謂政黨内閣主義を採つて居る國と雖も、法律文に政黨員にあらざれば内閣に入ることを得ずといふ明文が存するのではない。獨逸に於ても、官吏より出てたるものにあらざれば國務大臣たるを得ずといふ任用資格の明文があるのではない。之は固より明白なる事理であるけれども、世間往々にして法理論と政治上の實際の運用論とを混同するものあるが故に此點一言を費す必要があるのである。

要するに自分は目下の狀況に於て、政黨でなければ政治は爲し得ないものであるといふのは少しく偏見であると思ふと同時に、又官僚でなければ政治は出來ぬといふ考を持つのは甚しく偏見であると思ふ。又主義としても或は政黨政治でなくてはならぬとか、或は官僚組織でなくてはならぬとかいふ絶對の主義が貫けるものであるかといふ事は時の狀況と俟たなければならぬと思ふ。若し政黨にして改善せられ、前申す如く極めて完全なる域に達した場合に於て、政黨が政治をなすといふ主義を以て最も國家の目的を達するに便宜なりと信ずるものであるけれども、之は詰り時の狀況によつて判斷せざるべからずと思ふ。又政治家は斯くの如き目的を以て政黨を改善することを心掛けなくてはならぬ。若し政黨にして弊のみあつて利のない狀態に陷つたる政黨ならば決して國政に任ずること能はず、若し政黨にして完全なる域に達したる場合には期せずして政治は此點に移らざるべからずと思ふ。かるが故に我々は何處までも政黨の改善を計らなくてはならぬ政黨の改善といふ事は一面に於ては實體上の包容を廣くし、一面に於ては其知識內容を改善することであつて、之によつて政治は初めて圓滿に行ひ得ると信ずるものである。而して其改善の機運が已に熟して來たから、遠からず其目的を達するであらうと自分共は信ずるのである。

（談話筆記校閲濟）

支那に於ける日本人の發展

法學博士 男爵 加藤高明

余が此前に支那に遊んだのは明治三十二年であつて今回十餘年振りで再び彼地を視察するの機會を得たのであるが、此十餘年間に於ける我邦人の發展は頗る目覺しきものであつて、南部に於ても北部に於ても到る處邦人の勢力の増加し又益々増加せんとするの實況を目擊するを得たのは余の甚だ愉快とする所である。

先づ上海に行つて見ると、此處は各國勢力の集注せる所で、我日本の勢力丈けが格別顯著であるといふことは勿論出來ぬけれど、然し漸次に地歩を占めんとするの好況を呈して居ることは喜ぶべきである。漢口は四通八達の要區であつて、專管居留地には千五百人の同胞がある。十餘年前に自分が領事の案内で專管居留地豫定地を視察した時には場所も邊鄙で支那街にも遠く、こんな所では將來の發達もどうかと心配した程であつたが、今回其實地を一見して發達の異常なるに驚かされた。漢口は從來水運のみであつたが今や京漢鐵道の便が開け、又將來粤漢、川漢兩線が全通したならば貿易上益々樞要の地となるだらうと思ふ。此地に店舗を有して居る三井物産の如きは益々其商賣を擴張し今や日支間の貿易のみならず、弘く歐米諸國と支那との貿易にも手を染め、其成績頗る見るべきものがある。

長沙は十餘年前には船便だもなくて視察の便を得る能はざる程であつたが、今日は日清汽船の航行があり全く其面目を異にして居る、現在に於ても在留邦人が既に二百人の多きに達し、大商店の出張所もあつて將來最も發達の望がある。此地は從來は排外思想の旺盛な所であつたが、今日は其風潮が一變し、喜んで外國文明を歡迎せんとして居る。廣東と共に政治上重要の

地位を占むべき所であつて、黄興は此地の出身であり譚都督の次席たる七名の司長は外務部長一名を除くの外悉く日本留學生出身で、流暢に日本語を操ることが出來る。

北京は公使及び主もなる我邦人の在留地てあるから改めて多くいふ必要がない。天津は是れ亦十餘年前に專管居留地を定めた際には地圖の上に想像線を引いて支那政府に交渉した程てあつて、寧ろ邊鄙に近かつたが、今日ては宏壯な煉瓦造りが櫛比し、且つ支那人にして自國政府を信頼せないものが我政府の保護を得んが爲めに此處に家屋を建築して移住するものもあつて日支兩國人軒を接し、一戸も空屋なき盛況を呈して居る。又此地に於ける日本の貿易も頗る盛んとなり、今や英國に亞ぐの狀態となつた。

濟南府には在留人百人ほどあるが、將來我邦の勢力の大に發展すべき地と思ふ。獨逸の經營して居る膠州灣は、流石は獨逸の經營丈けあつて、萬事が遠大の大計畫てあるが、然し實際に於て其恩惠を蒙つて居るものは我日本である。といふのは此港灣を利用する貿易を最も多く取扱ふのは我日本人てあつて、同地貿易の六分は我國が占め、日本商品の輸入額は、支那商品の日本輸出額よりも多いと聞いては實に快心の至りである。元來此地は山には植林し、水をば清冽ならしめて外人の遊覧者引附策を講じたものてあつたが、邦人の活動振り前述の如くてあつて、同地が繁榮すればする程我邦人を利益するの結果となるだらうと思ふ。

又支邦に於ける今後の大問題は鐵道敷設の一事てあるが、今や英、佛、獨等の大資本國が、各〻金を貸付けて、支那政府をして鐵道敷設を實行せしめつゝあるのは頗る歡迎すべき事柄てある。若し此等の大國が鐵道敷設權を得て其沿線の行政權、警察權等を壟斷するといふ事てあれば、之は世人の危惧するが如く慊忌すべき事に相違ないが、只支那政府に金を貸付けて敷設せしむる丈けならば、之は頗る我邦人を利し、貿易上益〻發展活動するの便利を與へるものと信ずる。

又今回の視察に於て最も心強く感じた事は、日本語

の通用區域の頗る擴大せることと、對日感情の漸次良好なる方面に向ひつゝあることとである。世界到る所英語の通ぜざる所なしとは我々が嘗て英國人に向て欽羨した所であるが、今日支那の各地に於て日本語の通用が甚だ弘くなつて居ることとは一驚に値する。前に述べた如く湖南省の如きは都督を除く外要局に當れる人は殆んど皆日本留學生であつて、何れも多少日本語を解して居る。又上下兩院議員八九百人中其半ばは日本留學生出身であつて、參議院議長張繼、衆議院議長湯化龍初め政黨の重立ちたる人は大抵日本語に通じ、法律行政等の用語も皆日本丸寫しのもので「取締」とか「取扱」とか「手續」等の文字は勿論甚しきは「遣繰」「都合」「運動」等の言葉も已に慣用語となつて居る。それで支那語のみを研究した西洋人は「新らしい文字は分らなくて困ります」というて溢して居る。

斯く日本語の勢力を有し、且つ對日感情の漸次良好になりつゝあるのは、主として日本留學生が現在に於ける樞要の地位を占めて居る爲めである。只彼等の中間ゝ日本に對する好感情を有せぬものも見受けるが、それは我國留學中教師なども餘り親切に彼等を取扱はず、又我邦の無智の階級から侮蔑されたのなどが因をなして居るやうである。今後は官民共に其等の點にも充分注意して彼等をして何處までも日本に對して好感情を有せしめることに努められんことを希望する。兎に角に支那に於ける日本人の發展は頗る目覺ましき事實であつて、又今后益ゝ發展せんとするの形勢にあるのは喜ぶべき次第である。

現内閣の首相たる　山本權兵衛伯を論ず

山名次郎

貴誌に於て近來、政治界の大立物に關する評論を連載せられ、已に桂公、西園寺侯の如き當代の政治家中の兩橫綱や、犬養氏の如き所謂民黨の旗頭等の批判を終へて、今回は山本權兵衛伯の評論を揭げらるゝに當り、平常餘り訪客に面接せぬ伯を知悉する人が操觚界に見當らぬとあつて、偶然にも余に向つて之が批評を求めらるゝことになつたのは、自分の愉快とする所である、いふまでもなく、山本伯は現內閣の總理大臣にして且つ一面に於ては軍人中の最も重きをなす人てあるから、評論の主題としても又順序としても甚だ當を得た事と思ふ。さりながら自分も鹿兒島のものであるから、先輩山本伯を評論するには頗る遠慮會釋するてあらうとの豫想を抱くものがあらう。然し自分は幼少の時よりして三田の敎育を受け、而かも直接福澤先生に親炙し、不肖ながら今日に至るまで福澤先生の主義方針を悉く遵奉して來て居るものである。されば假令生れは鹿兒島てあつても、別に鹿兒島の人に向つて餘り多くを求めたこともなく、いはゞ局外中立の地位に立つものであるから、先輩山本伯に對しても徹頭徹尾自由に評論しても差支ないのである。去れば自分は多年伯を知るにも拘らず、敢て同鄉人たるの偏愛を以ていふにあらずして、實際深く伯の手腕人物について畏敬し、伯を以て確かに當代政治家、軍人中の第一流の人物と信じ、伯が國家多事、國步艱難の今日に於て自ら國政の燮理に當らるゝについて期待する所が多い、從つて今茲に伯を評論するに方つても、大體に於て非難よりも賞讚の辭が多からうと思ふ。然しそれは決して同鄉の薩人たるが故にあらずして、伯に對する自分

の觀察の然らしむる所であることを斷言して憚らぬ。只何人も完全無缺といふ譯には行かぬ。多少の缺點は如何なる人にも免れぬ。依て伯を評論するに方つても勢ひ其缺點をも擧げるのは止むを得ぬことである。本論に入るに先つて、一言自分の態度を明かにして置く。

山本權兵衛といふ人は、いふまでもなく鹿兒島の人であつて、已に幼少の時よりして其非凡の人物であることを知られて居つた。大寺安敎、河島醇、山本權兵衛は維新前後からして薩摩壯年中の三人男といはれ、何れも大西鄕の崇拜者であつて、儕輩の間に嶄然頭角を顯はして居た。大寺の剛邁にして不屈なる、河島の博識にして議論に富める、山本の精悍にして俊爽なる共に容易に得難きの人才とせられた。而して大寺は陸軍に入り、山本は海軍に入り、河島は純粹の政治家として起つことになつたのである。河島は夙に獨逸に洋行し、非常の出世もせずに終つたが、其人物は兎も角も一方に雄を稱するに足つた。山本權兵衛に至ては海軍に入つて遂に雄を立て通し、未だ其名を得ぬが殆んど無名の元帥たるのみならず、現に内閣の首班に列して、政治家としても確かに第一流たるの實力をあらはしつゝある。

權兵衛伯の幼時に就ては自分は詳しく知りもせないし、又之を語る必要もない。扨彼が兵學寮に入つたのは明治三年十一月であつて、東鄕大將の見習士官となつたのと殆んど同時である。兵學校に居る頃からして所謂嚢中の錐であつて、才鋒、元氣、耐忍、勉强悉く人に傑出した。時あつてか元氣餘りに横溢して、先輩の連中も之を制御するに困つた位である。事の詳細は知らぬが、何でも彼が海軍大尉かの時に、或國家の大事件について、時の要路者の措置を憤慨し、非常なる大議論を試みたことなどもある。

兵學校を卒業するや彼は一般の通則に從つて、暫らく軍艦に乘り込んでゐた。軍艦乘込中に於ても定めて珍談奇行が多からうと思ふが自分は詳しくは知らぬ。海軍大佐になるに及んで、軍艦生活を罷めて、海軍

省主事として本省に入つて來た。時の海軍大臣は樺山資紀であつた。處が此樺山といふ人は又種々の非難あるに拘らず兎も角も鹿兒島に於ける一の立物であつて矢張り壯年時代より大西鄕を崇拜し、沈毅剛邁を以て薩人中に推されて居つたばかりでなく、又確かに一と角の手腕もある人物であつた。彼は元、陸軍の出身であるが、當時海軍部内に、其地位聲望海軍を統一し、川村純義の後に紊れに亂れたる海軍の整理を斷行する人が無かつたから、是に於て西鄕從道は陸軍より彼を拉し來つて之を海軍大輔となし次いで海軍大臣となして、其任に當らしめたのである。樺山なるものは斯くの如く一面に於ては確かに才氣手腕を備へ、一面に於ては西鄕に引立てられて西鄕の後援を有つて居るので海軍の事務を整理統一せんとするに當つては、其勢力殆んど旭日昇天の概あり、凡そ時の海軍の事は殆んど樺山の意の如くならざるはなき有樣であつた。而して最も此の樺山を援けたものは確か主計總監かの職に在つた本宿託命であつた。普通をいへば、海軍の事件を處置するに方つては大いに山本主事の意見を聽き、又山本主事を使つて何でもせねばならぬ譯であるが、樺山は萬事を本宿と協議して山本とは相談しない。兩雄の衝突は玆に起つたのである。固より一方は堂々たる海軍大臣であつて、其勢力隆々たるに對して、一方は眇たる海軍省主事であるけれども、山本の勢力亦なかなか侮るべからざるものあり、樺山から見れば山本は何だか眼の上の瘀瘤の如き觀を呈した。樺山は主として本宿と事を共にして山本を省みざるにも拘らず、精悍なる山本の事であるから、其間に幾多の意見を出し又種々なる計畫を立てた。然し一見識ある樺山は又なかなか之を採用せず、大抵之を斥けて自分の意見を遂行した。是に於て樺山と山本は同鄕人であるにも拘らず、其間には何時となく一種の面白からざる感情を互に抱くに至つた。其當時に於ける兩人の胸中を打割つて見れば、樺山の方では山本を以て「長官の命令を柔順に奉ぜぬ生意氣な小僧」と思ひ、山本の方では樺山を以て「何だ、陸軍あたりから轉げ込んで海軍の事を

知りもせないでいろ〳〵の事をいふ、今に見ろ」といふやうな考であつたらうと思ふ。

斯くの如くして樺山は明治廿三年より廿五年まで足掛け三年の間海軍大臣をやつたが、議會に於ける海軍攻撃がなか〳〵矢釜しくなり、樺山は例の大演說を試みたが、其次の議會では薩摩の総攻撃となつて非常の苦境に陷り、遂に樺山は罷めて了つた。然るに其後任の人選が頗る難件となり、誰も海軍大臣になり手がなく、大いに困り拔いたのであるが結局、鹿兒島の老先輩として尊敬せられ、殊に海軍部內で德望ありし仁禮景範が樺山の後を襲ぐことになつた。抑〻仁禮景範の山本權兵衛に於ける殆んど親子の關係である。山本が海軍兵學校に居る時に一大故障を生じて、事頗る困難なる狀態に陷つた。處が先輩仁禮景範が山本の非凡なる才を愛するの餘り、其事を悉く圓滿に取り結んでやつたといふ關係もあり、山本は俊邁なる樺山には抵抗したが、溫厚なる仁禮には如何なる事も命維れ從ふといふ有樣であつた。そこで時なる哉、仁禮の海軍大臣になるを機會として山本權兵衛は十分に其才を試むるの好運を得た。恰かも蛟龍の雲霧を得て池中を出づるが如く、朝暾の暗黑を破つて東天に昇るが如く、光芒陸離、精彩奕々たる勢を以て乘り出して來た。仁禮は軍人としては剛邁不屈の人であるが、政治家としては極めて臆病にして且つ政治的才能に乏しい人であつた。そこで山本は一面に於て之を援けて自己の手腕抱負を思ふ存分に發揮すると同時に、一面に於て報恩の念を以て此溫厚なる老人に對した。由來報恩の念極めて盛んなるは山本の性格に於ける一美點であつて、彼の仁禮や西鄕從道などに對する態度は賞讃に値するものがある。

仁禮の海軍大臣となりし頃よりして山本の才幹は一般に認められ、又海軍に於ける其地位も次第に堅固となり、是に於て所謂權兵衛大臣なる名稱が起つて來たのである。眇たる一大佐にして主事たる山本は隱然海軍大臣たるの勢力を有するに至つた。而して世間の薩摩攻撃の聲も此時頗る盛んであつて、山本權兵衛なる

ものは寄るとさはると世間談柄の好き材料となつた。彼は如何なる人ぞ、或者は怪物といひ、或物は非凡といひ、或者は豪傑といふ。殆んど議論が分らなくなつた。餘り議論が矢釜しくなつた揚句に、彼を海軍から放逐して了へとの論までも出た。そこで長州三尊の一人にして時の內務大臣たる井上馨は、餘りに矢釜しき評判に好奇心を起し、一度逢つて見ようといふので、一日山本を內相の官邸に引見した。處が會談して見ると、どうも實に議論痛切、識見該博、辯論縱横、小は海軍船艦の瑣事より、大は世界の大勢に至るまで細論曲說、流石の井上も喫驚して、實に天下の快男兒、國家有用の材、何事ぞ之を海軍部內より放逐せんとは、そは以ての外の事であるとて口を極めて山本を激賞した。山本放逐の話は此井上の激賞によつて立消えになつたばかりでなく、大隈伯なども之と逢つて見ようといふ事になり、大隈も亦「山本はなか〳〵面白き人物」といふ品評めをしたのである。

明治二十六年二月伊藤內閣が出來ると共に仁禮は海軍大臣の職を辭した。鳥渡此頃西鄉伯は民間に下つて品川彌二郎と共に國民協會を天下に向て擴張せんと、品川は東海道を下つて九州に、西鄉は東北巡遊を終へて北海道に渡らんとする時に於て端なくも宮中よりのお召に與り、突然海軍大臣の命を拜した。時の海軍次官は伊藤雋吉であつた。此人は實に古き海軍の物識りであつて、極く温厚で單純なる事務家であつた。大臣の西鄉從道は天下の大器であつて敢て自ら意見を述べ或は自ら細務を見んとするが如き小人物に非らずして飽くまでも巨大にして只衆人の上に居然として臨み、努めずして群雄を駕御するを得た人であつたから、權山とは變つて、眼の下の山本權兵衛輩と枘格齟齬するが如きことなく、巧みに之を圓融抱擁して、權兵衛をして思ふ存分に其手腕を試み其才能を發揮せしめた。そこで海軍省の事は獨り軍務に關する事のみならず細大の事殆んど其決を權兵衛の意見に仰ぐが如き形勢を現じた。例へば經理局の村上の如きは何か事件があれば先づ山本と意見を打合はした上で返事をするといふ

氣味合てあつたといふ。以て權兵衛の得意の狀想見すべしてある。

山本は仁禮の時代に頭角をあらはすの好機會を得、西鄕の時代に水魚の關係を以て其手腕を揮ひ其地位を築き上げたが、玆に復め時なる哉、西鄕の在職中日淸戰爭は開始せられた。而して大本營は廣島に移された。彼山本は大佐の主事を以て參謀として西鄕に從つて廣島に行つた。抑々日淸戰爭なるものは今日に於てこそ何でもなかつたやうに考へらるゝが、當時に於ては支那は老いたりと雖も大國であり、且つ日本よりも優勢なる艦隊を持つて居つた。勝敗に關しては、日露戰爭の時に露國に對するよりも危險が多いと思はれた。そこて大本營に於ても屢々議論沸騰した。權兵衛は大佐を以て御前會議に列するの光榮を得た、時の軍令部長は樺山であつた。然し御前會議に於ける議論に於ては山本の意見が常に一頭地を抽き、何人も之に向て反對を唱へ得るものがなかつた。當時の軍人中最も有名なる川上操六をして舌を捲かしめた。川上は一種圓滿にして大才の人てあつたから、よく權兵衛の才を見拔き大いに之を用ゐやうとした。或時などは山本を陸軍の本營に連れて行つて、是非お前の智慧を借りねばならぬなどゝいつた事もある。又山縣公なども當時の山本の意見に對しては殆んど顏色なかつたといふ。

日淸戰爭當時に於ける薩摩の勢力は非常なもので、長州は殆んど齒が立たなかつた。長州が其後に於て大勢力となり永く獨舞臺の如き觀を呈したのは、當時の薩摩の勢力に對する反動であるとも見らるゝ程であつた。そこて時の伊藤總理も大に薩摩芋の機嫌を取らねばならぬ必要があつたものか、又實際に大に感服したのか、一日廣島に於て川上操六と山本權兵衛の二人を引連れて御前に出で、申上ぐるには、此川上と山本の兩人は何れも年若のもので御座ります。然し我々老人共は今日以後此兩人に向て若年寄の名を附けました其譯は此兩人のいふ事はなか／＼非凡であつて、我々老人の及ばぬ智慧を出す男で御座りまする。此旨を言上致すによつてどうぞお上に於てもお含みおきを願ひ

せするといつた。

どうも山本權兵衞が日淸戰爭てメキ〳〵技倆を上げた事は非常なもので、明治先帝の彼に對する御信用の厚くなつたのも此頃からてある。而して彼は戰爭の終りに近づく頃には海軍少將に昇進して軍務局長となつた。軍務局長といへば今日てこそ、それ程に思はれぬが、權兵衞の時代には其勢力誠に盛んなもので、海軍省の勢力の中心は悉皆軍務局長に移つたのてある。權兵衞は實に不思議な男て、其地位によつてエラクなるにあらずして、權兵衞が居れば其地位がエラクなるのてある。彼が主事となれば主事の權力擴大し、彼れ軍務局長となれば海軍の全權が軍務局長に移る。當時に於ける彼の威風は實に海軍全省を風靡し、其容貌を見ても當時の彼は英氣颯爽として、實に見ても心持よいといふ有樣てあつた。是れ併しながら山本の穎才に加ふるに西郷の大いなる後援に俟つ所あつたのはいふまでもない。

普通の軍人が大臣になるのは、必らず次官より歴任するのは其時までの慣はしてあつたが、處が西郷が在職六年にして明治三十一年海軍大臣を罷むるや、西郷が其後任に推薦したのは、軍務局長山本權兵衞てあつた。即ち海軍少將てあつたのを中將にして次官を經ずに直ちに海軍大臣にした。之は蓋し非常なる異例てはあるが、然し彼は已に軍務局長にして海軍大臣の實を行つてゐたのてある。されば彼が海軍大臣になつたのは、只形式的に其名稱を附與せられたに過ぎないのてある。

彼が海軍大臣となるや、彼の勢力と手腕は益々其大を加へ、陸軍に於ける川上の遣口と同じく、歐洲列强へ視察武官ヶ派遣し、大は世界の大勢、海軍行政の大綱より、小は船艦、艦具、糧食の事に至るまて、數字により、統計により、實驗によつて詳しく之を調査した。そこて世界の大勢などについては却て外務省よりも詳しく隱然として外務の權力をも有するに至つた。海軍の基礎が着々として出來上つて行つた事は固より申すまでもない。

是に於て權兵衛の名は益々隆々として昴つた。餘り評判がよいものだから、一度逢つて見ようと思はれたものか、一日福澤先生は三田の山上から之を招かれた。山本も一代の大先生からの招待てあるから面白い事に思つてノコ／＼とやつて來た。然し山本が考へた、ナニシロ明治文明の率先者たる福澤先生の事てあるから一つ何か奇拔な挨拶をしてやらうと思つたらしい。聞く所によれば、彼は開口一番「今日は實に初めてお目に懸ります。扨御維新前の事につきましては先生の御敎示を受ける事も多々あるだらうと考へます、併し御一新後の事については私から御話申上げたい事が御座ります」とやつて、維新前の事は先生の談話も聞くが維新後の事については敢て敎を仰がぬと太つ腹に出かけたものと見える。流石權兵衛の人物があらはれて面白いてはないか。處が一方も亦福澤先生の事てあるから、胸襟を打開いて色々の話をされた。處が此兩人の話は枝から枝がさいて、談柄多端。彼談じ此聞き、此話し彼頷き。一話は一話より面白く、一談は一談より興熱して、時去り時來るを覺えぬ程て。午前九時から初めた話が、何時しか晝になつて居る。そこて山本は氣が附いて辭し歸らんとすれば先生は、「イヤ待て、今飯を誂へたから」とて、趺坐をかいて又話し初めた。西洋料理の御馳走が出て、奥さんも出て來られて、「之が薩摩の海軍大臣の山本權兵衛さんといふ人てある」と紹介されたと洩れ聞いて居る。それから又話から話て何ても午後四時まで對談された。餘程の意氣投合てあつたと思はれる。其後自分は福澤先生から直接に聞いたが、「此頃山本權兵衛といふ人に逢うたが、イヤ實にエライ男だ。彼は軍人てない、學者だ。全體薩摩の奴は數學の分らぬ男が多いが、山本と來ては徹頭徹尾悉くマセマチカルに出來上つて居る。どうも非常に面白い男だ」と激賞せられた。然るに又自分は山本伯にも逢つて、伯の福澤先生評を聞くことも出來た。伯がいふには「自分は福澤先生にはひどく敬服した。自分は伊藤公の知遇を受けた、が今日から見ると、三田の老人が一日自分を呼びつけて話を聞かして吳れた其厚情

には更らに一段の敬意を表したいと思ふ」といつた。山本伯が福澤先生に最も感服した點を聞くに多くのエライ人に逢つたが、多くの人はよく自分の手柄話をするものだ。又あれ位の大事業をした人ならば、手柄話をするのも當然として聞く。然るに福澤先生は不思議な人で、毫頭も手柄話をしない。維新以來の自分の見込違ひ、喰ひ違ひ、失策話、失敗話ばかりをやられた。己れはかういふ計畫をしたが、時勢は斯う轉變した。己れは斯ういふ方針でやつたが時代は斯う推移したと自分の見當違ひのみを話された。權兵衞實に敬服した。之は實にエライ人だと頭が下つた。山本伯はあの莊重なる句調を以て「あゝ之は偉人であると思うた」といはれた。

福澤先生と山本伯との間に於ける今一つの逸話は、福澤先生が腦溢血に罹られて病氣危篤といふ事になり兩陛下から御見舞を頂戴し、日々容態書を差出せとの御命令を忝うした事がある。幸にして病氣が稍々回復して床上げをするといふ事になつても、卒中の爲めに記憶力が非常に衰へて、顔は知つて居つても人の名前はなかなか思ひ出されなかつた。奥さんの名前までも忘れられた事がある。其時の事である。醫者から訪客の面會許可を得られた時に、最初に先生が面會を求められた人がある。「あの薩摩の奴を連れて來い」といはれる矢張り名は思ひ出されぬのである。誰の事か分らぬから家人も大いに弱つて、野村政明とか何とか三田に關係ある薩摩の人物の名を數々擧げたが、先生は手を横に振つて、さうでないといはるゝ。不肖山名次郎の名も其中にあつたさうだが、矢張り手を横に振られた。それで何とも困じ果てゝ了つたが、此頃山本權兵衞といふ人が二三度來たからあの人でないかと話し合つてゐると、先生兩手を打つて「それだ！」といはれた。極く些細の事であるが先生が如何に山本伯を重んじたかゞ分る。呼ばれた山本伯は勿論名譽であるが、自分は呼んだ福澤先生の見識にもひどく感服するものである。何故といふに、之は全く自分の推測であるが、先生の山本伯と最初に面會せんとせられたのは、

勿論伯の人物に感心して面白い男と思はれた事にもよるであらう。然し自分の推測する所によれば其外にもまだ理由がある。先生は元來海軍論者で、日本の國防は海軍を充實擴張するにありとの意見を有せられて居つたから、海軍の事には常に意を注がれて居つた。處が久しい病氣の爲めに、病中の出來事は一切分らずに居る。處が山本と話せば、獨り海軍の事が分るのみならず、世界の大勢から國内の出來事まで明瞭に分る。そこで山本伯を呼んで自分の後れた知識を補つて置かうと考へられたものであらうと思はれる。之は先生平常の人格から見てどうも間違あるまいと信じて居る。然らざれば如何に人物が面白いからとてまだ二三回しか逢はぬのに其親友故舊を差置いて第一に山本伯に逢ひたいといふのは解せられないと思ふ。

其後福澤先生が病癒えて別莊に於て病氣全快の祝賀會あり時の各大臣を初め朝野の名士數千名來會したが當時の山本海相は軍服を着けて來た。自分は其時接待役をしてゐたが、山本伯は自分に向つて「先達は三田の老人が逢ひたいといふ事で逢ひに行つたよ」と言つて居られた。

彼の海軍大臣中に起つた大事件はいふまでもなく日露戰役である。戰役中の事は固より詳しくいふ必要もないが、若し戰後の論功行賞について自分の意見を述べれば山本伯は今一段の功績を認められてもよからうと思ふ。日本海々戰については東郷大將が其局に當られたから勿論其首功に居るべきであるが、然し自分を以て之を見れば若し東郷大將が大勳位を受くれば山本伯も之を受けて差支ないと思ふ。海軍の組織計畫は悉く主として山本伯の方寸より出てたものであつて、又東郷大將を全艦隊の司令長官に推薦したのも亦山本伯である。すれば日本海々戰勝利の原因は確かに山本伯に在るともいへる。あの戰爭を開始せんとするに當つて、陸軍の戰鬪準備に少からざる遺憾があつたが、海軍の方は完全に準備が出來、陸軍の躊躇する時に海軍が其機先を制したのも主として山本權兵衛の一決斷によつたといふ。

日露戰役後長い間軍事參議官として引退して居つて世人は彼を以て或は老いたりとなし、或は彼遂に成すあるに足らず、只海軍の黑幕として昔日の勢力の隋力を維持するのみ、孫の顏を見て徒らに老後の慰となすに過ぎずと罵る一方に於て、彼に成すあるの志確かに有り、只山縣、井上等の政治上に勢力ある間は舞臺に出てざるべしなど種々雜多の說があつた。處が偶然にも今度の局面に飛び出して、政治家としての其手腕を試す好機會を作つた。

彼の政治系統をいへば、彼は伊藤系の人である。嘗ては伊藤の四天王の一人といはれた事もある。彼は之まで一個の海軍々人として世間に受取られたけれども彼の政治家的手腕は知る人ぞ知るで、昔から尋常のものではなかつた。日露戰爭の始まる少し前に、露國のローゼン男が屢々海軍省に山本を尋ねるが、山本は何時も會はない、そこてローゼンが非常に怒つて、伊藤の處に怒鳴り込んだ。山本は怪しからぬ男だ、幾回行つても一度も面會せぬと訴へた。そこて伊藤は驚いて山本を呼んで、それては困るぢやないかといつた。處が山本は輕く受けて、よろしう御座る。御心配に及ばぬというた。何をするかと思うたら、それから間もなく、橫須賀の海軍造船所を各國大使公使に觀せる事があつた。ローゼン男も亦やつて來た。彼は其席上に於て巧みにローゼン男を丸めて、今までの惡感を悉く忘れしめた。其外交的手腕の尋常でないといふ事は此一事でも分る。又彼の識見膽力を見るべき一例は、日淸戰爭當時に於ける發砲事件である。あれは國際法上先例がないとて伊藤總理も大いに困つた。それて山本を呼んて其事を詰ると、山本は極めて平然たるもので、一向心配する必要がない。直ぐ何とでも出來る話だ。全體國際法上の事は深く先例を問ふの必要はない。先例がなければ我より先例を開けばよい筈のものぢやないかといふた。其意見が奇拔で而かも要領を得て居つたので流石の伊藤も大いに其識見に服したといふ事である。

元來今日までの日本の國是は大體に於て陸主海從て

あつて如何なる内閣に於ても陸軍は他の各省に對して優越の地位を得、陸相のいふ事は御無理御尤て通したものである。然るに山本丈けは異例であつて、山本の海相たる時は、殆んど内閣會議の首腦者であつて、陸軍の豫算に向つてもドシ／＼切り込んで行く。寺内などもそれて大分やられたのである。それで彼が内閣に居る時は事實上の中心の如くなつて、桂なども彼の力量と手腕には中心畏れて居つたのである。滑稽な事には第一桂内閣の時に久保田文相などは、豫算會議の前後などには海軍省に日參して居つたといふ。又一の議案が出る時には法制局などでも彼の理窟には負けるので閉口して居つたといふ。

彼の手腕力量は桂を初め長州系の人の熟知する所なので、彼が出廬せば己等の勢力にも大打撃を受くべきことを怖れ、成るべく彼を引退の儘に葬らんと苦心したのであるが、幸か不幸か山本は今回の風雲に乘じて政界の中心に乘り出して來た。其政治家としての價値に對する批評は種々であらうし、又多く今後の施設如何に繫ることであるが、然し今日までの遣り口について見れば、なか／＼しつかりして居つて、必らず今日までの彼を辱しめぬ手腕を發揮するだらうと信ずる。

以上話し來つた所によつて見れば、山本伯は實に一世の傑物であることが分らうと思ふ。之は自分が同じ薩人であるが爲めにいふにあらずして、伯に親炙し又伯を研究した人の必らず一致する所であらうと思ふ。然し人誰か缺點なからんやで、伯と雖も缺點はある。長所のみを擧げて短所を擧げぬのは評論の公平を失する虞があるから以下少しく伯の缺點をいつて見ようと思ふ。

伯は人と會へば餘り多く自分の話をし過ぎる。そして自分の話が濟んで了ふとお別れになることが多い。それで大抵の人は面喰つて歸つて來る。又どうも人の意見を容れるといふ事も比較的少い。どつちかといへば我見を通すといふ事になる。或は之に西郷從道の雅量海の如きを加へたならば一段の光彩を發揮するだらうと思ふ。又今少し門戸を開放して人に接することを

しなくてはならぬ。少し煩さいかも知れぬが政治家となれば廣く天下の人に接するの必要がある。伯の家の前には何となく鐵條網でも張つてある感じがする。此點は少しく高島鞆之助や大隈重信などの幾分を加味したいと思ふ。又餘りに事が細密に入り過ぎるが爲めに動もすれば大才に疵を附けぬかとも思はれる。又或意味からいへば餘りに一身の計を爲すに用意が周到に失する様に思ふ。

然しながら人誰か缺點なからん。若し伯にして此等の缺點微りせば完全無缺の人となるてあらう。人に完全無缺を望むのは餘りに無理なる註文てあらう。

同郷の先輩に對する妄評は誠に僭越の事てあつて、又當人若くは當人を一層よく知つて居る人から見れば間違があるかも知れぬが、自分は自分の信ずる所を正直に開陳したるに於て毫も疚しき所なく、且つ天下の公人として天下の公人を論評するは必ずしも不遜ならざるを信ずるものてある。

罷免官吏の身の處置

△働きさへすれば必らず仕事あり

法學博士 男爵 阪谷芳郎

今回の行政整理の結果、罷免になつた官吏の數は五千以上に上つた。それ等の人が如何に身を處すべきかについて意見を述べよとのお求めであるが、之は銘々人によつて違ふものであるから、一概に其處置振りを認定することは六つかしい。然しながら大體之を區別して論じて見ると、中には政見の相違―詰り政黨政派の關係から罷められたものもあらう。さういふ人は野に下つて、大いに自分の思想を磨いて更らに捲土重來の機を待つがよからうと思ふ。

然しながらさういふ事に關係のない、普通一般の人は、再び會社なり若くは官途なりに就くといふ事は望ましい事であるが、世間の進歩は一刻も止ることなく、後進のものがあとから〳〵押し寄せて來るのであるから、なか〳〵容易に出來にくい事と思ふ。夫れ故に地方なり又は殖民地なりに行つて働くか、若くは一時思ひ切つて外國へ行つて、新らしき運命を開くといふやうな事をした方がよからうと思ふ。或會社なり或官署なりに缺員があつて、之に入る機會があればそれで宜しいが、空しく機會を待つよりは、寧ろ自ら進んで一つの仕事を組立てゝ、それに從事する方がよからうと考へる。それには都會に集るよりは地方若くは殖民地の方が其機會が多い。固より老年に臨んだ人は遠方に出かけることが六つかしいから、地方の自治體なり、民間の慈善事業なりに手傳をすることが國家の爲めに望ましいのである。

之を要するに人間が各々働きさへすれば必らず何か仕事があるので、仕事があつてから働かうと思ふのが根本の間違である。「働けば必らず仕事ある」といふ原則を忘れぬのが第一の緊要事と考へる。

山本首相の訓辭にもある通り、此度の改革は、其人に不都合があるからといふのではなくして、全く政費節減の必要上人員を淘汰したのであるから、罷免されたからとて決して其人の不能を證明するものでない。然らば其罷免されたといふ事は、不時に病氣に取つかれたと同じ事であつて、寧ろ其人の不運といふべきである。夫れ故に罷免になつた人々は恩給とか、退官賜金とかによつて遊惰に暮らすのは、自己の才能を發揮する機會を失するのみならず、又實に國家の害をなすものである。例へば鋤を揮つても草鞋を作つても、其鋤や草鞋を賣つて多少の收入を得る

ことも出來、又國家に向つてそれ丈けの生產的事業をなした事にもなる。詰り働きさへすれば、仕事があり、仕事をしさへすれば多少生活の資料を供する譯になる。夫れ故に何でも働くのが先決問題と考へる。

一體世間では今回の整理を以て、整理其物が終局の目的であるかの如く誤解して居るものもあるが、整理をするのは、國家機關をして益々有效に働かしむる手段に過ぎないのである。國家の機關を縮少し、仕事の分量を減らすのが目的ではなくして、一旦整理したならば、其整理の結果を善用して、益々事業の勃興、國運の隆盛を期しなくてはならぬ。東京市に於ても私の就職以來、人員に於て百五十人、經費に於て五十萬圓と節減した。小さな東京市としては少からぬ節減であるが、之とても決して東京市の事業を縮少せんが爲めではない。上水下水事業及び築港事業等やらねばならぬ事は澤山にある。寧ろ此等の事をやる手段として先づ整理したといつてもよい。そして此等の事をやれば人も要るし、又事業によつて國の富も殖えるのである。獨り東京市のみならず、今回の行政整理も必らず同じ意味の下でやつたものであらうから、行政整理を以て單なる消極的の意味に解するのは間違つて居る。然らば此整理の結果他日必らず積極的機運が廻つて來るものと考へる。然し人間一日も無爲遊惰にして終るといふ理窟はない。一日生存すれば一日の義務がある。自分は今回罷免せられたる官吏に於ても心から此理を體して、如何なる方面にでも働かんことを希望するのである。

△要は人口問題の解決にあり

文部次官　福原鐐二郎

罷免官吏の身の處置と言つても、已むを得ない事であるといふ迄で有つて何の妙案も妙策も私には無い。成程氣の毒な話には相違無いが、さうかと言つて其等の冗員を官省で養つておかねばならぬ理由は無し、要の無い者ならば矢張りドシ／＼淘汰をして整理を附けるのは國家といふ上から見て當然採るべき處置であらうと思ふ。尤も今度罷免された官吏は皆が皆役に立たぬ者のみではない。中には年少の有要な才も有り、罷免せらるべき無能者で無い者も混つてゐるとと思ふから、今度の冗員淘汰其者が必すしも正當な完全なものであるとは思はぬが、それは人間の仕事に附隨する已むを得ない結果であつて何事にも免れるとは出來ぬと思ふ。又事實有要の才で有り、大に爲すあるの力を有してゐる者ならば必ず又他方面に於いて活動し得るものと信ずる。人間生れて何も役人に成るに限つた事はない。が無能な者に至つては何處に置いても用を爲さぬ贅物で、使つて役に立たぬ者ならば罷めさせるより外に仕方が無いではなからうか。

要するに現在に於ける日本の社會問題としてさういふ種類の問題ならば他に幾らも解決を急ぐ重要な問題が有る。例へば高等遊民の處置とか

醫學生問題とか乃至一般の生活問題に至るまで緊要な社會問題として而も未だ解決せられずに殘つてゐる。今度罷免せられた官吏の中でも個々の人に就いて考へると、中には自分一人の生活は兎も角、妻子を何うして養つて行くかといふ事で非常に困つてゐる人も有るやうだ。然しながら今日澤山の子供を擁へて其日々々の生活に苦しんでゐる人間は果して何の位あるか。豈必ずしも罷免官吏のみならんやではあるまいか。

醫學生の問題は、是れはまだ皆同じ種類の人間であるから其處置は執り易いが、年々輩出される學校卒業生で、其求むる職を得ずに悶々としてゐる多くの所謂高等遊民を何うすれば可いか。社會から見ても學問をした人間を遊ばせておく事は不經濟であり、個人として見ても學問をしたが爲めに職を得ずに空しく人生の大半を過して了はねばならぬといふくらゐ馬鹿々々しい話は無い譯である。此等の社會問題は何とかして早く其解決の法を講じなければならぬのであるが、其因つて起る根本原因は何であるかといふに、それは人口の過剩といふ事である。日本くらゐ繁殖力を有つた國は外國にも其例を見ない。一面から見て、人口の年々減少するやうな國は心細い譯であつて、國家の發展の爲めに人口の增殖するといふ事は非常に喜ばしいとであるには相違ないが、區劃せられたる一定の土地に生存してゐる人間が無限に繁殖するとしてみると其結果は推測られるではないか。要は年々過剩の人口を如何に處置するかと云ふにある。そこに總て此等の社會問題の解決がある。而して此人口問題の解決は積極的に之を海外に發展せしむるか、然らずんば消極的に人口の繁殖を阻止するの方法を講ずるかの二途を出でない。而して其避妊といふ事は決して輕々に斷行すべきものでないとすれば現に採るべき最良法は人民の海外發展、海外移殖である。而も何ぞ世界の面積を以てしても限りある土地に限りなく繁殖する人口を收容し得ないとならば最後の手段として人工的避妊法も亦已むを得ないかも知れぬ。要するに今日の社會問題は此人口問題の解決に依つて解決せられる。是れが根本の大問題として未解決の中に横たはつてゐる間は、それから生ずるあらゆる社會問題を云爲するが如きは抑も末である。罷免官吏の處置の如き豈論ずるに足らんやではあるまいか。

△罷免官吏の身の處置

田川大吉郎

○此度罷められた人の中には、年の若い人達も澤山有らうが、然し乍ら大多數は年の老いた人達で有らうとして、卑見を述べる、先づそれで無ければ理窟が立たないからである。

◎既に年の老いた人達であるとすれば、その罷められたのは當然である、吾等は四時の序功を成すものは去るの理に從つて、罷められた諸君は、位地の大小高下に準じ、各それ相應の功を成して去られたものと推信する、從つて國家は去るべき氣運に向ひ、その廻り合せに爲つて居た人々

を去らせた迄の事で、皆至當の理に合つて居るのだから、去られた人にも去らせた人にも、共々に恨みは無かつたものだとする。

◎して見れば、その去られた人は、國家の爲に涯分の力を盡して、到頭その有效力を消失する迄に至つた人達であるから、果して然らば、國家はその有らゆる力を以て、去られたその人達の殘年を保障すべき義務がある、而して國家がその義務を果して居るとすれば、今日の問題は無いのである、今日の問題の有るのは、國家がその義務を果して居ないから起つたので、僕は此點に於て先づ我國家の冷淡不親切、忘恩不徳を責めねばならぬ。

◎外の事は申すまい、例の所得税問題の中、勤勞所得に關する課税である。勤勞の所得に關する課税と、資産の所得に關する課税とを同一視する譯は無い、資産の所得が既に成立して居る以上、勤勞の所得をも、やがて資産の所得たるを得せしめねばならぬ、それには勤勞の所得に關する課税を幾割か割引して從かねばならぬ、幾割々引することが適當かとの論は、日本人は幾何年勤勞し得るかの標準に由つて決せねばならぬ、大藏省の連中は之を二十五年と觀た、從つて割引すべき歩合を四割と觀た、即ち資産の所得に對し百を課する場合には、勤勞の所得には六十を課することが適當である、かくしてその殘りの四十を、殘年のために保留せしめる、積んで二十五年、それが一千に滿ちた時、彼は功成り年老いて職を退ぞく、而してその時には、既に一千の資産が出來て居るから此資産に由り生活も相應に支持され、得税の力も依然として存する譯である、大藏省の手合は此く論じ此く決して居た、然るに事の實際は太だしき打ち壞しで、從前は兎もあれ、今回の改正にも、勤勞所得に關する課税を、資金所得に比し、僅に一割引にした、四割引で適當の所を、理由も無く一割引にして仕舞つた、だから今後と雖も、國家は官吏の使ひ放してある、二十五年を勤勞し得べき適當の年限として、その年限間、忠實に務め終つた老健の人士でも、その人はその勤勞の所得より、晩年を養ふべき適當の蓄積を爲し得ないことに爲つて居る、そのやうな所得税の規定に爲つて居る、實に馬鹿々々しい不人情、向ふ見ず、得手勝手の規定である。

◎以上は一個の所得税の例であるが、他の方面にも此樣な手落ち、不思慮、陥穽はある、日本の國家的經營は、何かにつけ此樣な缺點を免れないのである、殘念な次第である。

◎但、それは死んだ兒の年を數ふる愚痴である、到底逐つ着かない話だから之を舍くとして、僕は年老いて罷められた諸先達に對して、故山への歸臥をすゝめる、尤も歸臥と申すは必らずしも隱退されるといふ意味では無い、日本の地方は、一と口に申せば荒れて居る、之を整頓し、之を充實するは今後の仕事である、多年、他郷に出て、新らしい、異なつた空氣に觸れ、智見を拓き、經驗を積まれた諸君の如きが、丁度、その働き手である、僕は、諸君の手に由つて、地方の開發、作振を謀りたい、若し、事業はといはるゝなら、地方の政治である、市町村の政治である、必らずしも市町村長と爲られよと謂はない、市町村の名譽職員としてと

謂ひたい、それでは、生活の助けに爲らぬと謂はるゝかも知れないが、漸々に生活の助けに爲る途も開けよう、名譽職に爲つて居れば、儲かる途が幾つと有ると謂ふのでは無い、名譽職としては儲かる途の無いことは勿論であるが、名譽職に當らるゝその位地、信用、努力は、自然にして遠からざる中に種々の事業に當らるゝ機緣と爲り、便宜と爲り、新事業を得らるゝであらうと思ふのである、僕は、罷められた諸君が相脊いて郷里に還られ、焦らず、あわてず、而して一意市町村の利益を惟謀り身を以てその開發、充實のために盡されんことを祈るのである、生活の途は、自ら其中に在るのである、孔子さんが、三年も學へば、祿其中に在りと謂はれた、僕は、諸君の老熟せる經驗を以て、新たに地方の事を學ばるれば、三年は愚か、一年ならずして、祿（祿といひ得べきか）其中に在りと謂ひたいのである。而してその國家に對し大效益のあるべきは言ふまでも無い、

◎年の若くて罷められた人達に對しては、僕はたゞ海外發展をすゝめる、南米可なり、南洋可なり、南滿可なり、北滿も亦可なり、海外といふべからざるも、朝鮮可なり、滿洲も亦可なり、僕は、壯年有爲、前途の希望に富める人達は、いづれも海内の事に屈託せず、進んで海外に人間到る處青山ありの詩を詠じて、新境新地を開かんことを希望に堪へない、その費用は案ずる程に多きを要しない、今回罷められた際の、手當の幾分を充つれば、乾度押渡ることが出來る、遠き方面はどうか知らん、近き方面なら、それだけの費用で乾度有りつかれるに相違ない、僕は、熱心に此事をすゝめる、

◎海外の話に及べば、北米に對する移住の不自由に對しては、僕は只慷慨嘆息の外は無い、何といふ目の見えない、氣の利かない、意氣地の無い、經綸の無いやり方をしたものであらうと、痛切に非難するより外は無い、僕は日本民族のため、此絕大の放出路を塞がれたことを、一代の恨事、拭ふべからざるの汚辱とするものである、但、これは獨り山本內閣の罪で無いから、僕は、山本內閣を罪するために此言を爲すのでは無い、これは我內閣歷代の因襲的過失罪惡である、僕は歷代の內閣に對して之を痛憤し、而して我國民のため之を愛恨するものである。

◎且又從來の敎育が惡い、我國民は世界的開濶の規模雄心に缺けて居る、總て陰辨慶で、いぢけて、偏狹で、固陋で、我執で、妬み深くて、孤居的に出來て居る、世界の民と、隨處に肱を張つて交歡し、胸襟を披いて敵の腹心に置くてふ包容の雅量氣品に乏しい、若し此開濶の氣象さへあらば、支那は、日本人の雄飛すべき最大の舞臺である、亞細亞各地到る處にその羽翼を張り、翱翔を試むべき分野と機會は滿ちて居る、たゞ、それ陰氣な、內氣な、邪見な性格で、八紘を相手に飛躍する氣合に缺けて居るから、こんな場合に爲ると、忽ち窮するより外ないのである、殘念の至りである、敎育の方針はどうかして之を變へねばならぬ、殊に社會的に之を戒め勵まねばならぬ、

◎ざつと此樣な意見である、お問に適しない答へかも知れぬ、要するに僕は、何等の美名にせよ、一旦、人を引き入れて、その生涯の方向をこ

こに決しさせ、而してこの精力を傾盡させ、消耗させたる後、晩年を養ふの費を與へずして、之を抛り出す我國家の仕打を太だ不都合だと思ふ然し乍ら人は如何なる場合にも自ら立たざるべからず、僕は諸君の奮發自彊を望むのである、而してその方向を大體以上の如く選まれば、稍幸なりと思ふものである。

△此早川鐵治を學べ

早川鐵治

一體今の役人共が、役を罷められたからとて、ベソを掻いて、食ふの食へんの、死ぬの生きると騒ぎ立てるのは、餘りに意氣地がなさ過ぎるぢやないか。フロックコートを着て、髯を生やしたまゝで、何かに有り附いて旨い飯を食はうと思ふから食へんのであつて、會社の小役人なり、商店の番頭なり書記なりになつたら食へんことはない筈である。結局はよかよか飴を賣つても食へるぢやないか。東京に初めて電車が出來た時東京市の車夫はすべて皆困つた。然し其爲めに餓孚途に横るといふ慘狀を呈したといふ話も聞かない。然らば其職業を失つた彼等も何か他に食ふ途を見附け出したのである。只役人などは昔の格を落さずにやらうとするから六つかしいのである。

此早川鐵治は十四から十六の年まで馬車屋をやつた事がある。そんな少年でありながら一生懸命に働いて、日に三四圓は取れた。又明治三十一年十一月に役人を罷めて三十三年五月まで浪人をして居つた。自分は早速何か仕事をやり出す計畫であつたが、世間知らずの友人共が寄つて集つて、も少しぢつとしてゐろ、少しは武士は喰はねば高楊枝の態を學べなど勸めた爲めに、遂ゝ足掛三年遊んで了つた。其間に一回田舍の鐵道會社から、其社長になれといふ交渉があつたが、會社なんかに入ると株主の機嫌も取らねばならぬし、又餘り有望な會社でなかつたから斷つた。そんな事をして居る中に兵糧は盡きて了ふ。又三十三年の春には妻を失ひ次いで子を失ひ、哀れ至極な境涯だつた。それでこんな事をして遊んで居るのは非常の心得違であると思ひ、此處（麹町區有樂町）へ事務所を設けて自活の道を講じた。爾來足かけ十四年、どなた樣の御厄介にもならずに立派に食うて行けるぢやないか。いろいろな會社の取締役とか社長とかにもなつたが、自分の仕事丈けで食つて行けるといふ自信があれば、何處へ機嫌氣褄を取る必要もなく、自分のやりたいと思ふ事をやつて來た。今日の乞食の多い世の中に、兎に角乞食の眞似をせずにやつて行けるぢやないか。又代議士になるにも自分のポケットから出して數千圓を使うた。然し代議士になつたのも自分の權利を保護する爲めであるから、何時でもイヤなら左樣なら！だ。政治家にはなるが政治屋になるのは嫌だ。如何に金を遣つてなつたからとて、イヤになれば左樣ならだ！。其代り自ら一錢一厘でも矢釜しくいふ。

役人をやめて、自ら食ふ道を開くといふ事は其人の爲にも國家の爲めにも決して悲むべきことでない。吾輩などは浪人生活の苦みも嘗め、又自ら事業を初めて、自活の途を開いた實歷があるのであるから、吾輩の忠告は本當の忠告であると思ふ。どうぞ吾輩の言を以て一場の自慢話と聞かずして、各自銘々に其將來の途を拓かんことを罷免官吏諸君に希望する。

山路愛山氏著

（新刊出來）

爲朝論

附錄 義經論

紙數三百頁
價五拾五錢
郵送料八錢

是れ英雄兒爲朝を假りて、藤原時代が武家の時代に移りたる日本人民史の一時期を解剖せるもの也。著者自ら曰く、社會變遷の大原理は、此書の最も明快に語りたる所なりと。然り、極めて豐富なる史料の上に立脚して、あらゆる問題の眞相を闡明し盡くさずんば已まざる著者獨特の觀察を恣にして、種々の意味に於て日本史中最も興味ある一時期を遺憾なく解剖す。著者史傳の著少なからず、而も本書の如きは竊に以て得意とせらるるものに非ざるなき乎。史學の興味は過去の史上に現代を支配する法則を發見するに在り。讀者の本書に教へらるる所必ずや鮮少にあらざる可し。天下の活書を讀まんとする人は乞ふ本卷に就け。

島崎藤村著

後の新片町より

新刊發賣

特製頗美本
定價六拾錢
郵送料六錢

（中付一の一）

東京麴町區飯田町三丁目二十五番地　新潮社　電話番町二二三番　振替東京一七四二番

▲謠曲の全盛と本書の大歡迎▼

東京帝國大學 圖書館長 文學士 和田萬吉先生著

最新刊

謠曲物語

後編出來

菊判極美裝釘
挿畫木版色刷
其他計卅三圖

正價貳圓
送料金十六錢

本書は謠曲に於ける毎曲の結構を詳かにし、曲中人物の性格態度を明かにせんが爲に、原文を平易なる近體文に飜し、謠曲の短所なる冗句繁語を芟りて主旨の徹底を圖りたるものなり。曩に前編の出づるや、斯界闡開の新著として黒人筋は固より、一般人士の空前なる歡迎を受け、畏くも

天覽台覽に上り各宮家の御嘉納を蒙り、別て**伏見宮殿下**には最も興趣深き書也、後編も出來次第御希望の趣御令詞ありと傳承す。今や

後編出來して完璧を成す。收むる所百五十五番、五百年來國民の血漿に浸潤せる謠曲の粋は渾然として明快流暢なる國民的讀物となり、普く天下の玩賞を待つ。茲に五千部限り特價販賣を決行せんとす斯道に遊ぶ紳士淑女は勿論、家庭に於ける輿話の料として、毎戸必ず一本を備ふべき也。

●特價 前編後編 各壹圓八拾錢

發行所 東京神田 富山房（振替五〇一二）　大取次 東京日本橋 わんや（堀井）

（中付一の二）

日本傳說の淵源

文學博士 芳賀矢一先生纂訂

最新刊

攷證今昔物語集 天竺震旦部

菊判美本一冊
紙數九百頁
口繪コロタイプ
定價
金貳圓卅錢
郵稅十六錢

今昔物語は日本最古最大の傳說集たるのみならず、世界說話集として亦最も尊重すべきものゝ一也。本書は芳賀博士が、佛典經書、史子、小說、雜書の類に至る迄、洽く搜索して其出典を考證せられたるものにして、實に拾數年間苦心の著也。今や印度、支那の部の印刷先づ成る。奇談珍話應接に遑あらず、外國文明の我國に浸潤せし跡歷々徵すべし。歷史家、宗教家、國文家、教育家、美術家に取りて必讀の書たるのみならず、中流以上の家庭には一本を備へて、國民思想の由來する所を辨へざるべからず。卷頭附するに序論一篇を以てす。本文の校訂嚴正にして從來の誤謬を正したる箇所多し。本書の出版は眞に學界一部の缺陷を塡補せるものと謂ふべし。

(中付一の三)

發行所 東京神田 (振替五〇一番 電本四一三〇 一〇三六) 富山房

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

愈發賣◎現代傑作叢書◎忽重版

初版即日賣切 再版

第一編 正宗白鳥著

心中未遂

内容 ◎心中未遂 ◎白壁(脚本)

◎袖珍極美本 ◎木版五色目もあやに金光燦然たり

定價毎冊金五拾錢 郵稅金六錢

内容

「脚本」平清盛 運命の丘 海濱の一幕 復讐 競爭

「小說」斷片 柏峠 山戀ひ 小品五篇

初版即日賣切 再版

第二編 島村抱月著

影と影

第三編 岩野泡鳴著

ぼんち

内容 ◎ぼんち ◎巡査日記 ◎非常時 ◎閻魔の眼玉

大阪の若旦那が寶塚へ初めての藝者買に行く電車中で重い怪我をする それでも藝者を買ふのを樂みに我慢して料理屋へ上つて遊ぶ一描寫深刻を極め東京朝日これを激賞して近來の傑作なりと稱し「自然主義も是處迄行かなければ駄目」と云ふ他の二篇皆尤も自信在るものとして著者自ら選擇したる者

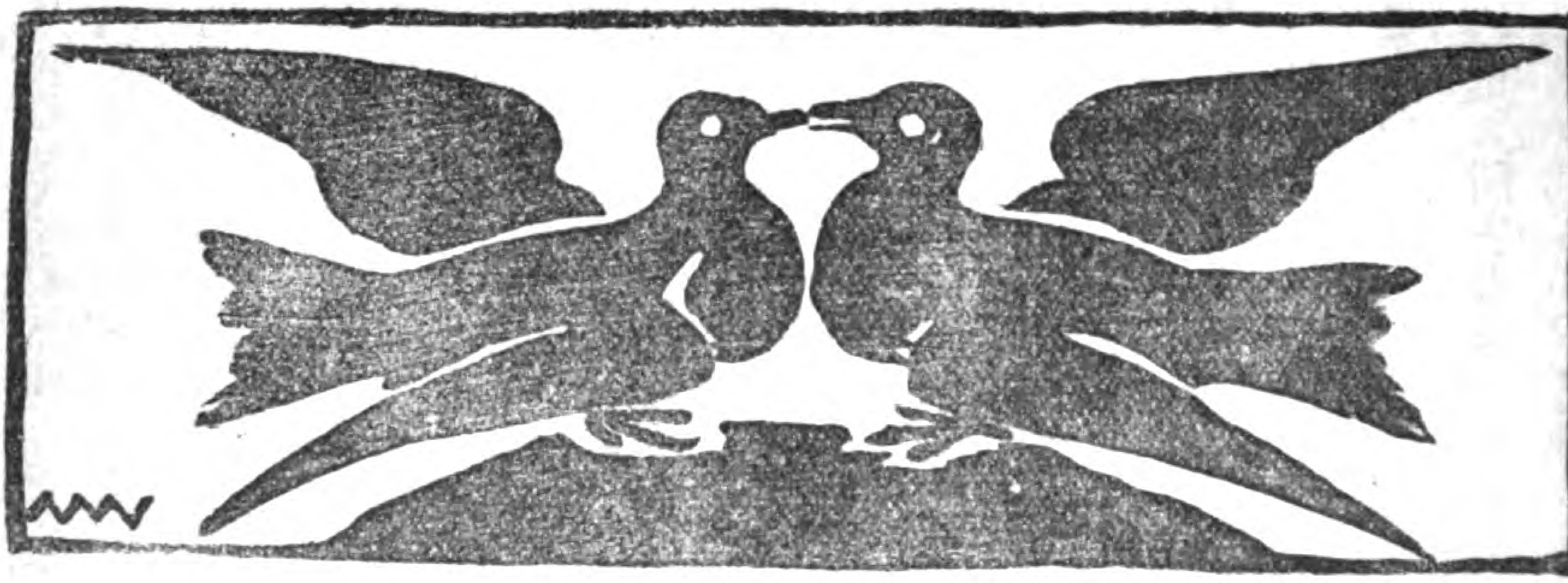
注意!!

本叢書は表紙全面に要する金銀箔沸底の爲め發行豫定より遲れ漸く初版丈けの箔を都合して六月初め發賣の運びになりしに意外の歡迎にて初版丈けにては第一回の注文部數に滿たざる爲め賣出す能はず直ちに再版に着手したるも忽ち箔の品切を來し、漸く六月中旬箔の輸入在りて發行するを得たり發行遲延の事情御諒察を乞ふ。

發行所 東京神田佐久間町四丁目二十三番地 植竹書院 (振替東京一二九五三番 電話下谷三四一九番)

(中付一の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



女八人

松崎天民

「女八人」は、藝妓を見たる「板新道の一隅」、妾を書いたる「最後の牛肉鍋」、女將を描いたる「稲舟の四疊半」、娼妓を題材とせる「名代部屋の客」、老孃を主題とせる「紫の風呂敷包」、及び看護婦を觀察せる「廊下の曲り角」、狂婦人を主人公とせる「十萬圓の奥様」、新女優を叙述せる「荒物屋の二階」等、凡て八篇より成るべき予が「新聞記者生活中の副産物」なり。明治三十六年より四十五年まで、多事多忙なりし十年間に於て、予は大阪、京都、東京の三都にて、八人の女性の上に潜める個々の運命を讀みたり。例に依りて小說に非ず、雜報に非ず、事實と空想の中間を辿りて見たる「人生探訪の報告書」に過ぎずと雖も、また波瀾多かりし予が青年時代の一反映と見るも妨げず。

六、廊下の曲り角

一、牢獄に似た病室

Y君、僕はまた、築地の××病院に入つた。人間も斯んな病院に、一度ならず二度までも入院する樣では、最うお仕舞である。

それも眼病とか、腦病とか、肺病とかて、眼に繃帶したり、頭を氷て冷したり、海氣室て空氣療養て遣るのなら、如何にも病人らしくて好い。妻も親族も友人も知己も同僚も世間も、これを病人視し病人扱ひにして吳れ樣が、僕の

樣な病氣の種類で、××病院に入つたとあつては、第一家内の者に申譯がないし、生活費を貰つて居る社に對しても、何となく肩身が狹い樣で困る。

僕、生れて三十六年、病院の不味い飯を食ふのは、これで恰度三回目である。其の第一回は、君と未だ相識るに至らざりし明治二十九年、齡十九歲にして京都の×館と云ふ寫眞屋の受付を勤めて居た時、猛烈な脚氣を病で同志社病院に入つた。其の第二回は去年の師走、歌舞伎座で雲入道が浪花節を演つて居た時、今度と同じ樣な病氣で、此の病院の三階に入つた。京都では一ヶ月餘、去年は四週間、今度も此處へ入つてから今日で恰度二週間目になる。三十六年間にたゞの三回とは云へ、其の度每に一ヶ月もかゝつては、僕の病院生活も、決して短い方ではない。

何んな病氣か、そんな事は不問に附して貰ひたい。兎に角、身體の一局部が或る刺戟に依つて、惡い黴菌の巢ふ所となり、それが段々嵩じて一種の副作用を起したのである。溫めるか冷すかして、一週間も安靜にして居れば、大概全治して了ふさうであるが、僕のは氷で如何に冷しても、惡くなる一方であつた。患部の方は異常の熱を有つて、化膿しようと化膿しようと傾いて居る處を、冷たい氷で冷すのだから、其處に冷熱の激しい戰鬪が起つて、入院後一週間と云ふものは、何の位苦しみ悶えたか知れない。晝の間はさうでもないが、夜八時九時になつて、廊下を過る看護婦のスリツパの聲が耳敏く響く樣になると、熱も三十九度から四十度の間を昇降して、其の苦しさと云つたら無かつた。

去年は、寒い冬だからと云ふ譯でもあるまいが、溫め通しに溫めたけれど、遂に切開手術を受けた。今度は、蒸し暑い夏の初と云ふ譯でもあるまいが、冷し通しに冷したけれど、遂に外科室の手術臺上に横つた。在院二週間の豫定で、切開せずに全快する樣にと云ふのが、僕の希望であつたけれども、病症の方はさう註文通りになつてくれず、去年と同じ外科室で、去年と同じドクトルに依つて、其の切開手術を受けた。脊髓注射に依つて、切られる所は痲痺して了ふから、手術

を受ける間は、痛くも苦しくもなく、注射が覺めてからもさう痛くはないが、最も厭なのは毎日のガーゼの取替てある。それも實はホンの一瞬間て、手術後は日一日と快くなる一方だから、今ではそれを樂しみに、毎日、白い病床(ベツド)の上に仰臥して、過ぎ去つた種々の事を考へて居る。

僕の病室は、三階の院長室の隣て、壁も天井も病床(ベツド)も皆白い中に、白い浴衣を着た僕が寢て居るのだから、黑いものは僕の顏と手足と敷物だけてある。三坪ほどの中に病床と、藥瓶や湯呑を置く机と、腰掛が一個あるばかり、昨日見舞に來た或る人が「一種の牢獄だね」と云つたが、全く獄舍に似た樣子がある。僕は今、其の室を壺中の天地として、朝は六時半に起き、夜は十時半に眠るまでの間、書籍を繙くと云ふてなく雜誌を見ると云ふてもなく、たゞ敷島を燻らして、無爲無能に暮して居る。宅に居れば、近所のオルガンが癪に障つたり、子供の泣き喚くのが厭になつたりして心の平靜を亂され勝だが、身動きもならぬ病人になつて、「一種の獄舍」に寢そべつて居れば、反つて天下太平て宜い。種々の邪念も起らず、樣々の慾情も生ぜず、「成る樣にしかならない」と斷念(あきら)めてしまつて、其外に一種の安心も得られる。

然し、病院の月日と云ふものは、決して愉快なものては無い。病氣が快くなればなるほど、病院生活の寂しさ侘しさが、堪らなく心身を襲うて來る。何とも云へぬ孤獨の感が身に沁みて、譯もなく涙のこぼれる夕暮さへある。斯うして寢て居る間に、寸時も休まぬ時勢の進運に見放されはすまいか、と思ふことがあれば、我と我が技倆や手腕を疑ひ、最う何事も出來ない樣な心細い氣もすれば、また無暗に他人の仕事に感心して、世間の人が悉くエラく見える樣な夜半もある。一小局部の手術の跡が、全快するまでの月日を此の病室に託して居る樣な、輕症の「患者さん」に過ぎない僕にも、病院の日夜は神經過敏になる。窓外の近所の家に、子供の消魂(けたゝま)しい泣き聲が聞えると、宅の子供も泣いては居ないだらうかなど丶、壯健(すこやか)なる日に經驗した事のな

い氣持に、哀れを覺える場合さへある。生とは何だ、死とは何だ、人生とは何だ、信仰とは何だと云ふ樣な事を、取止めもなく考へて居る間に、あゝ死にたく無い、との恐怖心も起れば、生きて居たい何時までも生きて居たいとの執着心も起る。病院で食ふ三度の飯が宅の茶漬より不味いのも、考へて見れば當然の事である。

腹這になつて、今日初めて萬年筆を執つた。何時も簿記臺の樣な斜面になつた机で、手紙も原稿も書く癖が着いて居るので、腹這の執筆は人一倍に苦しい。久しく大阪朝日を見ない爲に、君の書いて居る「闇の女」が、其の後何う云ふ風に發展して居るのか、考へて見れば、君にも、君の小說にも、重ね〳〵の御不沙汰である。

二、新聞社内の空氣

Y君、病氣は最う快くなる一方である。××看護婦會から附添に來た、若い野村と云ふ看護婦に向つても、面白可笑しい冗談口が叩ける樣になつたから、先づ以て安心してくれ給へ。

社から貰ふ、百圓足ずの給料だけでは、一家六人の餬口を支へて行くに、頗る非紳士的なるを忍ばねばならぬ僕にとつて、今度の入院は經濟的にも尠らぬ打擊である。半期〳〵に貰ふ賞與金は、最うそれ〳〵の支出に豫定してあつて、一錢の過不足も無い所へ、降つて湧いたのが今度の入院である。幸に近日出版する「人生探訪」の稿料の殘額と、二圓三圓と貯蓄した妻の銀行預金の一部と、或る雜誌へ書いた原稿料と、或る雜誌へ書くべき原稿料の一部前借とで、百圓餘の金を工面して、取るものも取敢ず入院したが、考へて見れば、眞に心細い境涯である。

お互に新聞記者として世に立つ以上、十年經つても二十年經つても、勳章一つ貰へねば、二千三千の小金?を蓄へることさへ、思ふに任せぬ位の事は、百も二百も覺悟の上であるが、それでも時あつては、金の欲しい事が無いても無い。金の欲しくなる時が、即ち

新聞記者一代の危機て、退いては職業に對する自負、自覺、自信が弱くなつたり、進んでは人に對し世に向つて、記者たるの面目を失ふ樣な事を仕出かすかも知れない。僕等はそんな危機に立つた事が、比較的稀てはあるけれども、それても知らず識らずの間に、危い淵瀬に立つ樣な事が、長い月日の間には無いとも限らない。今の新聞經營者が、其の社中の靜的少數にのみ高給を支給し、動的多數を遇するに、警察署長乃至警部、警部補程度の支給を以て足れりとして居る間は、僕等を此の經濟的危機より救つて、安易の位地に置かれるのは、先づ絶望と云つて宜からう。

僕の樣な無學な者ても、新聞や雜誌て多少名を知られて居るのか、新聞記者になりたいから世話してくれとか、書生に置いて下さいなどゝ云つて、手紙を送つたり訪ねて來る者が、毎月必ず五人から十人位はある。僕は甚だ相濟まぬ事とは思ふが、手紙を寄來す人には大概返書を出さず、訪ねて來る人には努めて逢ふ樣にして居る。そして其の人の風采、態度などを見た後、志望最も熱心な者には、先づ新聞記者と云ふ職業が、職業として認められて來たのは、近い此の四五年來である事を語つて、新聞記者になつて、飯を食ふと云ふ事の甚だ至難な次第を知らせて居る。新聞記者にならうとして、新聞記者になり得た僕、新聞記者の職業を以て宰相、將官よりも貴しとして居る僕が、新聞記者志望の青年に向つて、新聞記者の生活難、出世難を語るのは、如何にも矛盾して居る樣であるが、新聞記者の世間に於ける一部のみを見て、忽ち記者熱に犯される樣な青年に向つては、此の位の事を云はねば駄目であると思ふ。

それに君も知つて居る通り、新聞社内の空氣は、官署や銀行會社などとは異つて、協同生活の最も難かしい所てある。世間に其の存在をさへ知られない者が、社中に於て重要な幹部の地位を占めて居るかと思へば、世間てやんやと評判され取沙汰され、恰も其の社の代表的記者の如く認められて居る者が、社中ては重きを置かれず、失意不遇の境涯に押籠められて居る樣

な例も、決して稀有の事ではない。優勝劣敗の最も激しかるべき新聞社中に於てすら、技倆あり手腕ある者必ずしも用ゐられず、僕の樣な平凡鈍才碌々たる者と雖も、其の日〳〵のお茶を濁して行かれる以上、こゝも亦普通の世間である。僕は新聞記者志望の靑年に向つて、こんな事も語るし、また文章が上手だからと云つて、それが好い記者とのみ限らない、探訪が巧いからと云つて、それが手腕ある記者とは云へぬ。世渡りの上手下手よりも、一つは運不運もあると云ふ樣な事を話して、相手を煙に卷いて居る。僕などは、斯うして病氣して病院生活を送つて居ると、心も身も弱くなつて、新聞記者の職業が、この世に何の反響も傳へない、空しいものであると思ふ事さへあるに、世間一部の靑年が、新聞記者に爲らうとして、苦み悶えて居る樣は、實に滑稽であり、悲慘である。

僕一人だけは、何う考へて見ても、今まで歩いて來た道を、たゞ一直線に進むのが、運命でもあり、使命でもあり、天職でもある樣に思ふ。今度の病氣は、入院と云ふ顯明な事實があるだけに、品行方正面する僞君子の群には、僕にとつて不利なる辭柄を與へたかも知れぬが、然し僕自らは、今度の入院に依つて、人知れぬ修行をした。所謂「一種の牢獄」に似た病院の窓下で、僕は何一つとしてまとまつた事を考へなかつたけれど、此の淋しい幾日間は、容易に得られない病氣の恩惠である。樣々な都會の刺戟に依つて、荒み切つた僕の感情に、一點「孤獨」の哀愁を覺えさせたのは、全く病院生活の賜である。百餘圓の金は、經濟的には苦しいけれども、これを精神的に償ひ得て、尙餘りあるを覺える。劣け惜みではないが、人間も時折病氣をして、病院に入つて見るが宜い、君は何と思ふ。

大阪に旅せざること二年、切に大阪の酒を懷しみ、大阪の料理を欲りし、大阪の女を戀し、大阪の生活を想ふ。大阪へ行けば、進んで大に開拓すべき「新聞記事」の材料が、其處にも、此處にも、落ちて居る樣な氣がしてならぬ。新聞の首都は、曰く「大阪」なり。

大阪に行つた君は、僕よりも幸福である。

三、看護婦の白い服

Y君、腹這になつて書くことが、大分上手になつた。長い間續けて書いて居ると、胸が押結まつて苦しいし、兩手の肱が痛くなつて困るけれど、時折、休んで書きさへすれば、腹這の執筆も頗る妙てある。

　氣も心も、未だ病人らしい上に、手術の痕が前途甚だ遼遠てある。斯うして手紙を書いて居れば、病人らしく無いと思ふかも知れぬが、日に三四回の小便も、一二回の大便も、未だ看護婦の厄介になつて居る。それでも大便だけは、痛いのを辛抱して、便所に立つて行くけれど、少便だけは横に寢た儘て、長い硝子製の便器の中にして居る。今度の入院て、僕が初めて經驗したのは、「腹這て萬年筆の執筆」と「横に寢た儘て小便」の二つてある。

　看護婦と云へば、今度、僕の附添になつた野村と云ふのは、名を幸子と云つて、未だ十八歳の若い娘てある。講習中の勉强盛りて、看護婦の免許も、產婆の免狀も有つて居ないが、斯うした病院て、斯うした病人の附添看護婦となるには、免狀の有無など問題にならない。美人と云ふてもなく、男の心をそゝる類の女てもないが、笑ふ度に右の頰へ片笑靨が出來て、それが何となく可愛らしい。白い看護服を着て居れば、何の女も一つに見えて、個々の有つて居る容色を平均して了つて、誰が誰やら判らなくなるのが常てある。野村も亦その個性を白い服の中に包まれて、看護婦らしく振舞つては居るが、實は看護婦としてよりも、娘としての氣分に勝つた方の女に見える。一人前の看護婦として、重患者を取扱ふまてには、未だ〳〵長い修行を積まねばならぬ女の樣てある。

　生れは群馬縣ださうて、產婆になるのが目的て、東京へ出たと云ふ。國には父もあり母もあり、何うせ不如意な家庭に育つたてあらうが、其の戀知らぬ顏には、悲しい痛ましい過ぎ來し方の影が無い。世には家貧しいために、淪落の群に入る女もあれば、美しい容色を有つた爲めに、新女優となる女もあり、生活の爲めに

電話交換手となるがあれば、欺かれて女工に落る女もある。娘十八にして、嫁すべき道を横に外れて、自ら稼ぎ自ら食ふ群の中に、運なればこそ看護婦の白い服を、博愛の化身と見るのか。僕は此の二週間餘を病院に暮して、しみ〴〵と看護婦の仕事を見た。帝劇の女優にならねば、せめて女案内人でもと、若い娘を擧げて、華麗な世に憧憬れて居る時節に、看護婦になろうと志す娘の心は、何處までも尊重したい。たとへ夫れが辿るべき道に迷つて、仕様ことなしの切迫にしても、其の志業は貴く清い。野口の樣な若い娘は、看護婦などに爲らずとも、他に幸福な月日があると思ふのに、本人は白い服の穢れを氣にしながら、朝な夕なの檢溫器に、例の片笑窪で微笑むで居る。

世間は廣く人は多い、澤山な看護婦の中には、貴く清い職分を忘れて、女心の狂ひ易く、戀に憂き身を窶すもあらう。看護婦と云ふは名ばかりの、私娼に似た行爲に月日を送つて、悔ず悲しまぬ女もあらう。人いろいろ、世さま〴〵、事には表も裏もあらうが、兎に角看護婦の任務は美しい。厭な思をするに反比例して、僅少な報酬しか得られないにも拘らず、看護婦の任務は、其の人の生命そのものを犠牲とする所に、清く美しく貴い職分の光がある。看護婦の習ひ覺える知識としては、醫學もホンの通俗な初步の生理、解剖學や、看護術、繃帶術に過ぎぬけれど、繃帶の卷方にも、百通り以上あれば、看護術にも屍體の手當など、隨分、厭な事がある。女優は長唄の稽古をしたり、踊を習つたりして、脂粉の香に若い娘盛りを美しう飾り、晴の舞臺に立つけれど、看譯婦は世と隔つた病院の中、陰慘な空氣の漂つて居る所で、日夜を白服で過して居る。

僕は今度の入院に依つて、努めて看護婦若くは看護婦にならうとする女の心持やら云ふ事やら爲る事やらを觀た。所謂新しい女の一部では、今更の樣に「婦人の經濟的獨立」などを說いて、新しがつたり强がつたりして居る樣子だが、女が自營自活すると云ふ事が、何の誇であり何の幸福であらう。出來得べくんば、世に在る女の總體を、嫁して人の妻とならしめ、正しい

生殖の大道を行つて、强健なる種族を此の世に提供するのが、生れて母となるべき約束の下にある女の天職てある。海の彼方には、參政權運動などを遣らかして、男も尙且つ躊躇する樣な亂暴を敢てして、得々たる女が澤山あると云ふが、考へて見れば厄介千萬な時節になつたものてある。婦人の覺醒も宜からう、婦人の自覺も宜からう、獨立自活と云ふ事にも、多少の理窟はあらうが、考へて見ればベラ棒極る話てある。

　彼是と議論して、騷ぎ廻る女の群よりは、不如意な運命にも泣かず悲しまず、女の行くべき第二の道として、白い看護服を選んだ群の方が、何の位、意味深いか知れない。我が野村さんは、斯うして看護婦會から派出されて、亙からぬ病人の世話をしながら、閑暇(いとま)ある每に「看護婦用語集」を開いては、赤鉛筆て記憶點を附けて居る。「看護婦や產婆などにならずとも、然るべき嫁入口を求めて、細君になつた方が好いと思ふにねえ」と云ふと、彼は例の片笑靨てニコとしながら、「お嫁になんか、一生涯參りませんわ」と笑つた。

病院生活がポツ〳〵單調になつた。早く世間に出たいけれど、患部の方が未だ承知しないので困る。

四、肺病列傳の人々

　Y君、今度は誰にも知らせず、默つて入つて默つて出る積てあつたが、それても日に三四人の見舞客があつて、大に心强く思つて居る。病氣して居る時には、僕の樣な男ても何だか心細くなつて、悲觀的に傾くものてあるが、今度は努めて、何事も考へずに暮して居る。

　自分の身上に就ては、現在も未來も無念無想てあるが、終日終夜寢そべつて居る間には、過ぎ來し方の幾春秋が、走馬燈の樣に浮かんで來る。場所が病院てあり、相手が一人の若い看護婦てあるだけに、華やかな遭遇よりも、暗い陰森な思ひ出が、それからそれへと斷續する。果は、京都の大學病院て、肺に死んだ親友永井定太郎、山田桂華、平尾不孤などの在りし世の事どもが、凄慘な繪卷物でも展開げる樣に、强く烈しく

夜半の幻覺に映つて、思はず冷たい汗を流す事さへある。

僕の親友、知己の中で、若うして死んだ多くの人々は、皆、肺病のために斃れた。米國の寫眞學校を卒業して歸つた永井定太郎、醫師となるべかりし玉井一二郎、大阪新報記者たりし田中稻月、加藤啞蟬、脚本作家となるべかりし山田桂華、大阪毎日新聞記者たりし山下雨花。新演劇の作者たりし畠山古瓶、劇場の背景畫家たりし北村菜、文藝批評家にして創作家たりし平尾不孤、新文藝勃興の先驅者たりし詩人國木田獨歩、新々歌壇に新樣の歌風を傳へた歌人石川啄木など、不用意の間に、一寸、思ひ出しただけでも、十指に餘るほどある。此の中には君の知人も五六人ある筈だが、僕はこれ等の肺に死んだ亡友を、永久に記念するために、「肺病列傳」一篇を書かうと、三四年前から心掛けて居るけれど、未だ果さずして今日に及んで居る。

未定稿「肺病列傳」の人々は、何れも僕にとつては淺からぬ因緣があつて、誰彼と親疎の差別はないが、昨夜は妙に京都の大學病院が、夢現の間に思ひ出された。京都の大學病院は、永井、山田、平尾の三人が、若い其の生を終つた所であるが、其の前後の光景よりも、臨終前後に見た何の因緣もない背景や、背景に現れた看護婦の姿が、強く鋭く枕に通うた。茅ヶ崎の南湖院に國木田獨歩を見舞つて、終に永眠した後一ヶ月と云ふものは、何う云ふ譯か惡夢にのみ襲はれて、僕自身が肺病に罹つて、南湖院へ診察を受けに行つた夢を、一度ならず二度三度も見た。僕を診察した南湖院の醫師は、背の高い鬚の濃い人で、右の拇指を示して「君の肺には、こんな黴菌が居る」と云つた、それが小說家の眞山青果君であつた事も、二三度の夢枕に現れた。それから後と云ふものは、僕も肺病になるかも知れない、と云ふ樣な氣持がして堪らず、社用を帶びて北里研究所へ行つた時、試に診察して貰ふと、「肺病の方が恐れて逃げる」と笑はれて、漸く安心した事もあつた。それに今度は、京都大學病院の夕暮れ、藥臭い長廊下の曲り角で、二三度行き逢つた看護婦の姿が、

幽靈の樣に記憶の底から浮かび上るのみて、列傳中の人々が個々に有つて居た運命などは、別に讀まうとも何とも思はないから不思議てある。」

平尾不孤の時も、山田桂華の時も、見舞に行き得なかつたけれど、永井定太郎の時には、一二度、病院の長い廊下を通つた。病院と云ふ所は、自分が入つて居ても、心持の好くないものだが、入院中の他人を見舞ふ場合には、たとへ其の病氣が、自分とは沒交渉なものてあつても、決して氣持の好いものてはない。況んや既に絶望を宣告された、重態の肺病患者を見舞ふのだから、患者其の人と自分との關係などは超越して、其處に何とも云へぬ不快と不安の氣が漲る。相手の前て平氣な面をして然るべきか、或は嘆き悲しんても宜いか、何事も病人に氣兼をして、默つて控へて居るのが宜いのか。凡そ重患者を見舞ふ時ほど、思ひ煩らふはなく、重患者と相語る時ほど、苦しく痛ましく悲しさはない。殊に肺病患者は意識が明瞭て、氣持も確りして居るから、今夜か明日かと云ふ場合にも、人情として泣き顏を見せたくないものてある。

僕は傳染病室の中て、瀕死の人と二三十分位談話を交へて、直ぐ普通の病室へ通ずる廊下に出て、深いため息を吐いた。嵐山の櫻花は最う散つて、草も樹も綠にならうとする時節、季候の移り變るあわたゞしさに、何か知ら涙催さるゝ夕暮てあつた。掃除の行屆いた病院は、隅から隅まて靜まり返つて、壯健なる者も、斯る夕、斯る所て死ぬるの幸福を思ふ時、涙は止め度もなく零れ落つるものてある。僕は其の時、彼方の廊下の曲り角に立つて、夕暮の空を眺めて居るらしい、背のスラリとした一人の看護婦を見た。何科に屬する何と云ふ女性てあつたか、昔も今も知らずして打過して居るが、其の白い神々しい姿は、今も尙ほ忘れ得ない思ひ出の一つてある。

他日「肺病別傳」を書くの時、僕は「廊下の曲り角」にに見た其の一看護婦を點出して、小說的色彩にしようと思つて居る。僕の樣な病氣の附添看護婦なとは、同じ看護婦の中ても、極めて容易な仕事てあらうが、内

科や外科の重患者になると、眞に生命懸けの仕事てあらう。戀に微笑み、歡樂にはしやぐ妙齡を、陰氣な病院に送つて居る看護婦を思ふ毎に、僕は何となく一種の美しい哀れを覺える。

取止のない事ばかり書く樣だが、斯うして毎日、君に宛て手紙を書くと云ふことが、此の頃の僕の日課てあり、また慰藉てある。あゝ僕等は「書かずには居られない」一種の動物てあるかも知れない。

五、戀に落る危險性

Y君、退院の日も、段々近づいて來た。醫師の說に從へば、最う一週間餘も在院する方が、經過の上に好いと云ふけれど、三週間目には、何うしても退院する豫定てある。長く居れば金の豫算に差響くのみてなく、第一病室内の單調に、悶殺されて了ひさうてある。

僕の附添看護婦野村幸子は、看護婦の未成品だけれども、十年前、京都大學病院て、廊下の曲り角に見た看護婦は、女としても成熟し切つて居たし、看護婦としても一人前の女てあつたに違ひない。その當時二十五六の僕が、最う三十六歲になつたのだから、當時二十一二に見えた女も、最う三十以上になつて、人の妻になつて居るか、看護婦會ても經營して居るてあらう。何と云ふ女てあつたか、姓名も判らぬが、親友永井定太郎の死を思ふ時、「廊下の曲り角」は、其の一表徵の樣に、夢てもなく現てもなく、明瞭に浮かんて出る。

僕は其の後、京都醫科大學に學んだ友人に依つて、看護婦に關する種々の興味ある物語を聽いた。身を以て患者に對する看護婦の逸話には、其の淸く美しい氣高さに、落涙することが珍しくない。内科などの難治な病氣になると「一に看病、二に藥」など云ふが、全く病氣の全快と否と、或は快癒の遲速などは、看病の宜しきと然らざるとに、多大の關係があると云ふ。殊に誰も厭がる傳染病の看護婦は、一歩誤れば自分にも傳染すると云ふ危險があるだけに、並大抵の骨折てはあるまい。男と女とを問はず、何んな職業にも、苦しみがあれば悶えもあり、不安があれば危險も伴ふが、

女の職業の中では、看護婦ほど死生の境に出入して居るものはない。單にこれを職業としてのみ視ず、博愛人道の上より意義あるものとして、淸く美しきものにされて居るのも、當然の事であらう。

然し彼等の多くが若い女であり、未婚の婦人である以上、其處にまた人情の幾波瀾が渦卷き起る。殊に、日々夜々相接して居る患者が、異性である場合には、彼等は其の職業の性質上、戀愛に落つべき幾多の危險性を備へて居る。看病の極意は、患者の氣分や生活狀態に同化して、これを洞察し、これに同情し、患者の苦痛を以て自分の苦痛となし、患者の喜悅を以て自分の喜悅とするにありと思ふ。看護婦の此の獻身的努力は、職務に忠實なと云ふ他に、何の意味も無い場合でも、それを感謝する患者の心と、不圖した刹那に相觸れる時、即ち人情の波に漂ふことになる。行屆いた看病の親切に依つて、看護婦その人の情を思ひ、或は其の人柄性質を懷しんで、娶つて妻とした樣な例も、廣い世間には澤山ある。看護婦の職務的立脚地から云へば、患者と戀に落ちるなどは、既に其の天職を忘れた墮落の行爲であるが、相手が異性である以上、遂に免れ得ない一種の危險性である。たゞこれを正しく爲し、世間晴れてする所にこそ、認容して然るべき理由あれ、情感の狂旺する所、痴態を逞して憚らぬ群に至つては、嘲けるべく憫れむべきである。

此の病院で、看護婦副長を勤めて居る人は、最う四十年配の寡婦で、二十七歲にして良人なる人と別れて後、今日まで十五六年の間を、看護婦として過した人である。この副長さんは、僕の病室に廻つて來ては、能く種々の話をして、「妾の過ぎ來し方は、立派な小說になりますよ」と云つて、笑ふのが常であつた。何でも重態の患者を看病して、一月なり二月なりを立派に務め終はせた者が、初めて一人前の看護婦ださうで、左樣した至難な重症患者を取扱はねば、看護婦としても未經驗な、世に立つ資格の無い者らしい。今日でも看護婦の志願者は、地方の多少文字ある娘の群に多く、年々多數の人々が上京して來るが、多くは見習勤務や

講習中に、辛抱が出來なくなつて、中途で志業を變じる者が、十分の四までに達すると云ふ。其の十分の四も、過つのは色戀の沙汰であつて、弱い娘の心は、都會の刺戟や誘惑に打ち勝つこと出來ず、遂に邪道へ外れて了ふのらしい。

さうして殘つた十分の一が、看護婦として世に出るべく、長い間の修行を積むのである。修行を終へて、一人前の看護婦になつても、生涯を白い服で過す人は眞に數へるしかなく、其の多くは人の妻となつたり、底知れぬ溝の中に落ちたりして、一生を終るのらしい。婦人の經濟的獨立などを說く新しい女は、少しく斯うした方面にも着眼して、四の五のと議論はするものゝ、女は遂に男の下に隨從すべき動物であることを、自覺する方が宜からう。一生を男の厄介にならず、男には最う懲りたと云ふ類の女は、主として變性男子か、寡婦か、老孃(オールド・ミス)などで、彼等こそ新しい女の議論を實行しつゝある、齢老いた「新しい女」である。誰が何と云つたつて、女は男がなくては、一日も立行く事の出來ない人間である、弱い、乏しい、受動的の人間である。到底、男の風上には、置くことの出來ない、一等下級の人類である。

「廊下の曲り角」から、飛んだ事まで書いて了つた。病氣して入院して居ると、取止めもない雜多な事が思ひ浮んで、何だか斯う世間を罵つたり、人を嘲つて見たくなつたりする。其の癖自分は大に悄氣て、心細い淋しい孤獨の感に堪へられず、一日も早く退院したい、一日も早く世間に出たいと思つて居る。

窓外の景色は、最う全く夏になつた。退院したら、大阪へ行つて食いたい、遊びたい。

六、社會制度の破壞

Y君、いよ〳〵三日後には、退院する事になつた。讀まうと思つて持て來た本も、碌に讀了しない間に、手術の痕は日一日と癒えて來た。此の前は左樣でも無かつたが、今度は何だか宅が戀しくて、一日も早く歸つて、子供等と一所に遊びたくて仕樣がない。

病院の横手には、勞働者の汗する荷車が通る、藝妓を乗せたゴム輪が通る、西洋人を乗せた自動車が通る。都會の色と匂と響とは、此の病院にも日夜見舞つて居るに、我が野村看護婦は、世間を思はず、榮華を思はず、戀を思はず、死を思はぬのか。例の片笑靨て納り返つて、娘十八の若き日を、惜むでもなく、恨むでもなく、たゞ白服の穢れを氣にして居る。僕は無聊に苦しむ朝夕、此の野村さんに向つて、隨分思ひ切つた冗談口を叩いたが、野村は何を云はれても平然たるもので、近頃は「戀の迷ひ」と云ふ貸本を耽讀して居る。

此の病院にも、隔日位には貸本屋が入込んで、病室を廻つて居る。新刊物は何一つも無く、名も知れぬ作者の戀とか罪とか、悶えとかを題名にしたものが、最も看護婦仲間に受けるとか。僕は持つて來た「みゝづのたはこと」を出して、其の中の「梅一輪」と題する所を開き、野村に「讀て御覽、涙の零れる事が書いてある。外國の看護婦學校へ行つて、長い間苦勞した甲斐もなく、病氣の爲に死んだ女の事を書いてある」と云つたけれども、野村看護婦は一寸手に持つたのみで、また「戀の迷ひ」を讀み初めた。何でも無いこんな事で、一般看護婦の趣味性を是非するのではないが、娯樂のために讀む本でも、それに依つて大概その人の情性を窺ふことが出來る。野村さんは齡も若いし、戀に迷つた經驗も無いので、反つて「戀の迷ひ」と云ふのに好奇心を抱いて、それで愛讀して居るのであらう。

凡ての看護婦は、皆「廊下の曲り角」に立つべき約束の下に、「病院の下女」たり、「病人の女中」たる任務(つとめ)をして居るらしい。彼等の多くは、看病に必要な學問を修め、看病に必要な技術を習ふのが精一杯で、讀書とか修養とかに、それ以上の餘裕があらうとも覺えぬ。從つて眞に看護婦の職業を、婦人の天職と自覺して、一身を不幸な病者の犧牲にするだけの覺悟で、進んで奮つて看護婦になる樣な女は、百人の中に幾人あるか心許ない。彼等の多くはたゞ身境の不如意に切迫詰つて、何とかして自分一人の渡世を餘儀なくせねばならぬ結果、何うにも此うにも仕様がなくて、看護婦と云

ふ一つの職業を選擇するらしい。そして一年なり二年なりの修行を積む間には、職業に對する趣味を覺え、自覺も出來るし信仰も感じて、職業そのものに傾倒し、同化する樣になる。けれども數多い中には、自ら看護婦として四五年の歲月を過して居ながら、何時まで經つても職業上の意義を理解することが出來ず、每日每日厭な思をして、不愉快さうな顏をしつゝ、任務めて居る者をも見受ける。何んな職業にも苦勞があれば厭な事もあるに、辛苦の外に超然として、職分に終始する事が出來ず、不平不滿の月日を送つて居る樣な例は、男の仲間にも尠らずある。況して男より弱い女の群に、職業の爲めに婚期を過ぎつゝある若い女の群に、厭な月日の多いことは、別に不思議でも何でもない。これも亦、婦人の職業に伴ふ一種の危險性として見る時、其處にも人知れぬ不安があり煩悶がある。

　病院へ入つて見たり、病人に爲つたりして見ると、看護婦の有り難さが身に沁みるけれど、僕に若し女の子があつたなら、如何に不如意窮迫に陷つても、看護婦などにはさせまいと思ふ。看護婦も亦この社會の一部を組織する上に、無くてならぬ大切な職業ではあるけれど、僕は相知つて居る交友の仲間に、一人の看護婦を有つて居ない事を、上帝に向つて感謝したい。僕の言ふ事は舊い男の愚論で、婦人問題の新思潮を無視した、時代の流を知らぬ愚説だと云つて、世間の所謂識者達から、鋭い嘲笑を受けるかも知れないが、僕は一個の男性として、何處までも女を屈從させたい、奴隷視したい、玩弄物視したい。僕を生んだ「母」と、僕の內助者たる「妻」の外に、此の世の中に、尊重すべき婦人が何處にあらう、敬愛すべき女が何處にあらう。妻たり母たるを欲せざる新しい女が、相當の理由を抱いて世に現れ、世間も亦これを識認する時、社會制度の基礎は、根柢から破壞される。

　君が新聞小說壇に打つて出た處女作、「闇の女」の女主人公は、何んな思想を抱いて居る女性が、如何なる境遇や運命に支配されて、悲慘な徑路を辿るやうになるのか。入院前から「大阪朝日」を讀まないために、其

の後の「事件の發展」を知らないが、思ふに其の個性描寫は、今の婦人問題と接觸する點があらう。僕は君の處女作が、多數の新聞讀者に喝采されるのみでなく、婦人問題の一部と交渉する處淺からぬ點に、君の新手腕を讀まん事を望み、君の努力を見ん事を願ひ、君の婦人觀を聞かん事を熱望する第一人である。

今日は珍らしく婦人の見舞客が、朝から二三人來た。それが皆、然るべき母や細君でなくて、それ〴〵「職業」を有つて、自ら稼ぎ自ら食つて居る人々であるから不思議である。僕の樣な愚論を云ふ男にも、「經濟的獨立の婦人」に、多少の知合があるから可笑しい。

近日愚文惡文集「人生探訪」を出版するから送らう。今度の入院記念として、恰好な本である。

七、天職に殉ずる心

Ｙ君、主觀的と云はうか、獨斷的と云はうか、愚論と云はうか、惡說と云はうか、毎日つまらぬ事ばかり書いて、君を惱ますの罪淺からぬ。僕の樣な頭腦の明斷な男も、病氣して病院に入つて居れば、神經衰弱になつて矛盾した事ばかり云ふ、何事も病氣のせゐだと思つて、大目に見て貰ひたい。

今日、外科主任のドクトルに相談したら、實を云ふと最う一週間前後在院して、傷が半以上癒えてから退院する方が、理想的ではあるけれども、貴君の方の都合もあらうから、先づ明日退院しても好い事にしませうと云はれた。今年の正月から碌に仕事をせず、社に對しても申譯が無いと思つて居る處へ、今度の病氣であるから、經濟的の關係が無くても、一日も早く退院したい。そして、何か讀者受のする讀物でも書いて、大に氣を遣らうと思つて居る場合だから、いざ退院と云ふ事になると、僕も亦世間の一人になれると云ふ喜悅の情に、心も飛び立つばかりである。

我が野村さんを初め、看護婦會から派出されて來て居る人々にも、大分心安くなつたが、いよ〳〵別れねばならぬ日が迫つた。僕一人は、氣味の惡い藥の香が漾ふ病室を離れ、陰慘な空氣に充てる病院を出て、花

賑かな世間の人と爲り得るけれど、附添看護婦には容易にそんな月日が來ない。日々夜々、不氣味な病人を送り迎へして、櫻花が咲いても、螢が飛んでも、月が照つても、雪が降つても、彼等は世の行樂を病窓の外に眺めて、白い服に起臥せねばならぬ。たゞ重患者が輕症となり、輕症者が全快して、病院の玄關を立出づる時「お芽出度う御座います」と云ふ、それが唯一の慰藉であるとは、何となく哀れ深い。自分の手に掛けて介抱した患者が、全快の喜悅を抱いて病院を出る時、一種の誇と愉快を覺えて、人知れず微笑む處に、僅に其の勞苦が酬いられるとすれば、世に看護婦ほど淸く美しい榮ある職分はあるまい。

僕は野村看護婦の勞を慰めるために、「退院したら電話をかけるか、又は手紙で知らせるが、一日僕の宅へ遊びに來ないか、大に御馳走をして、妻と一所に芝居でも見に行つては何うか。慰勞の爲に……」と云つて見た。齡の若い野村の事であるから、何と答へるかと顏色を見て居ると、野村は「有り難う御座いますけれど、患者さんのお宅には參られません。退院なさいます時に、お送りする事さへ出來ないのですもの、最うお言葉だけで澤山ですわ」と云つて、片笑靨で笑つた。そして「會の方へ歸りますと、一日二日の休養は出來ますけれど、何時何んな場合に、病家や病院から聘らせて來るか知れません。妾等は斯うして正月から師走まで、種々な患者さんの看護をして、月日の經つのも知らないで過すのです」と云つた。看護婦になつた以上は、凡ての歡樂を他所に見て、病人と始終するのが天職であらうけれど、斯うした言葉を若い看護婦から聞くと、何とも云へぬ哀を感ずる。殊に、明日が退院と云ふ今日だけに、僕は斯うした病院に殘つて、戀盛りの若い日を、何の榮もなく送らねばならぬ彼等の群が、可哀相な樣な氣がして堪らない。出て行く人々に「お芽出度う」を浴びせかける、其の言葉は傳習的にして、無心の間に出るとしても、それが彼等の生活に、何の交涉あるお芽出度さであらう。今朝お芽出度い人を送つても、今夜はお芽出度からぬ人を迎へて、斯く

て繰り返し行く附添看護婦の月日ほど、世に陰氣なるはなく、世に味氣なきはあるまい。

斯うして看護婦の身の上に就いて、種々と思ひ煩つて居る時、又しても浮び出づるのは、京都大學病院の「廊下の曲り角」である。夕暮の雲の行く方を見て居たらしい彼の女を、今、眼前(まのあたり)に見る心地がするのは、此の病院の廊下である。京都の夕暮には、親友永井の死を背景としただけに、今日に至るも忘れ難い强い印象が殘つて居る。肺て死んだ永井の生涯に、海を隔てた熱烈な戀があつた樣に、永井の死んだ病院の廊下て、夕雲を眺めて居た看護婦の上にも、淚多い戀があつたかも知れない。此の病院の廊下に見る看護婦は、僕に似た病人の群を背景にするだけて、其處に何の興趣もなく、其處に何の詠歎もない。京都大學病院の廊下に立つた女は、其の後何うしたか知らないが、此の病院の廊下に立つ群は、時にゲラ〳〵と笑つたり、時に小聲て奈良丸くづしを唄つたり、時に「患者さん」の取沙汰などをして、樣々な笑ひ方に興じて居る。

明日が退院だと云ふ僕の喜悅を、自分の悅とする譯てもあるまいが、野村は最う嬉しくて堪らないと云ふ樣子て、繪はがきまて買つて眺めて居る。「國から祖母が參りますから、妹に土產に送るのてす」と云つて、子供のいたづらを書いた畫面を見詰めては、面白さうに笑つて居る。看護婦の免狀を受けて、更に產婆の試驗を受けるのが、目的てあると云つて、野村の心は其の事にのみ張り切つて居る。產婆なんかにならずに、產婆を雇ふ樣になるのが、生涯の幸福てあると云つても、患者さんの言ふ事などに、動きさうな樣子はなく、其の心は前途に燃えて居るらしい。

職業に貴賤なしと云ふ事を、子供の時から能く聞いたが、最も貴むべきは、「天職　殉する心」てある。考へて見れば豈單り看護婦のみに非ず、お互「新聞記者」の如きも、此の心掛けが有ればこそ立行かれるのてある。僕が「看護婦」を憫れむ樣に、世間ては「新聞記者を、憫れんて居るかも知れない。

時には、大阪の樣子を知らせてくれ給へ。

八、病院で得た興會

Y君、病院で手紙を書くのも、いよ／＼今日限りとなつた。今夜は二十一日目に歸宅して、懐しい書架の傍で、子供達と枕を並べて寢られるかと思ふと、實に何とも云へず嬉しい。退院しても當分は、通院治療を受けねばならぬが、先づ何よりも好きな電車に乗つて、東京の世間に觸れると云ふ事が、僕にとつては、意味あり價値ある生活の一部である。

今度の入院を好い機會にして、看護婦二三の閲歷を探訪し、それを京都に於ける「廊下の曲り角」に點出して、一種の非小説を書く積て居たが、果さぬ間に退院の今日となつた。こゝの看護婦副長などには、過ぎ來し方に二つ三つの小説があるのに、其の斷片をも拾ひ得ぬ間に、いよ／＼退院と云ふ日が來た。如何なる場合に、何んな所へ行つても、副産物を取つて來ぬ事の無い僕も、今度の入院中だけは、「人生探訪者」として無爲無能であつた。初の一週間は熱て苦しみ、中の一週間は傷で苦しみ、餘の一週間はガーゼの取替で苦しみながら、こんな事を云ふと、慾の深い人間だと云つて、笑はれるかも知れない。

兎に角、看護婦だと云へば、神樣の樣に尊敬する人人があるかと思へば、賣笑婦同然に取扱ふ世間もある。其の職務上、異性と交渉する處が淺からぬだけに、樣樣の誘惑もあれば誤解もあり、立派な一人前の看護婦として、模範的の生涯を送らうとするには、並大抵の努力では及ぶまい。僕も今日までに、看護婦に關する美談を聞いて、落涙した事も度々あるが、また看護婦にあるまじき醜行を聞いて、眉を顰めた事も度々ある。女優でも、交換手でも、女教師でも、女店員でも、工女でも、女學生でも、其の仲間に一二の不品行者が出ると、誰も彼も皆不身持の樣に取沙汰されるのが、今の世間の通有性である。若い看護婦でも其の通りで、患者と通じたとか、お尻が輕いなど云はれると、其の職分が淸く美しくあるだけ、それだけ世間から兎や角と取沙汰される。事にも物にも表裏があつて、事々物

物を一概に看過する譯には行かないが、看護婦だけは何處までも、淸く美しくあつて欲しい。

二十日なり三十日なりを、看病して貰ふ女だもの、人情として美しい容色の看護婦を好む。其の病人が男であると女であるとを問はず、美なるものを欲するのは、自然の人情であらう。然し數多い看護婦の中に、群を拔くほどの美人があるか何うか、頗る疑はしいと共に、看護婦だけは、容色の美なるもの、必ずしも優秀な人とは云へない。反つて人並勝れた容色が仇となつて、若い女の誰でもが落ちる穴へ、知らず識らずの間に墮落する者の方が多い。看護婦たらんとする女の唯一資格を、醜婦に限ると規定するにも及ぶまいが、華やかな世界を外に見て、陰森な病室に病人と共に起臥する女には、自分の容色に就いて、何等の自負心を有つて居ない者の方が宜い。若い女が看護婦にならうとする動機は、種々樣々あらうけれど、世に優れた美貌を有つて居る女が、榮あり光ある他の道を捨て、淋しい此の道を辿る樣な例は、百人に一人もあるまいと思ふ。容貌は如何に醜くても、醜い女の特有性なる惡い性癖が無くて、心を淸く美しく有つて居さへすれば、其の人は即ち看護婦として、世間の一部から神樣の如くに敬愛されやう。感ずべき逸話を有つて居る看護婦が、十人並劣つた容色の人に多いのも、敢て怪しむに足らない。

片笑靨の野口さんなどは、美人でもなく醜婦でもなく、世間並の唯の娘と云ふに過ぎないが、此の後何う云ふ風に成り行くであらう。三週間の間、朝な夕な熱を檢て貰つたり、脈を取つて貰つたり、三度〳〵の飯の給仕から、大小便の厄介までかけた人とて、いざ退院と云ふ今日になると、何だか其の行末が氣にかゝる。本人は平氣なもので、僕の樣な病人を、病院の一室に送迎して、判で捺した樣な任務に幾春秋を送るのを、定まつた運命と觀じて居やうが、僕は其の前途を考へずには居られない。看病し介抱されたのも、淺からぬ何かの緣であつたとすれば、かりそめの遭遇もあだでなく、無意義でなく、其處に何等かのローマンスを讀

みたい。今日斯うして別れて了へば、何時の日かまた相逢ふべき、これが永久の別れになるかも知れないが、それも亦後の世の意味ある思ひ出である。今も尚十年前の「廊下の曲り角」を思ふ様に、十年後には、其の「片笑靨」を思ふの日があらう。

三週間の病院生活は、隨分苦しかつたけれど、百圓の金を費つても、尚償つて餘あるのは、病院に於ける靜寂沈思の興會であつた。新聞記者の樣な、日夜の別なく活動する種族には、ものを考へる時間が、容易に廻つて來ないものだが、僕は病院へ入つたお蔭で、大分僕自身を内省する事が出來た。病氣の種類が、僞道德家の群に同情を惹き難いが爲めに、種々と取沙汰されたかも知れないが、そんな事は頭から問題にならない。たゞ大に考究すべきであつた「死」の問題に就いて、其の外廓の一端にも觸れ得なかつた事を、返す返すも殘念に思つて居る。信仰とか死とか云ふ問題は、聖書やお經を讀んだ位ではウソて、身自ら其の境に落ちて見なければ、動きの取れぬホンとの事が判るものでは無い。

世間は廣く人は多いけれど、愛すべきものは、たゞ我が身と我が妻子のみである。僕も樣々な事が原因して、長い間、自個虐待の生活を送つて來たが、人間も病氣をしては駄目だ。月並ではあるけれども、將來は大に自重自愛して、自分の爲めに勉强しよう、可愛い三人の男子の爲めに働かう。未だ三十六歲だ、僕の舞臺はこれから幕が開くのだ。

大阪は何うか、――考へて見れば、やはり東京の方が好い。――（退院の日）

附記、八月號には「十萬圓の奧樣」を、十月號には「荒物屋の二階」を書く。十萬圓の方は狂婦人て、荒物屋は新女優を題材としたもの。一は悽慘にして、一は艷麗「女八人」中の最も苦心の產物たり。

桐花學會論

鷺城學人

一

○世に如何はしき會多きも、近頃桐花學會と稱する國體こそ奇怪至極のものなれ。名は美ならざるにあらず、標榜する處も亦立派ならざるにあらず、而も天下一人として之を稱揚する者なく、萬口一齊に嘲罵冷笑し、梧桐未だ麗花を著くるに至らずして早くも凋落せんとするは何ぞや。

○初めて發起人會を九段偕行社に開きしはさる四月十六日なりき。會するもの博士上杉愼吉・筧克彥・清水澄・井上通泰・陸軍中將大島健一・貴族院議員江木千之等十數輩にして、上杉・井上・江木・入江貫一・加藤房藏等を起草委員に擧げて會則七條を立案制定し、五月十四日を以て帝國大學内に發會式を擧げたり。

○會の名稱については最初發起人間に種々の說出てしが、桐の花咲く頃に發會式を擧げたるより之に因みて桐花學會と命名せしなりと。表面の經過は單にこれに過ぎず。

○會則第二條に其目的を掲げて曰く、我國體を明徵にし、益々忠君愛國の精神を堅實にするにありと。さすれば桐花學會は我國體の明徵ならず、忠愛の精神堅實ならずとの前提を以て特に此目的を定めたるものと看ざるべからず。

○是に於て問ひたきは果して我國體は國民の間に明徵ならざるか、忠君愛國の觀念は果して堅實ならざるか。彼等は頻りに世道日に頽廢し人心月に傾き、動もすれば金甌無缺の國體を毀傷せんとするの惡傾向あるを口にす。

○乃ち其實例として先づ一昨年の大逆事件を擧げ、次

に最近に於て大政黨が恐れ多くも至尊の勅諚に副ふ能はざりしをいひ、天皇の大權に對して僭妄亂逆の言議を弄するの政黨領袖ありといひ、天皇も亦國家統治の一機關なりと妄言して憚らざる學者ありといひ、以て國體講明の急切なる所以となす。

○惟ふに第二の大政黨云々は政友會を指し、第三はさる二月桂內閣不信任案の衆議院に提出されし時、其理由を演說したる尾崎學堂を指し、第四は言ふまでもなく上杉博士の君主々權論に對して國體主權を提唱したる美濃部達吉博士を指せるならん。

○幸德一派の悖逆事件は歷史上の大不祥事にして天人共に怒る處、一人の之に同情する者なく、我國法は是等の逆徒に極刑を課して遺孽なからしめ、寧ろ此事に依て皇室に對する國民の尊崇心を一層深からしむる結果となれり。

○西園寺が政友會を鎭撫して桂內閣彈劾案を撤回せしめ、以て勅命に副ふ能はざりしは、之を臣子の關係よりいへば道德上議すべきなきにあらざるも、憲政の上よりいへば一概に不臣の行動と看るべきにあらず。況んや西園寺は大命に副ふ能はざりし責を負うて直に總裁職を辭したるに於てをや。

○假に西園寺の爲す所を以て不臣なりとするも、彼をして此に出てしめたる桂太郎はそれ以上に不臣の甚だしき者にあらずや。同じく不臣の罪といひても西園寺には多少同情すべき點あるも、桂に至ては秋毫の酌量すべきなし。

○嘗て常侍輔弼の職にありながら、策を宮闕の中に運らして宮中・府中の別を亂りしものは誰ぞ。濫に詔勅を奏請して皇室を政爭の渦中に捲込みしものは誰ぞ。先帝崩殂に對する國民の新愁未だ去らざる諒闇中の帝都に、一場の修羅劇を演出せしめたる元兇は誰ぞ。

○大正の政變を說けば千人は千人、萬人は萬人桂の惡を憎む。然るに桐花學會の人々は天下の人の擧げて指斥非謗する者を咎めずして、一に西園寺を責むるに急なるは公平の見といふべからず。

○尾崎は皇室の事に關して屢〻口禍を買ふも、或る一

派のいふ如く決して危險思想家にあらず。曩に文相職を去るの止むを得ざるに至り、延て憲政黨內閣瓦解の因をなしたる共和演說は、唯だ米國の例を引用したるに過ぎざるも、陰險なる閥族者流は大業に騷ぎ立てゝ政黨政治家を傷くるの材料に供しゝなり。

○第三十議會に於ける演說中の數語は、何程か不謹愼の譏を免れずとするも不敬といふべきにあらず。詔勅を濫請して累を皇家に及ぼしたる桂の不臣を誅むるの一事、既に尊皇的精神の發露と見るべきにあらずや。

○美濃部博士が學問の上より團體主權說を唱へたりとて國民道德の罪人といふべからず。上杉の君主々權說も憲法上の意見なれば團體主權說も亦憲法上の見解なり。學問上の見解と個人の道德觀念とは自ら別にして團體主權說を主張する美濃部に尊皇心なしと斷ずるが如きは物の道理を辨へざるも甚だし。

二

○桐花學會派のいふ處は從來屢〻耳にする閥族官僚の口吻其儘なり。然らば桐花學會と閥族政治家との間に何等の關係あるにや。

○去月發行の「世界」と題する雜誌は、桐花學會は全然政治的の意味を離れたる學術的結社にして、黨派階級等有ゆる畛域を撤去し、苟も健全なる主義を抱持する者は何れの方面より來りて之に加はるを拒まずといひ、又た上杉博士は學問上より國體の精華を國民上下に周知せしめ、我本來の國民性を陶冶善導せんとするにありて、政治とは沒交涉なりと辯ぜり。

○該雜誌は世間より存在を認められざるも、嘗て山縣系の機關新聞たりし京華日報の後身にして、一派の補助の下に發行せるもの、又た上杉は桐花會創立者の一人なれば、さる辯解を爲すは當然なり。

○何樣の辯解を試むればとて疑はしきは飽まで疑はしく、何人も純粹なる學會として合點の行かぬ節多きを認めん。开は餘りに一方を貶して一方に傾き、其動機の客臘以來の政局に對して不滿なるに存するの嫌ひあることなり。

○彼等は桐花學會員を以て悉く獨立獨行の操守あるも

のとし、黒幕の繰縦するなきを辯ずるも、學會の内情を知る者は背後に傀儡師の潜めるを傳ふ。煙のある處豈に火なきの道理あらんや。

○現に筧博士、國學院幹事長山田新一郎、同院幹事今井清彦、同院講師石川岩吉等の入會後幾くもなくして脱會したるは、必ずしも政府の壓迫よりしたるにあらず、入會後單純なる學術的團體にあらずして、一種の政治的結社たるを觀破したればなり。

○筧の脱會理由は一夜天神樣の靈夢に感じたりといふにあり。上杉等言を悉して留會を勸說するや、彼れ曰く、何分にも神の託宣なれば余一人の心を以て決する能はずと。爾來桐花學會の人々は『筧の天神樣』と綽名し莠に惡聲を放ちつゝあり。

○博士高橋作衞も會員名簿中にあるも、彼は初めより入會するともせざるとも明言したるにあらず。彼等が會員の數を多くするの意より、承諾なくして其名を加へたるは不穏なる行の不正なり。

の疑ひは、朝鮮總督寺内正毅の私邸に屢〻會合したる一事に依て益〻深くなり、更に山縣公も平田東助子も初めより之に關係せるの知れ渡るに及びて最早言ひ遁るゝ能はざるに至れり。

○桐花會の役員は評議員に上杉愼吉・淸水澄・井上通泰・江木千之・大島健一・二宮熊次郎・加藤房藏・丸山正彥・入江貫一・湯本武比古あり、上杉・加藤の二人を幹事とす。

○此外會員に猪谷不美男・西川權・西田敬止・渡邊薰之介・赤司鷹一郎・加藤玄智・加茂百樹・柳田國男・深作安文・二上兵作・笹川潔・木村鷹太郎等あり。杉浦重剛は最初より會員にならずとの約束にて會員となれるも、其關係極めて薄し。

三

○上杉は故穗積八束の龍弟子にして其後繼者と稱せられ、彼れ自身爾く任じ、先生以上の極端なる議論を唱

○そは兎も角桐花學會が學術以外に或る目的を有すと

○今までは世間に其名を知られざりしが、昨年美濃部

博士に挑戰して愚論暴論を公にして以來問題の人となり、同時に人格下劣にして知識の淺薄なる似而非學者に過ぎざるを世に明かにせり。

○眞の學者は學問の爲めに學問し、何等の權力にも左右せられざるの强味を以て學問の權威と神聖を保ち、隨て一世の尊敬を受く。而も上杉の徒は學問を以て一身の榮達を圖るの道具に供するが故に、曲學となり阿世となり、學者として毫も尊敬すべきなし。

○彼は政黨を呪詛し、畢世の事業として之が撲滅を計らんなどゝ豪語す。彼れ如何に馬鹿者なりといへ、立憲政治の下に政黨の存在し且つ其必要なる所以の理を知らざるにあらざるも、藩閥の頑迷者流が政黨嫌ひなるより、故ら政黨の有害を叫びて彼等の意を迎へんとするに外ならず。

○政黨を無用なりとする論據は、統治の大權上御一人にあるを規定する我憲法に之を認めずといふにあらんも、然らば彼が偶像的尊貴の念を以て謳歌する元老なるものは果して憲法に其存在を認容するか。假に政黨を有害なりとせば、元老は憲政上それ以上に有害ならざるか。

○彼は西洋學問の丸呑込み流行し、我國獨特の憲法を歐化せんとするの風潮あるを慨するも、彼の憲法論も亦獨逸の學說を鵜呑みにしたるものなり。それも新說といふにあらず、メッテルニヒの保守反動政策を謳歌し、ラバンド・ホルンハック等の糟粕を嘗めたる穗積の陳說を祖述するに過ぎず。さる黴臭き議論を大正維新の今日に擔ぎ出して一應の新說らしく振舞ふこそ心得られね。

○靑二才は靑二才らしくすべきに、アッパレ愛國者顔して口幅つたき言を弄するとは生意氣の沙汰なり。國體を講明し國民道德を作興するには世間自ら其人あり愼吉の如きは今少し新しき西洋の書籍を讀みて頭を造る傍ら、女房の褌の臭ひでも嗅いで居るが好し。

○淸水も同じく穗積系の憲法學者にして美濃部達吉副島義一の反對に立つ。されど上杉程に不評判ならざるは一通り常識を具へ、徒に愚論を吐て得意にならざ

ればなり。夙に山縣の寵を得て樞密院の書記官たり。

○井上の斯かる會に頭を突込みしは、醫は身體の病を治すると共に天下の病を治すとの信念よりするにや。古き眼醫なれども學と術の造詣深からず、猶ほ其歌の拙なるが如し。山縣と和歌友達なるより屢〻椿山莊に出入して幇間的に振舞ふといへば、桐花會との關係を察するに難からず。

○江木は長人にして弟冷灰の奇骨と學問なきも、老人仲間にては相當の物知りにて、久しく地方官を勤め官僚派中のヤカマシ屋なり。貴族院議員にして表面桐花會に名を列するは彼れ一人とす。

○大島は岐阜人なれども長閥全盛の陸軍に於て參謀次長にまで進みしは、初めより山縣恩顧の下に立ちたればなり。日淸の役、第一軍司令官山縣の副官として出征したる外、軍人として戰功の錄すべきなく、常に參謀本部に在て長閥の機嫌取りに汲々たり。

○末廣鐵腸の盛名ありし頃、同鄕人にて二宮熊次郎といふ男と共に何かの西洋小說を翻譯せしことあるを記憶せり。如何なる緣故に因るか知らざるも、其後山縣系と關係を結び、山縣が憲政黨內閣の後に出でゝ盛んに反動政策を行ひし時、京華日報の筆政を宰して專ら御用を勤めたり。其後生けるか死せるか明かならざりしも、加藤房藏と共に『世界』を發行し山縣・平田・寺內等の家に出入し、其恩惠に依て辛うじて衣食するのみ。

○丸山は故丸山作樂の嗣子にして國學者なり。湯本は伊澤修二と鄕國(信州)を同うし、嘗て並び稱せられたる古き敎育家にして、言ふまでもなく官僚系に屬す。入江・二上は共に樞密院書記官にして樞相山縣の子分なり。

○猪谷は學習院學監にして故乃木の信任を得たりと稱せらるゝ人、西川も乃木の晚年に於て知遇を得、日本古代史の研究家なり。渡邊は久しく文部省圖書官長たりしが　行政整理の結果逐はれて浪人となり、赤司は小僧なれども維新史編纂局に在りて元老の覺え目出たく、加藤玄智は文學博士にして士官學校の敎授、加茂

は靖國神社の宮司、共に長閥陸軍と淺からぬ關係あり。

○稻田は元と古河家にありし時、原敬・岡崎邦輔の子分の如くせしが、馘られて以來官僚派に取入り、今は國民新聞に筆を執れり。上杉が美濃部と憲法論を鬪はしゝ際、蓬萊山人の號を以て上杉に助太刀し、美濃部を非國家主義者なりなどゝ喧きたるは此男なり。

○彼の筆を以て立つは間違つても自家の主義を宣傳せんが爲めにあらず、報酬を目的とする論說技師なるを以て、其論ずる所も娼婦の廻しを取りて越客秦郎の意を迎ふるに同じ。

○即ち國民新聞に於て官僚を辯護しながら、中央新聞には官僚を攻擊して政黨を辯護し、更に大阪毎日・東京日々にも一週二三回筆を執り、一時大阪朝日にも寄稿せしが、後に至て朝日より斷わりたり。賣文の徒とは彼が如きをいふべく、眞に操觚界のパチルスなり。其他柳田といひ笹川といひ、木村といひ、孰れも官僚臭味を帶ぶ。

○以上の形成分子を以て見るも、桐花學會は一派の政略に利用する別働機關たるの事實を掩ふべからず。然るに彼等は識者の非難に對し、黨人が他人の操縱に依て盲動する事實を移して大人君子の心事を忖度する者なりといひ、愛國の志士を誣ふる者なりといひ、頭隱して尻隱さぬの愚に陷る。如何に口は調法なりとて大人君子、愛國の志士などゝはチヤンチヤラ可笑し。

○世に忠君愛國を以て自家一黨の專有物の如く心得る嗚滸のシレ者あり。殊に山縣系に多し。而も彼等の忠君愛國は僞忠君僞愛國にして勢利の爲めに之を利用するに過ぎず。

○獨り自ら尊王愛國の念に厚きを誇るは尙恕すべきも謂れなきに他を不忠呼はりするは不埒極まれり。三浦將軍が進步黨の客將となるや反逆者の如く遇し、西園寺を社會主義者の如くいひ、其他政治家・學者にして彼等に驩ばれざる爲め惡名を蒙りしもの少からず。

○彼等は　陛下聖明の治を傷くると共に、黔首を愚にしつゝ三十餘年間權勢の地に居れり。彼等が權勢を利用して積みたる私財、尋常富豪の上に出づるも、法律の規定する所得稅を納めず、納めざるを以て元老の特權の如く思惟せり。而も國民は苛斂誅求に苦み、細民は生活難に泣きつゝあり。

○議會を腐敗せしめ、國民一般の政治道德を破りたる者は、長閥政治家が政權を私せんが爲め買收政略を行ひし結果にあらずや。

○世道衰へ人心の傾く今日の如きを致したる罪魁は即ち閥族の一階級にあらざるか。假に社會思想の國民の一部に發生するありとせば、其因をなしたる者は是等一部の種族にあらざるか。

○古來皇室と國民の間を隔てたるもの藤原氏の後に源平足利氏あり、豐臣氏の後に德川氏あり、德川氏の後に薩長藩閥あり。大正新時代に於ては斯くの如き階級の君臣の間に存在するを許さず。

○彼等は自家を中心とする狹き範圍のみを見るが故に大勢の如何に推移し民心の如何に歸嚮するかを知らず。而して近づくる處のものは多く佞幸の徒なるを以て益〻其愚妄を肆にす。

○桐花學會の幹部は概ね勢威ある人に阿諛諂媚して立身を策するの徒なり。何ぞ世道人心の事に益するを念とせんや。

○因あれば果あり、長閥の衰ふるは衰ふべき原因ありてのことと謂はゞ自然の成行なり。最近薩閥は復び勢ひを盛返したる如くなれど、是れとて晩かれ早かれ秋に會は[illegible]。

○長閥は薩閥の頭を擡ぐるを看て内心快からず、自然斯かる會の起るを必要としたるならんが、政黨撲滅云云の如き暴論の今日に通用すべしと思ふは既に山縣寺内・平田等の耄碌して時代を解せざる證據なり。又た桐花學會派が忽ちにして一世の歡迎を受くるが如く己惚れたるは迂遠なるも甚だしからずや。

○軍人には軍人の職分あり、政府の官吏には官吏として守るべき道あり。學者は學を講じ道を明かにし、教育家は天下の惡を戒め破り、天下の善を勸め導くこそ是れ天より命ぜらるゝ處なれ。而も皇室をダシに使ひて彼己氏を擁護し、自ら爲めにせんとするが如きは、不忠不臣の譏を免れ難し。

○日本の國體は牢として磐石の如く國民の忠愛心は古今に通じて渝る處なし。然るに突然國體擁護の運動を起して世間を騷がすは、却て國民に惡影響を與へ、外國人をして如何にも皇室に對する國民の觀念に變化ある如く思はしめ害ありて益なし。此意味に於て曲學阿權の徒を排斥し桐花學會を存任せしむべからず。

○最後に一言す、卿等は國民道德を憂ふるに先ちて自家の道德心を憂ひ、政黨を攻擊する暇に自家の頭腦入れ[illegible]の必要ありと知れ[illegible]

女優の内幕を暴露せし 獨逸女優の日記（三）

山本迷羊

十二　衣裳の罪

（五月初）「妾の初興行の季節が濟んでから、既うたつぷり二週間にもなる。夏興行の試演は五月の十日に始まるのだから、丁度三週間あまりは芝居の用が無い筈なのだけれど、妾はこの間を悠々と遊び暮すわけにはゆかぬ。この頃には、考へて見ることもそれから又爲なきやならない仕事も山ほどある。自分の持つてる衣裳だの細々した附屬品なんかを片端から調べて、やがて來るべき新しい戰鬪の用意をして置かなければならない。端物の補充をしなければならないのも澤山あるし、新しく調べるのも澤山ある。

　支拂の總勘定をやつて見たが、餘りのことに開いた口が塞がらなつた。例の財産から千七百マルク（凡八百五十圓）引出さなければ追つかぬことになつたのだが、此莫大な金額は全く、着物とそれからコンラード師への謝禮とだけに消えたものである。この外にまだ食住の費用や細々した必要なところへ費つた金が、財産の利子二百マルクと給料の四百八十マルクとだ。して見るとたつた七ヶ月の間に總計二千四百マルク（凡千二百圓）許り費つたことになる。

　そんならその結果はどうであるかといふに、成程衣裳と着物は二十組足らずもあるには相違ないが、その半數はもう流行遲れて、拵へ直さなきや手が通されぬ。

　妾達はいつも最新流行の着物を着て、華やかな扮裝を凝らさければならない。妾達にとつては泪の出るやうな費用のかゝるこの要求を不斷に出す源は、かねがね御愛顧を蒙つてゐる芝居の御客様方て、座頭殿はそ

のお客様方の傳話筒になつて、件の有難い仰を直接妾達へ傳へるのである。その要求を一々かなへやうかなへやうとするので、妾達の心も落着かなければ財布も安らかならぬのだ。

衣裳や携帯品にしみつたれた事をする女優ほど慘なものは復とあるまい。かういふ人は、忽ち女客の贔屓を失つた上、否でも幹部の室へ引張り込まれて、自分に關した澤山の手紙の朗讀を聽かされる。その手紙といふのは、筆者の名前の記したのもあるが、無記名の方が餘計て、曰く「お馴染の定連」、曰く「芝居に忠實な女客」、曰く「永年の劇通婦人」、曰く「一等席を張込める定連の一婦人」、曰く何曰く何と、有象無象の婦人の觀客が、自分は不廉い入場料を拂つて見物に來たのに、甲孃からは、今てはすつかり廢れてしまつた水色の夜會服を、昨日て既う三度も觀せつけられたなどと、ぷん／＼憤り立つた文句を書きつけてある、すると座頭は、件の水色の衣裳をやつと十日ばかりも前に仕立屋から受取つたばかりの、その甲孃なる女優を呼んて、御客様が、貴孃の着てゐるやうな吝嗇氣な着物は觀たくないと仰有るには誠に困つた。と云つて私の劇場は、御客様方の御贔屓て立ち行くのであるから、貴孃もせめて衣裳だけはあんまり吝嗇々々しないて、御客様の御機嫌をとるやうにして貰ひたいものだと、强制的に懇願する。が、若し其處て甲孃が、もうこれ以上の贅澤は自分の財布が許さない、何しろこんなお禁厭ほどのお給金てはとても言はうものなら、見よ、わが尊敬すべき座頭殿は、肩胛骨を上下に顫動させて嘲弄の意を示し乍ら、そんなことは自分の知つた事てはないと空嘯く。さうかと云つて、若し甲孃が觀客に滿足を與へることが出來ないとすれば、それ以後甲孃は、自分よりも少い給料を貰つて居ながら、最新流行の綺羅びやかな衣裳を取つ換へ引つ換へ着こなすといふ玄妙不思議な術を會得してゐる乙孃なる者に、自分の持役を讓らなければならぬ。ところで甲孃は、眞正面に自分へ吹きつける北風を避ける爲めに、又彼女の女優としての末路即ち飢餓の入口へ到達するのが厭

ならば、抑も如何なる手段を採らなければならないだらうか。……彼女は、例の乙孃が以前から久しい間やつて居る事を始めなければならぬ、露骨に言へば、彼女は、誰か金持の旦那を探さなければならない、その旦那なる者は彼女に涎を垂らし、而してそれに對する御禮として、彼女の仕立屋の拂を引受けて呉れるのである。」

嗚呼、斯くの如くにして、神聖なるべき女優は竟に賣春婦となる。

「妾達女優は美しい着物が要るばかりでなく、衣裳に附屬した物は、靴の踵から髮飾の針に至るまで、何でもかでも雅致があつて斬新で性が良くつて、觀客の心をそゝるやうな、何か獨得の工夫を凝らしたものて、謂はゞ舞臺の上て流行品の展覽會が開かれるやうなものを揃へなければならぬ。殊に現今のやうに、頭の無い作者が自分達の小刀細工の痕を衣裳の觀せ場でお化粧させて、綺麗に見せかけやう見せかけやうとばかりしたがる時代では、妾達は下の下の肌着からして、思ひ切つて婀娜つぽく、贅澤三昧に見せかけりやならない。妾が御手製て髮編の縁飾を附けたり小縁を編んだりしてこしらへ上げた實用向の肌着は素人でなくつちや着られないもので、迚も舞臺上の御役には立ちかねる。若し夫れ舞臺の女を飾るものと言へば、圖條に漣波の俤を偲ばせ、裾飾は翩翻として野禽の舞ふが如く、絹擦れの音は沙々と茅萱を風の吹き分くるが如くといふ萬事この要領で行かねばならぬ。それから又、肌着や着物や舞臺着なんかのほかに、まだまだ附屬品が山のやうにある。帽子、面帕、リボン、飾りの花、手套、日傘、雨傘、髮飾、眉掛、外套、朝衣、廻外套、乘馬着、種々の毛布、上は華奢な上靴から下は裏に鐵がベタ一面に打つてあらうと云ふ山歩きの長靴に至るまて、ありとあらゆる目的に使ふ靴一式、カラー、靴下、扇子、腰帶、と、まアざつと言へばこんなものだが、このほかに何だかんだと一寸思ひ出せぬ位種々雜多のものが要る。これらの品を悉皆買調へるに入用な金額を考へてみると壽命が縮まる。加之かうやつて折角手

に入れた品も、二三年も經てばまるで古物になつてしまつて、そこいらの古道具屋の店頭にある店ざらしと大した差違は無くなるのだけれど、さうかと言つて、かういふ物を持つてなければテンで出世は出來ないのだ。糞土のやうな近代の喜劇では、劇そのものの屁粕のやうな内容よりも、役者の衣裳の方が觀る價値のある事は屢次あることだ。で又實際、役者の衣裳が數寄を凝らしてあつた爲めに、三文の値打もない脚本の命を引きとめた例も珍らしくはないのである。

技能のない女優の中には、單に自分を崇拜してゐる鼻下長の旦那に背負して、金のかかつた凝つた扮裝をこらす手管を心得てゐるといふだけの理由で、格の好い舞臺に幾年も出てゐる者が澤山ある。觀客、殊に婦人の連中は、奇拔な意匠を凝らした贅澤な衣裳や携帶品を觀て有頂天になり、驚異の眼を瞬つてあれかこれかと研究をする。で、只もう衣裳の美しさを褒めたり女優の身の上を羨んだりすることにばかり熱中して肝心の演技に注意することを忘れ、女優の藝の無いことなどは頭で氣が付かずにゐるうちに幕が下りるといふ次第。鳴りもやまざる喝采は、光彩陸離たる衣裳に浴せかけられるのであつて、脚本や演技に對してなされるのではない。新奇な着物は幕毎に御高覧に供せられるからして、從つて喝采も一幕毎に繰返へされる譯である。すると終には批評家までがその演技をよいものと思込んで、翌日の新聞に大々的の讃辭を載せるといふ段取となる。

妾は、この夏興行と次の冬興行とには、新調と修覆とに三四千マルク（千五百圓乃至二千圓）ばかり張りこんでやらうと思つてる。かういふ無くてならぬ衣裳の費用が一時にどつかりと出るほかに、肌着だの下着だの毛布だの、その他ちよこ〳〵した裝飾品だのといふものは、何時といふことなしに不斷要るもので、これにかける費用が、又中々馬鹿に出來ないものだ。この夏には出來るだけ儉約をして古物を着てしまはうが、冬は迚もこの手は用ゐられぬ。劇場では、平均一週に一つは新物が演ぜられる。それに對して妾達は、

いつもかも新しい物を準備して置く必要がある。それに妾は、演技の技能ばかりでなく、衣裳をも餌にしてこの次の次の冬の興行季節即ち千九百年から千九百一年へかけての季節には、今よりもぐつと好い出勤先を捺へやうと思つて手ぐすねを引いてるのだから、尚更以て衣裳の儉約は出來ない、乾度他の代理者や座頭達に觀られるにちがひないから。」

十三　金が敵

ヘレーネ嘗て某地の劇場で「ザザ」(佛ベルトン及びシモン合作)の女主人公ザザの大役を引受けたことがある。或る日自分にザザの役が割當てられたと聞いたとき、ヘレーネは心配で息が噎けぬ位であつた。これは、衣裳に莫大な金のかかるので有名な役である。二年前にある女優がザザに扮した時は、その所謂旦那なるビール會社の社長から二三千マルクの衣裳をこしらへて貰つたといふ事實がある。そんな事を思ひ合せると、限りある自分一個の資力では到底この贅澤な負擔に堪へられさうもない。その劇場へ來てから演つたイレーネ(イブセン作「蘇生の日」に出づ)やヤネツタ(ブリヨー作「赤袍」に出づ)の着付は大變質素だつたので、持參して來た銀行の預金へ手もつけずに濟んだのだけれど、今度は中々銀行どころの騷ぎではない。嗚呼、作者がせめてその作中の人物に質素な衣裳を着せて置いて呉れたなら、世の中に品行の正しい女優がどの位殖えることであらう!

抑も女優が劇場へ傭はれる時には、衣裳その他携帶品の調達は一切劇場幹部の命ずる所に從ふといふ規約を承知の上で出勤の契約をするには相違ないが、それにしてもザザの役なんぞには、この條款を寸毫の假借もなく勵行しようとするもので、衣裳の地質・色合・仕立方まで事明細に規定せられて、女優の方では些とも動きの取れぬやうに出來てる。この衣裳は、總試演の時迄には殘らず調へて置かなければならないのだか、さてその金は、何處から持ちだしたものか。……その頃のこと、一人の朋輩が座頭に向つて、舞臺監督が金のかゝる衣裳ばかり調製へさせて困る、自分には迚もそんな費

用は出せないと碁に窮状を訴へたところが、座頭の答はかうてあつた。

「貴嬢は大層綺麗な娘さんだ。この都會には、あなたから仕立屋の支拂をしろと仰付かるのを此上も無い光榮と心得てる富裕の旦那衆が百人やそこらは轉つてゐますよ」

まア何といふ言草だらう！ こんな奴には洒面へ青啖を吐きかけてやりたいのだが、女優の身の悲しさにはそれも出來ぬ、若しそんなことでもしようものなら立處にお拂箱になるから。但しその女優は實際面の好い娘て、後には座頭の言つた通り立派な旦那を見つけ出した。

ヘレーネは、この劇場へ來た時千五百マルクだけ持つて來て銀行へ入れて置いたが、ザザを演じて喝采を博した後ては、千一百マルクしか殘つて居らぬ。こんな役をもう二ッ三ッもやつたら、軍用金は一文もなくなるに定つてる。軍用金が無くなつた曉こそ、運命の手が彼女を何處へ導くか解らぬ時てある、勿論故郷にはまだ五千マルク(二千五百圓程)といふのもが据ゑてあるけれど、これにはどんな事があつても手を着けられぬ。

其後ヘレーネが舞臺監督に向つて、こんなに費用のかゝる役ばかりやらせられちや遣り切れないと冗談まじりに談したところが、彼は、それは貴孃に出世の機會を與へたいばかりに演らせるのだ。貴孃のやうな美貌を持つてる仁はかういふ役に適當だが、慾にはもう少し放埓になつて貰ひたいと言つた。

萬事がこの調子てある。

「全體妾達の現在勤めて居るやうな劇場、それは月にすくなくとも二十日位は何等道德の陶冶場てもなく道義を説く學校てもないこんな劇場は、何の爲めに存在してゐるのだらうか。萬一この劇場が今日消え失せることがあるとしても、この都會の文明的生活には厘毫の損失を與へることもない、寧ろ益がある位のものだらう。して見るとこの種の劇場は、思ふに、座頭に濡手て粟の大儲をさせる爲めに、平土間に陣取つてる阿呆臭い喰ひ肥つた市民の女房共に、最新の流行品を生人

形の身體へ附けて紹介する爲めに、乃至は歡樂を趁うて走る紳士方に、氣兼なく試みられる肉市場を提供するために、たゞそれだけて存在してゐるものに相違なからう。これを外にしては何等存在の理由がないてはないか。元來政府は、新に設けられる私立劇場は大抵俳優に僅ばかりの給料しか拂はず、その結果其處が密淫賣宿となり人類虐待の伏魔殿となることも百も二百も承知してゐながら、何故後から後から劇場の開設を許可するのか。當局者の心がわからない。」

十四　女優の浮世

芝居道の世渡りなら酷いも甘いも嚙みわけたフレッグスといふ海山千年の女優が、衣裳部て毎晩女優哲學の說教をする。次に面白い節々を摘い摘んて見よう。曰く、

俗世間の愚物共が被つてる毛のもじやもじや生えた皮は、女優には窮窟過ぎる。女優はこの皮を脫ぎ棄てて、延縮自在の新しい皮を被らなければ駄目だ。それてこそ初めて進歩もし、御馳走も摘喰も出來やうといふものだ。「操」といふものは、安氣に男を待つてる金に困らぬ素人の娘が嫁入のときに持參してゆく贅澤物て、女優には無用の邪魔物てある。こんなものを背負つてた日には、氣づまりて手も足も出やしない。それに第一、女優の操なんてものは、世間ては、精々辻褄の合はぬ洒落ぐらゐにしか通用せぬ。若し女優が世間へ顏を出して、私はまた清淨無垢て御座いますと言つたなら、何だ馬鹿な、お伽噺にてもありさうなことだと言つて笑はれるに相違ない。どうせ他人がさう思つてるのだから、此方も決して遠慮するには當らない、齡の若いうちに、身體の續く限り快樂を貪るが宜しい。若い女優は兎角謙遜て、黃金の取れる場合にも銅を貰つて喜んてるのが多いが、實に愚な話だ。自分の色香に迷つた男がやらうといふものは、地所ても家作ても御禮無しに貰つとくがいゝ。

役者は面白い商賣だ。我々が面燈まぶしい舞臺の上て蓋世の波瀾を捲き起したり人情の機微を穿つたりして見せると、觀客はしんとんとろりとしてしまふ。て、

色氣ばかり發達した西東も知らぬ女學生や、總身に智慧のまはり兼ねた淫亂みたいな細君達が、エグモントやドン・カルロスやロメオやローエングリンに扮する男優に現ぬかしてあられもない事を希ふと同じく、金に絲目をつけぬ享樂主義の男は、グレーチヘンやメサリーナやスザリーヌやハンネやナナを擁して一夜の快樂に耽らうとする。これも何れか舞臺の華やかさに魅せられた結果ならぬは無い。併しかうやつて男の崇拜者を得る段になつても、選擇といふことを忘れてはいけない。それから、選りに選つて一人捕へたにしても、決して情の安賣をしてはならぬ、賣物は、其の都度代金を拂はせなければならぬ。て、代金を拂はせる段になつたら、どうせ女優は舞臺といふ妓樓に專屬してゐる私娼なのだから、紳士達の競爭の的に的となるやうに仕向けて、思ふさま甘い汁を吸ふがよろしい。但しここに注意がある。それは、舞臺と作者とは、世の常の婦人には迚も得られぬ美しい裝飾物を女優に供給し、又女優をば、精神上にも種々の美質を附與せられたるものに爲立てて呉れる、換言すれば、舞臺と作者とは女優にかゝる得難い武器を授けて市を開せ、顧客に代物を賣つけるのである。て、女優は劇場からかゝる恩惠を受てゐる以上は、劇場へも相當の税を納めるつもりで、給料の多寡などは氣にかけず、何でも座頭や監督の言ふなりになつて居なければならぬ。これはよく〳〵心得置くべき事である。

これがフレッグス女史の持說である。一寸聽きは、強ひて奇矯の言を弄してゐるやうに思へるが、女優生活を多年續けてゆくうちには、この中にも慥に眞理を見出すことがある。

この女に誘はれてヘレーネは、その劇場の俳優がとある小料理屋で日を定めてやる懇親會へ顏を出すやうになつた。この會へ出て見ると中々面白い。

普通一般の世間の人は、役者の後光の射す表面ばかり見て、その裏面に暗のあることを悟らぬ。が、これも無理の無いことだ、俳優社會では、日常の相互同士の交際にも、決して暗い側を語合ふことがないのだから。

「各自は、他人よりも心配が無ささうに、未來に榮ある希望を持つてるやうに、又呑氣に生活をしてゐるやうに見られたがる。つまり、實際以上に見られたいのである。これは全く、妾どもの日夜親しんでゐる舞臺が、かういふ風に敎へ込むのだ、舞臺といふやつは可笑しなもので、實際は麻布であり厚紙であり繪具であり膠てある癖に、外見は、野となり森となり石となり鐵となりたがるのである。

俳優の内幕を何も知らない素人が、妾どもの會合を傍から觀て居たら、妾達は揃ひも揃つて有福な生活をしてゐる、だから大威張であんな面白さうな會合の出來るのも無理はない、とかう思ひこむに違ひない。

俳優は人の前で、自分の困つた事や不愉快なことを話すのを嫌ふ。その席上で取交はされる談話は、さながら底淺き小川の水の如く、さら／＼と可愛い音を立てて心地よげに流れてゆく。彼等は好んで自分の過去現在未來を語るけれど、定つて、自分を偉く見せかけるやうな大袈裟なことばかり言ふ。どうかして、金に困つた話でも出れば、あの時にはこんな滑稽な事があつたといつた態に、總べて厭なことは忘れてしまつて面白い事ばかり口にする。

かういふと、役者は大變僞善家のやうに思はれるけれど、彼等が自分の經歷の明るい方面ばかりを人に語るのは、強ち人前を繕はうといふのではなく、それよりも實際、さういつた方面のみが、彼等の記憶には鮮かに殘つてるのである。苦勞を忘れ、面白い事ばかり覺えてゐること、これは慥に舞臺に生きる人間の憐しき特質である。若しも俳優にして、不愉快な事、酷い目に遇つた事なんかを忘れることが出來ず、又忘れやうとしなかつたならば、日がな一日快々して居なければならぬのはまだ宜いとしても、これで、どうして自分の仕事をやり遂げることが出來ようか。元來俳優の勤なるものは、

「或る一定の時に妾達に課せられる役目に適當しからぬ氣分なり感情なりは、一つ殘らず根こそぎ搔投ぐり棄てよと要求する、又一つの勤に召されるや、瞬間に

自分を棄て自分を忘れ、一圖に自分の扮する舞臺上の人になりきつてしまへと要求する。妾達が自分の仕事を手落なくやつて退けやうとするならば、妾達が日常生活で泥んでゐる知覺感情を其儘舞臺へ持つて上つてはいけないのである、これは無論の話なのだが、これを久しくやつてる間には終に慣習が性となつて、舞臺外の生活にも次第に之れを應用し、不知不識平素の感情を排斥するやうな傾を生じる。」

一事物に深く拘泥せぬこと――浮氣は役者の生命である。

役者は忙しい商賣である。殊に觀客の鼻息を窺つて新作ばかりを澤山演る劇場にゐる者は息を吻く暇も無い。試演試演で追ひ廻はされて、午後の三時になつても舞臺に立つてることも珍らしくない、腹はペコ／＼で身體は綿のやうになるが、舞臺監督の眼には涙は無い。新作を一週に一つづゝ演るとしても、兎に角其の劇場での上班の俳優となると、持役の臺詞の書抜もちつとやそつとの紙數ではない、それをすつかり暗誦してしまつて、さてそれからその人物へ自分の工夫で肉を附け血を通はせ最後に大切な魂を吹きこんで我が物とする迄には中々研究に骨が折れる。そこへ持つて來て週の眞中へ舊作が出ることにならうものなら、又そつち方の記憶を新しくするやらお浚ひをするやらで頭腦の中は大混雜。全體役者の頭腦の中にはどの位の物が蓄藏出來るものやら素人には夢にも想像がつくまい。

十五　操が大切なら

世間の娘は、舞臺の色と光との華やかさに憧れて女優を志願する。眞に藝術を愛する心から女優になつたと言ひ得る者は、十人の中に一人あるかなしであらう。彼等は舞臺の人となる當初に於て既に不用意である。元より彼等の若さで、自分の技能を考へ自分の天職を自覺し、飽く迄も一身を藝術に捧げようとの健氣な決心がつく筈もないが、さりとて單に美しい衣裳を着飾り觀客の喝采を博したいとばかりの目的で劇場に入つたなら、劇場の隅から隅まで行き渡つてる淫靡の風に、己一人染まさらんとするも豈得んやである。落花既に

情あり、崇拜者は立ちどころに彼女の門に集まる。

女優が情人を澤山持ッてゐればゐる程座頭は地藏顔となる。情人はその劇場の定連となり、自分の女優を誇らんが爲めに仲間を多勢引張ッて來て一番上等の觀覽席に陣取り、旺に花環を贈る。座頭は花て舞臺の景氣をつけて、脚本の缺點を「かくさう」とたくらむのだ。

ヘレーネの朋輩の中に、たッた一人、その土地に情人を持つてないのがあッた。座頭は頻りに骨を折つて、どうかして取持たうとしたけれど、この人他に操立てする筋があッて、いつかな頭を竪に振らぬ。が、からなると慘なものである。彼女の貰つてる二百七十五マルク(百三十五圓程)ばかりの給料が何の端にも足らぬのは前に述べたことて明白てある。彼女は、着物をこしらへたいばかりに顎を棚へ引懸けてるといつても好い位。晝飯には野菜料理屋へ二三十ペンニヒ(十錢か十五錢)拂つてばさばさの野菜か何かを喰べることもあるし、全然何も喰はぬことも珍らしくない、それて晩餐には、粘氣のなくなつたぼそ〳〵のパンと、乾酪か廉い腸詰を一片腹へ入れて置くだけてある。

「妾はその家へ往つたことがあるが、彼女は薄寒い部屋て一生懸命に裁縫をしてゐた。裁縫道具の傍には最近の持役の書拔があつた。裁縫をしながら讀んてるのだ。あれんばかりの給料ては、衣服を殘らず仕立屋へやることすら出來ないから、否ても自分も手を下さなければならぬ。彼女の部屋といふのは貧乏家の一室て小ッぽけて落着がわるくて、道具なんかも、あるといふ名ばかりだ。彼女はこんな生活をしてゐるために、色澤も惡く、元氣も何處かへ消え失せて居た。可哀相にこれてはいくら意志の强い女ても、やがては兜を脫がなければなるまい、饑飢は操よりどうしても力が强い。」

彼女も早晩何方からか喜捨を仰ぐか、さもなければ女優をやめて子守女にてもならずはなるまい。

十六　實　習？

座頭の中には、自分の劇場へ出勤する役者の顏觸の

屢々變るのを好むものがある。それは觀客の意を迎へる爲めでもあるが、女優の場合には、一つには自分の爲めでもある。

ヘレーネがある劇場へ傭はれた時のこと、初めて座頭へ出勤の挨拶にゆくと、座頭はヘレーネをつかまへてヘレーネの持役の話を長々とはじめた。持役といふのは、ズーデルマンの「ヨハネ祭の篝火」のマリッケである。久時すると座頭は、さも〳〵談話に身が入ッたやうな態をして、片方の腕をヘレーネの肩へ掛け、盤のやうな厭らしい眼を光らせながらヘレーネを密と自分の方へ引寄せて、

「貴孃にはマリッケの熱烈な戀をする心がしッかり解ッて居ないやうですね。何なら三幕目の濡場は、貴孃と二人で演つて見て置きたいと思ふんですがね。御足勞ですが、今日の午後に私の宅まで來て下さらんか。さうすれば、悠々茶でも飲みながら、貴孃の御不審の點を腑に落ちるやうに御話もしませうし、一つ試演もやッて見ませう」

ほざきもほざいたりな！かういふ座頭は、淫樂や肉慾の出て來る役を呑みこませるのを口實にして、水心のある女優に接近するのを慣用手段としてゐるものらしい。まア何と奇抜な巧い思付ではないか。

舊のヘレーネなら、こんな言をいはれれば蒼くなつて縮みあがるのであるが、今は此方もさる者、いかにも初心な何氣ない様子をして、

「はア、有難う存じますが、座頭様、わたくしマリッケの性格には解らない點は一つもございません。が、それよりか、あのウこの二週間うちにフォッスの『エヴ』、あの以前の戀人を突き殺しますあのエヴね、あれも演らなきやならないんですが、どうも私にはあの殺人をしようとする時の氣分が呑込めないンでございますの。いかゞで御座いませう、若し御指南が願へますなら、あの刃物を振廻すところを前以て實地にやらせて戴ければ、ほんとに嬉しう御座いますわ。」

と臆面もなく言ひ放つと、座頭は肩に掛けてた腕を稻妻のやうに引込ませて二三歩飛びのき、恨めしさう

にヘレーネの顔を見ながら「あなたは大分お悧巧なやうぢや。が、悧巧があなたの出世に祟をしなければよいが」といふのをヘレ・ネはすかさず「如何でございますかね。けども貴下も御自分がおつかひになる者は馬鹿より悧巧の方がお宜しいンで御座いませう！あゝさう／＼、忘れないうちに申上げて置きますが、あの、主筆のギヨッツ博士から貴下へどうぞ宜しくといふ御傳言でございました」とやり返した。

　復讐が怖ろしさに、ヘレーネは窮策を思ひついたのである。

　ギヨッツの名を聞くと、座頭は果して面喰つた。ギヨッツは豫てこの劇場に、給料が馬鹿にやすいとか、俳優が病氣に罹ると直に解傭するとか、座頭の意に從はぬ女優には一向好い役をつけないとか、種々の點で手酷い攻撃を加へたことが度々あつた位で、座頭の卑劣な性行を知りぬいてゐるから、ヘレーネにも色々爲になる注意を與へて置いたのであつた。ヘレーネは、自分がギヨッツと親しくしてゐる事、有力な新聞の保護の下に立つ事を仄めかして、暗々に座頭を嚇しつけた。座頭は、てッきりギヨッツをヘレーネの情人だと思つたに違ひない。

　ギヨッツとヘレーネ！

　今まで讀者には語る機會が無かつたが、その後ヘレーネのギヨッツを慕ふ心は日一日と強くなり、竟に彼に切ない胸の中をあかしたところが、ギヨッツも元よりヘレーネを憎からず思つてゐた矢先とて戀は忽ち成立し、ヘレーネはギヨッツに身體も心も任せてしまつたのである。それからといふもの、ギヨッツは陰に陽にヘレーネの利益を計り聲援をして居る。但し彼の身體には一種の怖るべき病根が潛んでゐるからといふので、正式にヘレーネを妻とすることはどうあつても承諾せぬ。これがやがて、ヘレーネがギヨッツを疎んじはじめた原因になる。

十七　火と煙

　女優に不品行は附屬物である。

「不品行の女優に於けるは、煙が火に從ふやうなもの

てある。大學の書生が友達を集めて大酒を飲むのゝ同じく、珈琲店の給仕女が朋輩の間で傍人の譏口をきくのと同じく、士官が同僚の面前で借金をするのと同じく、かの事は妾どもの社會では根ッから名譽を毀損する事柄ではない」

耽溺生活に於ては、俳優社會の者は他の社會と全く別種の規則を奉じてゐる。何の苦勞も知らずその日その日を送る飽食暖衣の素人の女、社會の習慣だとか、交際の條件だとか、兩性間の牆壁だとか、人前をつくらふとか、そんな事が役者にも通用するものと心得てる他界の人は、到底俳優の情味生活を理解することは出來ない。他の社會の女と女優とは、日常生活が根本からして違ふ。

「明けても暮れても情熱といふものに取圍まれてゐるのが妾達の職業である、仕事である。妾達が稽古をするにしても働くにしても、試演又は公演の晴の舞臺に立つにしても、さまざまな愛情の葛藤を研究し、それを我がものとし、それを模倣し、且つそれを公衆に演じて見せるのが妾達の商賈である。妾達は、日がな一日男の朋輩と共同生活をして、情話を取交はしたり痴態をしたり、此上も無い戀の幸や悲哀のどん底を言葉にあらはしたりしなければならぬ、又情の動くままに身も世も忘れ、演技を眞ならしめんためには味なこともやつて見ねばならぬ。素人の女は、社會の常規を逸するやうな感情や願望は强ひて押包みもし、口を緘みもせねばならぬ。が、妾達は職業上そんなことを口にし、力を籠めて説き、動もすれば大聲疾呼しなければならない。で、妾達が自分の演じる劇中の人物として爲たり感じたりすることは、次第に日常生活の中へ織込まれ、妾達の天職に心を打込む熱誠の度が强ければ强いほど、妾達が天職に要求せられて爲る動作や仕事は、愈々確實に舞臺外の實生活の中に習慣となつて現はれるのである。」

十八　鼻持ならぬ女客

解し難いのは世の中の所謂貴婦人なるものである。彼等口を開けば女優の無節操を云々し、自分達ばかり

が潔白な女の標本ぶッて、何ぞと云ふと女優を眼下に瞰下すけれど、失敬千萬な、ちつとは自分の内幕も明處へさらけ出して見せるがいい。

素人の女の鼻持ならぬことは、芝居へ這入つて見ればよく解る。立役者が何か華々しい役をやつた後、わけて騎士にても扮した後では、彼等は觀客中の所謂貞淑なる夫人令孃達から、附文を背負ひきれない程受取る、紅筆の匂ゆかしい雁の便は、束になつて木戸口の郵便函の中に鮨詰になつてる。ところで彼等婦人達は、男優は家にゐる時も矢張エグモントでありタッソーであると想像して、その偉い人に思を寄せるのだらうがいづくんぞ知らんそのエグモントやタッソーの眼から見れば、彼等は色情狂の女に過ぎず、陰では、若し女共が聞いたら恥かしくて顏が眞紅になるだらうと思はれるやうな惡口を浴せかけてる。但しかういふ女共に果して恥を知る心があるかどうか、これには大きな疑問符がつく。

嘗て或る人氣役者がある役を演つた後で、受取つた艶書を談話室で擇り分けてゐるのを見たことがある。少く見ても十二通ぐらゐは椅子の周圍の床の上に散らばッたやうだッたが、彼はその中から、何でも三通ばかりポケットの中へ捻ぢ込んで、その言草が好い。「この二三通は好ささうだが、餘の奴はからッきし駄目だ。この賣春婦めらを片端から對手にするにや助手を二三人も傭はなくッちや。」

芝居の女客については、も一つ面白い話がある。それはヘレーネの師匠である例のコンラードがヸインへ立つ御名殘狂言として、『ザラメアの判官』(カルデロン作)を演つた最終の晩の事。ヘレーネも彼の對手になッてイサベルの役を勤め、光の海色の海は滿場の觀客の大喝采にどよめき渡ッたのであッたが、殊にコンラードに對する女客の歡喜は有頂天に達し、喝采、涙、花束、花環、艶書、その他の細々した贈物は嵐の如くにコンラードの身邊へ集ッた。ところが、演伎が終ッてコンラードが劇場の外へ出ると、彼を崇拜してやまぬ無數の婦人客は犇々と木戸口に詰めかけてゐる。若

いのもある齡をとつたのもある、既婚者も居れば未婚者もゐる。この婦人達は何れも劇場の近處にあるコンラードの住宅まで彼を送らうとするのである。何しろ今夜がお名殘といふのだから、婦人連は何れも遣る瀬なささうに深い溜息を吐いてゐる、中には美しいハンケチへ顏を埋めてシク〳〵泣いてるのもあらうといふこれだけでも、傍で觀てゐると滑稽を通り越して狂氣染みてゐた。自宅へ歸りつくと、か程までの殊寵を一身にあつめたコンラードは、泣き悲しむ娘子軍の親兵をすげなくも振り棄てて遽しげに邸內へ入り、門扉をい、どんと閉ぢてしまつた。ところが、かく迄面目玉を踏みつぶされても、若しや可愛い男の後影をなりと窓の裏に拜むことが出來ようかと一縷の望を繫いて、多數の夫人令孃方は家の前を徘徊して居た。その光景はまるで起水のついた牝犬が澤山集まッて門內に繫がれてゐる一匹の牡犬を待伏してゐるやうだッたと、この顚末を殘らず見屆けたコンラードが、後でヘレーネに物語ッた。實に巧妙な比喩である。併しコンラードは至つて物堅い人で、婦人連に隨行されるのさへ好まなかッた位だから、とうとう堪へ兼ねて窓を開き、早く此處を退去げてくれ、さもなければ警察の力を借りると嚇したので、さしもの女軍も不性不承にボツ〳〵と往來を立去つたさうである。

「この人々は誰あらう。口を開けば妾達を輕蔑することに極めてる貞淑なる市民諸姉である。この種の婦人達が身體の中へ藏つてある蟲の喰ッた名譽心、こんなものを自分のと交換するのは私は眞平御免蒙ります」

十九　女優と結婚

「婚姻といふことは妾達の間では、ぐッと偉い者とずッと下廻りの者とだけがやれるものである。この連中は幾年も同一の劇場に踏止ッて居られるから。中途半端の者にとッては、婚姻は悲哀と負擔と桎梏と妨害とを齎らすばかりである。妾達芝居者の大半は、立派に妻子を養ひ子女に十分な敎育を施せるほどの金を持ッてない、妻は共稼をしなければ追つかぬ、とすると勢ひ家と子供は等閑にせられる譯である。又、定住は幸福

なる婚姻の一要素である。然るに俳優は、幾度――惡くすると一年一年に――彼等の居住地を變へねばならぬこと、諸處の劇場へ傭はれる爲めに、夫婦の共棲はどの位の間續くことであらうぞ。て、その夫婦別れをした曉に、別離が數年で濟めばまだしも、恐らくは永久に續くこともあるであらう。

「婚姻」といふ章は、俳優社會の文明史上、わけても傷ましき章の一つである。

舞臺の人は結婚してはいけない。それは俳優の經濟狀態と定住不能とが結婚に不都合であるばかりでなく俳優そのものも、少しの間劇場に關係して居ると、婚姻生活に不適當と思はれるやうな特質を得るに至るからである。彼等は情緒の恆性を失ひ家事を配慮する心がけを無くし、又、夫なり妻なりは個人的の嗜好や願望を主張する前にまづ婚姻によつて生ずる共同生活の要求する所を顧みなければならぬといふ信念をも無くなしてゐる。つまり、劇場にゐると、人間は皆な利己主義者になり、從つて夫たり妻たるに適しなくなるのだ。」

男女の俳優で、結婚する者も無いではないが、それによつて幸福な生涯を送るものは極めて罕である。結婚をする女優は、大抵上に述べたやうな理由で、覆水盆に還らぬ悲劇の主人公になる。

多くの女優は事實に於て結婚の樂を味ふ事が出來ない。併し乍ら女優も亦「女」である以上、自然は女優にも女たるべき資格を公平に賦與してゐる。既にその資格を備へて居りながら、その資格から生じる樂を享ける事が出來ぬとすればその結果や知るべきのみ。

憫むべきは、これも人類の一員たる女優の情的生活である。

廿　二千五百マルク

觀ずれば夢の浮世である。絲に操られる人形が一寸先の遠見もきかずして只管に手を舞はし足を動かすを徒に呆けたりと嗤ふこと勿れ、牧師の愛娘さへ嫉妬深い運命の手に弄ばれては、己が肉を鬻いで藝術に仕へてゐるではないか。二世を契らうとまで思詰めたギョ

ッツとの仲も、ヘレーネの薄情から次第次第に疎くなり、彼の異情こめた手紙に虚僞の答をするやうになッては、ヘレーネの心も荒み果て、怏々として日を送るところへ、圖らずも伯林の代理者から、ハンブルクの劇場へ三個年契約で出勤せぬか、給料は最初七百マルク（三百四十圓程）、といふ棚から牡丹餅の福音が舞ひこんだ。ヘレーネは飛び立つ思ひで、事の由を現在の劇場の座頭に告げ、自分の出世になることだからどうか次期の興行から暇を貰ひたいと頼んだ。が座頭は急には女優の補充が出來ぬとの口實で、酢だの蒟蒻だのとどうしても応と言はない。つまり座頭は美しい女優を手放すのが厭だからなので、他の劇場へ往かずとも此處にゐて出世の出來る手段があると、忌らしい事をほのめかすのが癪に觸ッて、ヘレーネは座頭を散々に罵倒した。

復讐は踵を接して現はれた。

座頭はヘレーネに宛てて、貴孃が此頃のやうにあんな流行遲れな見窄らしい衣裳を着て舞臺へ立たれては大變迷惑する。こんなことでは將來は第二流の役を勤めて貰はなくちやならないといふ意味の手紙を送り、それと一緒に、二人の貴婦人からの例の苦情の手紙を添へて寄越した。その内容は無論衣裳の惡口である。

けれどもこれは決して無理な註文ではない。前にも述べた通り、貴婦人逹は演伎を觀るのではなく、自分の衣服を見せびらかすのと、それから女優の新しい衣裳を觀るのとを目的として芝居へ來るのであるのに、ヘレーネはその興行には、他に氣を取られる事があって演伎の方がお留守になッてる上に、思ひきつて衣裳の節約をしたのだから、さういふ種類の觀客からも、亦劇評家からも苦情の出るのは道理至極である。

衣裳をこしらへるには金が要るし、金を借りるには抵當がなし。さればと云つて勤勉と技藝だけでは元より出世の出來るわけのものではない。

茲に先頃から、ヘレーネに慕ひ寄る男が一人ある。製薬會社の社長か何かをして居た人で、どうしたら自分の財産が減るだらうかと日夜首をひねッてる人であ

る、名はハッセと云ふ。ハッセは、前に「女優の浮世」の節て一寸引合に出して置いたあの俳優の小集へ缺かさず顏を出して頻にヘレーネの御機嫌を取ッてゐる。ヘレーネは元より彼に操をうることを手強く拒み、好い加減にあしらッてゐたが、彼はヘレーネのために種種心を碎き、いろんな心配に呵まれて彼女の容色の日増に衰へるのを氣遣つて郊外の散策を勸める。それからといふもの、毎日正午になると、眩しいやうな立派な空馬車が、ヘレーネの晝食をするレストーランへ來る、これは馬にも運動をさせるのだからといふ名義てハッセの邸から差廻はされるのてある。彼女はたゞ一人この馬車に乘つて、市外の新鮮な空氣を飽くまても吸ひに行く。定めし往來の人には、浮世を外に遊び暮らす富豪の愛孃とも見えるてあらう。

「貴孃は第一流の劇場へ出られる藝があると世間ても認め私もさう考へてる。が、若し金錢上の些細な心配なぞに氣を腐らせて折角の腕が磨けないやうては寔に殘念だ。」ハッセはこんなことを言つて、折もあらばヘレーネに物質上の助力をしようとする。

たとひ衣裳が惡かつたにせよ、失敗は失敗に相違ない、どうかしてこの不名譽を恢復したい。と思ふにつけても恨めしいのは衣裳てある。苟も神聖な藝術に仕へる者が區々たる衣裳なんかのために一喜一憂するとは腑甲斐ないとも思へるが、事實は動かすことが出來ない……から煩悶に煩悶を重ねてゐるところへ、次興行にはサルドゥーの『氣樂夫人』の女主人公を勤めることになつた。しかも役を貰ふとき舞臺監督長はヘレーネを呼んて、「あなたのこの前の失敗は何といふ態だ、あれて立役が勤まると思ふか。今度だけは私が座頭に頼んて此役を演らせてあげる事にしたが、若し今度も以前のやうな見若しい失敗を繰返すやうなら、次からは斷然端役の方へ廻すから、その覺悟て精々しッかりやッて吳れ」と申渡した。演れとなら、技は命懸けてやりもしようが、それ肝心の衣裳はどうする！「氣樂夫人」には、ヘレーネの從來持つてる衣裳はたゞの一つも役に立たぬ。「氣樂夫人」の衣裳とは何か――氣の

稍いた洗濯女の衣裳はまだ好いとして、流行の費をつくした公爵夫人の着る衣服が二三揃!!

若しこの衣裳の調達が出來なければ、ヘレーネの舞臺上の生命はまづ失はれるものと覺悟しなければならぬ(稿者曰、この劇の主人公氣樂夫人は洗濯女より一躍して公爵夫人となる)。

いよ〳〵ヘレーネの危機が到來した。彼女は少しても餘分の金を殘さうとして、衣裳の仕立直しも自分で針を持つ、食物は極端に倹約して、白銅一ッか二ッて晝飯を濟ますやうにした。が、腹が減つては戰爭が出來ぬ譬、そのためにヘレーネの顔色は惡くなり、身體は次第に瘦せ衰へて來る。

曾て師匠のコンラードは告別に臨んで、貴孃は早く女優をよして結婚なさい、老ぼれた女優がいつまでも舞臺にかぢりついてゐて若手に追ひ拔かれ追ひ拔かれする位悲慘なものはない、忘れても舞臺て老いるなと眞情から忠告した。それは、ヘレーネとても夫と定めて一人の男を專有して見たくない事もない、妹のアンナが平和な定庭の主婦として既に三人の子供の親であり老母が孫を甜めるやうに可愛がるのを見聞きしては、自分も女と生れた甲斐には我身の血と肉とを割いた嬰兒に玉の乳房を啣ませて見たいと、女優の境遇を抛らなく淋しいものに思ひなすこともある。けれども、あれ程堅固な決心をなし、あれほど遠大な抱負を以て新生涯に船出したものが、よしやそのために生命をなくなすやうなことがあらうとも、あれこそ世界の女優の花よと歌ひ囃されるやうにならぬ中に、一度や二度の艱難にへこ垂れて、怯々と古巣へ舵を返されようか。

この間の煩悶を記する、著者は尠からぬページを費してゐるが、手短に言へば、つまる處ヘレーネはかのハッセに身を任せ、一夜の報酬として、大枚二千五百マルク(千二百餘圓)を受取つたのである。

彼女はこの金て『氣樂夫人』の素晴らしい衣裳と、又その後にズーデルマンの『モリトゥリ』の女共の衣裳を調達し、それを着て破天荒の大芝居を打つた。これを觀て、舞臺監督も座頭も觀客も狂せんばかりに喝采し

劇評家は筆を揃へて、「ヘレーネ復活せり」と囃し立てた。

名譽恢復か墮落か。憫むべし、何事にも負けじ魂のヘレーネは、氣慨ある女優の意氣地から、竟に涙を呑んで操を金に代へたのである。

ハッセの指圖でヘレーネは先の下宿を去り、市中屈指の俳優合宿處へ引移つた。元より大金持が後楯なのだから、部屋も善美を盡した素晴らしいのを獨て三室も借切ッて堂々たる貴族的生活を送ることになつた。……此家に下宿してゐる女優は孰れもヘレーネと同じやうな境遇の者ばかりで、煩さき社會の束縛を受けず、せち辛き世の苦勞を知らず、戀のさざめ言！衣摺れの音！高貴の酒の香は四壁の中に永世の春をただよはせ給仕の小娘は翩々として胡蝶の如くに走せちがふ。謂ふべくばまことに之れ、現世からなる歡樂世界である。

ハッセは、市中の大商店の陳列窓の中にあるものでヘレーネに似合ひさうなもの、ヘレーネの喜びさうなものと見れば、衣類でも靴でも傘でも手套でも、純金だらうが寶石だらうが金に絲目をつけず手當り次第に買込んでは送り屆ける。その贈物の包は、一日に少くとも一個は來る。

女優は、よしや給料は少くとも、自分の覺悟一つで歡樂世界に住み得るのである。事實に於て一二千の獨逸女優はかくの如き生活を送つてゐる。怖ろしいことではないか、彼等は必要に迫られてかゝる生活を送らざるを得ないのである。社會は、政府は、議會は、昔からこれを目擊して居りながら、何故口を緘んで居るのだらうか。國立市立の劇場は、何れも夫々政府の手て經營し、私立劇場には嚴重な掣肘を加へ、愚劣な觀客から提出する女優の衣裳の要求は興行者の方で一切拒ねつける。かういふ事にてもすれば、女優の墮落を防ぐ事もさまでむづかしい事でもなからうかと思はれる。

因曰、ハッセとの關係は、ヘレーネがその都會にゐた間だけで、後は女の方から別の道になつてしまつた。

廿一　迫害

某市の劇場での出來事である。座頭は、丁度ヘレーネが演る筈の『蘇生の日』のイレーネの呼吸を教へるといふ口實の下に、彼女を自分の室へ連れ込んだ。この室は内でどんな大聲を出さうが決して外へは洩れないやうな仕掛けになつてゐる。室の内へ踏み込むや、狒々のやうな座頭は、矢場にヘレーネを眞向から羽掻いじめにして土耳古風の長椅子の上へ遮二無に押倒しあはや手ごめに及ばうとした。この不埒な所業に遇つて怒氣心頭に發したヘレーネは、自分ながら驚く程の力で跳ね返りさまに座頭を長椅子の端へ突轉ばした。座頭は少時は呆氣にとられて口も利けなかつたが、やがて薄氣味の悪い笑を洩らしながら、あなたはイヤに體裁振つてる、その齡になッてまだ男を知らないのかと言ふ。と、ヘレーネも喧嘩腰で、妾をそんな未央な處女と思つてるのか、人と見て物を言ふがいゝ、だけど貴下のやうなイケ好かない男に摘喰される程耄碌はしないと啖呵を切る。流石の座頭も、女優からこんなに遣つゝけられたのは、臍の緒切つて以來の初經驗であッたであらう、彼は眼を廻はさぬばかりに驚愕仰天してゐたが、やがて「お前が俺の言ふことをきかなきや此方にも覺悟がある。どうするか見ろ」と、凄い捨臺詞を浴せかける。

座頭の魂消たのも無理はない。女優にとつては、座頭は萬能の神である。苟且にもこの神様の逆鱗に觸れたが最後、女優の前途を照す光明は永久に消えてしまふ、藝のある女優を殺すのも無能の女優を生かすのも座頭の心一つである。この權力を利用して、獸にも劣る座頭は自分の劇場へ舞ひ込んで來る美しい女優を五指の如くに好き自由にする。が、女優の身の悲しさには、何をされても何處へも訴へることも出來ぬ。たとひ女優と雖、權利の主體たることに於ては彼座頭と等しかるべき筈である。この人權の蹂躙に對して、何故社會は默してゐるのか、何故政府は目を瞑つてゐるのか。文明と野蠻とが常に相提携して進む世の中に、憫むべきは女優ではある。

背鐵砲の御禮が來た。

その翌日試演に出かけると、こはいかに、イレーネの役は取上げられて、その代りに素人にても出來るやうな無言役の看護婦を勤める事になつた。これは勿論い丶役者のやる役ではない。この時の舞臺監督になつた某男優は事の原因を推察してゐるので、ヘレーネにいたく同情を寄せ、「凡そ世の中に獨逸の俳優ぐらゐ權利もなく保護もなく名譽などは藥にしたくもなく、おまけに年が年中飢餓に追廻はされてる者はあるまい、が、目下の形勢ではどうも致方がない。今度の事も誠に殘念だが、どうか事を荒立てずに溫順しく新しい役をやッて吳れ、その方が却つて將來のためによからう」と、頻りに慰めた。やがて時間が來て試演の舞臺へ往くと、舞臺監督は俳優一同に向つて、都合によつてヘレーネの役が急に變つた事を告げた。が、見ると座頭の祕書役(これは間諜だが)が樣子を窺つてるのが眼に這入つたので、ヘレーネは癇の蟲がムク／＼と首を擡上げ、監督の詞尻を引取つて、「皆樣、昨日私は座頭の御懇望て、座頭から持役のイレーネのお話を承る筈てございましたが、御對面の結果、座頭はすッかり御機嫌を損はれまして、私はとう／＼あの役を奪られることになりました。これだけ申上げれば、この劇場の內幕を知つてらッしやる皆樣には、事情は十分お解りになるだらうと存じます」と附加へた。と、方々からくッ、くッと意地の惡い含み笑が聞えたばかりであッたが、ふと後の方で、「あンな助平爺なんざイヤッといふ程打擲つてやるがい丶」、と遠雷の轟くやうな聲が聞えた。

迫害は愈〻甚しく、何時まで待つても海路の日和が來さうもない。座頭の意恨はいつになッたら解けるのか薩張見當がつかない。困ッた事になつたものである。かうやつて何時までもこんな愚にもつかぬ端役を勤めて居た日には、腕の振ひ場が無いから、觀客や劇評家からは存在を認められなくなッてしまふ。それに第一これては自分の研究も出來ない事になる、役者は書齋て空威張をしたつて駄目である、本ばかり讀んでたつて、舞臺の上で實地に演る機會が無くッちや河童が旱に會ッたやうなものだ。又、期限の切れる迄この儘て

ここにおッとしてゐちや、無能と認められて、この次には何處の劇場でも傭ひ手がなくなるのは知れきッてる。かと云ッて、契約期間内にこの劇場を遁げ出す事は猶更出來ぬ。といふのは、ヘレーネが出勤する位の兎に角名のある劇場は何れも劇場組合に加入してゐてその組合には、俳優にして出勤期限の契約を破ッたものは向十個年間何處の劇場でも傭はないといふ嚴重な規約が設けてあるから、そんなことをしようものなら、それこそ舞臺的生命は全く絶えるものと覺悟しなければならない。

この難關を切拔けて、再び華やかな立役を演じようさうして段々出世しようとするには、採るべき手段はたつた一つしか無い。それは――座頭の狒々爺の前に前非(?)を悔いて兜を脱ぐことである。なんと情ない事であらう。出世のためとならばこれも已むを得ないとは云ふものゝ、何ぼ何でも餘り心外で、考へれば考へる程口惜し涙が夕立のやうに流れる。
弱き者よ、汝の名は「女」である。

廿二 恩人

ヘレーネが、身の不幸を歎き、煩悶に煩悶を重ねて謂はゞ泣くにも泣けず死ぬにも死なれぬ四苦八苦の最中に折よくも天降つたのは、この稿の初『女教師』の節でちよいと紹介して置いたかのゼングニッツ男爵である。彼はその頃同市の聯隊へ轉任して居て、ヘレーネとも近付になり、同僚と一緒によくその劇場へも見物に往つたものだが、既に新聞にも出て居たヘレーネの華々しい持役が遽に變更せられて、下らぬ役をすることとになつたのを不審に思つて居た矢先へ、或る日、當人から直接に、例の座頭の凌辱事件を聞かされた。ゼングニッツは、生れつき義俠心の強い人なので、それを聞くと烈火のやうに憤つて直樣劇場へ赴き、座頭に面會して直接談判を開いた。で、何處までも男爵の威光で嚇しつけ、恐悃々々いふと市長へ訴へると敦圍いて、物の十分ばかりの中に苦もなく座頭を抑へつけ、ヘレーネに元々の定どほりイレーネを勤めさせる契約を結んでしまッた。

ヘレーネは甦つた。彼女の舞臺的生命は男爵によつて救はれたのである。……その後男爵はヘレーネの杖とも柱ともなり、衣裳その他の莫大な費用も悉皆彼の手から支出せられることになつた。

ヘレーネは、かねて男らしい氣象のゼングニッツを賴もしく思つてゐたところへ、かくの如き再生の恩を施されたので、この謝恩の念が動機となつてゼングニッツに熱烈な戀をする事になる。この頃は、例のギヨッツとの仲は全く絶えてゐる。

又ゼングニッツの方は、初めは、ヘレーネを愛するなんていふことは夢にも思はなかつたのだが、元來この人は、祖父や父が放蕩三昧の結果家產を根こそぎつかひ果し、竟に祖先傳來の故郷の家屋敷をさへ人手に渡さねばならぬ破目になつたのを深く悲しんで、せめてこれだけは子孫へ傳へたいとの健氣な決心から自分の一身を全く犧牲にして猶太の富豪の娘を娶つた人で夫人には結婚の當初から毫も愛情を捧げてゐないのとそれにも一つは、夫人との間に生れた二人の娘が純粹の獨逸人の血ばかりを受けてゐないのを苦にするのと——寧ろこの後者が强い動機となつて、竟にヘレーネを妾とし、到頭女優をやめさせてしまつた。

ゼングニッツとヘレーネとの間の物語は、六七十ページも費して大變詳しく書いてあり、その中に、ヘレーネが女優をやめるについての大きな煩悶も縷々叙述してあるが、結局彼女はゼングニッツ男爵の切なる願を容れ、彼の爲めに玉の如き世嗣の男の子を擧げて、今は男爵の別莊なるマグダレーネンホーフに悠々たる生涯を送つて居る。

（完結）

（因曰。此紹介は筆者の目的に適ふ部分だけを書いたので、全篇の梗概を書いた譯ではない。又此「日記」は單に女優の内幕を暴露して世の識者の反省を促したといふ所謂實用的方面を眼中に置かず、一個の文藝的作品として觀ても、相應の價値があるものだと思ふ。ギヨッツとの戀物語の如き、又其他の叙述にも女性的の精細な心理描寫を試みてある所に言ひ知れぬ面白味がある。）

地方長官の大更迭と其政治的色彩

鐵拳禪

【一】

◉内閣の更迭する毎に、地方長官に多少の異動を見るの例なりしが、近年著しく其の馘首率の增進を示せり。加之、其の轉免休職のやりくち極めて露骨にして、漸く政黨的色彩を帶び來れるは、又從來と其の趣を異にせり。

◉地方長官の一黨一派と聲息を通じ、選擧に干涉し、若しくは反對派を抑壓せるは、敢て今日に始まれるに非ず、藩閥政府の内相たりし品川以來の現象也。往年は藩閥と握手することの官界游泳に安心なりしが、時勢の推移と共に、政黨にも好意を表せざるべからざるに至れるの結果にして、唯形を變へたるに過ぎず。

◉憲政黨内閣の際、地方長官に多くの黨人を採用せしが、其の後文官任用令の改正となりて其の事なきに至り、高等文官の資格を有する官階漸進者のみに限られたり。されば其の更迭の如きも、各省次官等に地方長官中の傑物を拔き、そが補充の爲めの異動に外ならざりき。

◉然るに、第一次政友會内閣成るに及び、地方長官の更迭に例の補充以外に、幾分の黨略を加味せり。第二次の際には、更に一層之を加味せしかば、官界游泳業者は所謂藩閥及び黨閥の二大分野を劃し、一黨一派の爲めに利用せられ、或は縣治上に利用すること甚しきを致せり。

◉是に於てか地方の牧民官は、民を牧せずして一黨一派の利益擁護者となり、黨勢擴張の狂奔者となり、以て己れの地位の安全を圖るに至れり。黨閥の内相原の如きは情弊百出の張本人にして、之と對抗する者は藩

閥の内相大浦也。此の二人者の爲めに、地方長官の馘首率は增進せる也。

◉昨年末の藩閥內閣は、補充以外の意味を以て、黨閥臭味の徒を斥け、自家系統の頭腦を羅列せり。今次の苟合內閣は、又前內閣に報復するの態度に出て、組織の當初は補充の爲めに一道長官並に三縣の知事を更迭し、次て四縣知事の轉免を試み、更に行政整理に伴ふ老朽淘汰の意味にて十五縣知事の大更迭を斷行せり。以前は世間を憚りて容易に嫁をいびり出さゞりし舅姑の、怒心頭より發して理不盡に追ひ出せるにも似たり。

◉既に老朽淘汰と稱する以上、縣治の成績より見て其の有能無能を判別し、情實を以てするを許さゞる也。單に老齡、禿頭、白髮の表面觀にのみ止まらず、其の實質をも洞察して、老朽と共に若朽をも斥けざるべからず。又迎合の巧拙對黨派の忠不忠を標準とせず、牧民の手腕、人格の優劣を以てせざるべからず。今回の大更迭は一見公平なるが如きも、內實は黨派系統の關係、迎合の巧拙を主とし、老朽淘汰を從とせり。

◉現下政友會は『我黨の內閣』を以て得々たるも、黨勢を支持するに就ては多大の苦痛あり。國民及び政俱の二派は憲政擁護の鋭を提げ、新政黨は黨勢擴張の聲を擧げ、以て腹背より攻擊し來るが故に、地盤擁護の策を講ぜざるべからず。內相原は、一面此の黨略上より、自黨に不利なる地方長官を馘首し、黨勢緊張の資に供せり。

◉されば今回の老朽淘汰に於て、最も打擊を被れるは大浦系也。老朽無能の者の葬られたるは、現內閣の手を待たず自然に葬らるべき命數なるも、有爲の新人物にして馘首せられたる者なきに非ず。薩派に緣あるは蘇生し、政友會の忠僕は榮轉し、山海不明の兩棲類は試驗期までの命脈を取り留めたり。以て一方に情實的任免の深酷を極むると同時に、他方に公平の餘裕を示し、懷柔の一途を存せるを見るべき也。

◉或は地方長官の異動を以て、地方自治の發達上不祥の現象となすも、流るゝ水の濁れるは、溜り水の腐れたるに優れり。沈滯して情弊を釀さんよりは、流動し

て一脈の新を加ふるに若かず。地方長官の異動は、縣治上に幾分の革新を與へ、腐敗せる空氣を排除するに多少の效あり。

◉地方自治の名は美なりと雖も、其の長官は官選也。今日の如き内閣の下にありては、長官は地方自治の發達を圖るの前、先づ内相の器械たらざるべからず。更に黨利の機關たらざるべからず。斯の如き器械、斯の如き機關を長く据ゑ置くは、却て地方自治の發達を阻礙するもの也。内閣の更迭毎に、少しにても善良なる器械々据ゑ替ふるを可とす。

◉地方長官の更迭を、或は情實により、或は黨爭によるは、固より好ましからざるも、惡性の機關を永久に据ゑ置くに優る萬々也。彼等地方長官の縣治は、殆んど自己本位にして、或は虚名の爲めに、或は地位の爲めに、或は私利の爲めに試み、一片の誠意の認むべき者あらず。其の手腕を揮ふと云ふと雖も、偶ま以て將來の拔擢を僥倖するに過ぎず。

◉今日、良二千石の拂底せるは、藩閥又は黨閥の器械となり了せるに由る。彼等にして毅然として操守する所あり、地方の休戚を念頭に置き、民意に從ひて政を行はば、地方自治の發達期し難きに非ず。寧ろ此の點より見る時は、地方制度の改善を斷行し、以て根本的淘汰をなすに若かざる也。

◉地方制度の改善、今急に行はれずとせば、其の長官の人物性行を嚴に銓衡せざるべからず。内相原の如き、之を知らざる程の馬鹿に非ずと雖も、背に腹はかへられず、屢〻姑息の更迭を繰返して歇む。地方自治の振はざる、一日の故に非ず。

〔二〕

◉苟合内閣の成立は二月二十日にして、其の後の四日間は次官の更迭を試み、二十六日に至りて始めて知事に一指を染め、鳥取の岡喜七郎を警保局長に拔擢せる補充として、休職滋賀の川島純幹を復職せしめたり。是れ内相原の、大浦に報復する筋書の序幕也。

◉翌二十七日には、北海の山之内一次を内閣翰長に拔擢せる補充として、廣島の中村純九郎を轉任せしめ、

宮城の寺田祐之を廣島に移し、休職新潟の森正隆を起して其の後任となせり。

◉越えて三月四日に至りて、再び報復的更迭は行はれ、休職長崎の安藤謙介を起して新潟に封じ、法博松井茂(静岡)を愛知に、笠井信一(巖手)を静岡に轉任せしめ、新に香川事務官の堤定次郎を岩手縣に拔擢せり。而して、清浦系の頑固者伊澤多喜男(新潟)、名詮自稱の硬骨漢石原健三を馘首し了れり。

◉一長官七知縣の中、大半は赤門出身に非ず。中村及び川島は頭腦古きながらに、尚幾許の將來なきに非ざるも、寺田に至つては人格下劣にして地方自治の何たるを解せず。之を宮城より廣島に移して、古物保存を敢てせるは、事淘汰以前に屬すと雖も、内相原の明を疑はざるを得ず。

◉寺田の宮城に殘せるは、多少の艶聞と鄙吝貪慾の噂とのみ。郡村を視察するに王侯の威儀を整へ、到る處の招待會に鼓腹し、空壜までも旅行鞄に收めて歸家するの一事、最も縣民の指彈する所となれり。縣治の見るべきものある筈なく、唯政友會と不即不離の關係を保てるが故に、纔かに事無きを得たるのみ。

◉森は變物也。感情家也。忠臣藏の芝居を見て、聲を忍びて泣くほどの男也。誰知らぬものなき政友會贔屓にして、曾て茨城縣民の惡感を買ひ、秋田に左遷されたることあり。手腕の稱すべきものあるも、往々突飛なる事を敢てするを以て、部下の信望を失する事なしとせず。

◉森は寺田と正反對にて、郡村視察の如きは突如單身にて赴き、招待の盛宴に列するを避くるの風あり。荒療治は最も森の得意とする所、創業の頭腦ありて守成の才幹なきは斯の人の短所也。宮城は今後事業及び財政の整理をなすの期に際し、能く之を斷じて治績を擧げ得るや疑問とせざるを得ず。

◉安藤は元檢事正、原系吏僚中の巨頭也。二たび斥けられて二たび救はれ、常に一等縣の知事たり。彼れは森の如き變物に非ず、鋭利的手腕の、吏務よりも勝れたる男也。されば、彼れは事業界に頭を突ッ込み、前

官の權威を利用し、市井の徒と結託して飛躍を試みしは世人の知る所也。

◉新潟は由來難治の縣也。事業の國也。安藤の人格を以て、政爭を緩和すること難かるべきも、事業家と握手せんには好都合也。然れども、此の好都合は、却て彼れが破滅の因をなすやも測られず。松井は學才識見ありと雖も、快刀亂麻を斷つの手腕の人に非ず。柔性の名古屋を治むるに、斯の人を以てせるは、偶ま銓衡者の粹氣を見るに足る。

◉政友系の千葉（長野）の逝くや、後任として擧げられたるは、休職群馬の依田銈次郎也。彼れは明治大學の出、千葉に劣らぬ政友會贔屓にして、犬馬の勞を惜まざる人也。之を政爭激甚の長野に配置せるは、蓋し大に意味あり。

〔三〕

◉川島は奥田系にして、元來政友會と惡しからず。六月一日の大更迭に際し、大浦系の告森良（千葉）、日比重明（沖繩）の高等官一等に陞叙して罷免せられたるに、彼れ獨り陞叙の恩典に浴し、而も風浪を避けたる所以のもの、情實灣內の寵入者なれば也。

◉川路利恭（福岡）、大山綱昌（岡山）等は、告森、日比の徒と共に、大浦系の老朽者を以て目せられたれば、其の免官は當然也。薄定吉（岐阜）壯朽、黑金泰義（群馬）は無能にして知縣の器に非ざるも、武田千代三郎（青森）、熊谷喜一郎（山梨）、上山滿之進（熊本）、西久保弘道（福島）、昌谷彰（大分）等の斥けられたるは異樣の感なくんば非ず。

◉熊谷は俊才、上山は手腕家、武田は突飛なること森に劣らず。何れも長州出身にして、藩閥臭味の徒なるも、知縣の器としては寧ろ群を拔けり。昌谷、黑金の二人者は、大浦に拔擢されたる少壯者。西久保に至つては才人に非ずして豪傑、三十貫の巨軀、智慧が總身に廻り兼ねたるの憾あるも、操守すること固く、福島の縣治見るべきものあり。新任の才人、兼美顏家太田政弘とは、全く別個の性格を有す。

◉今其の人物の如何を問はず、單に之を政爭上より觀

察する時は、其の色彩截然と分明し來る。見よ、宮城、福島、熊本、福岡、高知、埼玉、鳥取は新政黨の既に築き、或は築かんとする地盤也。岡山は國民黨の根據地也。岐阜、千葉は政倶の勢力を扶植せんとするの地也。而して、西久保及び薄の政友會に聽かざるが爲めに黜られたる、青森の新政黨所屬代議士淸水隆德と骨肉なるが故に淘汰されたる、又這般の消息を語るものに非ずや。

◉今回新任の人物中、最も政界の目を聳てしむるは、川口彦治の大分に封ぜられたること是れ也。大分は現遞相元田の選擧區にして、政友會及び新政黨の混戰地也。彼れは曾て同縣事務官たりし時、故千葉貞幹を援けて政友系に加擔し、遂に愛知に追はれたるもの。今や再び知事として大分に臨む、政爭の劇甚を致すこと知るべき也。

◉事務官より陞任せる新顏は、川口の外、大芝惣吉（群馬）、折原己一郎（奈良）、添田敬一郎（埼玉）、永井金次郎（高知）等あり。大芝は西久保の下に事務官たりしも、政友系と握手せるの結果、政爭地たる群馬に拔擢されたる也。永井は私學出身の敏腕家、難治の縣たる高知に差向けられたるに見て、政友會腹心の徒たること疑を容れず。

◉折原は、手腕を有するも、醜聞の人也。一たび囹圄に呻吟し、信望に於て大に缺くる所あり。人材登用と云ふと雖も、斯の如きは人選を得たりと稱すべからず。名は老朽淘汰なりと雖も、政友會及び薩派の匙加減なること蔽ふべからざる事實也。

◉薩派の出には、福井の香川輝、沖繩の高橋琢也、熊本の赤星典太等あり。香川は、伯寺内に斥けられたる朝鮮長官也。曾て香川縣に知事たりし時、進步黨を抑壓して自由黨を助け、爾後惡緣を結べる也。一時鈴久の番頭となりて衣食し、今回端なく救ひ上げられたるも、老朽を如何ともする能はず。唯些少にても取るべき所ありとせば、それは一種の性格のみ。

◉高橋は山縣系の人、老朽の點に於て香川の上に出づ、山林局長を退くの後、青森に店を張りて材木業を營み、

人格に非難あり。赤星は清浦系の人、行政裁判所評定官より抜き來りて熊本の要地に据ゑたる、何等かの魂膽あるべしと揣摩せらる。裁判官として秀才の稱あるも、牧民官として幾許の實績を擧げ得るかは疑問也。

◉小橋一太の地方局長に轉じ、湯淺倉平の岡山に追はれたるは、一種の對照也。前者は肥後産の曖昧派、後者は清浦系の人也。共に學閥の新人物を以て目せられ、壯年行政官として出色の稱あり。小橋の敏捷にして事務の才ある、湯淺の剛直にして周到の才ある、手腕力量恰好の取組たるを失はず。

◉岐阜に移されたる島田剛太郎は、精力主義の猛者也。大林區署長より府事務官に轉じ、陞進稍々儕輩より後れたり。手腕なきに非ざるも、多年埼玉縣民會に排斥せられたるは、餘りに政爭緩和に無頓著なりしに由る。若林賚藏も亦前任地奈良の縣民の非難を受けしが、山梨に轉じたり。豪放にして司法的材能に富める、何程か故龜井に髣髴す。

◉南弘の出てて福岡に赴ける、池松時和の千葉に移されたる、田中武雄の青森に拔擢せられたる、なほ幾分の政治的色彩を帶ぶるを見る、千葉は告森の前任地、比較的非難なき池松を以てせるは、當を得たりとすべく。新政黨の飛躍せんとする福岡に、當年の花形南の手腕を試み。新進の田中をして青森を守らしめたるは、又興味なしとせず。

〔四〕

◉前内閣に更迭せられ、今回其の地位を動かされざる者、二府七縣あり。動かされたるもの、二縣あり。動かされざるに政友系あり、薩派あり。大浦系と目すべきもの、又無きに非ず。然れども、免がれたるは、免がれ得るだけの事情あり、關係あり。其の之なきは就任の日尚淺きと否とに拘はらず、電光頭上に一閃せり。馘首せられたる山上、黒金等の純大浦系なるを見るも明か也。

◉前内閣の時、新任に俵孫一あり。事務官より陞任せるもの、黒金の外、岡田宇之助(茨城)、佐柳藤太(滋賀)、深町鍊太郎(愛媛)の三人あり。而して岡田は愛媛

より、佐柳は福岡よりせる者、政友會に好意を表せりと見るべき理由あり。彼等は大芝、田中、永井と同じく中央大學の出身にして文相奥田と師弟の關係あれば也。そは兎も角、今回の更迭に際し、奥田系の漸く勢力を得來れるは注目に値す。

◉東京の宗像政は、憲政黨内閣以來の居殘知事也。曾て壇の浦知事と嗤はれ、變節漢と嘲けられたるも、藩閥に媚附して今日に至れる者。當然首になる筈の所、内相原と私的關係あり、且東京博覽會の經營を控へ居るに由りて、纔かに免がれたり。

◉大久保利武(大阪)は、外相牧野の實弟也。其の無能は官界の定評なるも、薩派なるが故に颶風圏外に立てり。阪仲輔(石川)は創意の人、事を構ふるの嫌なきに非ざるも、難關を突破するに妙を得たり。

◉阪は學閥に負ふ所なきも、長州の出身也。少時服部一三の食客となり、高商に學びしも、校長排斥を試みて除名せられ、後高等文官に登第せり。内務祕書官時代は總監大浦と提携して省内を切り捲り、愛知縣書記官時代は知事深野を助けて町村分合を斷行し、嶄然頭角を拔くに至れり。學識、元氣併せ備へて、而も如才なき行政振りを見する所、好個の知縣たるを失はず。

〔五〕

◉如上は、昨年五月一日『職員錄』調製後、異動せる所の地方長官也。滿一個年間に、三十有餘の異動は、決して平穩なる政界の現象に非ず。地方自治の如きも亦斯の如く動搖するは、勢免がる可からざる所也。

◉往年白根專一、安場保和、松平正直等の知事たりし時、内相に拮抗して下らず、内相と雖も容易に其の地位を動かし難きものありて、知事の價値を認められたり。然るに、今日の相場は大に下落し、人物も亦吏僚の毛の生ひたる者に過ぎず。

◉現制度にありて、知事は政務官に非ずして一個の事務官也。高等文官試驗及第者の屬官となり、事務官となり、次て知事に進級せるもの也。所謂制度の鋏を以て切り揃へられたる、行政官の並木也。偶ま傑出するもの無きに非ざるも、吏僚の器にして大官的人物を以

て推すべからず。人物の日々に下降する、又止むを得ざる也。

●古參知縣中の人物は、大森鐘一(京都)及び服部一三(兵庫)の二人者也。彼等は並木制度以前の知事、學閥の出に非ざること論なし。大森は頭腦冷靜、能く行ひ能く斷ずれども、餘りに多角形にして融通の利かざる點あり。内相に媚びず、毅然として持する所あるも、齡漸く衰境に入り、明日の人に非ず。退官は最早免がれざるの數也。

●服部は、なほ活動舞臺面の人たりと雖も、既に片足を淘汰圈内に踏み入れたるの觀あり。識見抱負夐かに並木線上に出て、外交官たるも優に大使たり得べしとの許あるも、今後に疑問を保留するの人物に非ず。大森は明年行はるべき即位大典に關係ある共進會其他の事務取扱上、退隱を延期せられ。服部は勇退を欲せずして、其の儘となれり。事情斯の如くなれば、此の二人者は遠からず勅選議員たるべき運命を有す。

●平岡定太郎(樺太)は、才氣縱橫なるも、輕薄淺慮、斷じて俗吏以上の器に非ず。彼れは巧みに内相原に慇懃なり、自ら其の乾兒を以て任じ、島利を以て黨利を謀りたること尠からず。今後彼れは其の夫人の虛榮を滿足せしむる程の榮達をなせりとするも、人格に對する非難は到底免がれざるべし。或は平岡を以て、滿鐵總裁に擬する者あれども、其の器に非ざるは過去の經歷之を證して餘あり。

●臺灣に失脚して、神奈川に拾はれたる大島久滿次は、平岡の俗臭なく、朋黨吸引の魔力あり。男後藤配下の警務總長より一躍して民政長官となりたるも、其の覇氣と野心とに驅られて後藤系排斥を畫策し、款を政友會に通じたるの結果散々の不始末を演出し、遂に逐はれたる也。川村竹治(和歌山)は大島の乾兒、當時の內務局長たり。

●學閥の馬淵鋭太郎(山形)、有吉忠一(宮崎)、李家隆介(長崎)、谷口留五郎(鹿兒島)等は、鐵中の錚々たる者也。有吉は才氣膽略二つながら之を有し、機鋒辛辣なるも德望に缺くる所あり。李家は石川以來手腕を揮

ひ、多少官界の注目を惹きしも、幾分脱線の氣味あり。馬淵は三年不鳴不蜚、平凡の軌道を歩めるに似たり。

◉谷口は明治二十三年の卒業にして、其の同窓に知名の人物尠からず。今之を列擧すれば、前文相柴田あり。鐵總裁床次あり。前次官石井、現次官小山、橋本あり。内閣翰長山之内、民政長官白仁、公使伊集院、專賣長官櫻井あり。其他井上辰九郎、石塚英藏、山田新一郎、秋山雅之允、藤田虎力、吉井友兄、秋山定輔等あり。而して、彼れと同窓にして同僚たる者、前に岡澤あり。現に島剛及び李家あり。官界立身の標準より見れば、彼れも亦其の線上にある一個の星たるを失はず。

◉鹿子木小五郎(香川)は平凡多奇なく、秦豐助(秋田)は駄目也。弊臭の未だ脱し難くして、良質を發揮せざるもの、濱田恒之助(富山)、岡田文次(栃木)の徒あり。其他、高岡直吉(島根)、渡邊融(山口)、不破彦麿(佐賀)、渡邊勝三郎(德島)等の新進あり舊進あり、有能あり無能あり。眞に系統に拘泥せず、私的關係を絶ち、高處より觀る時は、淘汰を要すべきもの又尠しとせず。

◉要するに、今回の老朽淘汰、新進拔擢は、或度まで其の實を擧げ、一見公平なるが如きも、常識を以て觀れば不公平なりと云はざるを得ず。第一、所謂大浦系に甚だ酷也。殆んど其の人物如何を問はずして馘首せり。第二、原系乃至薩派に屬する者は、老朽無能の者をも庇護し。或は拔擢せり。第三、私的關係、情實の連鎖によりて、罷免を躊躇せり。是れ眞に、地方行政を刷新せんが爲めの更迭と見るべからざるの證也。

◉斯くて現任知事中に、大浦系は殆んど隻影を留めず公桂及び男後藤の一派も枝葉悉く伐られたるの觀あるに拘はらず、山縣系は免がれ、清浦系は手心を加へられ、穩健なる者のみ存置せられたり。之を以て、直ちに伯山本と公山縣との接近を云々するは早計なるも、多少の臭味は認められざるに非ず。

◉行政整理の不完全ながらも一段落を告げ、文官任用令の改正は曲りなりにも決行せらるべく、然る後に政友會の地方に飛躍すべきは疑を容れず。既に地方長官の更迭を行ひたるを以て、政戰に都合よきは勿論也。而して一方には薩派の蘇生するあり、奥田系の衙進するあり。政治的色彩の益々濃厚、彌々豐麗になり行くを見る。

◉吾人は、地方長官更迭を背景とせる、政戰に興味を有す。興味を有するが故に、老朽淘汰の名に由つて成されたる大更迭の、甚だあきたらなさを感ず。苟も政

黨內閣本位を以て、地方長官の更迭を斷行する場合は、なほ一層の辛辣を加味するを要す。姑息の刷新、情實の更迭は、却て地方自治の發達を危うする者ならずんば非ず。（六月十三日稿）

〔備考〕

府縣名	西園寺內閣（昨年五月）	桂內閣（昨年十二月）	山本內閣
北海道	石原健三（轉）	山之內一次（轉）	△中村純九郎
樺太	平岡定太郎	―	―
東京	△阿部浩（休）	△宗像政	―
京都	△大森鐘一	―	―
大阪	犬塚勝太郎（轉）	大久保利武	―
神奈川	大島久滿次	―	―
兵庫	△服部一三	―	―
長崎	△安藤謙介（休）	李家隆介	―
新潟	森正隆（休）	伊澤多喜男（休）	△安藤謙介
埼玉	島田剛太郎	―（轉）	添田敬一郎
群馬	△依田銈次郎（休）	黑金泰義（休）	○大芝惣吉
千葉	△告森良	―（免）	池松時和
茨城	○阪仲輔（轉）	○岡田宇之助	―
栃木	岡田文次	―	―
奈良	若林賚藏	―（轉）	折原己一郎
三重	久保田政周（轉）	俵孫一	―
愛知	△深野一三（休）	石原健三（休）	松井茂
靜岡	松井茂	―（轉）	笠井信一
山梨	熊谷喜一郎	―（休）	若林賚藏
滋賀	△川島純幹（休）	○佐柳藤太	―
岐阜	薄定吉	―（免）	島田剛太郎
長野	△千葉貞幹	―（死亡）	△依田銈次郎
宮城	△寺田祐之	―（轉）	森正隆
福島	西久保弘道	―（休）	太田政弘
岩手	笠井信一	―（轉）	堤定次郎
青森	武田千代三郎	―（休）	○田中武雄
山形	馬淵鋭太郎	―	―
秋田	秦豐助	―	―
福井	池松時和	―（轉）	△香川輝
石川	李家隆介（轉）	○阪仲輔	―
富山	濱田恒之助	―	―
鳥取	岡喜七郎	―（轉）	△川島純幹
島根	高岡直吉	―	―
岡山	△大山綱昌	―（免）	湯淺倉平
廣島	△中村純九郎	―（轉）	△寺田祐之
山口	渡邊融	―	―
和歌山	川村竹治	―	―
德島	渡邊勝三郎	―	―
香川	鹿子木小五郎	―	―
愛媛	伊澤多喜男（轉）	深町鍊太郎	―
高知	杉山四五郎	―（轉）	○永井金次郎
福岡	△川路利恭	―（免）	南弘
大分	昌谷彰	―（休）	川口彥治
佐賀	不破彥麿	―	―
熊本	△宗像政（轉）	上山滿之進（休）	赤星典太
宮崎	有吉忠一	―	―
鹿兒島	谷口留五郎	―	―
沖繩	△日比重明	―（免）	△高橋琢也

以上△は非並木制度の任用者○は非學問の高等文官登第者、其他は悉く帝大出身也。

三都の夏
の
趣味と印象

東京の夏の趣味　永井荷風

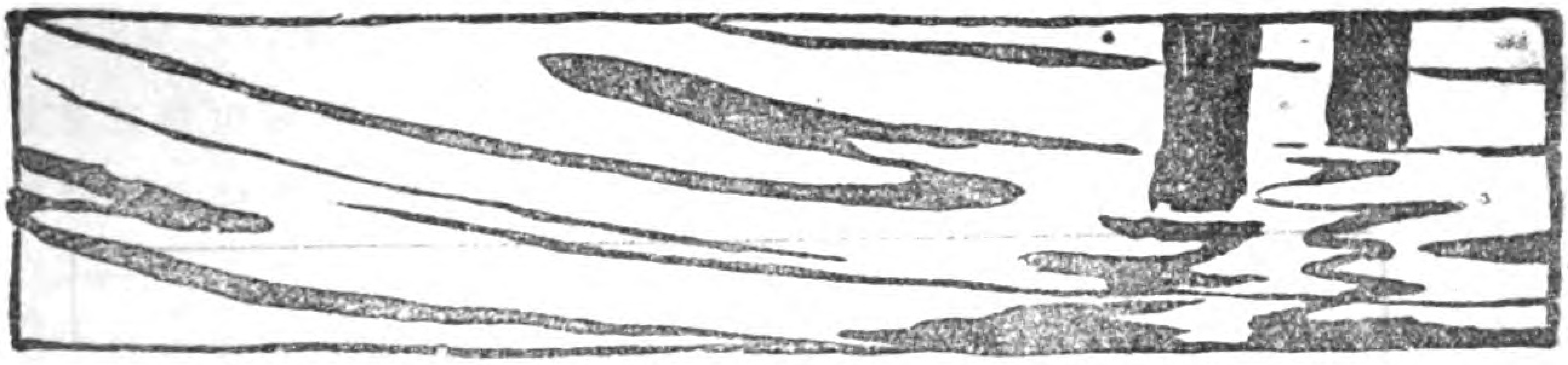
東京の夏の印象　水野葉舟

京都の夏の趣味　高安月郊

京都の夏の印象　長田幹彦

大阪の夏の趣味　薄田泣菫

大阪の夏の印象　岩野泡鳴



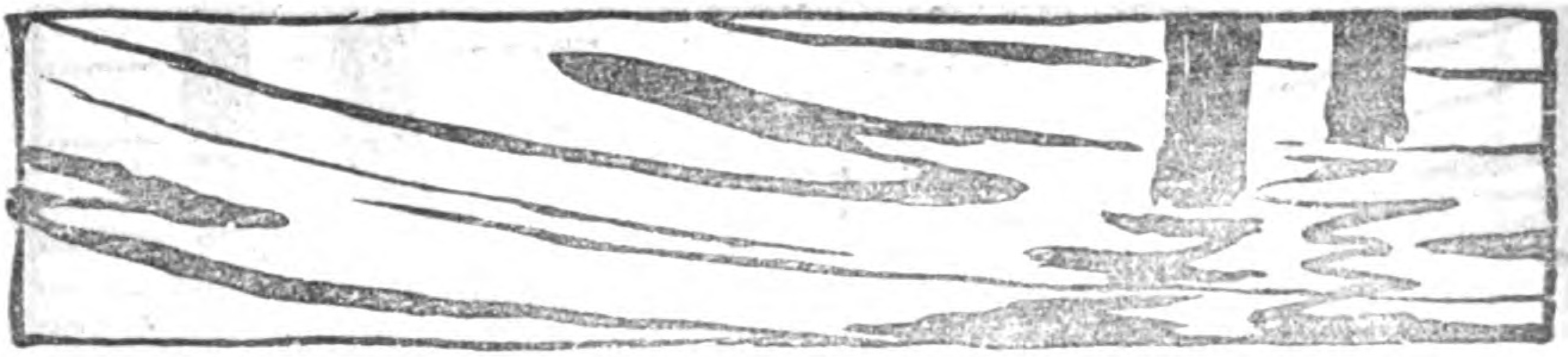
東京の夏の趣味

永井荷風

中央公論の瀧田君、余に囑するに夏の東京と夏の江戸趣味なぞいふ事を以てせらる。然れども其等の事はわれ既に拙作の小説及び蕪雜なる隨筆小品文の中に云ひ盡したれば、今更に書くべき事殆どなし。拙著「すみだ川」の中「夏の町」には幾分か一まとめにしてわが夏を愛する心の程より、幼き頃の思出までを書きしるしぬ。若しそれ江戸時代の夏の趣味なぞいふ事に至りては、われ等の如き若輩の嘴を入るべき處にあらず。こは全く見ぬ世のさまなり。見ぬ世のさまを窺知るには、唯ひたすらに書籍によるべきものなれば、一卷なりとも多く讀む人は讀まぬ人よりも能く見ぬ世のさまを知るわけならずや。されば先づ自ら許すに博覽强記を以てするにあらざる限り、われ等若輩の物知顏は憎むべく笑ふべき事なるべし。

東京も明治二十年頃までは山の手の邊鄙なる處々にありては、猶その儘に江戸の昔を思出すべき事多かりき。われ小石川の父の家にありし頃は、初夏の薄曇りしたる空に、聲とてゝ時鳥の過ぐるを聞ゝたり。六月朔日の富士詣も小石川邊には講中殊に盛なりければ、每年東都歳事記なぞにて見る如き有樣を目擊しぬ。大塚護國寺の御富士樣は他所と異りて朔日より十三日までなり。われ屢ゝ家の者に伴はれて麥藁細工の蛇なぞ購ひし事今に忘れず。その頃には極樂水、江戸川なぞの螢狩にも近くに住む人々多くつどひしが、今はいかゞにや。卯の花も大塚庚申塚あたりには珍らしからぬ程路傍に咲き亂れたり。今は盡く電車道となりて開けしなるべし。

われ先頃より江戸都會趣味の江戸藝術に伴ひて、明治に入りて以後、漸次に衰滅し行きし有樣を取りて三期に分ち一卷の風俗美術史の如きものを編纂せんとしつゝあり。第一期を明治初年より十年までとし、茲には專ら新しき明治風俗の發現を說かんとす。駕籠猪牙船等の衰微に代るに馬車人力車の流行を論ずるなぞは最も重要なる事件なれども、又この時期には、温泉旅館の新築により深川仲町再興の事、山谷堀、向島、柳橋あたり料理屋繁昌の事。又猿若三座の移轉より新富

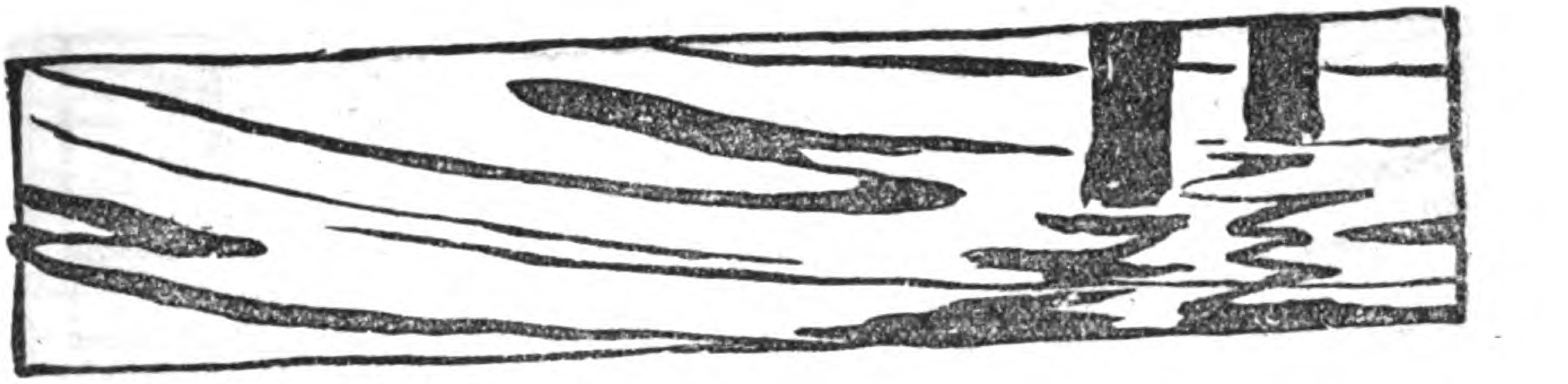


町守田座、中橋澤村座大當りの事なぞ、世は凡て天保御改革以前の昔に返りしが如き觀ありし事をも忘るべからず。明治五年頃遊廓繁昌を諷したる狂歌に、

玉華族、金瓶官員、彦士族、商賣品川、卒は佐の槌。
知事梟、久喜參事に伊勢は屬、杉田權少、岡田等外。
甲子博士、助教角海老、鶴得業、通辭丸熊、書生岡本。

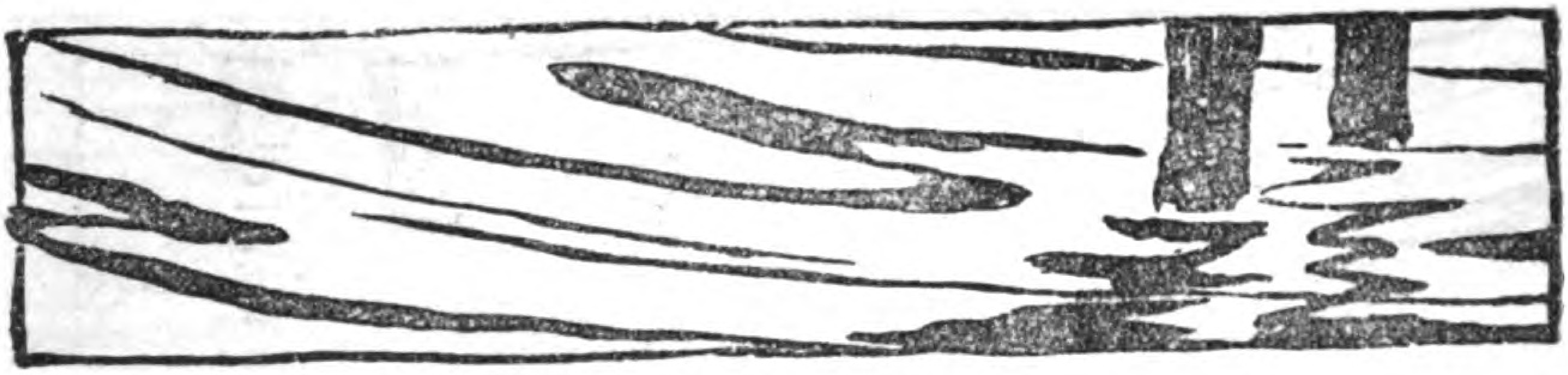
これ等を以て見るも維新當時未だ廢藩置縣の制に至らざるに、諸侯は早くも身輕となつた自由を喜び、又浪士上りの官吏軍人は直ちに都會の樂事に誘はれ、上下擧つていかに肉樂の追究に馳せしかを知るに足るべし。薩長土肥の浪士は實行すべからざる攘夷論を稱へ、巧みに錦旗を擁して江戸幕府を顚覆したれど、原これ文華を有せざる蠻族なり。卑しむべき江戸庶民の作り置きたる花柳の地を荒すの外、一ツとして自己特有なる遊樂の法を案出するの能力だになし。三味線と藝妓との兩々相携へて、今日に至つて猶未だ全く滅亡せざるも故なきにあらず。虎狼に齊しき征服者は、自ら被征服者の殘し行きたる腐敗せる文明に軟化せらるゝ事、豈獨り明朝を滅したる滿洲人の國家のみを例とせんや。明治初年に殘りたる江戸趣味を尋ねん事は、これ江戸なる敗者が薩長の勝利者を軟化し行きし狀況を語るに等しきものとす。

さて西南戰後より日淸開戰までの間を以て、明治に於ける江戸趣味衰滅史の第二期とすれば、この時期に於て江戸趣味は西洋文明の侵略に遇ひて刻々頻死の境に陷り行きぬ。然れども猶團十郎菊五郎左團次の演劇、魯文採菊默阿彌柳北櫻痴等の文學、芳幾芳年國周曉齋三世廣重等の浮世繪、其角堂、四世夜雪庵等の俳諧によりて市井の一個に其の命脈を保ちしと知るべし。(此の頃には隅田川の蜆も猶石油臭からず、白魚も四手網にかゝりしなり。)而して、日淸戰後より日露戰爭までの第三期に至り、益々西洋文明を迎ふに急なる一世の風潮は、新設の都會中に全く江戸趣味の存在を許さゞるに終る。道路の改正によりて見付城壁神社佛閣墓地等、凡て歷史的記念物の取壞し、河流溝渠の埋立、樹木の亂伐。又工場煤烟の被害等、これ等は古來の名所を破壞すると共に、水雞、蟲聽き、螢狩等凡て天然によりて興味を催すべき日常生活の詩味をも撲滅し盡しぬ。江戸文學中時勢の爲めに最も甚しき致命傷を負ひたるものは俳諧なりといふも不可なかるべし。されば今日となりて滅びたる江戸の風俗美を尋ねんとせば俳諧の研究に如くはなし。



抑ゝ江戸幕府に取りて寛永の鎖國以來、歷世絕る間もなき經濟的禍根となりしものは、唐蘭二國の外國貿易なりき。唐蘭に加ふるに英魯及び米國現はるゝに及びては、此れが爲めに三百年の泰平も打亂されぬ。幕府を滅せしものは實に西洋なりき。西洋なかりせば薩長の狡兒も虛に乘ずる事能はざりしや明なり。明治に至つて猶餘命を保ちし江戸趣味も亦同じく西洋文明の爲めに破壞し盡されぬ。日露戰爭後の日本文明は、西洋文明の輸入若しくは模倣と云はんよりも、こは寧ろ毀損或は粗雜なる贋造と云ふべく、本家の西洋に對しても甚だ氣の毒なる時代となりぬ。吾等今此の時代に在りて十年前既に全く後を絕ちたる江戸趣味の事を云々せんとする如き、愚も亦甚しからずや。

われは寧ろ一日も早く固有なる東京趣味の成立せん事を欲して止まざるものなり。江戸趣味の成立に關しては江戸平民文學と浮世繪美術の與つて力ありしや云ふを俟たず。東京趣味の成立また自ら現代藝術に依賴する處なかるべからず。春秋時々の大掃除、租稅取立なぞの事を新しき俳諧の季に入るゝもよからん。豐後節に代るに浪花節を以てし、潮來節に代るに何テ間ガイインデセウの流行歌を以てするも惡しきにあらざるべし。猪牙の蒲團の夜露にしめりしは昔の事なり。贋のダイヤの電氣に光る新橋の夜の情調も亦可ならずや。今試みに東京年中行事の夏ともいふべき事を取入れて新しき人情本の筋立をなさんか。發端は日比谷公園音樂堂の夜に青年男女が見初める場。次に大森海水浴場の歸り池上館旅の濡事より漸く佳境に入らしめ、帝國座夏芝居廊下にて鞘當の波瀾なぞよろしくありと知るべし。彼等が睦言の夢を照らすものは敷島の空袋をかぶせし電燈なり。彼等が煩悶の情に伴ふものはトタン葺の屋根を打つ雨の音なり。彼等が乘りて走るものはタキシ自動車なり。彼等が忍會を約する處は銅像の陰なり。彼等の末路を唄ふものは編笠かぶりし讀賣りにあらずして髭を生ぜし三面記者の道德的宣告文なり。現代の事豈それ一から十まで盡く醜惡なりとのみ斷ずるを得んや。君子郷に入りて郷に從ひ、又常に時と共に推移る事を忘れず。われ等現代の人新世紀の夏を迎ふるに當りて何ぞ徒に辰巳の昔をのみ夢みんや。既に某處溫泉場に男女混浴の女夫風呂あり。浴室よりして直ちに妓を聘し得べしといふ。時勢の要求は利を見るに早き輩を驅りて、娼樓には鏡天井の間を設けしめ、女優を主とする劇場の裏面には特別演技室の經營をなさしむる等の事また近きにあらん。文化文政の太平豈羨むに足らんや。日進月歩の今の御代こそ實に仰ぐべく尊むべけれ。



東京の夏の印象
（さまざまの記憶の中より）

水野盈太郎

溫室

自分はこの外郊の書齋の中て倦み切つてしまつた。坂の上のこの二階の窓から見える、廣い市街の家の屋根は、今、プラチナの燃え上つた光で、重い炎がどろッとした凄い陽炎になつておしかゝられて居る。その光は少し濁つて居る。灰埃が低く立ち上つて、この日光を燻た色に濁らせて居る。暑い。燃えつくやうに暑い。

自分は今、この室を出て行かうと思つて居るのだが、この燃えた日の色を見ると、東京の街に踏み込むのが恐しくなる。埃にまみれた鼠色の家と木とが苦しい息をついて居る中に入つて行くのが恐しい。その中には暑さて狂氣した埃が立つて居る。喉から燒けつきさうな人の吐息が吐き出されて居る。石が血走つた目を開けて呻いて居る。ものの響がしやがれた聲を立てゝきしみ上つて行く。水がのたりと昏睡して居るやうに動かない。…………

京橋から日本橋の街通――丸の内から神田へ通つた街通――大川のふち――下谷の古い町――何處を考へて見ても、燒けて爛れた風と、狂氣になつた砂埃とが通つて居る處だ、少しでも家の無い廣い處は考へただけでも目が眩みさうだ。そこはプラチナの大きい溶爐の中だ。

自分は窓を閉めてがッかりしてしまつた。「何處へ行かう？……夜まで待つて居ようか？……だが、もうこの室にはあきあきした」。そして室の中を二三度往つたり來たりして見たが、堪らなくなッて、

「ヤッぱり、その燒けて勢のない風に吹かれに行くのか……」と思つた。と、ふと、

「街樹を見に行かう。さぞ苦しさうに、ぐッたりしてるだらうが、それでも木の葉には、しなやかに冷さを含んでるだらう。」



やはり街にと思つて、自分は家を出る覺悟をした。

街はづれから市中に入る電車に乘ると、自分はすぐ心の中で目をつぶつてしまつた。電車が街の中に進んで行くに從つて自分の喉は燒けた息を吐いて居る。全身の血が重つくるしい熱であえぎ始めた。

「何處にでも暗い處に行かう。穴藏の中に、日のさゝない處に……溫室に入らう。」

自分はグラスの天井に簾(すだれ)を下した室の中を思つた。羊齒と、中央アメリカの高山植物とが茂つて居る室の中を思つた。

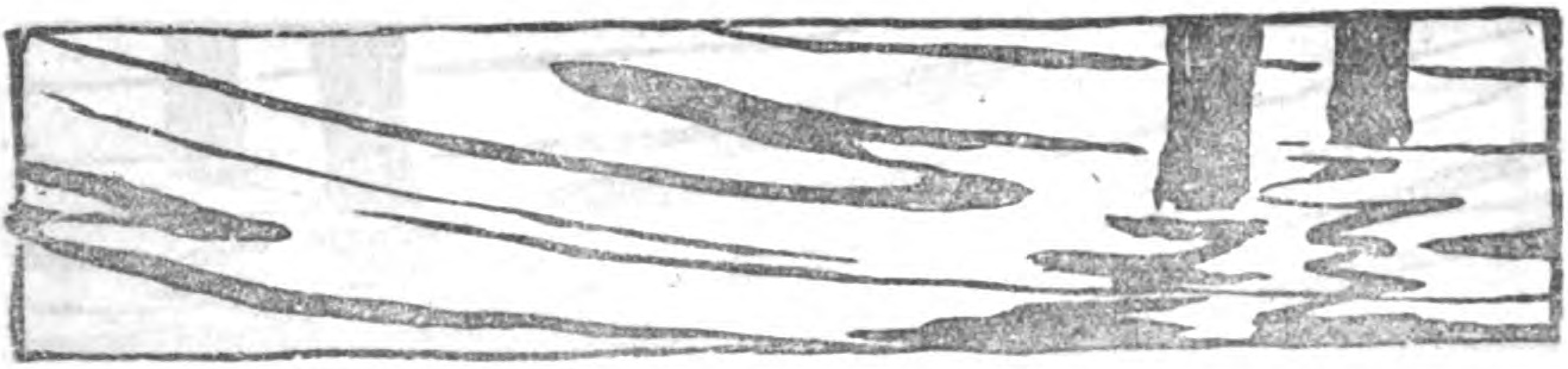
自分は又、街はづれの方に出て行く電車の方に乘り換へた。

車の中に居る中に、自分の想像は、そのグラスで區切られた中の、暗色を帶びた空氣の中に、ぼとりと濕氣を含んで居る草の葉を描いて見て居た。日が遮られて居る中で、草がその草の生きた臭ひを思ふ儘に漲らせて居る……その室の中が、今自分の胸に極く親しく生き上つて見えて來るのである。自分はこの顔を、その濕つて澱んで重くなつて居る空氣の中に突き込んで、暗い醉はせられるやうな匂ひをかぐ時の心持を、だん／＼微かに思ひ入つて行くのであつた。——乾き切つた、火の燃えたこの埃の中から、薄暗い、濕つた陰の世界に逃げ込んで行かうとして居る。

しかしその感覺は、自分には特異な氣味の惡いものに觸る味ひである。その室の壁は苔で靑ずんで居る。その壁の苔にはこの草の葉から立つた濕氣が、じつとりと露になつて、綠の色に暗さを見せて居る。その中を喜んで生きて居る草が漂はして居る力は、自分の肌には死んだ魚の冷さを感じさせる。しかし、自分は今、その水を含んで暗くなつて居る中に逃げ込まうと思つて居るのである。

車の外は何處まで行つても、燃えた火の中である。自分は駒込の方に行く電車に腰を下した儘で、ぢつとその恐しい燃えた火を見まいとして目をつぶつて居る。

漸くのことで、動坂の上の某家の溫室のドアを開けて入つた。目はこの瞬間に葉を廣げられるだけ廣げて茂つて居る草を見た。ベコニヤの葉に光つて居る綠銀の色——黒ずんでぼとりと重くなつて居るグロキシニヤの葉の間から咲き遲れた



花の一群……花瓣の中に含まれて居る水粒の光を帶びた紅、紫、白の花の一群、——小かい葉の集つた長い羊齒の房……自分の額にはこの中に漲つて居る小さい水粒が、冷く當つた。

自分は此温室の隅にある籐の椅子に腰をかけて、今朝から初ての煙草に火をつけた。そして今火爐の中で白く光つて燃えて居る街の中を思ひ浮べて見た。自分の目の中には東京の街の土が次第に、とろ〳〵、とろ〳〵と燃えて、溶けて渦になつて行くのが見えて來る。自分は今、此處で竊に地の底から汲み上げた水を一口飲み下して、自分の呼吸を靜めて居るのである。

街の燈

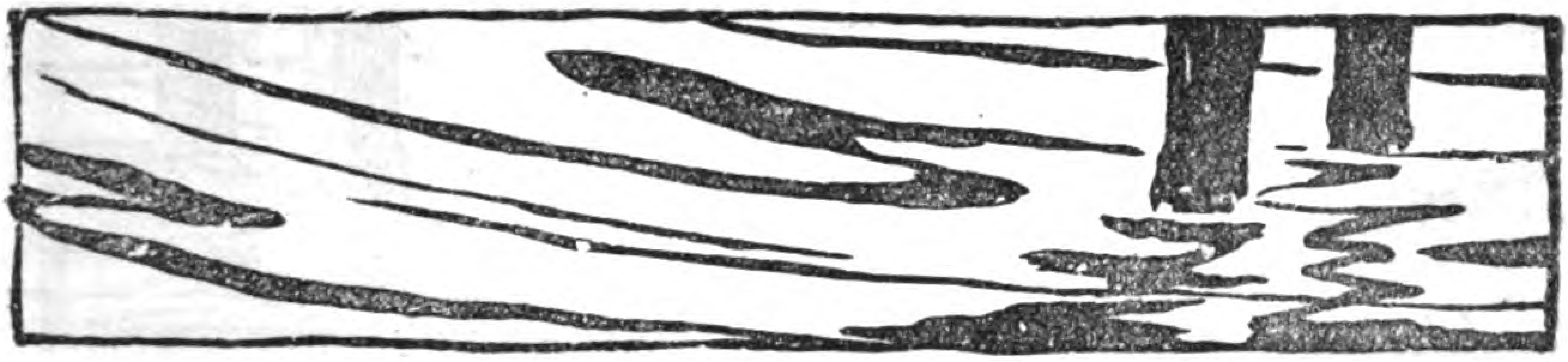
恐しい程、入り交つた雜音の渦の中を、私もその人も歩いて行くのである。その渦の底に沈んで居ると、自分達を取り圍んで居る音は、ぼつと廣がつてるものが、たゞ重く身體を取り巻いて呻つて居るやうである。

私はその晩は氣が輕かつた。その人をその家から誘ひ出して來て、賑かな蒸し暑い銀座の通りを歩いて行くと言ふことだけでも私の氣持がどんな輕快になつてるかと言ふことが知れる。

私は初は態と夜店の出て居ない方の通りを歩いて行つた。足の踏んで行くペーブメントの石が見えない程、人の群つてる中には入り度なかつたのである。私は肩を竝べて、少し背の低い其人の髮の美しさと、其肩に流れて居る薄い着物のしなやかさと、ペーブメントに流れ、街樹を取巻いて居る街の燈(あかり)とが、私の心に深い味ひに成つて來るのを喜んで歩いて行く。

この方の側(サイド)は、長いまつすぐなペーブメンが打水で濡れて、遠くまで見透される程に、人がちらほら歩いて居る。その人の足もとが、ペーブメントに反射した燈火で、幻影の中に映つたものゝやうに浮き上つて見える。如何にも靜かでしつとりして居る。美しく飾つた店は眩しい程、明くされて居る。その店の燈火は街の方に擴がつて、そこを燈火の洞のやうにして居る。燈の中には厚く立つて居る埃が溶け込んで、その色に燻(いぶし)をかけ、半透明にし、薄い紗が渦巻いて居るやうに見せて居る……その中にそこを歩いて來る人がふわりと浮き上つて、緩く舞つて行くやうである。

……その燈火の擴がつて行つた先きは、圓い街樹の周圍にいつて、輕く引つかゝつて消えやうとして居る。此處の街樹は柳である。柳の枝の房は、輕く、柔かく垂れ下つて居る。そのこまかいしなやかな葉は、無數に群(むらが)つて、その樹の形



を顯くして見せて居る。葉の色は微に赭の交つた綠で、それにこの街の燈火がまつはりついて、ぽッとした白さを見せて居る。そして低い聲でさわ〲さわ〲と囁くやうに身をもんで居る――その中を歩いて行くのが私には嬉しいのである。

私と並んで歩いて居る人は、少し重くしづれかゝる着物が、しッとりと合ふ身體の人で、目の下に力の強い影がある。聲も彈力のある、はッきりした輕さを持つて居る、……私達はこの燈火の洞の中を靜かに歩いて行く中に、柔く吸ひ込まれるやうにその町の或る家に入つて行つた。そこの入り口からすぐついて居る階段を上つて、街の方に開け放されて居る室に入つた。そこの白い石のテーブルの上に手を置くと、地の底から汲み上げられた水のやうな冷さに、快く觸つた。私はチエリイソオダとアイスクリムとを言ひつけて、それがこの机の上に置かれるのを待つて居た。私は街を背にして、その人と對ひ合つて居た。その人の黑味の深い目が、目の下のその影で深くぢッと動かない力を見せて居る。その目の底から笑ひが浮んで來るのが湧き上るやうな心で待たれて居る。

私の目が、その人のその目から髮を見て居た。その視野の中に、その人の背の壁にはめ込みに成つて居る鏡が見えて居た。鏡の中には一杯に盛り上げられたやうに暗綠の色をした小さい木の葉が暗く映つて居る。それに女の髮の後付きが一つ明かに入つて居る……私の目が……心が自然とその人の顏から、その鏡の中の木の葉に移つて集つて行つた。

鏡には青い深さがある。はてしもない深さがその面に映つたものの形の奥に見える。木の葉は鏡の中では、群り湧き上つて居る。そしてこの明るい室の中で、特別の暗い、微かな色をして、木の葉が見えて居る。

机の上には、チエリイの色が泡立つた。長いニッケルの臺のはまつたコップが運んで來られた。その中にクリイムが柔かく沈んで、長いスプーンが立つて居る。

そこを出ると、私はその人に、

「彼方（あつち）を歩かうか……少し暑いけれど、やつぱりあなたは人いきれの中が好きなんだらう?」と言つて、今鏡に映つて見えて居た街樹の下を通つて向ひ側の雜踏の中に入つた。

こゝは人の呼吸で燈火が乳の濁つた色になつて居る。無數の足音と、反射とが狂ひ上つて慄へ立つて居る。よく聞くと、



その雜音は痙攣を起して居るやうに。少し病的の一定の鼓動をして居る。人の顏が閃いて行き違つて現はれては又消える。店に並んで居る寶石が聲を枯らして人を呼び立つて居るやうに光つて居る。私はそこを歩いて行きながら、自分の神經が蓋をされてしまつて、たゞその渦の中で、周圍の雜音と、光との動く調子に從つて、身體が廻つて居るやうに思はれて居る。

木立の奧

歐洲航路の××丸に乘つて居るK——君が久々に上陸して訪ねてくれた晩の事である。私達は上野の森の中の、或る家のバルコニイのテーブルに、歩き疲れた顏を向け合つて坐つて居た。

私達は前に開けて居る池——暗い廣い水を見ながら、その池の周圍を取り圍んでちら〳〵して居る小さい燈火を見ながら、ビイルの來るのを待つて居た。私は少しも、このK——君の口から言葉の出るのを待つては居ない。もう話を聞くのにも倦み、ものを言ふのにも倦んで居た。

K——君の眞白なリネンの夏着と、白い齒とが際立つて私の目に映つて居る。風が房になつて居る木の葉をゆすつて吹き込んで來る。

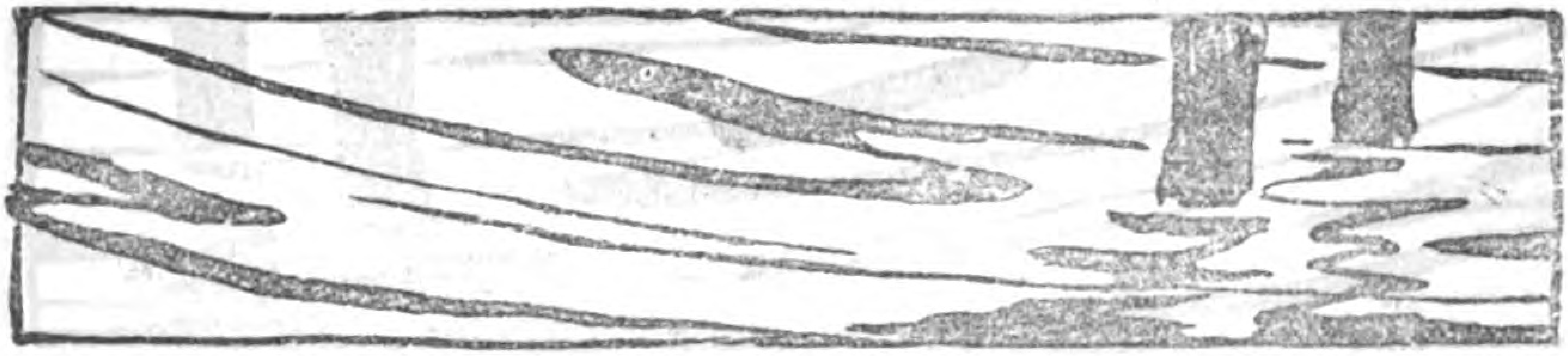
私は耳を澄してそれを聞いて居た。私達の目の前に廣がつて居る闇は、生暖かく湧き上つて居る。まだ日が暗くなつたばかりである。よく見るとその黑い中に、消え去らずに、ツワイライトの白さが、それは微に肉眼で見分けることが出來にくい程に、たなびいて居る。

「君——ぢつとして居て見たまい。それ、それ、何處かで人が話して居るだらう?……」

此處に落ちつくまで、元氣のいゝ調子で話して居たK——君に、私は不意と斯う言ひかけた。その調子が妙に濕つて居た。

「何?……何處で?」K——君の太い聲はすつかり調子をはづしてしまつて、私の言葉を他愛のないセンチメンタルな微動にして消してしまつた。私は微笑した。ウエタアの持つて來たビールの泡が小さくはねて行くのを見ながら、

君のその白いリネンの着物を着てるのを見たり、黑く燒けた顏を見たりすると、僕は新開の港にでも行つて見たくなる



よ。……此のバルコニイは東京で一番氣持のいゝ處だと思つてるが、妙に古びた匂ひが殘つてるだらう。僕は此處に來ると、幾代も幾代もの人の顏が、この闇の中に重り合つてるやうに思はれてならないんだ……ま、プロジットしよう。」

K――君は、太い聲で笑ひ出さずに私の話を聞いて居る。

「しかし、東京と言ふ市街は全く壞れてしまつてる。それは亂暴に壞してしまつてあるんだ。停車場の周圍に出來た町見たいになつてしまつてる。その中にぽつりと、此處見たいな處があるんだ。だから何處に行つたつて本當にいゝ處と思はれる場所はないよ。」

私は目に廣く映つて居る暗を見て居る。池の周圍の燈火がだん／＼潤んで見えて來た。

「君はたまに東京に歸つて來ても、故郷に入つた氣持はすまい？」

「本當にさうだ……たゞ、だん／＼變つて行くのに驚くばかりだ。」

「亂雜で………」

「だが新開の港とは全で違ふ心持だぜ」

「違ふとも、消極的で、つぎはぎ仕事で……」

「新開の港はがさつだが生々してるぜ……」

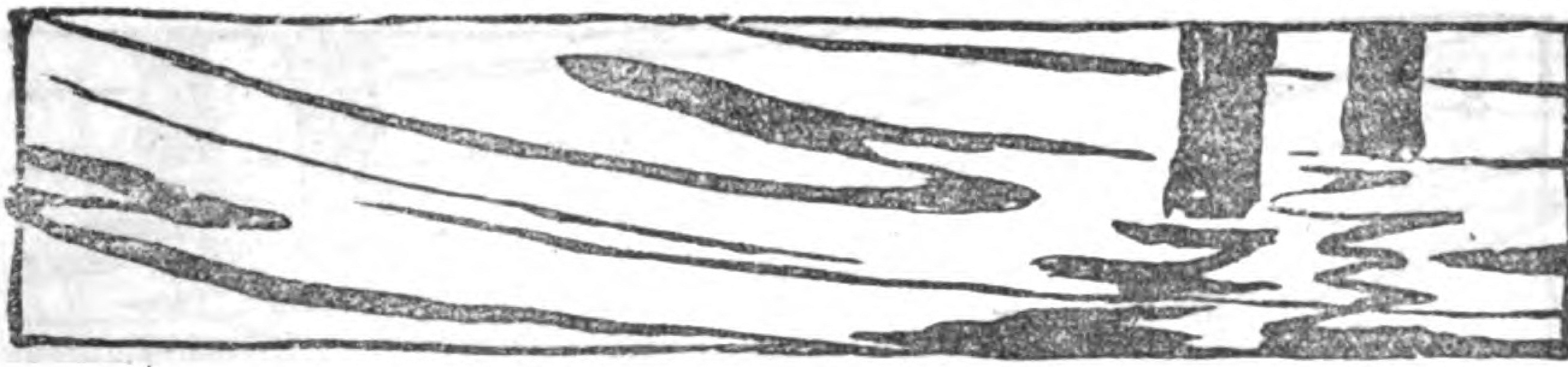
「だからね、こんな處に來て見ても、全く此處の古い木立の中の味に浸るつてことが出來ないではないか。何だか、無理にすぐ傍にある雜音を忘れさせようとして居るんだが、それには心持が欺されないよ。」

「…………」

「僕は此頃は、東京の街がたゞ亂雜だと思はれるだけなんだ。折ふし、ひよいとして場末などで、妙に思ひつけない心持の起る處に出る事もあるが……それをしつかり感じようとすると、やつぱり、もののかけらなのさ……」

「…………」

「でと……何か冷いものでも食べようか」私は心に蓋をしまつて、テーブルの上を見た。仕方がないから、やつぱりこんな晩にはこの人と何處かの狹い室にでも入ることだ…………



店の人

私の住んで居る郊外に出はづれようとする場末町で電車を降ると、軒の低い店の續いた中に、一軒少し暗くなつて見える古道具屋がある。

この店はこの町などでは珍らしく、賣物が重り合つて竝んで居る店で、古びた道具の黒い色と、埃の色とで暗くなつて居る店の中には、何處か寺の内で嗅いだ事のある臭がしさうである。私はこの店の前を通る度に、よくその奧にある。道具の、薄光りに光つて居るのを見て、も一度自分の周圍の日の色と、街とを見廻はして行くことがある。

これは黄昏近くのことであつた。

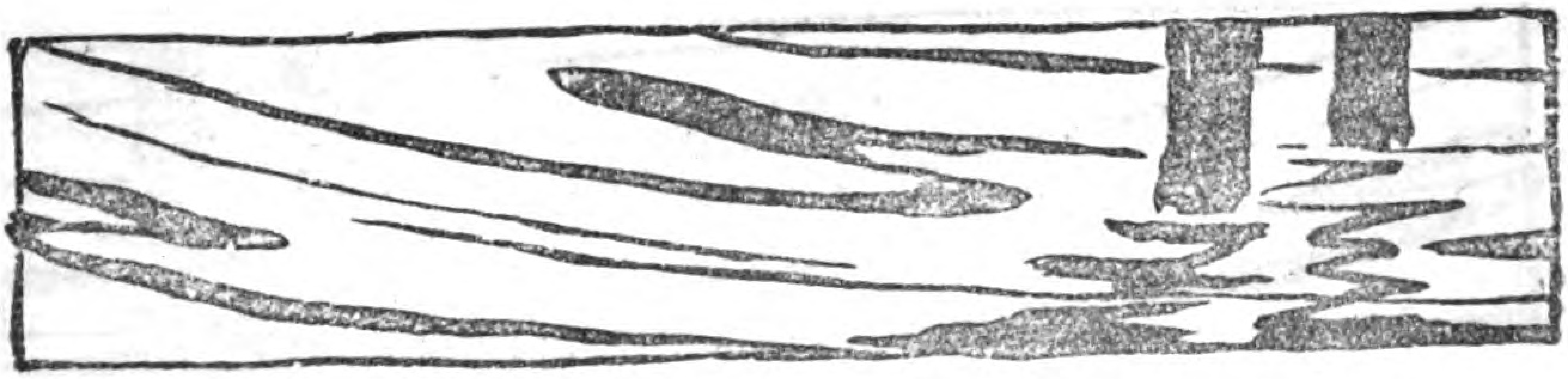
その店の前を通つて行きながら、ふツと中に瓦斯の燈火（あかり）がついて居るのに氣がついた。と同時に帳場（ちやうば）に坐つて居る蒼白い娘の顏が目に入つた。

私はすぐその娘の顏を明かに覺えてしまつた。(私には如何しても、この瞬間が心に餘程深く閃いたやうに思はれてならない。)まだ十五か六位だらう……肉が骨を包んで居る力が弱く衰へて居る。そして蒼白く動かない弱さがその身體を占領して居る。日陰の草とも、古い道具の重り合つて置かれて居る爲めに、その呼吸が壓しつけられて居る肺の臓とも人は言ふだらう……私はそこを行きすぎると、(足が何時となしに通り過ぎて居たが)空の上に殘つて居る黄昏の光を見た。恐しく強い力が空に流れて居るのを見た。肺が思はず一杯にふくらんだ。すぐその衰へた肉を忘れてしまつた。

だが、或る日自分の室の中で、それを思ひ出した。その時にはその店の中、道具が總て枯れた針になつて殘忍な爪を立てゝその娘に迫つて行くのを、明かに見るやうに感じた。

樣々の因縁話が頭に浮んで來る。

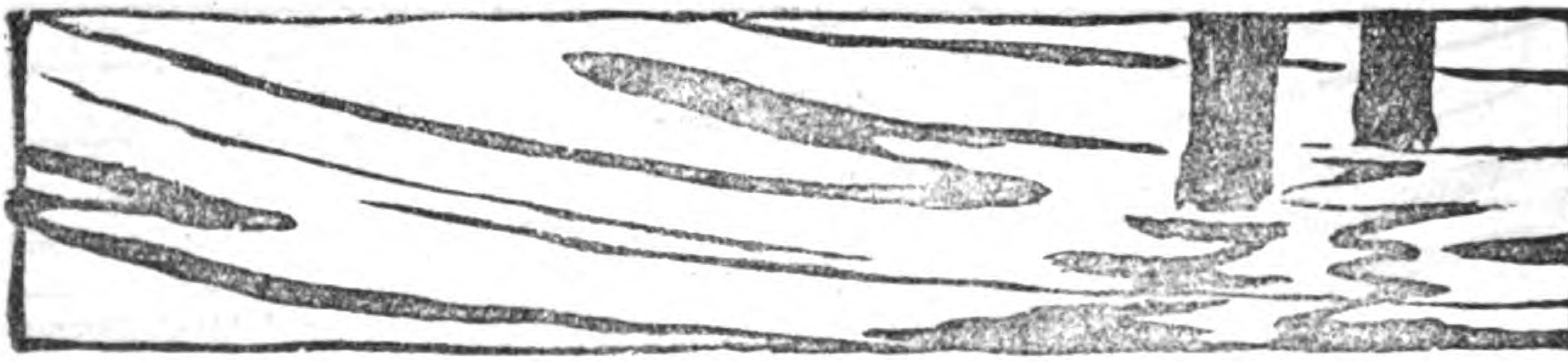
「あの娘は無言で死ぬだらう………………」



京都の夏の趣味

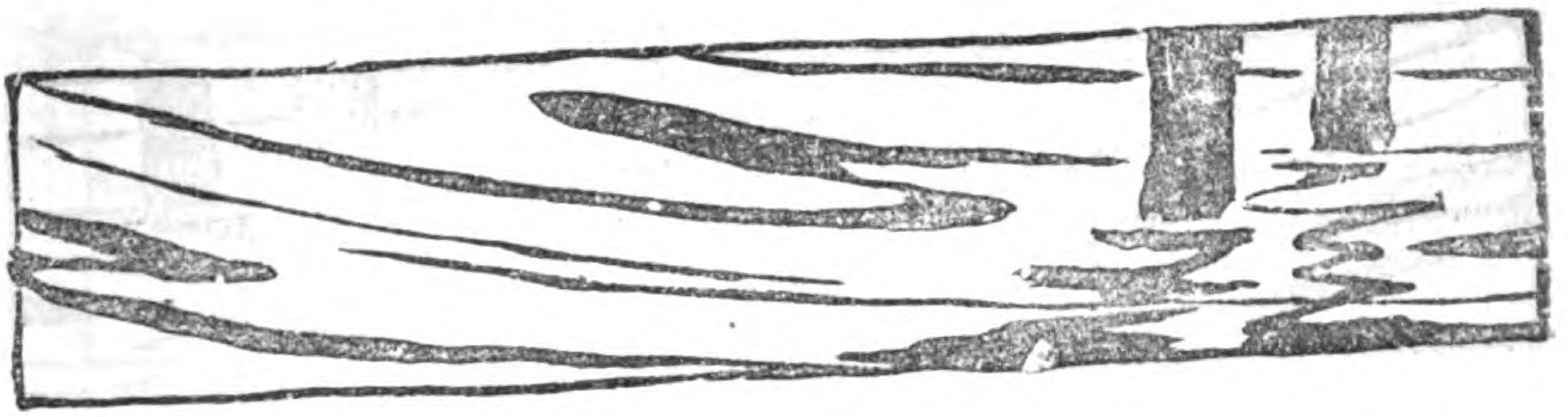
高安月郊

京都の夏は先東山に現れる。花と霞て塔まで醉うた春の色は躑と散つて、人より厚い濃い綠の衣更、土佐の繪の具をつけたばかりの繪卷になると、悟り顏の叡山まで髪を延ばして若草山より若がへる、殊に綠の中から平安朝の夢を練出す御蔭祭、葵祭、いつも綠の糺の森へ白が來る、黑が來る、赤が來る、紫が來る、淺黃が來る、黃が來る、萠黃が來る、褐色が來る、馬が來る、檢非違使が來る。童が來る、山城使が來る、雜色が來る、舍人が來る、花傘が來る、白丁が來る、衞士が來る、牛が來る、花をめぐらした御所車が來る、樂人が來る、美人が來る、勅使が來る、朱の鳥居で止ると、笙、篳篥、和琴の合奏、それにつれて樓門の中へ收まると、木蔭、草原に殘る舍人、童、繪卷物の斷片か、見物の中にも古代紫がある、朱の裏がひるがへる、夢も現と溶け合うて更に加茂堤の木の間、向の山を背景にして北へ行く人と自然の調和、誠に平安の象徵である。人は人と競うても轡を竝べては駈けぬ上加茂の競馬、勝負を知らせる太鼓の音にも勝負を問ふ氣にもならぬ長閑さ、兜着た里の子が群をなしてさまよふてゐるのも古朴てある。藤の森の祭には鎧武者が多く出るが、それも古い五月人形の樣で殺伐で無い。梅の宮の杜若、松の尾、嵐山の青葉、雨の夕暮に河鹿を聞くと三舟の遊に洗うた笛が淵に沈んで、時に其餘韻を洩らさうとしては又咽ぶ樣子。歌の中山、清閑寺の木下闇に杜鵑聞かうと、曇つた日選んでは幾度か行つたが、いつもそこに埋もれた美人の琴の音程も聞こえず、道にあるじに問ふと却つて晴れた日に鳴くといふ。曼珠院に叡山を枕屏風にして水鷄聞かうと思ひながら今に果さぬ。梅雨は草と磧と淺瀨と組合はせた鴨川一面濁水の急流として、平家の運命を小原の奥に泣く上臈の涙も流す、源家の運命を鞍馬の奥から起して其身は北の海へ漂うた御曹司の恨も流す、叡山を下りては上り、果は向へ落ちた中黑の旗の影も流す、室町のうるさゝを遁れても苦い銀閣の茶の餘りも流す、群雄の中を駈抜けて先上つても、本能寺の烟から法華寺の土になつた吉法師の怒も流す、三日天下は小栗栖の泥になつた重兵衞の哀も流す、聚樂、桃山の榮華は浪華の蘆と散つた千成瓢簞の亂も流す、彼所此處に染込んでゐる千年の執



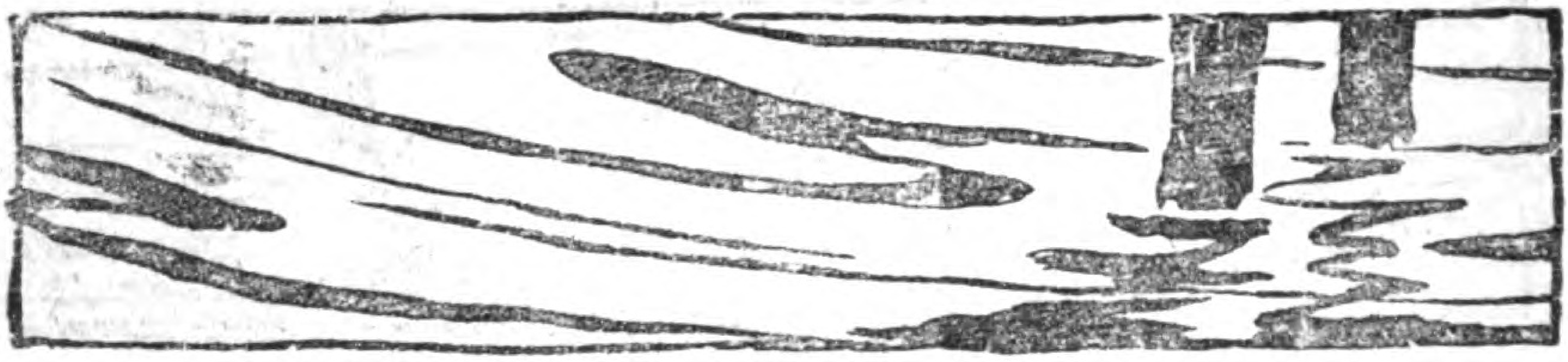
着を一時に流して流し切れず、更に其根元を天に問ふか、雷音でわめくのを、水樓の簾の中で宇治の茶すゝるのも長い夢をさます。

雨は川端の柳から晴れて卅六峯がまた數へられると、疫癘を拂ふ「嘉祥菓子」これも江戸の武家式より御所めいた泰平羹、早苗羹、桔梗羹、山路羊羹、露の光、伊賀餅(良則)花桔梗、捻餅、環餅、段餅、形羊羹(松屋)千年來の儀式は菓子に傳はつて、それも干菓子より較豐な味がある。中京は祇園祭の用意、十日から囃子の稽古、いつも虚無僧の尺八の澄む町中も活返る鉦、笛太鼓の音、鉾は道の眞中に飾り立てられて「宵山」は祭の日より趣がある。いつもは古びた暖簾、黒い格子に店先も暗い家々もけふは明放して奥行の深い京の舊家、中庭、中の間、奥座敷、奥庭まで覗機關の様に雪洞點して、石灯籠も點し、一面の毛氈、處々に碁盤、將棊盤、床には流々の活花、壁から店先まで秘藏の屏風、此日に限つて紹介無くとも入つて見る事を許される。金は剝げても色は解けぬ源氏は土佐、銀は焦げても、墨は薄らがぬ山水は狩野、いつまでも派手な光琳、放逸な様で眞面目な大雅堂、技巧に凝つた割に深みのない蕪村、奇拔で又汁灰の拔けぬ蕭白、圓滿で又平凡な應擧、破格で又落付の無い蘆雪、濃厚で又しつこい若冲、綺麗で又弱い景文、雄偉で又柔軟な山陽、詩人とは違ふ書家の能書の海屋、歌程狂はぬ季鷹、殊に源琦の唐美人より、素絢其儘の京女が薄物に紅、紫をすかして、簾の外まで洩るのは春も見られぬ京の町の美である。どこであつたか、漂うて來る香に引かれて寄つて見たが、そこは格子はづさず、爐の音もしなかつた。烏丸、室町あたりまで行くと、向も鉾に積重ねた提灯、右も「山」の提灯、左も提灯、後も提灯、囃子は四方に鳴つて縱横の人通り、眞に祭の眞中に入つた心持、暫今やら、昔やら、其處やら、他處の者やらの差別を忘らせる。十七日は鉾の通る道筋の兩側青竹の垣に人の垣、店先から二階から、三月の雛人形より昨夜の晝の人も愈濃い化粧して、旅の人も、外國の人も織交ぜた中を、長刀電線を拂うて和泉小次郎が通る、雲の峰を指す山伏が通る、平井保昌が通ろ、勇士に附いて孝子の孟宗も通る、郭巨も通る、音樂家あつかひを恥ぢた伯牙も囃されて通る、歌に負けて歸つたと謠はれた白樂天も住吉の神と一所に通る、聖德太子も、神功皇后も、鹿島の神も、海の神も、月の神も通る、天竺の花は飛ぶ、唐の獅子も遊ぶ、殊に珍しいのは阿蘭陀模様の「見送(みおくり)」鎖港の中を辛うじて通つた舶來品當時では一層珍重したであらう、今は文字より鮮な歷史の一片を見る様で見物の西洋人と好對照である。鉾の上には母親の自慢もさぞと思はれ



る振袖、指貫、狩衣に白粉濃くつけた兒を前にして、揃の着物きた囃方、前には紐を頼りに、ゆられながら扇を口に當て江戸より重い聲の音頭取、襦袢に散髪をかくす笠着た附添、牛の汗も涎より長くぢり〳〵と引いて通る。葵祭が平安朝の象徴なら、これは徳川も太平の眞中、儒も、佛も、神も人形になつて和睦してゐる形式的に豊富な封建時代の京の象徴か。神輿の渡御は鎧武者、猿田彦なぞ先にして時刻も別で夕方に三條の橋を渡るが、とてもの事にあの鉾を象の様に先驅にして、其後から行く方が見事であらう。祭の間も長く七日、二十四日は「山」が通る。鉾程大くは無いが、寂しくは無い觀世音が通る、鳩二羽つれて正八幡も通る、鈴鹿山の明神も通る、鬼を從へて役行者も通る、花の陰に重荷下す黒主も通る、橋桁を蹈む淨妙の頭の上を飛ぶ一來も通る、欄干を飛ぶ牛若辨慶も通る、龍門を登る鯉も通る、鷹を飛ばす太郎も通る、三韓征伐の凱旋の船は殿として通る。遂に神田祭、天神祭より落付いて、濃厚なのは京の夏の祭である。

暑さは東より風も立たず、大阪より水に乏しい丈、磧の涼は特色があつた、踵に及ぶ程の流に床几を置いて、足をつけながら兩岸の樓の灯、あたりの雪洞の陰に祐信の畫を見まはしながら投節唄くのは、いかに涼しい中に艶もあつたか、今は水が殖えて磧が狭くなり、四條は板橋より電車が通る大橋になり、イルミネーションは色摺寫眞を照らす様になり、兩岸から床（ゆか）を二重に川へ突出して天井と壁の無い家並になり、枝豆賣が床の下から開帳の賽錢受の様に笊を出して押賣するのを麥酒の泡と口にする様になつた。しかし夜は不朽の藝術家である。深けるにつけて稍自在の筆を揮うて、東山は墨の中に樓の灯幾點、水より遠い程ゆかしく、床の火も稍暗く柳にも影がつき、水の音も鼓と代つて三味線は愈沈み、それも遂に水になる頃、下の床から足をつけながら友禪より濃い情をさゝやく油絵があるか、ないか、斷えては續く往來の人の足音を頭の上にして橋の下で涼む人こそ、往來の人を深山木と見て坐禪した古人より一層澄まして衆生に蹈まれる稽古する修行者か。暑の解脱は川上程得易い、三本木は水に近く、水も亦狭く、草は廣く、短い板橋を撫でる流、顏を洗ふ草花、つみに出る少女の袖を拔けて、水をかすつては又緣に上る螢、舞扇の一片を投げた様な翡翠、岐阜提灯の陰の琴の音、筧を落ちる水にまぎれる謠耳にすべらせて、御幸橋の方へ寄ると、それから上は小家が無い丈、愈綠、それも段々淡い糺の森、草も短くなる磧に網の様に白い流、時に暮れるまで野鴨も遊んで、逐はれては、答へがほに鳴いて歸る、更に北へ進んで、今は好い魚出す酒店も無い砂川を過ぎ、麥藁細工、鳩の八橋賣る店のまばらな小原道を、上つて山端の平八で、段になる



淺瀨を隔てゝ松が崎の山が急に垂れたのと相對し、鰍、ひがひ、鮎なぞ味ひながら半日を過ごすのも町を遠く離れた氣がする。上加茂の殊に白い砂、淸い細い流の邊でそこの庫へ寄附した契沖の遺書を繙へしながら一日過ごした事もあつたが、牢の樣な圖書館より其人を語る樣に凉しかつた。未だ燒けなかつた前、千家の殘月亭で不審菴より廣く明い床の天然の墨蹟しかも「凡聖同居龍蛇混雜」としたに對し、釣花活の白椿が道也の釜の松風にも動かぬのを見ながら「とゝや」の茶碗で淸淨の一味を喫すると、形式に流れたとはいふものゝ流石に行屆いた手前には三尺の河骨に水を灑いだ樣であつた。自然の最凉しいのは愛宕の下の淸瀧である、山と山と相迫つて口は出るも遲く、入るも早く、水は空也の瀧から落ちて、愈空、橋は空に掛つて、影も空か。水に沿うて上ると草は愈深く、木は愈深く、瀧は左程大くもないが夏を空にするには十分である。更に上ると月輪寺、尙更に上ると、鞍馬より急、叡山より小さくて、遠く望む程眺も無く、しんこ食べながら土器投げる位が興である、しかし更に水に沿うて下ると路は盡きる、岩を飛んで下ると、山は愈迫つて、岩も碎ける、水も碎ける、暑さも、凉しさも碎ける、しかもまた盡きず保津川と落合うて俄に廣くなる處山も靑綠、水も綠、空は又綠である或夜蚊帳をめぐる螢を風に任せて一寢入すると、歌が聞こえる、耳を立てると丁度門前らしい。起きて出て見ると、暗い提灯の陰に三人、五人、何處から寄つたか若い男女が踊つてゐる。あゝもう盆になつたのである。

京の夏は遂に下鴨の茅輪を拔けて行く。いつもは水底の小石も數へられる程澄んで靑味のある水手洗に夏越の祓すると小橋の側に大く結んだ茅輪をくゞつて災厄を遁れる人々、篝火は共に照らして名所圖繪にする。裏へ出て森の中を雨壺洞のあたりさまよふと、火影は木の間に微になり、人影は木影と一になり、木影は水も陰にして向ふの岸の茂と一になる中を辛うじて光る流、つゝ姫は其上を裳裾曳いて行くのである。



京都の夏の印象

長田幹彦

木屋町の夕涼

一風呂ざつと浴びて、糊のかゝつた辨慶格子の浴衣に着換へて出て來ると、婢衆はもう湯殿の外に待つてゐて、

「もう床にお支度がしとおすさかい、どうぞその儘ずつとお越しやしとくれやす。」

「さうかい。そりや有難う。それから麥酒は冷えてゐるかね？」

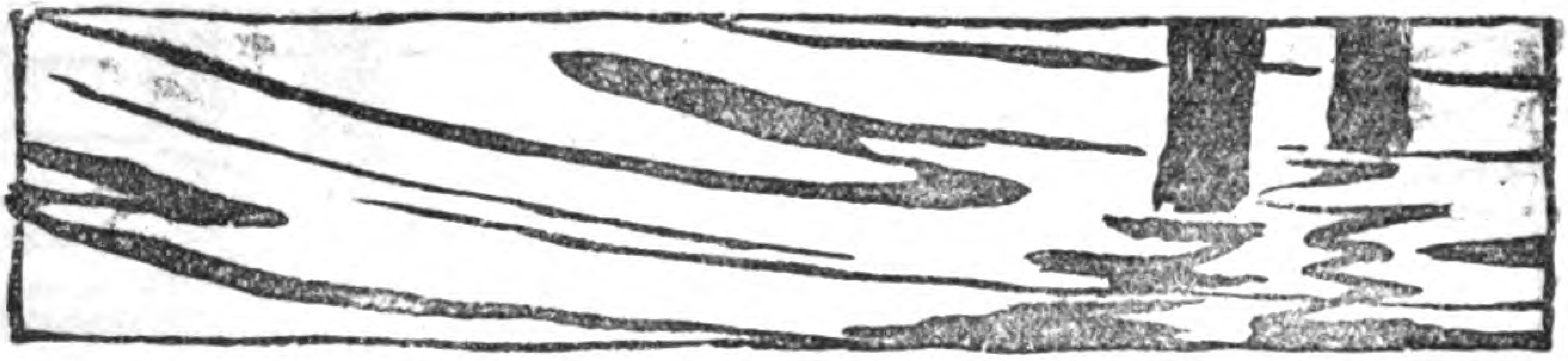
「は、今割氷を持つて參じます。」と、云ひながら婢衆は先に立つてばたばた奧の方へ走つてゆく。

私はその儘、濕れた手拭で額を拭きながら奧の間の緣端から河原へ懸けだした床へ出る。

赫々と燃えさかるやうな色彩を見せながらたゆたつてゐた夕陽の殘映は、いつのまにかすつかり消え落ちて、もう黃昏の薄明が河原から遠く東山の頂までうつすりと烟のやうに立罩めてゐる。對岸の宮川町の廓には紅く濕んだ灯が星のやうにきらめいて、浴衣がけの女の姿が處々の欄干に少さく打群れてゐる。河原の砂利に殘つてゐた火氣も冷えて、眞晝の暑氣に比べるとまるで噓のやうな涼しい微風が何處からともなくそよそよと動いてくる。

私は胸を咬られるやうな幸福と、爽快を覺えながら床の眞中に置かれた餉臺の前へ坐る。薄緣の上に敷かれた麻の座布團は媚びるやうに冷々と踝に觸れる。ほんのりと柔らかな光を投げる絹張りの雪灯は廣い床の上に二臺ほど置かれて、その光は餉臺のうへの生貝の皿や、酸のものゝ皿を美しく照らし出す。煙草盆に燻べてある香の匂ひは柔らかに浮動して、露ばんで來る夜氣とともに薄荷のやうな微妙な感觸を五體の皮膚に滲ませるのである。

やがて婢衆はこれも涼しげな浴衣に着換へて、水の垂れるやうな硝子鉢に大きく割り碎いた氷を一杯に盛つて、片手には麥酒の罎をさげながら出て來る。



「どうも遅うなりまして、えらい濟んまへん。」と、いひながら餉臺の向ふに坐つて、酌をしはじめる。
二杯三杯とコップの數を重ねてゆく度に苦い飲みものゝ味が舌から脊筋まで冷々と傳はつて、跨蹐いた、水晶の球のやうな透明な感じが次第々々に胸に溢れて來る。
隣りの床(ゆか)にも、先隣りの床にも、又その先の床にも漸次と雪灯の數が增して、涼しげな葭簾の陰にはほの白い浴衣がけの男や女の姿がちらちらと隱見して來る。河原には饒舌なせゝらぎの音が浮き上つて、靑々と茂つた草叢から鳴く蟲の聲が涼しい夜を祝福するやうに湧いてくる。
「旦那はん。辻占買うとくれやすな。」床の下から嗄れつぽい小娘の聲が聞えたかと思ふと、欄干の上へ長い竹棹がにゆうと出て、その先には束にした辻占と、小さな財布が結びつけてある。
「もう宜しいえ。そないに毎晩來やはつたかてあかんえ。」婢衆はいきなり立上つて、欄干から河原へ呼びかける。
欄干からそつと覗いてみると下の河原には十一二の辻占賣りの小娘が白い脛を淺い流れに踏み入れながら棹を捧げてしよんぼり佇んでゐる。
「そなこと云はんと、どうぞ買うとくれやすな。」娘は鼻へぬけるやうな甘つたれた聲で又訴へる。
「そやかて旦那はんがもうえちらてゐやはりまつせ。」婢衆はいかにも呑氣な調子でそれに答へる。
私は何だかさうした問答が美しい氣持ちを傷けるやうに思はれて、
「いゝぢやないか。買つておやりな。」と、命ずると、婢衆が默つて懷から幾らかの錢を出して、それを棹の先の財布のなかに入れてやる。そして二三枚の辻占をとつて、
「こらあんたはんのどつせ。あとは家のものへ分けて貰ひますわ。」と、云ひながら紅や靑の濃い色で染めた辻占を私の方へ差出す。
封を切つて讀んでみる。定まり切つた文句ながら大吉と出ると何となく淡い嬉びが胸に湧いて、
「今日は大吉だ。思ひごと叶ひます。待人來ます。はゝゝ。何かいゝ事がありさうだね。」
「まあ、まあ。きつう書いとおすえなあ。ほんまに何ぞえゝことが御座りまつしろえ。」と、婢衆は笑ひながら、「どうどす



また今夜も舞妓はんなとおしらせやすな。」

「さうだね。また電話をかけて貰ふかな。」私は心を決し兼ねてあやふやな返事をする。

姉衆はそれをきくと、私の顔色をよみながらついと立つて奥へ入つてゆく。やがて遠くの方の電話口で、耳に馴れた舞妓の名を繰返へす聲が聞えて來る。………

それから三十分も經つかたゝないうちに若い藝妓と、二人の舞妓が、

「おほきに。」

「おほきに。」と、賑かに云ひながら玄關の方から床へとほつて來る。

その頃は銀砂子を撒きちらしたやうに光つてゐた星の色も淡く褪せて、東山の上には眞圓な白い月が夢のやうに浮び出てゐる。蒼ざめたその光は彼岸の家並の陰を黒くくつきりと描き出して、斜に河原の方へ射し渡つてゐる。二筋に分れた河瀬には銀鱗のやうな漣が騷めいて、冷々する夜風の底からは何處か遠くの茶屋で騒いでゐる絃歌の聲がかすかに泝つて來る。

「こゝはほんまに涼しうて宜しうおすえなあ。」と舞妓の一人は輕ろげな絽のだらりを揺めかしながら欄干に寄つて、「私(あてえ)ら今池鶴はんへ寄せて貰うてたんどつせ。もう暑うて暑うてなあ。舞ひをひとつ舞ふたばかりやのに、もう背なかゞぐちやぐちやになんのどつせ。」

「ほんまに暑うおしたえなあ。そやさかいに又あんたはんのところへ電話かけて寄せて貰はふ思うてたんどつせ。」と、他のひとりも私の側へ來て坐りながら、小さな扇をとり出してはたはたと袖口から風を入れる。

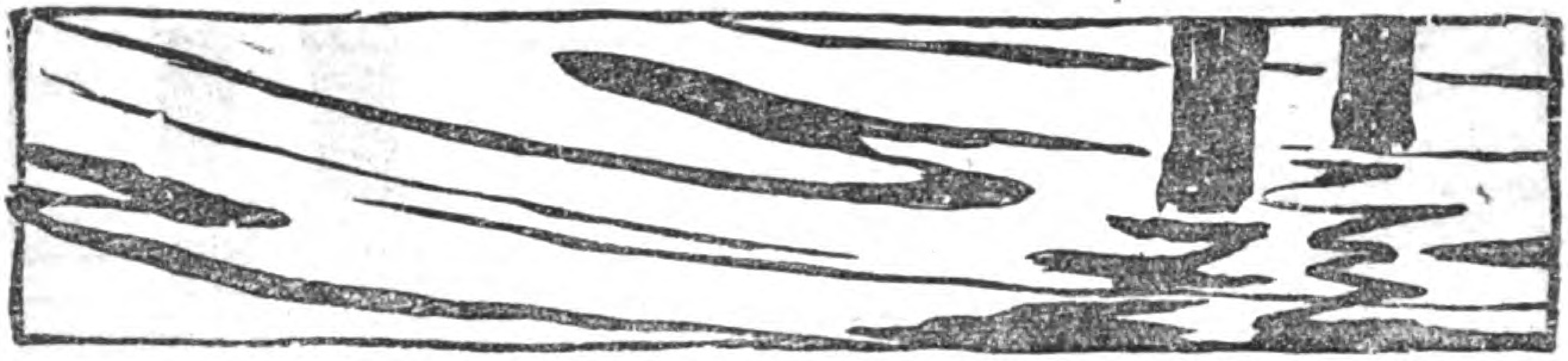
何か冷たい飲みものを命じてやらうかと訊くと、

「ほんならえらい濟んまへんけど、私(あてえ)に氷金時よんどくれやすな。」

「私はサイダ欲しいわ。」

と、各々勝手なことを云ふ。

その時、欄干に倚つた舞妓は、河原の方を見下ろしながら、突然、



「ほ、また何處ぞで流さはつたえ。」と、叫ぶ。と、みると河かみの黑い團栗橋の影から二つの少さな灯がゆらゆらと揺れながら互に追ひつ追はれつ流れて來る。それは中身をくり取つた水瓜の皮の片破れに白蠟をともして浮燈籠のやうにこしらへたものであつた。何處かの舞妓か娼衆の手すさみであらう、そのなかには七夕の色紙のやうなものさへ張りつけてある。

「ほ、危い、危い。」と舞妓達はともすると水の流れに覆へされやうとする灯の安危を氣遣ひながら手を打つて喜んでゐる。私は足早に流れてゆくその灯のあとに殘る淡い情趣と、舞妓達の美しい姿と、涼しい夜風と、月光とに惑はされながら漸次と魔術にかゝつてゆくやうに抑へ難い愉悦の波に心を浸してゆくのである。…………

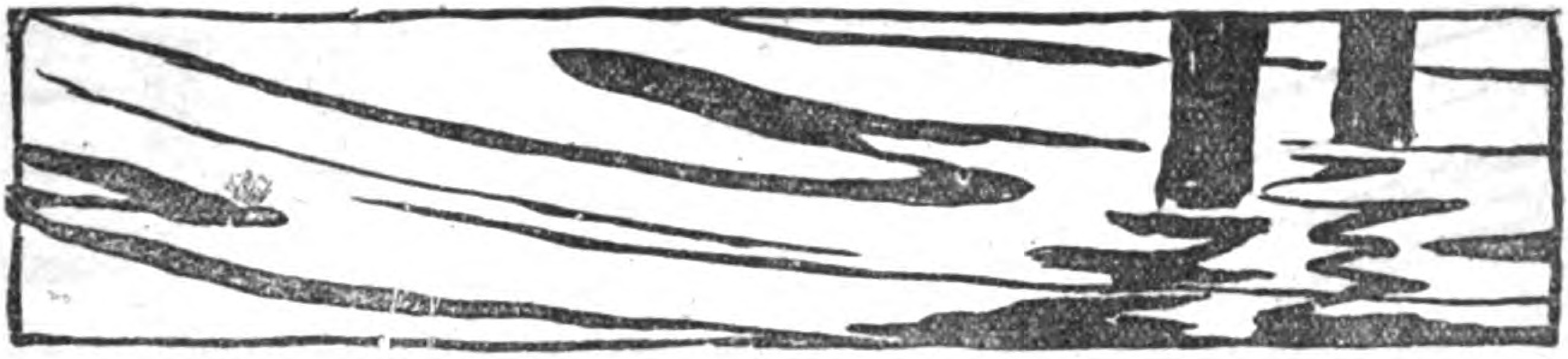
夏の夜の木屋町。これは私にとつて忘れることの出來ぬ京都の印象の一つである。

宇治の初夏

夕立のやうな俄雨の降りすぎた宇治の町には茶の匂ひと薄ぼけた灯の光が妙に古めかしい感じを與へてゐる。私はそのなかを、泥濘の水溜りを避けながらぶらぶら歩いてゆくのである。

町を出はづれて古風な宇治橋の南詰めから右へ入ると、眞暗な道は自ら平等院のなかへ導いてゆく。折柄の五月闇で、眞黑な樹立の陰へ入ると、何處からともなく蛙の聲が靜かに聞えて來る。此處が扇の芝、彼處が釣殿と大方見知つた方角を見定めて漸次と奧へ入つてゆくと、やがて鳳凰堂の前の古池へ出る。息塞まるやうな新綠の匂ひが四邊に澱んで、靜かな夜氣の底に美しい線の流れをもつたあの鳳凰堂の屋根が黑々と空を劃つてみえる。蛙の聲がまたひとしきり寂しい響を波立たせる。蓮の花の咲く頃ならばほの白い神々しいその花瓣が闇と、光の神祕をいかにも力強く描きだす處なのである。今日は雨のあとなので木葉ひとつこそりとも戰がない。

危い石段を足探りに登つて土手の上へ出ると、まるで別な世界へ入つたやうに四邊の風物は俄かに一變する。朝日山やその他の連峰は行手を遮るやうに聳えたつて、宇治の淸瀨は迷路のなかゝらでも流れ出て來るやうに廣々と展開して來る。瀨の音が喧しく堤の樹立に木魂する。



土手に沿うた細路は低くゝ下つて、いつしか渡船の小屋の前へ出る。その小屋のなかゝらは薄い灯の光が末廣がりに流れ出て、涼みに出てゐる逞ましい姿をした船頭の群を照らしてゐる。それから先は再び茶畑と、河岸の草叢とに挾まれた闇がりになるのである。

左手は澱んだやうな靜かな支流で、中書島や伏見、さては又上流の奇勝を探る客を乘せる小舟が幾艘となく岸に纜つてある。その向ふは浮舟の洲で、一面に繁つた葦の彼方に本流の激しい早瀬が奔馬のやうに流れてゐる。

闇のなかにはやがてほの白い浮舟の魚供養の寶塔が姿を現はし來る。十三重の石甃がまるで幻のやうに朦朧とみえる。よく眼をとめて見ると、そこらには幾十となく群をなした螢が星のやうな蒼ざめた光を喘がせながら右往左往に入り亂れて飛んでゐる。或ものは低く、或ものは高く、そしてまたあるものは流星のやうに水の面と摺れすれになつて何處ともなく飛去つてゆく。

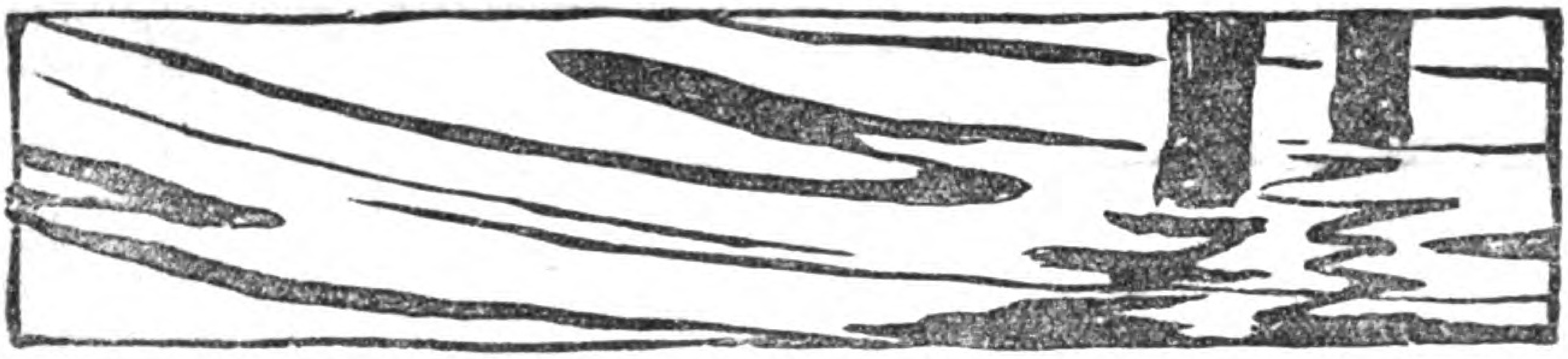
「花やしき」は丁度その浮舟の洲が盡きたあたりの右ての山添ひにあるのである。手廣く取り廻した庭園のなかに四疊半、六疊ぐらゐの小間をもつた粹な建てかたの家が幾棟となく散在してゐる。水に近く、山に近く、そして又春は櫻の花、初夏は夏草の綠を誇る洛西洛南の平野を一眸の下に收めることの出來る景勝の地を占めてゐるのである。

私は京都の近郷で、嵐山よりも嵯峨よりも此の宇治の風物を愛した。單に野趣ばかりでは滿足の出來ぬ氣の多い旅人には、自然のうちに何處か趣味の統一をもつてゐる此の地の山川の姿が最も氣に入つたのであつた。京都に疲れ、京都に倦んで來ると、私はいつでも汽車に飛び乘つてこゝへやつて來た。そして平等院の闇路を辿つて、浮舟の柴橋のほとりまで步いて來て、遠く「花やしき」の窓に點つてゐる數々の燈火の色を眺めると、何といふ譯もなく嬉れしさに胸が喘いで來るのであつた。

入口の石段を上ると、掛茶屋のやうな感じのする帳場から、

「ほ、お越しやす。」といひながら、美しい眼をもつた娘さんか、新夫人のやうな姿をしたお千代さんか、或はまた浮世繪のなかの世話女房のやうに眉を靑く落としたお菊さんかが必ず出迎へる。

「まあ、まあ、長いことで御座いましたえな、さあ、どうぞ奥へお越しやしとくれやす。」と愛想よく先へなつて、飛石づ



たいに奥の方へ案内してゆく。やがて私は一番河に近い粹な圓窓のある二階座敷へ上つて、窓近く置かれた籠洋燈の火影に疲れた腰を下ろすのである。

ひと風呂つかつて、さらりとした肌ざはりのいゝ浴衣に着換へて歸つて來ると、薫りの高い此家の手製のお茶が餉臺の上て寂しさうに私の歸りを待ち詫びてゐる。やがて芳醇な酒と、肴がそこへ運び込まれる。殊にその季節の若鮎は宇治にふさはしい味をもつてゐる點で最も私を歡ばせるのであつた。

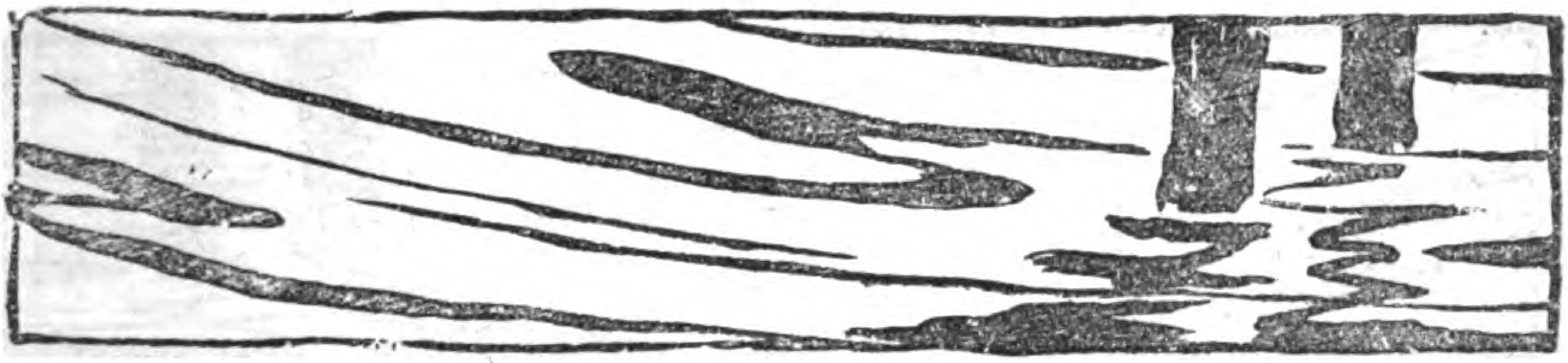
杯の數が重なつて、淺い酒の醉ひが頰に出て來る頃になると、飛石を踏む下駄の音がかすかに聞えて、やがて、「まあ、おいでやす。」と、云ひながら女將さんが上つて來る。

人並すぐれた廣い趣味性をもつた此家の女將さんは決して私達を倦ませることがなかつた。自分も杯を重ねながら次から次といろいろな話題を見つけ出して、いつも話は盡きることなく展がつて行つた。舞妓の話から、文學談、それから小說のなかに描かれた主人公の批評、そしてその批評は兩性の間に起る戀愛の極致とか、情死とかいふやうな感傷的な事實の感想にまで展がつてゆかなければやまなかつた。さうした點で女將さんは一種の獨得な見識をもつてゐた。

なにかの用で女將さんも、お千代さんも、お菊さんも一時に去つてしまうと、私はたつた一人ぼつちになることがあつた。靜かに酒を啜りながら涼しい夜風に吹かれてゐると、私の胸にはさまざまな情感が滲んで來る。旅の思ひ出や、長く別れてゐた東京のことなどが夢のやうになつて浮んで來る。興趣の盡きぬ饒舌の後のかうした沈默がいつも私には云ひ知れぬ歡びを與へた。そして、まるで釘づけにでもされたやうにぢつと坐つてゐると對岸の興聖寺の鐘が思ひがけもない間近でごーんと長い餘韻をひきながら聞えて來る。その響は狹い谷間から眞暗な水を渡つて、指先に支へた杯の底まで韻々とひびき渡るやうに思はれる。一點、二點、三點……そして九點、十點に及んで私は初めて夜が更けたのを知るのであつた

それから何時かの後、また誰れかの聲が戸の外に聞えて、「あちらにお床をとつて置きましたさかい、どうぞお寢みやしとくれやす。」と、いふ。

私は立上つて、庭下駄をつゝかけて庭へ下りる。低い樹立の陰にともつた灯もしつとり夜露に濡れて、案内にたつ人の横顏と踵ばかりがほの白く闇に浮いてみえる。



「もうそろそろ郭公が啼きまつせ。」ひそりとした夜氣のなかにその人の聲がまた聞える。私は郭公を聞くことは欲しなくても、土地にふさはしいさうした言葉を聞くことが又なく嬉しかつた。

私は人氣はなれた「花やしき」の粋な小座敷で、獨寢のはかない夢に明ける宇治の夏の夜を忘れることは出來ない。そしてまたその翌朝の鹽茶と、絹漉しの湯豆腐の味をも忘れることは出來ない。その時は、すがすがしい綠がかつた朝風が窓から吹き込んで、朝日山の新綠が眼を射るやうにぎら〱輝いてゐる。そして遠く霞んだ西空には愛宕の峰がうつすり姿をあらはして、浮舟の洲の彼方には泡だち流れる急瀨のうへに古風な擬寶珠をもつた宇治橋が長くかゝつてゐる。快よげな小禽の囀りが裏山から斷えず聞えて來るのである。

大阪の夏の趣味

薄田泣菫

大阪の夏の趣味――といふと、私には何よりも先きに祭の事が思ひ出される。大阪の祭は大抵夏祭で、七月の八日九日の生魂祭から始まつて　難波祭(十二、十三)、八幡祭(十四、十五)、御靈祭(十六、十七)、高津祭(十七、十八)、稻荷祭(二十、二十一)、座摩祭(二十一、二十二)、天神祭(二十四、二十五)、を經て七月三十一日と八月朔日の住吉祭で一先づ濟んでしまふ。その間二十三、二十四、二十五日の三日間は瀨戸物町で陶器で作り物をし、住吉祭には堺の魚市、靱、東横堀で、干鰯で作り物をするといつた風に、それぞれ違つた趣向もあるが、一體祭といへば氏子の家々では前の日から灰汁洗ひまでして、家中殘らず拭き清めた上、表へは定紋の入つた幕を引きまはし、店の間へは金屛風なり、銀屛風なりを立廻し、美しい毛氈を敷いて、番頭が碁を圍んだり、丁稚が將棊をさしたりして、樂しい靜かな日を送る。唯京都の祇園祭などとは違つて此都では屛風覗きといつたやうな事はする人が無いらしい。これは屛風其物に秀れたのが無いのにも依らうし、また市民がさういふ事に餘り興味を有たないのにも依るだらう。



――忘れてゐたが、祭の間は軒には屹度お祭提灯が吊つてある。お祭提灯といつても普通のとは違つて、青貝塗の竿に銀金具をつけた、上部へは總々した白い鳥の毛、下部へは鈴を吊した長提灯で、眞實はその家の子供の數程表に立てる事になつてゐる。祭りの日が暮れると、丁稚が提灯を先に立てて、子供は晴衣を着飾つて宮參りをする。そして御符を貰ひうけると、これを圓く提灯の胴に捲きつけたり、枠へ挿したりして表へ飾つておくのだ。恁うした飾りの間を何の用事もなく徜徉しながら、時々大店の素晴しい店の飾りつけの前に立ち停つてみるのも、祭の宵に相應しい氣持だ。

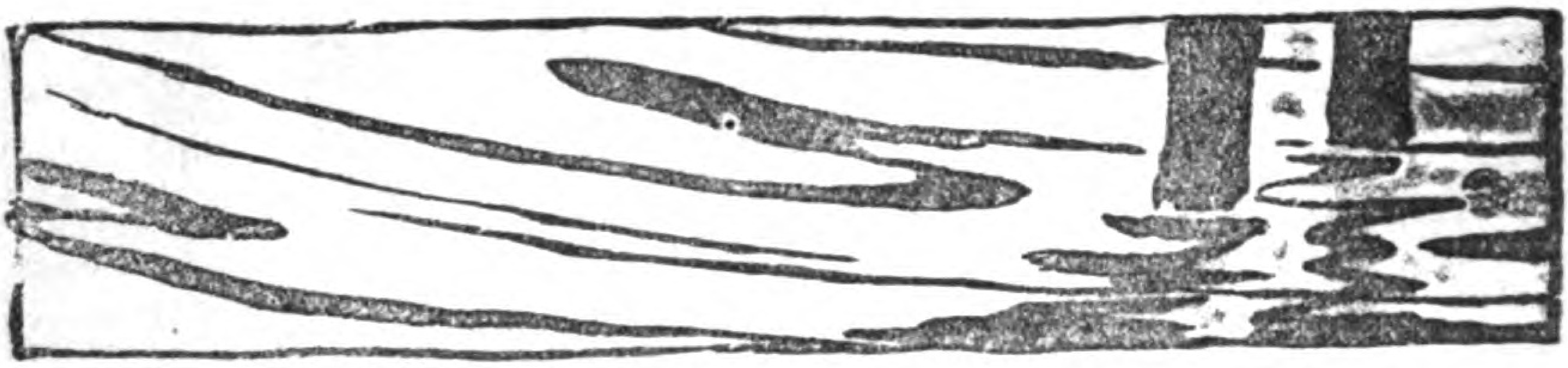
私は京都の加茂祭と祇園祭とに大阪の天神祭を合せて、近畿の――いや日本の三大祭と言つてゐるが、其の中でも取りわけ壯大なのは天神祭だ。天神祭は火の祭なのだ。火の祭といふと、十月の二十二日の夜にある京都の鞍馬祭も火祭だが那は寂しい山の谿間だし、加之に時候も紅葉がそろそろ黄ばまうといふ肌寒の頃なのだから、それ程にもないが、天神祭は砂も溶ける極熱の七月二十四日、都のたゞ中、大川筋の水を渡つて火を流さうといふのだから面白い。血のやうな篝火のあかあかと兩岸の暗を照して流れる間を、靜かに奏樂しながら下つてゆく伶人、八少女巫子、齋部、齋主、鳳輦、御輿といつたやうなものを載せた船は、流れのまにまに眞黑に人集りのした大橋の下を幾つか潜つて夜の明け方に松島の御旅所へ着くのだ。

大阪は人も知つてゐる通り水の都で、大川筋や、横堀が都の血管になつてゐるのだから、舟に乘つて川筋から川筋へ滑らしてゆくと、これまでついぞ知らなつた興味を見つける事が少くない。わけて面白いのは川涼みだ。そこらの横堀へおりて待ち合せた船に乘ると、船は兩軒に立並らんだ町家の裏側、釣忍や、植木棚や、岐阜提灯や、物干竿の下を通りながら欄干にもたれた肌ぬぎの大年増や、だらしなく胸元を寛けた若い娘に見送られて大川筋へ出る。町では暖簾一つ搖がない蒸暑い日でも、堂島川とか土佐堀川とかへ出ると流石に風が吹いてゐる。大阪では其邊の川緣に芝藤とか鮒卯とかいつたやうな船生洲があるから、料理を持込むのを忘れてゐたら、そんなところへ漕ぎ寄せて何か一寸したものを見繕つて貰ふ事が出來る。さうかうしてゐるうちに日がとつぷり暮れて、夕闇が川面一杯に落ちると、そのなかを拔き染めにしたやうな灯のあかりで初めて自分の周圍に幾百といふ數の知れぬ川逍遙の船が居たのに氣がつく、何處かで花火を打揚げる音がする。天には氣忙しさうに星が流れてゐる。ふと聽き覺えのある聲が笑ひさざめいてゐると思つて、それとなく舟を寄せて



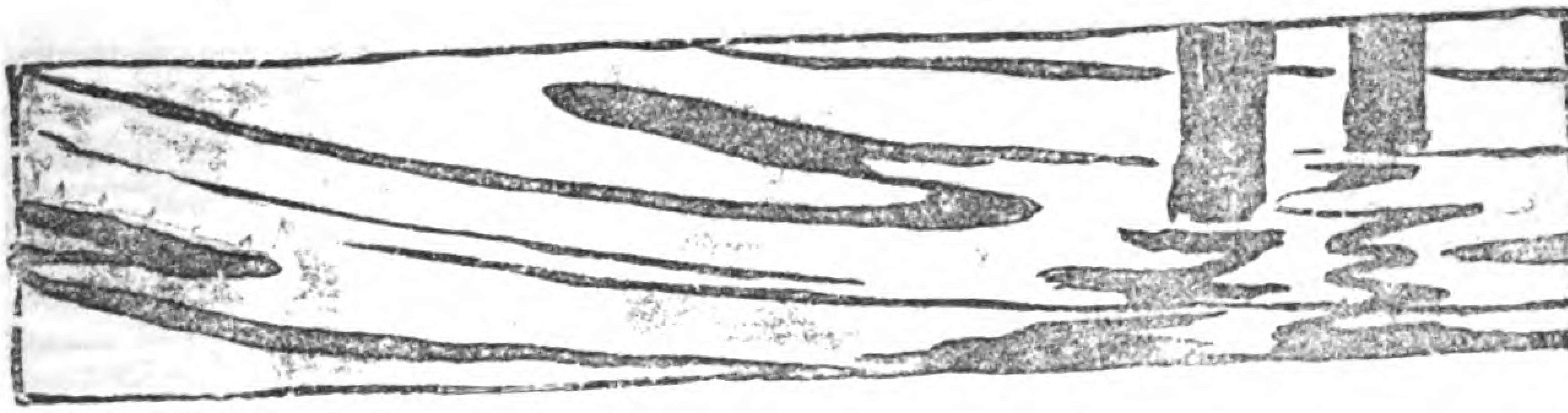
みると、つい行違ひになつて一年越し會はなかつた大店の主人が、化粧のものを二三人引連れて陽氣に騷いでゐるのだ。兩方の舷に摩り寄つて、互ひに杯を取りかはしたと思ふと、いつの間にかまた別れてしまふ。そのなかを無遠慮にずつと押し寄せて來るのは、酒の舟、鮨の舟、果物の舟、一口淨瑠璃の舟、新内の舟、浮れ節の舟で、それぞれ一寸した商ひをすると、直ぐまた闇のなかへ漕ぎ去つてしまふ。恁うして餘り遊び過ぎてふと氣がついてみると四邊には船の灯も既うちらほらと數へる程しかなくなり、遠くの下流に音締の緩んだ三味線の撥音が眠さうに流れ、空には露の氣がしつとりと濕つて、夜も大分更けてゐるのに驚くやうな事も少くない。――だが、かういふ川遊びも段々廢れて來て、今ではほんの物數寄な人達でなければ行らなくなつたのは惜しい事だ。

四つ橋は夕涼みの名所として聞えた所だが、今は市内電車が縱横に那處を通つて、隨分騷々しくなつたので涼みには向かなくなつた。實際市内電車の敷設と、郊外電車の發達（大阪の近郊程郊外電車の發達したところは先づ無いといつていゝ）とは、さういふ遊びの趣向や位地をも變へずにはおかなかつた。以前は四つ橋とか其邊の横堀にかかつた小橋で涼みを足したものが、今では無暗に足を遠方まで伸ばすやうになつて來た。先づ一番手取早いのは築港に出掛ける事だ。築港終點で電車を下りて、棧橋を傳ひながら沖へ出ると、左に岸和田、右に神戸あたりの灯が浪越しにちらほら數へられる。棧橋のとつ端で冷たい麥酒を傾けながら、海一杯に吹いて來る潮風を浴びるのもよいが、それよりも面白いのは、棧橋で鱸の夜釣をしてゐる人を見る事だ。棧橋の板と板との間が心持明いてゐるので、釣好きの男は、そこらに腰をおろし、兩脚を前に投げ出して其の隙間から釣絲をおろす。手もとの短い釣竿には鈴が吊してあつて、魚がかゝると鈴が鳴る仕掛けるなりてゐる。手應へがあると直ぐ鈎を合はせて引揚げるが、何といつても板と板との隙間にほんの一寸しか開いてゐないので、そこから魚を釣り上げるわけには往かない。さういふ場合に此方から一寸合圖をすると橋の下に船を繋つてゐる男はそら來たとばかり綸を手繰り寄せて獲物を提つて呉れる。恁うして獲物一尾について幾らかづゝの口錢を貰ふ事になつてゐるのだ。幸田露伴さんの談話によると、往時深川の木場で鱮釣をした人のなかには、後に小さな金屛風を立て廻らせて、そのなかで酒を煮ながら心靜かに魚を釣つたさうだが、さういふ魚釣を見るのは陽炎のもえる春の日が應はしいやうに、大阪築港の鱸釣を見るのは何時よりも夏の夜がいゝ。



も少し遠くを厭はない人は電車で箕面へ出掛けるのも面白い、同じ線路にある寶塚には溫泉もあり、河鹿も鳴くさうだが、私は矢張箕面の方か好きだ。實際箕面の山の緑は、景勝の地に饒かな近畿のなかでも一寸見附り難い程の色を見せてゐる。紅葉もいゝが、紅葉よりは矢張新緑から深緑になる間の方がいゝ。私は那處へ往くといつでも着物を草の上に脫ぎ捨てゝ、谿河の淺瀨に飛び込んで、河鹿のやうにそこらを這ひまはるのを娛みの一つにしてゐる。

住吉公園の逍遙も夏の捨て難いものゝ一つだ。あすこの社頭にづらりと竝んだ石燈籠の字には、名家の手蹟が多いといふので、好事家の仲間に珍重がられてゐる。夏の朝まだ人通りの少い、しつとりと露に濡れしめつた途を踏みながら、冷たい石の肌を撫でゝ、大雅堂、山陽、小竹、海屋といつたやうな人の書を發見け出すのも忘れ難い趣きがある。社の前から濱邊に續く松原も、下草が柔かいだけにぶらぶら歩きには持つて來いだ。確か大阪に博覽會の開かられた夏だつたと思ふ。德富蘆花君と二人あの松原を徜徉いた事があつた。蘆花君は國木田獨步君の噂をして、『那の人は一應壓へつけられても直ぐまた浮き揚つて來る。――恰で浮袋のやうな男ですよ』と言ひさして、ふと脚もとに咲いてゐる小さな紫の花を見つけ出して、『これは何といふ花でせう、御存知ありませんか』と訊かれたが、私もその草の名は知らなかつた。其の後住吉公園に往く折にはいつでも那の草が一番に眼について、そして今でも眞の名を知らないのが氣に掛つてゐる。此頃德田秋江君に聞くと。同君はあすこの松原で金の帶をしめた男に遭遇した事があるさうだ。何でも指には悉皆金の指環を穿めてそれでも飽き足りないらしく、大形の鎖にした黃金の帶を締めてゐるのださうだ。人品骨柄はいかにも卑しい、荒くれた土方の親分か、相場師かといつたやうな人だつたさうだ。私はそれを聞いて深紫の紋天鵞絨の羽織に、大粒な血球の珊瑚を紐にした毛剃の事を想ひ出さずにはおかれなかつた。大阪には偶にそんな人を見うける事がある。



大阪の夏の印象

岩野泡鳴

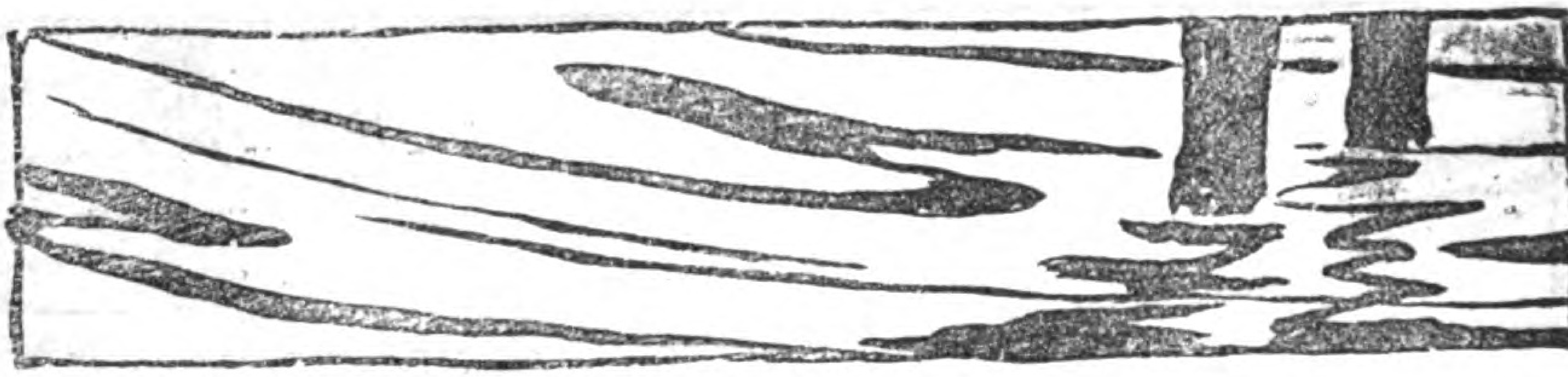
大江橋

梅田停車場前を、電車で左りへ行つて一度まがつて、それから眞ッ直ぐに大川へつき當つたところの橋が大江橋である。僕等を中の島へ渡す役目をしてゐるのと、そこに乘り換へ場があると云ふ外には、何でもない橋である。そんな橋がなぜ僕のあたまに長く殘つてゐるのか、そのおもな原因は時々僕自身にも忘れられてゐる。

そりやア、某新聞社の記者であつた時は、夏の暑いさかりにでも、毎日でないとは云ひながら、必らずこの橋を渡らなければならなかつた。そしてそれを渡る時は、その下を頻繁に通ふ十噸や十一噸の巡航船がきッと見えた。そしてまた二三ケ所の水泳指南所では、平べッたい船を浮けて、多くの眞ッぱだかの少年を泳がせてゐるのが見えた。上から見てゐると上手な泳ぎ手もあるが、多くは船を離れるとあぶ／＼しさうなのがあぶなッかしかつた。

この橋を渡つてしまうと、右に立派な煉瓦づくりの日本銀行支店があり、左は公園で、その中には石の大きな府立圖書館が見える。半町も行かないのに、また電車は淀屋橋と云ふのを渡らなければならない。それが大江橋をから長くおぼえさせるだけの資格にならうか？無論、雨の降つた日に、社の用事で車を走らせた時、頓馬な車夫はこの橋の中央を行かないで、左がはの人道に車をあげたので、巡査から注意を受けたことがある。が、それも何ほどの記念にならう？

云つてしまふが、僕は、實は。この橋の上で、――巡航船が凉しさうに水を切つて進むのを見おろしながら、――初戀の婦人のありかを思案に暮れたことがある。僕の二十一歳の時のことだが、東京で或別な婦人と約束をしたところ、どうも前のに濟まないやうな氣が込みあがつて來て、丁度、暑中休暇であつたのを幸ひに、四五年振りで、關西へ出かけた。まだ國にゐた時、國を出て親と共に親の故郷なる東京に行くからと云つて、別れた切りで、その後さきは行くへが分らな



かつたのだが、大阪で看護婦をしてゐると云ふことを耳にはさんだだけで、僕は東京から探しに來たのであつた。

二三の大きな病院に當つて見たのであつたが、その時は分らずにしまつて、歸京後、僕は第二の約束者と結婚をしてしまつた。ところが、その後十年も經つてから、僕はまた大江橋を渡つたことがある。その時代に、意外にもさきの婦人の居どころが分つたので、その家へ訪ねて行つた。僕を愛して異れたその父親なる人は死んでゐなかつたが、母なる人の話に據ると、丁度、さきに僕が探した頃、渠は何でも早く僕の居どころが分ればいゝと云ひながら日をつぶつたのであつたさうだ。餘りお話のやうだが、この時まで娘は產助婦――としては、まだ世間が信用を置き切れない年輩だが――をして獨りで母を養つてゐたが、僕が行つたと同時に半分燒けを起して、間もなく餘り好かないと云ふ所天を持つた。

その時、僕は大阪附近の中學に敎師をしてゐたのだが、やがて辭職をして東京へ歸つたので、またその母子に會ふ機會がなかつた。それから八九年して、僕はまた大阪に行くことになつた――それが新聞記者としてだ。さきの婦人のひとり息子は拾いくつかであつた。今度はその息子とその母とを伴つて、僕は一度大江橋――その近處に渠等竝にその老母の家があつた――の欄干にもたれて涼みをした。まだ日の全く暮れない夕方であつたが、僕等のわきを綺麗なお座敷姿の舞ひ子が棲を取つて、その姐さんらしい藝者と、氣まぐれにも歩いて通つた。その時には、無論、まだ電車が引かれてゐなかつた。

『お母さん』と、おツちよこちよいのやうに悧巧な子が母から奪つて使つてゐたうちわを以つて舞ひ子を指さして云つた、『あの子をつれて來て、うちのをなご衆におし、どこのをなごしもきたないさかい、なア。』これが僕の大江橋を聯想する一番おもな原因だ、その時にも、その下を小い巡航船は水を切つて、その跡に白い水筋を引いて進んでゐた。

妙見さん

妙見大菩薩は一種特別な起源があつて、佛敎のものではなく、本當はマホメト敎、乃ち、回々敎の渡り者てあるから、その紋じるしにも土耳古の國旗と同樣の三日月がついてゐると云はれてゐるが、僕が大阪で見た自安寺の妙見さんは、日蓮宗で、紋どころも赤十字の四端を三角に切り窪ませた物である。



大阪には、全體、東京よりも迷信が多いやうだ。新町や千日前の夜店をぶらついて見ると、青々した植木屋は少く、玩具屋、瀬戸物屋、喰ひ物店などは變はらないとしても、ほうしの玉や、木造または瀬戸の稻荷の社を竝べた店と、神棚道具を備へ付けた店とが、多くまた可なり大きいのがあるのに驚く。東京では、稻荷の社など賣つてるのは滅多になく、ほうしの玉も銅錢の貯金箱として今戸屋の片隅に並べられてるばかり、神棚道具も亦年末の酉の市に竝ぶくらゐのところを大阪では買ひ手が多いからであらう、不斷の夜店、乃ち、東京の所謂緣日に出てゐる。

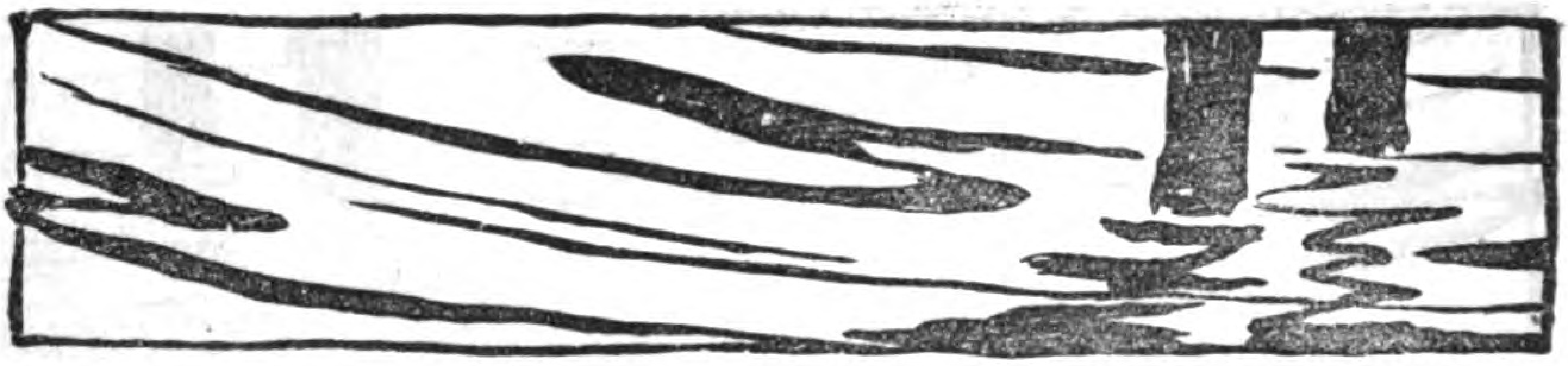
毎月廿一日、殊に彼岸の廿一日には、うこん木綿の米袋を提げて、若い娘までがお大師さんへ詣り歩くのも奇觀の一つだが、午の日はまた妙見さんだ。自安寺はいつも人出の多い千日前にある。たださへ暑苦しい盛夏に、而もまた苦しみを添へる人込みの中を、夕方からとは云ひながら、大阪の信心家連はこの妙見さんにまゐりに出るのである。

眞ッ赤な色の切り違十字形の徽章がついた正面欄間のもとに手を合はして、いそがしさうな早口に南無妙法蓮華經をくり返してゐるものには、藝者もあれば職人もある。かみさんもあれば商人、番頭らしいのもある。お婆アさんもあれば小僧もある。そして渠等が手に持つてゐる竹べらを一同に一つ宛傍らの箱に投げて回數を計りながら、堂のまはりを——矢張り、早口に題目をも投げつけながら——まはり歩くのである。

小い堂をかこつた狹い周圍の道を、人間の數も多く、足のあゆみも小きざみに、殆ど夢中でまはるのだから、僕等がその逆(ぎやく)にでも這入つて見ると、若い娘やお婆アさんにつき當りどほしだ。

ナンミヨ、ホーレン、ゲーキヨ！　ナンミヨ、ホーレン、ゲーキヨ！　ナンミヨーちよか〳〵、ホーレン——ちよこ〳〵ぱッたりゲーキヨ！

いつまで慾張つてまはつてゐるのか分らない。手には火をつけた線香の一束を持つてゐて、正面へ來るたんびに、二三本づつ大きな金の火鉢の盛りあげた灰の中へさす。そして手にそれが無くなると、安心して歸るものもあれば、また買ひ足すものもある。買ひ足したものはまたお題目でまはり初めるが、何のことはない、精神もない木像を前からも後ろからも、右からも左りからも拜むでゐるありさまは、丸で隱し女が根のあまい且那をたらし込まうとする圖だ。そして渠等が殘して行く幾千本の線香の煙が、木像の菩薩を蒸し活(い)かすかとも思はれるほど燻つてゐて、僕等は却つて息が詰まりさう



だ。

僅かに堂内を出て涼しい夜風に當るかと思へば、矢張り狹い境内を層一層狹苦しくして、數へ切れないほどの奉納燈が安遊廓の露地の掛け行燈をごツちやに集めたやうに、ごちやごちやちらついて、各々四角な紙の中から、薄ぼんやりの光を放つてゐる。そして紙のおもてには、中村雁次郎だの、梅玉だの、片岡だの、福之助だのと云ふ字が讀める。

僕はそれで考へた、大阪は實生活に於ても、また藝術の上からも、飽くまでも人工的な地獄若しくは天國だど。

九官鳥と『一靜』とかじか

大阪の市街には花も咲かない。柳の綠もない。天然として存在してゐるのは、蒼空と白い水だ。然しその蒼空は年中多くの製造場の煤煙にみなぎられて、住民の肺臓の裏皮には、黑い物がくツつき溜つてゐると云はれる。そして僅かに息のつけるのは、ふんどし一つで物干し臺に出て、家根から家根を渡る月を見る時だ。その水はまたよどみ勝ちで、諸方の堀にはぼうふらを飛ばしてゐる。やツと氣持ちがよく、また便利なのは、大川を巡航船で渡る時であつた。近年、電車が市中を諸方に通じるまでは、この小汽船が手車に次いでは第一の交通機關であつた。

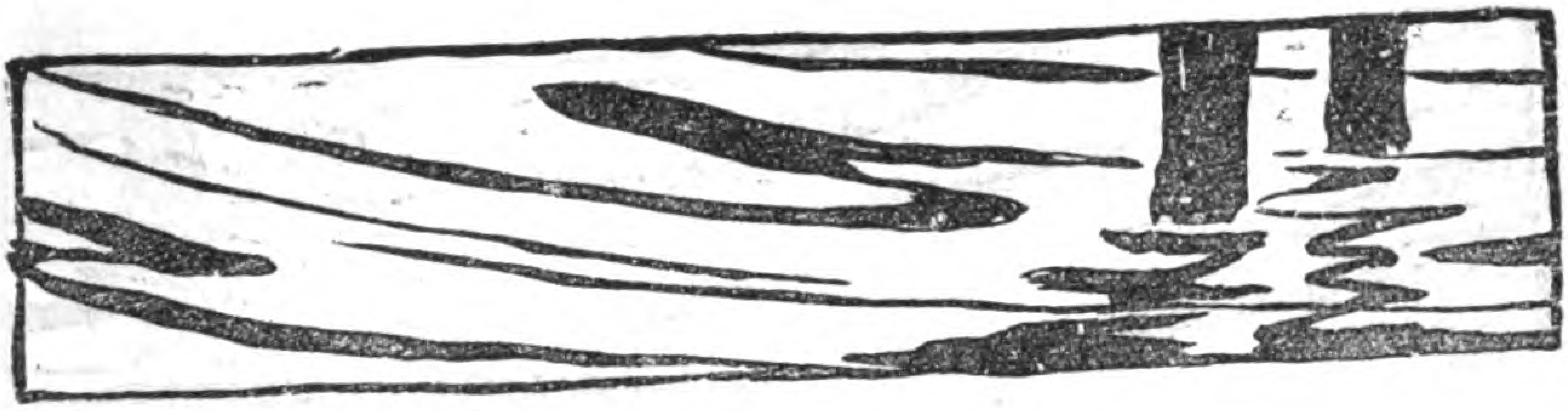
小い船だけれども、隨分乘り手が多かつたので、乘客は『もツと詰めておくれやす』を度々云はれた。そしてへさきの窓にくツついて腰をかけてゐた客の一人が或時眞顔になつて、

『この上詰めたら水の中へ落ちまんが、な』と云つた。

『ついでに、丁度ええさかい、泳ぎまほか？』

『そやそや、この暑いのに、こないに忙しうてはかなひまへん。』

それをまた僅かに免れるのは、郊外電車である。濱寺の長くつづく松原を背にして、洗つたやうに綺麗な海濱から、茅渟の海の涼風を臨んで見給へ。一勝負玉突きをやつて、或料理屋でざツと汗を流し、輕い浴衣で二階の欄干によると、かの壓迫する煤煙のおそれもない空氣は自由に呼吸せられた。そしてそこで『お父さん、』『お母はん、』『まア、お這入り』など頻りにおしやべりをしてゐた鳥が、暫く默つたかと思ふと、不意に酒を『まア、一杯』と云つた。



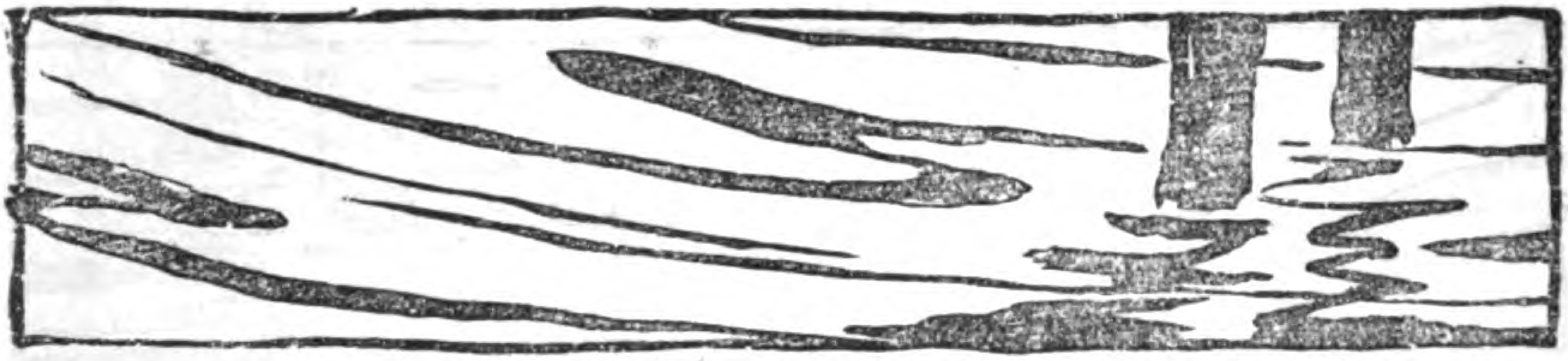
鸚鵡かと思つて、綺麗に方づいてゐる庭の中を見おろしたら、緋鯉を放つてある池の眞ン中の橋のたもとに、松の枝から鳥籠がぶらさがつてゐて、鸚鵡よりは小い、細身の、そしてきたならしさうな小鳥が、その中のとまり木にしよんぼりとまつてゐるのが見えた。

鳥の名をよくはおぼえなかつたが、その翌年、また暑さを訴へる頃になる少し前のことだ——ちよツとした一山をその境内に取り込んだ箕面の動物園で、時鳥啼合せ會と云ふのがあつた。鳥源と云ふ、ほととぎすと鶯飼ひに氣違ひなおやぢが主催になつて、『一静』とか、『殘月』とか、『若葉』とか云ふ名の付いた八千八聲連が、何でも十一二羽、大阪を初めとし伊勢、大和、熊本、伊豫、土佐などから集つた。三百五十圓と云ふ一靜がその場の隊長であつた。すべて羽根は鼠色で、胸の柔毛(にこげ)は白に鷹の紋がある鳥だ。ひとりで口を大きく明けると、眞つ赤に燃える喉の奥が見える。血を吐くとはそのことだらう。

時鳥は鷹五十八種の一つで、それがまた郭公、佛法僧等の五種あり。仙臺などでは、人の庭さきにとまつて啼くのがあるが、それは郭公で、眞のほとゞぎすは深山でなければ木にとまらない。隼のやうにしゆッと風を切つて谷合へ飛んで來て、木成りにとまつて、二三十回つゞけざまに啼いてから、カ、カ、カ、カと叫んでまた飛んで行くが、自分の巣は造營しないで、淨瑠璃にある通り、卵子を鶯の巣に産みつける。卵子が孵へると鶯はその巣へ蟲を運び行き、出ろ時は必らず糞を喰はへて來る。ところで時鳥は鶯よりも大きいので、口を明けて蟲を受ける時、鶯の額までを頬張るわけになるから、鶯が巣を出る時顔が一面濡れてゐるのを見て、あの巣には必らず時鳥が孵つてゐると見當が付くのさうだ。

全體、苦勞人でも、時鳥を專門に取りに行くものはない。鶯の巣を見付けに行つて、意外の獲物をするのである。この鳥が暖國から渡つて來る時、並にもとへ歸つて行く時は、夢中にあせつて大速力だから左右を忘却して、鷹や烏に蹴られて川へ落ッこちたり、白壁にぶかつてころげたりしたのを、よく拾ひ取るものがあるけれども、それは決して啼かない。どうしても、子飼ひからでなければ行けないさうだ。そして大阪へ[illegible]來てゐるのも、すべて土佐で取れた子飼ひ物であつた。

『さア、啼かせまッせ』と、源おやぢはビールの一杯機嫌で蓑蟲を入れた小箱を手に取つた。丁度、さみだれの晴れたり



止んだりする山の上であつたから、青葉の色もさえ／＼して、僕等の道をのぼつた時の汗は引込んでゐた。おやぢは愛兒をいたはるやうにこちらの木蔭、かしこの岩の上をまはり、時鳥の籠へ一々箸を以つて蓑蟲を與へてから僕等の待つてる亭へもどつて來ると、やがて一羽が啼いた。すると、また他のもすべてそれについて啼き出した。そして獨りでにこ／＼してゐるのは、渠であつた。

時鳥は、ホンゾンカケタカ、ホットンカケタカ、テンピンカケタカ、テツペンカケタカなど、いろ／＼に聽えるが、甲聲と乙聲とをはツきり區別して出すのがいいので、而もその跡で『一靜』などはカ、カ、カ、カと甲乙兩樣の聲をよく啼きわけた。

この催しの餘興として、山上の翠紅殿には、毛變はり黄目白、鶯と猫との眞似をする滿洲ひばり、おのづから尺八の追ひ分を吹く琉球鳩などが竝べてあつた。その間にまじつて、僕が名を忘れてゐた鳥もゐて、これはまた喇叭節をやつてゐた。九官鳥と云ふのだ。

箕面は、市中から、五里の道を電車でたツた三十分で行かれる。動物園の門前を過ぎて、狭いが奥行きの非常に深いかの幽谷には、清い谷川が道をつけて、こんもりと楓の青葉が繁りつゞく蔭に、せん／＼と流れの音を聽かせてゐる。夜、若し電燈のつき並んで青葉を照らすもとに、四五分も立ちどまつてゐると、直ぐそのそばでかじかの鳴く聲が聽える。僕は、去年、そこのかじかを捉へたと云ふ人から、一つがひを貰つて來たが、その翌々日から僕の書齋で鳴き初めた。

天神祭

夏のことであつた。

『火事だ、火事だ』と騒いでるものがあるので、家から飛び出して見ると、五里隔てある大阪の夜空が眞ッ赤になつてゐる。まだ宵であつたので、僕は涼みがてら電車に乘つた。書齋にこもつてゐれば、暑いことは暑かつたが、外には風があるし、いつも速い電車であるし、おまけに焦げさうな遠方の空をこちらから無責任にながめてゐるのが、一しほ氣持ちのいいものだ。



車内では、北の新地の大火事の時のことを話してゐるものもある。また、天神祭のことを云ひつてゐるものもある。

『ほんに、今夜は、そやつたかナ』と、忘れてゐたことを僕は思ひ出した。

『お祭のかがりにしては』と、一人は窓からその方をのぞきながら、『火の勢ひが强おまんが、な。』

『そや、なア――火事だッしやろか？』

「火事なら、仰山燒けてまッせ。』

『大阪一體のやうやないか？』

『そないな火事があつたら、どないしまほ？』

『えらう心配しなはるやおまへんか――何ぞ大けな取り引きでも？』

『さよだッせ』と、聽かれたのが笑ひながら、『得意さきからの註文で、大阪へ机を一つ賴んだんだす。』

『は、は、はア』と、あたりの人々も笑つた。

『火事が動いとるやおまへんか』と、十三驛近くへ來た時、云つたものがある。

『そや、なア――して見ると、矢張り、船神輿のお渡りか、な？』

『えらいもんや、なア。』

『今晩は、天氣模樣でこないあから見えるのやろが、な。』

何にせよ、有名なお祭りの夜だ、天滿の天神から船の神輿が出て、大川を上下するのに、幾百艘の小船がぼんぼりや焚い松をともして、それに從つて行くのだと聽いてゐる。それを見られるのが僕の樂しみになつて、電車が大阪に着くのが待ち遠しくなつた。

やがて梅田へ下車したが、右も左もおそろしい人出だ。滿員ばかりの市電には、無論、乘れない。歩いて中の島へ出た時は、空にうつる光は少しうすらいだやうであつたが、それでも人々はどし〱集つて來るばかりで、歸るものはない。そして戸外を人いきれの中に埋められながら、頭上の映光が段々薄らいで行くのを見るばかりであつた。

僕はどこかのすきに這入つて神輿の後ろ姿だけでも見たいと思つたが、どこにも樂なところはない。そして

喉がかはいて來たので、傍らの氷屋へ這入つたが、ここも人込みでなか〱順番がまはつて來ない。そのうちに、渡御式は全く終つてしまつて、五里さきで大火事と見えた空のあかりも、あたり前の夜空になつてしまつた。

僕には、天滿天神の神輿は天空を渡つたのであつた。そして餘りめづらしかつたので、神輿その物を見ることは出來なかつたが、神輿の威光だけが見えたのだ。そして僕の珍らしさの熱も、氷が口に這入ると同時に段々さめて行つた。

人物評論（三十九）

外交界の人物

△現在の主もなる外交家

文學博士　三宅雪嶺

現在の主もなる外交官は、各〻性格を異にし、一長一短あるが、皆平時相應に職務の勤まる人であつて、別段不體裁な事や不手際な事のあるべきでない。只新たなる問題の起つた時有能と思はれぬ事が少くない。多少外交事務に慣れた凡人と思はれるが普通である。

外相牧野男は未だに未知數の人である。世には時として未知數で終る人があるが、或は其一人になりはせぬか。男は或程度まで何の職務にも當り得ると共に、何の職務が最も適當なるかは分らぬ。大久保甲東の息子の中で最も有能に相違なく、沈默にして事を忽せにせぬ處頗る乃父に肖た所もあるので、新たなる職務に就く毎に少からぬ希望を囑されるが、其中〳〵と思はれる間に職を去ることになる。文相として不適當と思はれなんだが、然し結局之ぞといふ事がなかつた。假名遣問題を解決せうとして出來なんだ。農相として不適當と思はれなんだが、然し結局之ぞといふ事がなかつた。米價問題も其儘になつた。外相として如何であるかは現に試驗中であるが、支那に米國に、差當り困難なる問題があつて、何とか處置せねばならぬのであるが、何れも延ばして置けば延ばせる性質のものである。職に在るのは永くて明年中とすれば、其中之ぞと

いふ事をしなくても事は濟む。然し稍と遠い將來を考ふれば頗る重大なる問題であつて、今日の爲し方次第で著しき影響を及ぼす事になるが、其邊の事に敢て手を下すかどうか。男は自ら細かい事務を執れる方である。墺國に公使として電信なんかは自分で打つた。名門の出で飾物といふではない。觀察も隱かであつて、餘り間違はぬ、善い報告をした事もある。然し踏み切つて事を爲すといふ段は疑はしい。小さな事でもなかなか考へるのであつて、いろ〲と考へて終に斷行までに至らずして終つて了ふ嫌がある、首相に斷行力があつて、方針を決定したならば、其方針によつて適當に働き得るであらうが、自ら事を爲すには考へ過ぎる。所謂局に當るものは迷ふで、男は割合に知識がある丈け其れ丈け迷ふやうである。乃父は人に聽き自ら考へ容易に決せぬが、一度決すれば飽くまで貫かうとした。男の深く慮るのは之と同じ格であると思はれたが、今日まで別段に斷行の例を見ぬ。斷行すべくして其儘になつて居る。或は未だ眞に斷行すべき機會がないのであつて、機會があれば迅雷耳を掩ふの遑ないやうな事があるのであらうか。さう思はれながら歲月が過ぎて行きはせぬか。

今の次官松井氏も、取調べたり勘考したりして先き行きがせぬ。斷行力ある人の下では調法であつても、自ら取調べて日を送る人の下ではハキ〲した事のあるべきではない。局長阿部氏が輻を利して居るやうであるが、考へ込む大臣と考へ込む次官の間に居つてはさう見えもするが見えても詰り何程の效果あるか。

在外大使公使には古い人新らしい人樣々である。最も近い處で、支那の伊集院氏は絕えず人に彼是いはれて居る。袁世凱に喰はれて居るとまでいはれるが、氏自らはなか〲さう思つて居らぬ。本省でも强ちさう思はぬ。といふのは塞翁の馬のやうな事がある。淸朝が倒れず革命派が直ちに鎭壓せらるゝと思つたのは全く當てが外れたが、袁が假大總統たるに至つたのは頗る寵を强くし得たのである。三十七八年役に總領事として天津に在つた時、直隸總督たる袁に機嫌を取られ、便利を得た事もある。今は當時と事情を異にして居つても袁はなか〲透かさぬ。無二の親友のやうにも扱ふ。而して本省に於ても列國が袁を相手にして事を爲して居る以上、矢張り之を中心人物としようとする。何にしても國家としての支那の實權者とあつては之と事を議する外ない。而して伊集院氏が最も此袁に近しいとあつては他に如何なる事情があつても之を見離し難い。只餘りに北方の勢に卷き込まれ、全國の趨勢に通ぜぬ疑がある處からして更迭せればならぬともなつて居るが、氏自らは己れより以上に事を爲し得るものないとして居らう。

米國の珍田子は隨分長い經歷がある。それ丈け外交事務に慣れて居る此頃抗議を申し込んで居るが、かゝる問題の知識の素養はどうであるか、かゝることは本省に於て例の取調に從事した結果であつても、多少國務卿及び外交顧問と討論を要する。餘り分らぬ方でなくても、向ふの繰りに練つて來た處を打挫いたりする技倆に於ては如何であるか。彼れの輿論を動かすなど、どうせ運動費が少くて六ヶ敷いとしても、何分に

も希望し難いのである。問題がなければよい大使であるが、今度のやうに複雑した事柄のある場合、徒らに事が長びきはせぬか。

同盟國なる英國の井上氏は父侯の光と、辭令に慣れて居るので相當の敬意を表せらるゝ。只それ丈けの事であつて同盟の關係を一層固めるとか、冷やかになりかけて居るのを温めるとかいふ點に於て多く望み得べきでない。之こそ飾り物であつて、飾り物としては割合に出來のよい方位に見て置くべきである。

他の大使公使、先づ似たり寄つたりであつて、比較的褒むべきものがあり、比較的貶すべきものがあるが、之を云ふのは煩はしい。然し其中でも變つた人物といへば墺國の秋月氏である。氏は普通の外交官と型を異にして居る。此人こそ平常之ぞといふ事はないが、大なる問題の起つた時腕をあらはし得ると思はれるがどうであるか。大隈伯が條約改正に從事した時、氏は一留學生であつた。何人にも故を語らずして歸り、伯に面接して改正案の非なるを論じた。伯は留學生の身分さういふ事をするのは不都合であるといつたが、かゝる事は普通の外交官氣質のものゝ夢にだも見ぬ所である、只餘り其手腕を試めすべき機會がない。或は望を囑されつゝ其儘で終りはせぬか。

何れ公使より大使に上るのがあり、書記官より公使に上るのがあるが多少希望を囑すべきものもあるけれど、寧ろ淺ましいといふべきなのもある。外國語を話せる愚物といふべきなのもある。一通りの儀式をさへせば勤まるのであつて、外國人の間に居ればこそ、內實の性格が分らず了ひになつて居るが、內地の行政に與つて居れば夙に免職さるべき代物である。

外交官というても種類がある。政務官と事務官と多少質を異にすると同じく、國家の利害について折衝の役に當るのがあり、細かい法規を取調べるのがあり、或は貴賓に應接したり、舞踏に立交つたりするのがある。之を兼ねるのもあるが、先づ別れて居る。從來自ら豪傑を以て任ずるものは兎角人を支配する役に就きたがつて居つて、西洋の女の機嫌を取つたりしたがらぬ。之を好み、其點に於て能を備へて居るのは、どうもオツチヨコチヨイに近い。さういふのが外交官を志願する傾向であるが、かういふ手合が外務省に多く、之が鰻上りに上つて公使となり或は大使となるに至ては平常無事に事が濟み、一寸評判もよいにしても、一朝事ある折、只思案に目を瞠すやうな事になる。

陸奥伯と小村侯は明治年間の主もなる外相とせらるゝが、二人共初めから外交官を望んだのではない。前者は餘り外國語も出來なんだ。元老院では議官の中全く外國語の出來ぬのもあり、其中で幾分か洋書を讀んだりすることが出來たので都合のよい事もあつたが、其點に於ては實は何程のものでない。然し外相として秀でたものと見えた。小村は餘り陸奥に感服せなんだ。外交上の方針を立つるに拙であるとした。外國より歸つて初め判事となり、外務省に入つても飜譯局に抛り込まれ、一向用ゐられなんだ。が支那に力をあらはしてからトン／＼拍子に昇進した。遣り損ひもあるが普通の外交官の眞似の出來ぬ程の事をした。然し侯は

初からの外交官でなくても尙外交官出身と看做し得るが、他の省に交際官としては如何であるにせよ、外交の局に當らしめた方がよいと思はるるのがある。現在の外交官の狀態は尙過渡期たるを免れぬ。明治の中頃までは外交官は飾り物と極つて居つて、公使には金持の大名を勸めるか借金持の高官の都合を計つてやるか位のもので、其下に通辯の出來るのを書記官とする事になつて居つた。其後漸やく交渉事件が多くなり、多少能力に注意することになつたが、何分外交官を希望するものはいはば薄つぺらなハイカラといふ調子で、夜會を唯事とする手合であつて、中に多少能力あるのがあり、稍々困難なる職務に堪へたりしても、俗に腹の出來て居らぬ人物といふべき所のものである。且つ初め相當の人物と思はれたものも長く外國に居ると上ッ面で事の濟んで行く慣れからして何だか浮ついた調子になつて了ふ。歐米列國では風俗習慣の似て居るので、長く他國に居つても世態人情の機微に通ずる事が出來る、外國人を友人としても眞に友情を以てすることが出來る。日本では些か之と趣を異にして居る許りでなく、外國に行つて居るものは甚だ交際が狹い。公務の外私交が少い。私交には金が要るの虞もある。大使館公使館內で雜談するのが多く、外國人と親しく交るとしても出入商人か失意の政治家の類であつて、其他は除外例とすべきである。碁を打つたり、カルタをしたりするのも時間を費す一の方法である。事務の上に落度はないやうにとの心配はあつても其外は頗る氣樂である。[illegible]していへば法律に暗流しされたやうなものである。そして幾年も居る間、何時しか當年の粗豪の氣が失せ、何處かボンヤリした影の薄いものになる。さういふ連中も全く無用とはせぬが、大なる問題の起る場合、之を解決するに堪ふるものゝ出づるやうにありたい。

內田子は米國に大使とし條約改正に從事した功で子爵になつたが、幾年も經たぬ中排日問題が盛んになり、如何になるか分らぬ始末である。外交官は最も爵を得るに便利なる所であつて、其爵を得るのは先づ斯樣なことで得らるゝ。それもよい部類である。もつと下等なのもあつて、先づ善い加減のものとしても、此れ位の事では今後日本の利權を伸ばすに心細い所がないか。外交丈けで事が出來ぬといふも、外交の與る事少くない。同盟國の外相グレーは彼の如く歐洲に重きをなして居る。英は海軍で己れの領土を守り得るにしても、大陸に對して少しも兵力を加へ得ぬのである。然るに巴爾幹に關し、大なる陸軍を有する國々まで其言ふ事を聞くのは、他にも事情あるにせよ、外相の手腕に因る所なしとせぬ。由來英國は外交に拙と言はれながら、有能なる外交官を出す土地である。外交官上りでなくして外交上に手腕を揮ふのが珍らしくない。日本では此邊に就て少しく同盟國にあやかるがよい。(十四日)

△外交界の舊人新人

鵜崎鷺城

有るやうで無いのは金ばかりでなく人物もさうである。外交界には人

が揃ふて居るといひ、外務省でもさう己惚れて居るらしいが、實際傑出したのがない。事務を執らすと可なり捌いて行くもの、外交上の典例に通じて居るもの、ベラ〳〵外國語を操るもの、交際的辭令に長ずるもの、舞踏の上手なもの、洋服の着こなしやナイフ・スプンの持方に後れを取らぬもの、こんな連中は掃く程あるかも知らぬが、外交官はハイカラやベタ臭いのが能でない。外交家らしい外交家が欲しいのである、欲しいが得らないのは外交界の情弊があつて、それが原因の一をなして居るからであるまいか。

外務省も他の省と同じく學閥全盛で、現在の大公使十五人中英國の井上勝之助・米國の珍田捨巳・露國の本野一郎・西班牙の荒川巳次を除けば孰れも學閥出身で、其他は本省と在外公館とを問はず大概大學を出たもので、中に學閥でないのもあるが其代り外務省の生抜組で飛入りのものは皆無といつて好い。阪田重次郎・本多熊太郎・篠野乙次郎・齋藤幹などは學問でなくして割合に好く用ゐられて居るのはつまり根生えであるからである。其處で大學派と生抜派とが彼ヶ閥閥といふやうな一種の閥緒を造つて外から人物の入つて來ないやうにし、入つて來ても志を得させぬやうにして居る。死んだ稻垣萬次郎は不品行な女房の爲めに苦勞したが遲羅でも西班牙でも相當に働もし評判も惡くなかつた、併し本省からはいつも繼兒扱ひされ、成績の惡い部に入れられた一事に徴しても分る。立派な外交家になるとならぬとは其人の天稟にも因るが、外交官補及び領事官補時代の修養如何といふことが大に與つて居る。故に此の數年間の實地經驗は最も大切であるのに、彼等の全部とはいはぬが、概れ舞踏・賭博・飲酒・淫賣買ひに憂身を窶して肝腎の修養を怠るのは、畢竟するに外交官養成法の不備から來て居る。

それから外交界に名門閥といふ惡い弊がある。例へば陸奧廣吉・小村欣一・松平恒雄・徳川家正・岡部長景のやうな名門勢家の子弟は能力の有無を問はずに飛出しから一等國に出すが、さうでない者はたとひ働があつても好い方向に廻はさぬ。中には何年たつても遠島同様の境遇にある者も少くない。

駐外官は有事無事共に爲すべき任務がある、然るに彼等の多くは外國見物にでも來た積りで呑氣に歳月を送り、偶々活動すれば外交上の事でなく不眞面な方面であるから成績の擧らぬのも無理でない。現に堂々たる大使中に年百年中蟹が石垣に潜んで居るやうに大使館の一室に脂下りて機密費を飲す算段のみし、列國使臣の顔を知らぬものさへあるといふではないか。斯やうな弊を除かぬ限りはいつまでも待つても外交上劣勢者たるを免れぬ。

外交界の元老である青木周藏・高平小五郎・栗野愼一郎は樞密院に葬られ、林董も最早過去の人といつて好い。加藤高明・牧野伸顯・内田康哉一寸三役といふ格である。が、三人とも脈が上つて居ないといふだけで外交家として失敗者に幾く、惡い意味の旣知數（ノンクォンテナー）である。それでも本人は天狗であるからまだ〳〵大に遣る積りで居るらしいが、碌な働きの出來る譯が爲い。本野・珍田・石井・權助・井上等の中いづれが早く大臣になる

か。本野は現に第二西園寺內閣の時、最初外相候補者に數へられ。世間でもテッキリさうと信じ、寧ろ內田に札の落ちたのを意外に思つた位である。大臣になるなら今までになる譯で、斯く出場を失つては一寸難かしく惟はれる。露西亞には久しく居て餘程地盤も出來たやうであるから、他に適材のない限り容易に更迭するやうなとはなからう。珍田と石井は小村系の外交官で、共に小心翼々として祕密好きな點も何程か似て居る。日露戰爭の時、前者は次官として後者は通商局長として小村の傍に居たが、兩人とも餘り腦味噌が働かなかつた。大臣の命令を聞いて其通りに仕事をしたのであるから手と足の外交に過ぎぬ。それでも役人の有がたさには男爵を授けられ、大使に進んだ。大使になつても高祿を食つて居るに適ぎぬ。現に珍田は米國の排日案で何等の働をしたか。併し一升德利はやはり一升しか入らぬ、手と足の外交家には多くを期待することが出來ない。トコロテン主義からいへば將來大臣になり得る順序であり、或はなるかも知れぬが、今のやうな外交なら。誰が大臣にならうとも骨の折れる心配はない。

權助の伊太利住ひも可なり長い。內田と同時代に大學を出たのであるが、先を越された形がある。本人はいつまでもこんな處に置かれるのを不平に思つて居るらしい。外交家としては必ずしも無能でない、朝鮮公使時代に先廻りして鎭海灣を租借し、露國公使のウエーバーに鼻を明かさせたこともあり、支那でもさまでヘマをやらなかつた、が理窟を担れるのと、人間が無愛嬌に出來て居るのとで、人氣がない。處が大學時代には隔日に白襯衣(ホワイト、シャツ)を取換へるやら、間がな隙がな鏡と首引をして頭を分けるやら、なかなかのオシャレであつたといふが、今でも蠻カラのやうでハイカラである。今度日本と伊太利の通商條約で骨を折つたらしいが、大臣まで漕付けるか何うか疑問である。

井上が加藤の後へ英國大使になつて行つたのは、此男を外交上の適材と認めたからでない、獨逸大使を罷めて以來久しい間遊んで居るから、何とかしてやらねば內田山に對して濟まぬといふ情實に外ならぬ。彼が今までになつたのは無論充分に父の威光に因るが、人物は弟の勇吉……第二世伊藤公爵のやうな翩々たる俗才子、遊治郎の風がなく、品の好い紳士である。獨逸公使としても前任者の青木周藏より遙かに好任であつた。青木はアペコペに大臣に訓令を發したといふだけに夜郎自大で、西洋人を贔屓のみしたから、公使館と日本人間の圓滿を缺いたが、井上になつてからスッカリ親密になつた。夫人はヒステリーの我儘者で一方ならず井上を手古摺らし、內助の功のない代りに外助の功少くない。英國でも井上に代つて專ら切廻はすだらう。

外交界の若手には次官松井慶四郎・政務局長阿部守太郎・通商局長阪田重次郎・無任所大使館參事官山座圓次郎・新任墨西哥公使安達峰一郎などが居る。松井も阿部も以前支那で書記官を勤め、支那通といはれて居るが、通にも範圍の狹いのと廣いのとある。二人は北京の事情なり、支那人の系統なり、一小部分のことに通じて居るかも知らぬが、支那の大局に亘つて現在は如何將來は如何といふことになれば全く盲目である。言ひ換

ふれば政治的に支那を知れるにあらず、鳥瞰的に知るといふに過ぎず。こんな頭で日華兩國の問題を誤りなく解決して行けるものでない。對支外交の失敗は畢竟靑二才外交の結果である。そこになると坂田は何程か分つて居る。日露戰爭の時、政務局參事官として山座の相談相手になり、倫敦總領事としてもなか〳〵評判が好つた。人間もバタ臭くなく洒落に出來て居る。

少壯外交家中の錚々は何といつても山座と安達であらう。日露戰爭中初めから開戰論を主張し、眞に小村の片腕になつて頭の外交を行つたのは山座で、今までの政務局長中一番腕がある。珍田や石井が男爵になるなら無論男爵を貰つて好い譯であるが、さうも出來ぬ事情があつたらしい。第一桂内閣が倒れて次に林董が外務大臣になつた時、引續き本省に辛抱したなら無論次官になるべき順序であつたが、我れから運動して英國に行つたのは、林に使はれるよりも小村の下に居るを欲したからであらうが、ロンドンに著かぬ中、内閣更迭して復び親分が外相になつたので本人の失望のみでなく小村も殘念に思つたらしい。殊に氣障な加藤と氣合ひの合ふ譯がないから、在英中の不愉快察するに餘りある。

此春英國から歸つたのは伊集院に代つて支那へ行くことに内定したからであるが、其中支那の形勢が變になつたので、俄に公使の更迭を行ひ難く一時中止となつた。無任所で居るから無聊に堪へぬと見え、外務省に出懸けて廊下鳶をやり次官室や局長室を襲うてビールを呷りつゝ氣焔を吐き、盛んに山座式を發揮して居るらしい。今まで對支外交については彼の意見を徵したものであるが、今度は誰も一言の相談に及ばぬので餘程不平らしい。併し支那の事件が一段落を告げたなら伊集院と更迭するに相違ない、又た支那に關しては相當の經綸を有つて居り、南方にも知合が多く互ひに了解して居るから、伊集院のやうに袁世凱に丸められて北方の片贔屓をするやうなこともなく、手際好くやるだらうと思ふ。

安達は山座の豪傑肌と違つて温和な學者風の男であるが頭はなか〳〵好い。日露戰爭の時は本省の參事官で、働役者の一人であつた。手腕は山座に劣るが、學問はシツカリある、其上語學は英・獨・露・伊の四箇國に通じ、ポーツマウスの談判に際して小村とウヰツテの間に立つて通譯の任に當つた。佛國大使館參事官時代で巴里では巧妙な交際術と練達した佛蘭西語とで切つて廻はし、前の大使栗野愼一郎より評判が好かつたから、無論石井などは總の點に於て彼れ以上に出ることが出來ぬ。山座も安達も多くの未來を有つて居るが、大外交家になることは出來ぬ。勝つて居るといふのは無論他と比較しての話である。

△牧野、加藤、内田、珍田

仙朶翁隱士

牧野は世間では今迄無能者といふ評があつた。到底も外交などの局には當れぬといふ考であつた。初め外相となつた時などは頗る意外の感を

起したものが少くない。然るに外相になつてから後には割合に評判がよい。加藤高明の如きも牧野の外相といふことには隨分心配したのであつたが、なつて見れば案外に省内の折合もよいやうだし、あれならば遣れるだらうといふ事を、恰度支那に出發つ少し前に、或友人にいうた相である。一つ牧野の取柄は、物に驚かずに――膽力といはうか――一種の落着拂つた所があるのと、それと餘程物を緻密に考ふる所がある。國民新聞の如きは、餘り考へ過ぎる、一考再考すれば澤山だ、三考も四考もする必要がないと罵つて居るが、然しそこが亦牧野の長所で、思慮の周密といふ點では少しの缺け目もない、若し之を牧野一人の仕事として抛り放しにして置けばどうか知らぬが、山本伯といふやうな遣り手が後ろに附いて鞭撻するから、二人の組合せによる仕事には、第一落度がなく、又相應の成績が擧ると思ふ。今日の日本に於て、彼方此方に眼を配つて見ても、山本と牧野の組合せ以上の外交を爲し得るものは餘計にあるまいと思ふ。

牧野の今日までにやつた事に、大したよい事もないが、日露戰爭中に維納から發した牧野の報導が一番よかつた。彼處から露西亞の内情などをよく探つて、本省に一々報告した。事情に通じた人からは、其事は頗る多しとせられて居る。農相、文相としては一向是ぞといふ事はなかつたが、却て六つかしい外務大臣になつてから幾分か男を上げた氣味がある。若し此度の外相に成功すれば此人は或はもう一伸び伸びるかも知れない。政治家としては前途のある方で、寧ろ大器晩成の風があるといつてもよいかも知れぬ、

然しながら萬人が見て、今の我國の外交官中に第一に指を屈するものはまア加藤高明であらう。此人は頭腦の働く方からいつて牧野などの類でない。餘程テキパキして居るし、又隨分剛情な所もある。そして背後には三菱といふ金力を控へて居るから、なか〱侮るべからざる外交家といはなくてはならぬ。然しあれ程の力を有しながら、今日まで一つも是ぞといふ程の功業や成功がない。强いていへば日英同盟の序幕を切り開いたといふ丈けであつて、外に成功したものは一つもない。何で成功しないかといつて見ると、一つの短所は、どうも餘り自信力が强くて、物が見え過ぎて、物に隱忍したり執着したりしない。一言にしていふと「時」を利用するといふ事を知らない。何でも自分の思ふ通りにサツサとやつて了はねば承知せぬ。少しでも自分の思ふ所が通らぬと直きに辭職するといふ風で今日まで來て居る。少し辛抱すれば、其中には面白い事も落ち掛つて來るかも知れんが、少しも辛抱をせずに引下つて了ふ。一體人間の事は、如何に聰明な人でも萬事が萬事見通しがつくものでない。不思議な運命が又不思議な境地を拓いて行くことも珍らしくない。加藤は少しもそんな事を考へずに、何事でも分つて了つたとして見切をつけるのは政治家としては缺點である。

それから又加藤は餘り自信力が强いが爲めに先輩から容れられずして、力量ある割合には要路に立つことが少い。又今一つの缺點は一見すれば豪傑風であるに拘らず、其實局量極めて狹少であつて、人の毀譽褒

貶に對して可なり神經を惱ます。又部下に對しては小さな事まで干涉して、いはゞ重箱の隅を楊枝でほじくるやうな事をして、自分の才能を誇るといふ風がある、それで下のものからも心服せらるゝことがない。恐らくは今の外交官中にも加藤の乾兒として加藤に心服して居るものは少からうと思ふ。之は加藤の缺點であるが、然しエライといふ點からいへば、確かに今の外交界に之と並ぶものはない。死ぬ前に一度加藤丈けの事をやらして、思ふ存分に腕を揮はして見たいと思ふ。然し今のやうに立憲同志會などに頭を突込んで居れば、果して何時さういふ機會が來るか、隨分待遠い話のやうでもある。

内田康哉は亞米利加大使の段までは、各方面から非常に評判がよくて、自分も大得意になつて居つたに違ひない。然し外務大臣になつて歸つて來る早々――其足が未だ日本の土を踏まない中に、支那問題といふ大問題が起つた。其時までは元老の勢力といふものも素晴らしいもので、今日の如く金箔が剝げず、上から内田を壓迫しようとする。長く海外にのみ居つて、日本の事情に通ぜぬ内田に取つては之が第一のアテ違ひであつたに違ひない。又下からは犬養一派の民黨政治家からもいぢめらるゝ。犬養は内田の秘書官時代から已に政黨首領であつて、内田の眼には先輩として映つて居る。一方には元老から、他方には犬養から板挾みになるので、内田は少々マゴツイた觀がある。犬養と太刀打した時などは確かに怖氣をとつた氣味がある。然し公平にいへば在職中に失策といふ程の失策は何もなかつたと思ふ。一時は伊集院の事もあり、政府も成るべく君主立憲の方をよいとして南方を抑へるといふ傾があつたにしても、永い間の中には誰でも多少彼方に向いたり此方に向いたりすることがないと限らぬ。そしてそれも顯然と外にあらはれたのでなくて、いはば内輪話の事である。あの際の如き、如何なる支那通を以て任ずる人も、又世界の列强もすべて、一つ〳〵皆見込の外れるといふ際にあつては、方針の確立に多少の動搖を來すのに勢の止むを得んことである。然し元老、犬養兩方面から手嚴しくやられるので、其止むを得ぬ措置が恰かも大失敗の如く世間の眼に見えた。之は内田にとつて甚だ氣の毒の事と思ふ。然しまだ若いから必らず大いに手腕を揮ふやうな場合もあらう。果して外交家として何時までゝ踏み止つて居るか、又一般の政治家として何の方面にゝ當る積りであるか、當人に於ても考慮中の事であらう。やれば何にでもなれる性質であつて、大抵の大臣なら立派に勤まる柄である。今日は世間も變動して、やり方次第では如何にもなり得る時代であるから、餘り引込思案をせずして、一奮發すれば必らず何かやれると思ふ。役人になるならなり、ならなければ民間事業又は政黨に奔走すればよい。ぢつとして居つて諸葛孔明を學んだ所で、今の世には三顧して出盧を促すやうな劉備はあるまいと思ふ。

其外米國大使の珍田――之は大變よい男で、いはゞ先づ正直物で、内田程の覇氣がない。然しながら思慮は周密で、人と交際しても己れの赤心を吐露して、人の腹中に置くことは内田以上である。で今日の亞米利加のやうな形勢に處しては適材を適所に得たものと思ふ。今度の内閣の出

來る前には珍田を外相にしようといふ相談があつたが、珍田は斷つた。之は自ら知るの明あるものである。こつちへ來て外相などをやれば失敗するかも知れないが、亞米利加ではあれ以上の適材があるまい。尤も今の米國問題は事柄が事柄だから誰が行つても難問題であつて、總ての人が滿足するやうな成功は得られないのであるが、然し大過なきを得れば先づ成功といはなくてはなるまい。それ位の成功を贏ち得んことを希望する。

△無能大臣、ボーイ次官、灰殼大使

京童子

外交界に人物のない一番の原因はどこにあるかといふに、先づ外交といふものに對する誤解から起つて居る。西洋人に接するには風采がよくなくてはならぬ、所謂容姿端麗といふ風でなくてはならぬと思つてるのが先づ第一の誤解で、それから外國語を操ることが巧みでなければならぬと思つてるのが第二の誤解である。それから又外交といふものを餘り專門的のものに考へて、人物を取る範圍が極めて狹小である。裁判官の如くに憲法上身體を保障せられて居る譯でないが、實際に於ては終身官のやうなものになつて居る。濁水停滯して孑々を生ずで、其結果新進俊才が入つて來ない。近來裁判所に於ても今迄の弊に氣が附いて改革を斷行した。人は平沼系の專斷の如くにいふが、どうせ人間のすることだから、多少の情僞のあるのは止むを得なからう。外交界に於ても少くもあの位の改革を決行して、陸奧宗光以來沈澱したものを刷新する必要があると思ふ。

今の外交家を一口にいつて見れば、眞に可愛らしい連中が多く、容姿は端麗、外國語は巧み、又衣服の着こなしなどもなか〳〵上手だ。然しこういふ連中が歐洲人にもてるだらうなどゝ思ふのは抑々間違で、歐洲人には寧ろ容貌魁偉といふやうなのがよい。栗野愼一郎などゝいふやうなのがよい。又外國語なども無暗に巧みに操らなくてもよい。通辯を附けた方が勿體ぶつてよい位だ。兎に角今の色男本位語學本位を廢して人物本位にならなくては駄目だ。人物がしつかりしてさへ居れば一見して一癖ありさうな面構へのゝも却て面白からうと思ふ。

今の外務省の連中を見給へ。次官松井慶四郎君の如きは五十に近い年をしながら三十二三にしか見えぬ。惡口をいへば丸でボーイだ。昔て小村壽太郎を外國人が評して鼠公使といつたといふが、アレは事實無根で本當は早川鐵治がやまと新聞社員にいつた惡口が原因となつたのだ。然し小村を鼠公使といへば松井などは確かにボーイ次官だ。又此筆法で行けば今の大使などは大抵ハイカラ大使だ。

外務省の公使以上の人物を批評して與れとの事であるが、批評する位の人物がないぢやないか。先づ容姿端麗派の例外で、少しく容貌の魁偉

ならものの一人は支那の伊集院である。此男は色も黒く髯も多く、いかにも薩摩芋らしい顔つきをして居る。然し薩摩芋の本性としていかにも萬事に鈍い。袁世凱とか唐紹儀などゝいふ先生方と相駢馳することは到底も出來ない。偶々毛色の變つた奴があれば其通りである。

外務大臣の牧野伸顯君は故大久保右大臣の二男にして、薩摩に於ては守本尊の一人となるべき家柄だ。源義朝を義實が淡路の國で傷を受けた時に八幡公の面影があるといつたように、伸顯君には確かに利通の面影がある。薩摩の連中に此人を擔いで御大將に祭り上げようとするものゝあるのは不思議はない。然しあの、舌の長いような、座談ですら要領を得ぬ人を外務に當らしむるなどいふ事は、薩摩の如き閥族觀念の強い所には何でもないにしても、國家の爲めには誠に憂慮に堪へない次第である。自分は此人を評するに無能大臣の四字を以てする外適當なる評語を知らない。

それからボーイ次官の松井君は成程小悧巧だ。猪口才だ。がそれ以上の事はない。政務局長の阿部君は近來は柄にない大外交家氣取になられたさうだ。何でも條約改正の事業は乃公一人の力によつて出來たやうな顔附をされるさうだ。然しあれ位の智慧では兎ても西洋人と太刀打は六つかしからうと思ふ。

通商局長の阪田重次郎さんも其通り。高等商業出身で御座るから簿記位の事は出來よう。然し一國の殖產興業などの事にかけて御手腕あらうとは思はれない。

井上勝之助さん――アレは奥さんが大使なのだ。詰り末子大使なのだ。然し奥さんが如何にエラクても矢張り女は女。何か事が起ると神經過敏になる一女性に國家の大事は任せらるゝものでない。如何に閥族とはいへ、あゝいふものを外交の局に當らしめてよくも平然として居られるものだと呆れざるを得ぬ。

石井菊次郎氏は松井よりも稍々分つて居るが、矢張り同じ型の小才子で、先づ三十萬か精々五十萬位の會社の支配人でもさしたらよからう。それでも此人は其馬骨を民間に拾はれるだけの資格はある。が、秋月左都夫の疎大、杉村虎一の凡庸などは、外交官をやめれば何處へも持て行き處もなく、又拾手もあるまい。

林權助は若い時は稍々よかつた。が近頃は耄けたやうだ。顔附丈けが歐洲人に向きさうだが人間が鈍いので困る。

亞米利加の珍田アレをウツダと讀んだものがあるがウツダでなくてグツダだ。一通の事務は出來るし、又外務省に永く居つたから、日本の事情も一通り知つて居る。其點は秋月や杉村などの比ではない。然しどうもテキパキ事を捌いて行く手腕のないのには困る。

杉村などは何で公使などになれたのかといふに、或はあの男が西園寺の姪を貰つた爲めかも知れない。五十歲にして二十二三歲の若い婦人を貰つた。西園寺は自分の緣邊の事などに頓着する人でないが、他から西園寺の機嫌を取らうとしてやつたのかも知れない。アレなどを見れば全く果報は寢て待てといふ言葉を思ひ出す。

惡口をいへば數限りもなくあるが、餘り惡口ばかりを列べるのも寐覺がよくないから先づ此位で罷めて置かう。

△無能な外交

島田三郎

私は人物評論といふ物はしないことにしてゐる。何故といふに人物評論は其人の長所と缺點とを並び擧げるのでなくては面白くない。然るに私は要も無いに他人の缺點を擧げることを欲しない。政敵である以上は已むを得ない場合もあるが、さうでない限りは他人のあらを指摘するやうな事は望まない。それならば長所を列擧すれば可いかと言ふに、其人の短所缺點を知つてゐながら、それに觸らぬやうにしてお座なりを言ふやうなことは絶對に私には出來ぬ。又そんな煮え切らない物では讀者にとつても何の感興をも與へないだらうから、其意味に於いて私は全然此論題に對して無資格者である。

見渡したところ今の外交界には殆ど其人物を見ない。外交家として豪かつたのは死んだ陸奧だらう。次いでは矢張大隈である。小村に至つては豪いとも思はれない。大隈の敗れたのは政治的の死であつて決して外交家としての失敗ではない。が兎に角大隈退き陸奧死んだ後の外交界は外交家らしい外交家は一人も無いと言つて可からう。内田などは外交家としての辭令に巧みで慣例を知つてゐるといふくらゐの者で、牧野に至つては其慣例さへか覺束ない。

何故に斯くも我外交界其材に乏しきかと言ふに、第一に我國の事情が昔より外交的手腕を要した場合が少かつた爲めであらう。外交の發達は國運の進歩と關係するけれども、其國情に依りては外交の必要を感ぜない國例へば米國の如きは、彼の大國にして而も外交に至つては他の歐洲諸國に比して甚しく劣つてゐる。第二の原因は登龍の門戸が狹い。外交家たるべき資格としては外國語の素養が無くてはならぬ。容貌風采擧止動作總て禮に適つてゐなければならぬ。巧みに外國人と應接して夜會のダンスも踊るやうでなければならぬといふやうな煩瑣な極めてつまらない素養をも資格の中に數へられてゐるが爲めに、有爲の材は何を好んで故らに狹隘な門戸を潜つて外交界に出ようとするものぞ。從つて人材の缺乏を訴へるのは已むを得ない次第であると謂はねばならね。であるから其等の外交家は平時事無きの時に方つては外國との親善を保つてゆくこともどうにか斯うにか出來ようが、一朝有事の際には何等の役にも立たぬ。いざ鎌倉となれば大久保や伊藤が親ら出馬しなければならぬことになつた。尤も今度の米國問題に就いても一概に外交當局者をのみ責めることの出來ない内部の理由もあるから、私共は這間の事情を知らない人と同じやうに當局者を責めようとは思はないが、それにしても、もつと何とか方法もあつたらうに、要するに何方にしても無能であるといふ譏りは免れないであらう。(談)

△外交界の人物を評す

大森兜山

◎一國は一人を以て興り一人を以て滅ぶとは古人の已に道破せる所なるが那翁時代の佛國メッテルニッヒ時代の墺國が如何に歐洲大陸に活躍せるかに想到せば先人の言我を欺かざるを知るに餘りあるべし。我國の外交の振はざるや久し矣。しかも最近に於て最も外交の力を要すべき事件頻々たるに係はらず外交官の無能依然として舊の如き觀あるは聊か心細からずとせず。惟ふにこれ牛に牽かれて善光寺參りするをのみ萬全の秘訣と心得たる隨從的舊式外交の態度を一變するに堪ふる人物なきが爲めのみ。自國の者には各〻それ相應の自惚と理由と有るべきが僅々五十年間に世界一等國の班に伍し得たる日本帝國は譬へば成金の格にて歐米諸列強に對しては國內にて振り廻す程一等國の融通も利かざる事なるべく當分は竝んで喰ふも恥かしき花嫁御のお歷々の奥様方と自由自在の交際は無理と言へば望む者の無理の註文なる可し。

◎然かはあれ我國が中心主力となつて活躍すべき東洋問題に關してすら常に受働的の立場に居りて只管英佛露獨米等の鼻息のみ窺ひ居る事從來の如しとせば是れ將來帝國の利害に關する由々敷大事なり。抑も　天皇陛下若くは帝國政府を代表して國交の衝に當るべき道外使臣の如き最も堅固なる國民性を有する者ならざるべからず。然るに因循姑息なる事勿れ主義を固執せる帝國の外交は延いて其流弊を人選の上に及ぼしガイド式若くは式部官式の人物を以て外交官の適材と爲す。從て外交官の多くは半歐化的の者を以て充たさる。殊に若手連に此種の輕薄才士多きが如し。外交の振はざる又止むを得ざる也。

◎牧野仲顯は兎も角も外交官として多き經歷を有し現に山本內閣の外務大臣たり。大久保甲東を父とせると容貌の何となく重厚にして沈毅なる觀有るとによりて久しく薩州出身文官中の偉材として注視せられたるも要するに寡默を以て凡骨を包めるに過ぎず。決斷も無ければ奇略も無く極めて拙劣なる不得要領の裏に彷徨する今猶昨の如し。明治十二年初めて外務省出仕となり英國公使館三等書記官たり。其後碌々として役人生活に轉々し太政官權少書記官となり或は內閣に成は治縣に乃父の餘澤と閥族先輩の庇護とにより官祿を離るゝ事なく終に再び駐墺公使となり更に駐伊大使となりしも何等目覺しき手腕を示さず終始愚にして愚の如く茫漠として休むが如き思案の中に年月を徒消せり。

◎彼の茨城に知事たりし頃縣會時に騷擾して怒罵の壓場に喧しく或は憤然として彼に諾否の決を促す者あるも每に默々として椅子に倚るのみ。要するに爲めに罵る者も終に愛想を盡かして深く追及せざりしといふ。無言は彼の保護色なり。消極的の利器なり。斯くして一生を熟考の裏に空過し期待せる者を失望せしむるに過ぎざるべし。過去に於て彼のやゝ好評を博せるは第一次西園寺內閣に入りて文相となりし時代なるがこれすら少しく進歩的に假名遣を改正し羅馬字採用節を主張して聊か從來の

文相と毛色の變れる所ありしが爲めにして其後彼の企圖は悉く覆へされ何等特殊の功績と見るべきものを文教の上に遺さず。彼は甲東の子としては不肖兒なり如何に薩派に人物無しと言ふも今後永く其頭目の一人として擔がるゝ事無かるべき也。

◎遣外使臣として相當に人氣あり一度寒閣の人となりて散々に味噌を着け現在野に在りて殆んど人の記憶より去られんとしつゝある者は内田康哉なり。康哉は伸顯の如く無策無能の人物にあらざるも其態度遜々として落ち着きなく相貌の宛として護謨人形の如き彼は他(ひと)に好愛せらるゝも未だ尊敬せらるゝの重威無し。康哉は明治二十年の法科大學出身にて駐伊大使林權助と同窓なり。在學中よりやゝ風流を解し町田忠治井本常治の諸氏と共に盛に湯島邊を荒らして腕を鍛へたるが後二十三年陸奥農相の下に祕書官となるや其兒廣吉の爲めに藝者買ひの指南役を勸めたる事あり。彼の今日ある婉轉の才人の氣を反らさゞるに因ると雖も亦故陸奥伯推挽庇護の力多きに居る。

◎彼は外交官として順調に緞上りに出世せる者なるが故に大臣と爲りし迄には省内省外共に殆んど凡ての梯階を歷たり。而して其最も才幹を發揮せるは日露戰役中駐淸公使たりし當時にして外は馬賊と邦人との連絡の楔子となり内は巧に淸國高官を說破して好意的嚴正中立の態度を執らしめ別に在淸外字新聞の全部を買收して我に不利なる報道を禁遏し以て淸國人心の動搖を防止する等善く其職を辱めざりき。後墺國大使となり更に米國大使としても評判さまで惡しからず。新の日米改訂條約締結は大使として彼が一週日間に纏めたりとて一時外交界の噂に上りたる事あれど、これ特に彼の手腕の異常なるを證するには餘りに但に過ぎたり。日米改訂條約の甚だ彼に有利にして談判の容易なりしは近時世論の焦點となれる排日問題解決の困難に見て明か也。當時康哉が移民問題に關して根本的解決を敢てし能はず纔かに但書の祕約を以て一時を糊塗せるは彼の識見と外交的手腕とが未だ凡流を脫せざるを證して餘りあるを知るべきにあらずや。

◎而して外相としての康哉は憫れにも意氣地なき爲體にて支那動亂に際し極端に外交の無能無方針を暴露攻擊せられ豫算委員總會にて散々犬養木堂に油を搾られ「責任ある大臣は虛言を弄するを許さず」と一喝せられて縮み上りたる如き滑稽劇すら演じたり。然れども彼の無能は伸顯の無能に比すれば假借すべき點多し。何となれば優柔不斷なる公望を首相とせる彼の苦境は剛骨なる權兵衛の下に外相たるより數倍の不自由を感ずべき理由有るが爲め也。

◎康哉は弱冠鄕里熊本にて嘉悅塾に修學せる頃より那翁に私淑し妙に豪傑振るの癖あり。且つ柔道に赤帶格の手腕あるより時に生兵法の祟りて醉餘無謀なる腕力沙汰に訴ふる事あり。曾て犬養大石等の諸豪四谷大石邸にて痛飲せるに彼酒を被りて宴席に殺到し突如杯を取つて牛鍋の中に投じ逆に列席の山本達雄に喧嘩を挑まれ一溜りも無く遁逃せる珍事あり。又公使として北京に駐在せる頃一日彼の恩師の息嘉悅海軍大佐と格鬪して散々に毆打せられ意氣地なく敗北せる事あり。要するに彼は官界

の寵兒として艱境に處して百折撓まざる底の骨力を缺く。其初めて大臣となるや榮達の徑路の全然故小村侯と同じく加ふるに年齒迄符節を合するが如き奇緣を說きて自ら喜ぶの色を示せる彼は內心私かに第二の小村を以て任ぜるらしきも素と資質に多大の徑庭あり前途猶外交界に現はるゝの期有るべきも到底大事を託し得べき程の人物にはあらず。

◎牧野伸顯が生溫き小智慧より元老連の甘心を買はんが爲めに强ひて政友會へ黨を背んぜず外相となりしと桂內閣の三日大臣たりし加藤高明の新政黨に加盟して去就を明瞭にしたるとは面白き對比なり。外交官としてけ故參の部に屬する彼が三十九年外相たりし當時其下に通商局長たりし石井菊次郎と同時に男爵を授けられたるは不運と言へば不運なり。

◎高明は明治二十年初めて外交官とし　外務省參事官となり大隈伯の條約改正當時は秘書官として盡瘁する所尠なからず。彼の資性の傲岸にして容易に他に下らざる頭腦の論理的にして徹底せる一部大隈伯の資質と共通せる點あり。從て伯の信任も淺からず彼の伯に負ふ所亦決して尠少ならざりしが如し。殊に彼は算數に長じ財政に暗からざるが故に外相としても單に一省の長官たるに甘んぜず國務大臣として充分の抱負を披瀝せずんば止まず。斯の第一次西園寺內閣に外相として鐵道國有に反對し職席を賭して爭へる如き彼の眞面目を躍如たらしむるもの有り。財政家としての官歷は二十三年大藏省の參事官となり二十四年七月銀行局長に任じ八月監査局長に轉じ更らに一年の後主稅局長を勤務せるを指示し得べし。

◎過去に於て彼の最も苦慮せるは憲政黨內閣の當時駐英特命全權公使として日英の接近換言すれば日英同盟の基礎を定めんとせる時なるべし。大隈伯は英國の南亞問題解決に急にして東洋の事を顧慮する餘裕無きを視、好機逸すべからずとなし英國に諮り殆んど全責任を負ひて支那問題を解決せんと欲し旨を加藤高明に含めて英國政府に說かしむる所あり以て大規模なる外交を敢てせんと試みたるが袁世凱の中途變心して機密を獨逸に漏洩せると內閣の瓦解とは遂に計畫を實現せしめずして止みたるも此時に於ける高明の努力は日英兩國の親善を濃厚にし後伊藤內閣に大臣となりし後も當初の方針にて着々步武を進め終に桂內閣に至りて同盟締結の事を了するを得たる也。

◎其後駐英大使として條約改正の事に當り功を以て授爵の恩典に浴せるも彼としては尋常茶飯事を爲せるに過ぎざるべく外交上猶多大なる抱負を有するは蓋し疑ふの餘地なし。彼は氣象精英にして自我を固執する事頗る强く人か人とも思はぬ不屈の魂は時に僚友との確執となり爲めに幾分人物を小ならしむるの嫌無きにあらず。生來無遠慮にして皮肉に隨分憎まれ口も利けるが近時餘程老巧となりやゝ愛嬌を添へたる觀あるは年の功なるべし。

◎黨人として彼が何程の執着力を有し多數凡物と伍して何時迄辛抱し得るやは興味を以て目すべき問題なるが多年英國流の憲法政治を目擊し時勢の要求を察して黨人となれる限り新政黨が政友會の如く墮落するに非ざるよりは應分の努力を自黨の發展に致さん事蓋し想像するに難から

ず。唯彼が富豪の愛婿として衣食の資に事缺かざるが爲めに中途立脚地を變じて他方に趨走する如き事有らんか恐らくは自ら一生の運命を呪詛して復た起つ能はざるの窮地に陷らん。曾て島田沼南を敵として旗を横濱市に爭へる彼今日沼南と堂に相會して苦笑す。人生逢遭の奇往々斯の如きものあり。

◎由來土佐人は辯舌に雄なるを以て聽ゆ。加藤高明も其選に洩れず。彼の卓上演説は擒縱活殺の妙を極め皮肉あり滑稽あり揶揄飜弄あり諷刺あり。不眞面目なるが如くにして飽く迄眞面目に冷然として警句を連發す。其頭腦の明晰にして論理的なる當代有數の論客たるを失はず。近く支那漫遊前犬養毅と朝吹英二の邸に會して舌戰を試みたる時の如き大に高明式を發揮せるが如し。事は朝吹が犬養を孤立の境より救ひて新政黨と結ばしめんが爲めに加藤に囑して犬養を說破せしめんとせるに起れり。犬養は斯る魂膽有るを知らず招ぜられて朝吹氏の邸に到れば既に高明在り酒杯の間互に最近の政局を談ず。加藤先づ火蓋を切つて曰く「予は久しく海外に在りて內地の政況を詳かにせず一體君等が桂を逆賊の如く非難するは何の因る所ありて然るか」と。犬養もさる者具さに桂の行動に就き批する所ありて答ふ。押問答數次の後加藤は「過去の事は措いて問はず將來桂が立憲的に行動すとせば君も來りて事を共にする亦不可なきにあらずや如何」と。之に對し犬養は執拗にも桂は立憲的に遣らずと獨斷し加藤は遣つたら何うすると迫り談論の餘地を有せず。是に於てか加藤の癇癪玉は爆裂せり。君等も存外分らず屋なりといふ見脈にて猛烈なる突擊を試み大凡そ立憲國にありて政黨の政府に對する反對贊成の二者一を選ぶあるのみ君が山本內閣に對して嚴正中立を標榜せるは如何なる意ぞ。嚴正中立とは山本內閣を認めたる謂か抑も亦認めざるの謂かと。流石の犬養も離職の色あり折角兩者の意志疏通を希望せる朝吹も殆んど閉口し會合は全然目的を達せずして引分けに終れりといふ。又以て加藤の鋭利なる人格の半面を窺ふに足るべし。

◎現在外交上の難局に當りて樽俎の間に折衝せるは米國大使珍田捨己と駐支公使伊集院彥吉となり。珍田は青森の產岩手の高平小五郎會津の林權助米澤の安達峰一郎と共に東北出身の外交官なり。幼にして本多庸一の經營せる東奧義塾に學び師の感化を受けて寡默謹愼の風あり。大隈伯の外相時代擢でられて伯剌西爾公使とあり後和蘭に轉じ三十三年北清事變の當時更に露都に移る。彼の駐露時代は露國の極東經營愈々歩武を進め露清密約の計畫將さに成らんとせる際とて手腕を示すべき機會多かりしが如く終に小村の外相となるに及び次官として本省に入り以て日露戰爭中露國にて探知して見聞せる一切の經驗を具して外相を輔佐し小村侯のポーツマウス派遣中殆んど外相代理を務めて無事に責任を了し一段男振を上げたるが如し。斯くて桂內閣瓦解の後獨逸大使となり足掛け九年の間平穩なる生活を爲して後內田康哉の後を襲うて駐米大使となり以て今日に及べり。

○排日問題に關し珍田大使の抗議なるもの屢々外電の報ずる所なるが彼の穩健なる態度と手腕とは到底露骨にして無遠慮なる米國政府を壓して

帝國の威信を保たしめ得ん事思ひも依らず。彼は外交官としては好個の術史に相違なきも風雲裏に殺活自在の快腕を揮ひ得べき大材にあらざる也。

○此他大使中にて最も評判良きものに本野駐露あり。彼は佛國流に生育し佛語に堪能にして相貌人格共に高雅にして些の俗臭なし佛國より露國に轉ぜるは戰後日露の和親を厚くする重大の任務を帶べるものにして交際に長じ才氣凡流を拔ける彼は蓋し最好の適任者たるべし。近時彼が官界を去りて讀賣新聞に全力を傾注し以て理想的大新聞たらしめんとする抱負を懷けるを聽くこれ外交よりは寧ろ難事業なるべきも發憤して此擧に出でん事は我邦の言論界廓淸上效果無きに非ざるべし。

◎駐伊大使林權助は内田康哉のライバルとして初より轡を並べて外交界に馳驅せるもの。林は内田に比すれば婉轉の才に缺くるも武士的骨力強く嚴峻にして豪放なるところ遺憾なく會津氣質を發揮せるを見る。終に内田に先を越されたるは官界遊泳の術に於て内田に一籌を輸するが爲のみ。過去に於ける彼の勳功として錄すべきもの有らば三十二年より七年間韓國公使として反覆常なき韓國政府を相手とし日韓議定書より日韓新協約を締結し以て統監政治に至る橋渡しを爲せるにあり。東洋流の風雲の氣に富める彼が和煦洋々たる南歐伊太利の古都に在るは其志に非ざるべく彼自身も心平かなるを得ざるものあるべし。

○外交界に於ける東洋流の豪傑別に二人者を算す伊集院駐支公使と山座英大使館參事官これ也。前者は薩州の產。過去にありて薩州先輩の外交官に西德二郎あり。然れども薩人通有の愛錢癖は彼に於ても著しく駐露數年間交際費を貯蓄する事數萬金なりしは今猶外交社會にて好個の一珍談なり。伊集院は西に比すれば人物數等優り錢の爲めに外交を犧牲とする如き陋態なし。日露戰役當時は天津總領事として直隸總督袁世凱と親しみ内田公使を援けて盡瘁する所尠からず。從來の經歷よりすれば彼の現境地は最も適當なるを失はず。然れども淸國擾亂の當時より中華民國となりし今日に至る迄、袁世凱の手先きとなり常に歐米列強の後塵を拜して快手腕を示さずとの酷烈なる非難を浴びつゝあるは聊か氣の毒ならずとせず。桂内閣成り加藤高明の外相に就任せる頃は山座圓次郎と更迭すべしなど傳へられたるが權兵衞内閣成り同鄕の牧野外相の下に暫らく地位の安固を得たるは幸運と謂ふべし。彼は資性恬淡にして覇氣の見るべきものあり。年齒猶若く未だ未來有る外交家たるを失はず。其大に失敗せざるに先ち他に轉じて骨休みして重來を策すること彼の爲めに策の得たるものなるや未だ知るべからず。

◎山座圓次郎は外交官中最も志士氣質の多きもの現に浪人的境遇にあり。彼は福岡の產にして膽斗の如く酒量度無く行動往々人の意表に出づ。故小村侯の祕藏兒として日露戰役中浪人野武士連の强硬を一手に引き受け輿論誘導に盡す所尠なからず。後加藤大使の下に參事官として改正條約締結に關し勳功の見るべきものなり。彼の無頓着にして豪快なる近時無聊に任せビール瓶を携へて外務省の各局を野次り廻り飽く迄天眞爛漫を發揮して益々壯なるものあり。他日必ず好外相として滿腹の經綸を吐

評する事あるべし。彼が辭除の放尿と浴中にて細君を熱愛するの一事とは特技として外交社會の評判なり。好丈夫自愛せよ。

○此他に式部官式の駐獨大使石井菊次郎ありポンクラ次官松井慶四郎あり猶幾多の凡流外交家と老耄せる大公使とあれど此等の徒は玆に批評する限りにあらず。

山座圓次郎氏は六月廿二日を以て支那公使に新任せられ、伊集院彦吉氏に代れり。評論文に總て伊集院公使、山座大使館參事官とあるは公使更迭前の執筆にかゝればなり。

オノト及オリオン萬年筆の粗製模造品あり注意せよ

弊社のオノト及オリオン萬年筆の信用厚きに乘じてオリオン式オノト式の名目にて粗惡なる類似品を濫造するものあり。此摸造オノト、僞造オリオンは往々意外なる中等以上の商店又はデパートメントストアにすら現はる。

此の如き摸造品が盛んに現はれたるは弊社のオノト及オリオンが最善なるを證する的確の明證なるが、諸君は此粗惡なる類似品に欺かる勿れ弊社販賣の眞正のオノト及オリオンには必らず軸部にONOTO及びORIONの横字の名稱刻みたれば萬年筆御購入の際は先づ此軸部の名稱を檢するを忘れ給ふ勿れ

オノト萬年筆　飾無金六圓以上各種　飾付金七圓以上

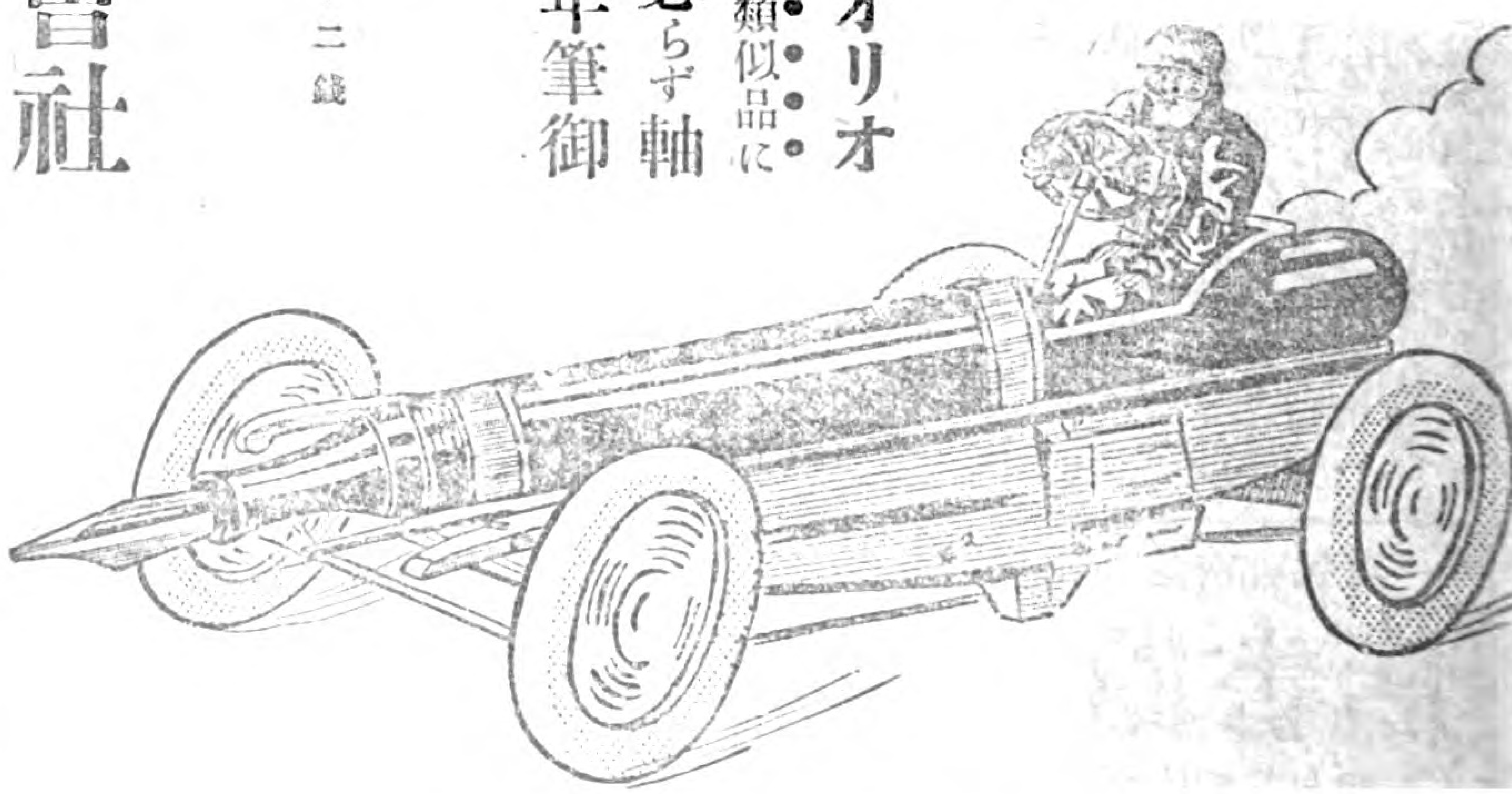
オリオン萬年筆　賣價金二圓八十錢　飾付金三圓二十五錢

送料各金十二錢

（萬年筆目錄御申越次第進呈）

東京日本橋區通三丁目（振替貯金口座東京五番）
大阪東區博勞町四丁目（同　大阪七四番）
京都三條通麩屋町西入（同　大阪一七三番）

丸善株式會社



(中付二〇一)

文學士 西澤富則氏著

最新刊

歐洲文藝界の逸話 文豪の部

本書は歐洲近代文豪の云はゞ正史に對する側面觀であつて全卷を獨佛英等の五卷に分ち通讀せば彼等文豪の眞の面影をさながら眼前に髣髴せしめる事が出來よう内容逸話中には奇拔にしてアッと云はすのも有れば意想外の奇智に富めるものあり同情すべき失敗談や抱腹噴飯すべき滑稽談も有る時恰も梅雨期緑蔭窓下隨一の好侶伴として敢て本書を大方の文藝愛顧の諸子に薦める

四六判形全壹冊
最上美本優美高雅
紙數五百十二頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅八錢

發行所 東京市神田區表神保町六 振替貯金口座東京八七貳番 大同館書店

新刊

赤き死の假面

アラン・ポオ作
島村抱月氏序
谷崎精二氏譯
小林徳三郎氏裝幀

本書は近代神秘主義、象徴主義の開祖たる、エドガア・アラン・ポオの最も傑出したる短篇十餘種を萃む。全編悉く異常なる神經と、鋭敏なる官能と幽玄なる幻想との所産也。島村抱月先生、本書に序して云ふ『烈しい所のある藝術は一方に非難者を持つと共に、一方には熱愛者を持つのである。バイロンがさうであつた。ポオの如きもやはりさうである。ポオは寧ろ現時の文壇に多く生くべき價値を持つて居る。廢滅、暗黒の詩人。死の詩人、而して芳烈の詩人は彼である』と。萬有の神秘に徹して其處に新たなる力と光とを感得せんと欲するの士に本書を薦む。

四六判箱入
裝幀頗善美
正價金壹圓
郵稅金十錢

東京市神田區南神保町
泰平館書店
振替東京二四八五九番

(中付二の二)

東京朝日新聞記者 松崎天民著

新刊 松崎天民 人生探訪

附録 人生探訪者 松崎天民論 東京朝日記者 薄井秀一氏

四六判全一冊 三百五十頁 装幀瀟洒 正價金六拾五錢 郵税金八錢

「淪落の女」を著して文名更に擧りたる松崎天民氏が、眞面目にして敬虔なる態度を以て、この人生と世相を觀じたる述作集にして、淪落の男、秋晴十日間、上野淺草記、春を追ひつゝ、銀座界隈、カツフエー、バーとホール、山水十日の旅、東京その折々、寄席印象記、探訪記者の印象等、何れも著者一流の人生觀、社會觀察、婦人研究、都會觀、時代觀を描くに、同情ある筆致、輕妙にして又一種の魅力あり、小説より趣味深く、講談よりも興味ある珍書として、これを大方の讀書子に提供す。

附錄「人生探訪者松崎天民論」は著者の親友が執筆せるものにして、滔々數百言能く著者の特色ある個性と文章とを論評して、興味湧くが如きものあり、併せ讀まば興會更に大に深きものあらんと信ず。

好評五版

淪落の女

▼一、黒縮緬の羽織▲
▼二、捨ばちのお時▲
▼三、お小夜の行衛▲
▼四、さまよひの女▲
▼五、十二階下の夜▲

四六判全一冊 装幀瀟洒 正價金五拾錢 郵税金六錢

(中付二の四)

發行所 東京市日本橋區蠣殼町二丁目 振替東京(壹五〇五六番) 磯部甲陽堂

和歌

尾上柴舟選

安井竹美

○

朱にけぶる夕日の中に古への奈良の都はしづかならまし

三笠川しづかに眸より消ゆるころいかにやさしく君はなくらむ（以下奈良へゆきし少女に）

今ははや別れて日かずたちにけりしみじみ古都になれてあるらむ

しのびかにほそくふるへし胸ふたつよせたる夜ははや遠きかも

○

藤井黎白

世のすみの山ふところの日だまりに凧落ちてふとわらべのこゑす

ひとひとり生けりともなし月おちて深き夜の氣つつめる山に

踏みつぶしし蟲にも親のあるなどとおもひ出づれば堪へがたきかな

○

竹村天雙

さびしきは野菜市場の白菜に靜かに降りて消ゆる淡雪

何か知らず心嬉れしく起きて出て街に行かむとしたる雪朝

黄昏の山の峽よりきれぐに煙の這ふがいたくさびしき

思ふまに身を浴槽にひたしつつ冬のをはりの雨をきくかな

○

前田黄昏

母上と君とあゆめる一筋の街の暗よりかなしきはなし

人並にいきることさへあたはざる男に意をもたらせし君

おごそかに冬の空よりおちてあるうらがれ山の赤き陽の色

黄昏の家をいていてゆく白がひとみに春のつめたさがしむ

○

鈴尾春醉

やはらかきネルのシーツにつゝまれて身にうすあまきかなしみおぼゆ

灯が黄ろく室をつゝめり飯をまつつかれたる子のにぶきまなざし

寢たらざる瞳のつかれをこゝろもちにおぼゆる朝なり雪ちらちらふる

○　金子伊助

あたらしき雜誌の上に瓦斯の灯の青く照りそふ夜のこゝろよさ

瓦斯の火の中に光れる金文字にかるくめまひをおぼゆこのごろ

南風は地を捲く如くけふも吹き空碧光り六月に入る

○　田中壽夫

わが誓ひ多く破るゝ頃は來ぬ花やわらかく蒼みそめけり

暮れかゝる書齋のすみに浮きて見ゆ君が忘れし白きかんざし

○　守野午後草

北風の水にさからひそよぎ行く川をし眺め思ひ暮すか

賣れのこる藥物の如く心明るき部屋にひとりまろべり

○　藤波君太郎

灰の中に何時か落ちたる折れ針をふとつまみあげ見つむる冬かな

吹く風にかなしき葉ずれの音さすは柏そなたの淋しいか春

○　法月俊郎

さし替へんなどおもひつゝさびしペンものうくもとる日のつゞくかな

おもふまゝに振舞ひ得たる一時のあればかけふはすこしうれしき

○　村上夕人

花みざるむれにもわれはまじりけり春は春とてかなしきものを

種となるころの菜の花旅人の瞳になやましく咲きのこるかな

○　柳つるを

ひとりなる姉にそむく日うちつゞきそむくことさへうれしくなりぬ

都どりしろじろと立つ川の波堤の岸うつうつと

なくらむ

○ 雨森繁

泣かまほしこの高原のしづかなるにこの靜かなる白き木蓮

春來れば野べの草木の歡びをねたむ心になれる我れかな

○ 寶吉波矢雄

ふところに組みしわが掌のぬくもりのなつかしやゆふべ春の街ゆく

草に伏せば喜びに似し疲れほのにからだをめぐる春のかはたれ

○ 野口柳美

春なれば互ひに泣きてへだゝるも忘れがたなきかなしみぞかし

魚の如くものゝ言へざる日の來れすべてと放れ山へのがれむ

○ 小松栄花

交叉點の架線の如くわが心みだされてこゝに投げ出されぬ

かの黒きおはぐろ蝶のさまに似む心をいだき常に涙す

○ 松原次郎

なげすてし煙草のけむりうすあをくのぼるもかなし初夏の草

われとわが指すふかかるかなしみに生くればさみし夏はくれども

○ 小林茂吉

ひとの前强げに言ひて爭ひて歸り來てまた涙ぐむなる

悲しとも思ほへなくにたゞ涙流るる性とわれなりにけり

○ 西村醉香

戀人よ月の光にしほしほと濡れてかへるはさみしかるらん

玉川の水ほそぼそとくれがたのうすらあかりに匂ふさみしさ

○ 清水鎮治

歸り來てくらき書齋にむざと坐しふと眺めやるわれといふ者

床活の山吹のはな三つばかり疊に落ちし朝のけだるさ

○ 高田螢汀

ふるさとの若草山に風ふけばわが悲しみの匂ふ
夕暮

たゞひとり小鳥しば鳴く青山の草の匂ひを慕ひ
て歩む

○ 村上夕人

相知りし君がをとめの日をおもひ京少女みるわ
れはかなしも

何げなく母のかたりし娘の名など思ひ出されて
さ夜を眠らず

○ 木村隆吉郎

楠山の楠の若葉のしつとりと海に映りてうごか
ぬ六月

○ 伊東碧村

あれ！舌に歯磨の香の快く沁む朝空を見るは樂
しも

○ 山下源吉

柳にも春おとづれぬ出あふことひさしくせざる
人の戀しき

○ 長瀬露子

十九てふわれ厄年に生れながら心おごりぬ戀を
得たれば、

○ 安本紅三

親友といふべき人は誰なるとふと思ふ時の淡き
悲しみ

○ 東櫻木子

細々と白き烟のたちのぼるかはたれ時の伊豆の
裏山

○ 時鐘三郎

なつかしき宿屋の夜具よこゝろよく旅の涙の涌
き出づるかな

○ 高木曉星

血いろなき人のごとくも蒼ざめしあかつきがた
の星のさゝめき

○ 久我梧葉

なまぬるき春の夜の風ひかりふくうすき影ひく
色街のいへ

○ 草見迷人

しらじらと廓の朝が明けてゆくその敷石に散れ
る黄ざくら

應募和歌は東京小石川區原町
百十五、尾上柴舟宛の事

俳句

若葉　高田蝶衣選

奥の院若葉の濕肌を刺す　國郎

寺内の閑橑の若葉に雫して　同

若葉すや水騒がしき臨峡亭　同

塔にやすむ放鳥や若葉晴るゝ空　明兮

戸すれ枝の若葉吹く泊坊の夜　同

若葉島に遷宮や船飾も見ゆ　同

龍禽の侫り鳴きや若葉風　愚案

温泉あび疲れの放心や若葉の匂ふ窓　同

功徳水鳥語に澄める若葉晴　同

名聞欲りし昨のわが愚や郷若葉　蓮湖

市井瑣事大まかに聞く里若葉　同

岸若葉靄寒むを薄暮冒人　茶六

温泉華溶さし風呂の匂や軒若葉　同

灯を呼んで馬の鞍解く若葉かな　蘭漿

園の鶴かくて老いゆく若葉かな　同

水荘の晝寂びを若葉擦る飛鳥　羊子

若葉照る落日や湖魚の跳ね凪ぎに　同

逡巡と鎌倉山の若葉かな　小鏡

弓疲れ若葉の風に冷しけり　同

養魚池へ板橋や若葉漏る日脚　逗子王

登山口馬別れ宿のわか葉かな　同

潮鳴りに霧襲ふ朝な若葉して　鶉衣子

庫裡の一間帆影も指呼す谷若葉　同

峠越せば北谷遲き若葉かな　六絲生

法螺谺す雲湧き谷の若葉かな　同

雨に煙る白帝城の若葉かな　葵星

弱法師の立籠る山の若葉かな　同

大衆ある日湯釜据えたり若葉寺　時雨來

浦若葉艪歌もなく潮満つるなり　同

若葉影大沼の水限取れる　諷軒

山根繞る雲や崩れて若葉かぜ　同

牧へ一路の若葉阪後鐘澄む朗ら　掬泉

若葉暗き水門にすがる艇白し　同

宵宮や若葉に灯り祝詞澄む　楊杞子

蜘蛛の圍に霧溜る朝の若葉垣　天行子

信貴山の若葉風今日を僧と連る　夕城

照々坊主に待つ賀や若葉降りつゞく　盲刀衣
若葉清き居心地や伯母が片山家　月咲子
句碑に訪ひし若葉寺お告藥ある　三蘇
深若葉筏あげ迯がす水强し　芳葩
牛の子の角のびやすき若葉かな　月堂
山房詩話処けて若葉の月に醉す　秋風嶺
若葉明き庭構池は漲れる　筑前郎
榎の若葉庄屋の故邸解く日なる　更二
手繰釣若葉の淵にあかず居る　飛雪
清流をせく若葉洞風寒う　黎白
南風がちの漁區晴るゝ若葉山の下　鬼因
若葉風調馬師が額凉しうす　五黄
沒頭の書の倦怠を若葉凪ぐ　保赤
灰皿の煙むらさきや庭若葉　夕人
新港の沿道の木々若葉照る　雀背
郷若葉麥の穗揃ひ日和待つ　藍一星
詣日和も舟楫の便や里若葉　水響
錫杖に動く巨巖や谷若葉　雲洞
庭せゝる胡蝶れや若葉映ゆ障子　一箕

越前吉崎に今初夏蓮如上人忌あり

御山賑ふ蓮如忌や若葉に海見えて　碧疑滴

尾張國織田信長御茶用井戸にて

榎若葉御茶井に昔偲ばるゝ　六泉水

晝寢

晝寢さむればなほ日車の色若し　芳葩
晝寢さめて庭見れば雨のありしとも　同
草の風晝寢の宿にいきれけり　同
晝寢覺蘭も山影に冷えてあり　同
醉泣の君寢て淋し日亭午　明兮
屋根草の花白う晝寢さめし眼に　同
間歇泉の地鳴に宿の晝寢覺む　同
木場衆の晝寢を着ける筏あり　逗子王
天嶺に來て一漁夫と晝寢かな　同
鐵鉢を取つて晝寢の枕かな　同
今次遠漕の初宿や雨に晝寢して　堇湖
覺めし一人は日記にや一行の晝寢時　同
講社客送り出して僕婢晝寢かな　同
山房や非に倦み雲と晝寢ぬる　秋風嶺
婢に茗を命じ置きしを晝寢けり　同
晝寢せる舸夫に帆濡らし雨も來て　羊子
肉木たく業見飽く宿の晝寢かな　同

午寢さめし前に大江の朗らかな　五黄
病馬癒えて安堵の我や溜め午寢　同
葉櫻吹いて晝寢に蟲の落つる軒　閑畝
晝寢覺隣のお茶に招ばれけり　同
魚荷未だし枝川茶屋の晝寢時　保赤
魔が淵に沈む惡夢の晝寢かな　同
縞紐も成りてとろりと晝寢かな　諷軒
晝寢さめて滿庭の木々勢あり　同
樹下に行者の長晝寢鳥の落すもの　茶六
移居市の雑音に晝寢忘れたり　同
講習疲勞の午後の宿晝寢貪りつ　天行子
晝寢さめて見る鱷の魚氷詰めてあり　同
訪ふ家の晝寢て庭樹靜まれる　碧疑滴
怪げな鳥なくや山莊の晝寢時　同
晝寢起態夫の書面見るもうし　稻塢
狐落ちて狂ひ疲れを晝寢たり　六絲生
埒もなき喧嘩や晝寢さめの弟子　楊杞子
午睡さむれば巡回文庫着きてあり　雀背
晝寢起對ふ家は綿打ちつゞく　三蘇
騷蟄又しきりなり晝寢さめし時　國郎
來客送りて晝寢しが遠き思して　鶉衣子

山伏の長者を訪うて晝寢かな　蘆風
晝寢起筏吐く江の崩れ雲　愚案
家出より連れ歸られて晝寢かな　更二
草籠に草も溜らで晝寢せり　平凡子
軒濶ろに晝寢せり晝板うち捨てゝ　筑前郎
御佛も一切衆生も晝寢かな　寒星
港務部の交代時待つ晝寢かな　多蛇王
夜泣せし子の晝寢たり針運ぶ　水・響
芭蕉期つ晝寢起雲長う飛ぶ　一・箕
晝寢起樂も遠う澄む竹の風　夫花郎

夏山

露の葉に漂ふ靄や夏山路　愚案
川尻に浮く夏山や雨の中　同
紫羅傘や夏山口の講社宿　同
草染の濃き布色や夏山家　同
夏山や夜を登る火に霧の色　芳葩
夏山や坊に吹き入る杉の雲　同
杉の香に行衣冷えけり夏の山　同
夏山や瀧透く坊舍開け放つ　明兮
夏山の洞廻り松明に落つ雫　同

齒朶蔭に引ける筧や夏山家　同
間伐りしたき木も農忙や夏の山　五黄
草廬賦すに對する夏山かな　同
桑かこふ窟持ちけり夏山家　同
夏山の夜越安堵や溫泉匂ひに　秋風嶺
湖光浴びて琴棋の興も夏山莊　同
夏川や大樹伐りし夜の月奇しき　同
湖抱く夏山杉の茂りかな　竹梅
夏山や御手洗めける池もあり　同
堂籠りの灯に語らふや夏の山　同
夏山の瓦場暑う素通りし　草蛇朧
夏の山塔脚の水趣殊に愛づ　同
蜂の難に捨て來し馬や夏の山　三光鳥
無獵この夏山の大風怯ぢ歸る　同
二度の登山夏となり瀧に宿もあり　逗子王
夏山を裏見の驛や湖近に　同
一掬の水尊さや夏峠　朱雀
兵燹の迹に消し止む夏の山　同
願解に雨の夏山三度越ゆ　諷軒
絶頂は風飽く如し夏の山　同
夏山を壓する雲に樵り歸る　死有

夏山の晨の月や木蔭に　同
果を盜む猿に張るものや夏山家　羊子
喪に降る日事も無う夏の山見容る　同
呼ぶがよに鳴く鳥や夏の夜の山　茶六
夏山や夕雲一朶雨と化す　秡山
夏山家艶拭きの縁に射す日弱　空鳥
天狗松雲に隱れて夏の山　南川
夏山の木立數ふる債主かな　孤村
夏の山寨賊者にやとのぞく小屋　一簑
夏山に徑あり瀧の裏見過ぐ　國郎
木枕に松風涼し夏山家　銀杏庵
吹非汲む寄進柄杓や夏の山　漁火
湖照れば映ゆる夏山朱樓あり　藍一星
虹晴れや木靈まつりし夏の山　晃．漾
裏耶馬の夏山杉の鉾立ちて　天行子
日に一度出づ畫室夏の山見晴る　來萬蛇
樟腦たく煙這ふ夏の山麓　雲洞
先達の白衣しるしや夏の山　蝶羽
軒にかゝる夏山や旅籠暑くるし　雀背
夏山や鷄伏せ籠に雨來る　月棠
夏山や古城の壁に映ゆ夕日　紫浪

夏山の難所來て鼓瀧を見し　桃仲

紙魚

筆洗を大海と紙魚放ちけり　逗子王
兵燹を全かりし書や紙魚の災　同
疑義なくて移る一齣や紙魚の出づ　同
禁制の頃の蘭書と紙魚も見ず　同
父祖の代の渡り薬と紙魚も見ず　同
我世古る紙魚に食まれし鎧かな　芳葩
紙魚食みて相傳の薬粉袋漏る　同
紙魚の書に昔心となりにけり　同
紙魚の跡が山路の如きこの書かな　同
秘方録紙魚に幾代の親炙かな　死有
紙魚獨り知る詩古人の逆旅かな　同
紙魚の巻一夜に寫し鷄鳴けり　同
讀みながら蠹はぢく榻や芭蕉陰　秋風嶺
架書を抽ら蠹はたく窓を過ぐ帆影　同
或日又蠹はたく處蟇を見つ　同
小袖就中悲しかり紙魚食める跡　明兮
彩梁の大額や紙魚掃ふ僧　同
閣風及ぶ柴垣や紙魚拂ふ縁　同

屑の値に買ひける古書や紙魚の嚢　五黄
正編より續編殊に紙魚の穴　同
本山に借讀す書や紙魚のあと　同
造花映ゆる佛燈や壁を光る紙魚　茶六
不時痛めば織りかけ機を紙魚の這ふ　同
紙魚の這ふ早し書房の明るさに　同
わが句録紙魚食ふ程に貴かり　竹梅
寺貧に御史も紙魚に古りけらし　同
遺稿處分定まらで紙魚に年餘なる　董湖
失明後の大著初巻に紙魚や見ん　同
事なげに紙魚つぶす君に恐れたり　三光鳥
朱註あるに紙魚惜きまで蝕める　同
紙魚光る見て灯も搔きぬ寫經の座　羊子
大書見するも饗應の一つ紙魚拂ふ　同
紙魚食みし古字典守る塾主かな　雀背
築城圖繪具褪せざれど紙魚の痕　同
紙魚はむや祖に賜はりし御墨附　飛雪
紙魚拂ふ日や前栽に風もなし　紫浪
ものつまる引出を紙魚の這ひ出てゝ　雲洞
此書紙魚に惜みし人を悼みけり　國郎
唐箕の音隣る麥秋紙魚拂ふ　天行子

師意に悖るなげやり本や紙魚のあと　一箕
紙魚叩く書に放心の鳥語きく　三石
企業成りて歸れば書庫の紙魚多き　桃仲
十年の句稿いたづらに紙魚肥す　蝶羽
古繪圖の江戶城や紙魚の巢となりて　漁火
大冊に紙魚百年を籠りけり　朱雀
日蝕す紙魚に食はれし衣乾せば　稻塢

俳句課題（土用（十五句）氷室（十五句）……七月五日〆切
雷（十五句）夏雜（十五句）……八月五日〆切
注意　各題別紙　淡路國釜口村高田蝶衣宛

評論

一　巴爾幹講和成立

昨年十月八日以來、砲煙彈雨の巷たりし巴爾幹平和は五月三十日を以て克復の運に會したり、同日土耳其、希臘、勃牙利、黑山、塞爾比五國全權は、倫敦聖ゼームス宮に會合し、平和條約に調印したるを以てなり。講和條約の內容は如何、第一エジアン海岸エノスより黑海岸のメヂアに至る一線を以て土耳其と聯合諸邦との境界線と定めたり、之にて土耳其は唯だ君斯丹丁堡の附近を除きて殆ど其歐洲領土の全部（約十分九）を四國に割讓したるものと言ふ可き也、第二クリート

エジャン海諸島は一切之を列强の處分に委したり、從つて土耳其は亦之等諸島を喪失するものと見ざるべからず、第三、アルバニヤ國境問題を列强の決定に委すると共に歐洲土耳其の財政諸問題（土耳其の現在公債額を領土の分配に準じて巴爾幹諸邦に分擔せしむる件等）をも之を巴里列國財政會議に一任したり、此規定に至ては土耳其に投資したる佛國其他列强資本家の保護策に過ぎざると、敢て喋々の勞を待たざる也。

吾人は此和約成立に對して、最も英國外相サー、グレーの努力を多とせるを得ず、何ぞや、是より先き、勃牙利、土耳其のみは講和成立を急ぎたりしと雖も、塞爾比、希臘兩國に至つては、些細の主張を固持して條約調印を肯ぜざりき、即ち彼等は講和條約中アルバニヤ國境及びエジヤン海諸島を列强の決定に委する旨規定せるを非とし、之が處分協議には塞希諸國も參加せざる可からずと主張せりき、之が爲め談判遷延、決せざりしを以て、外相グレーは、五月二十七日朝、別別に勃、土、塞、希四國全權を引見し「和約に關しては最早や論議を重ぬるの餘地無し、各交戰國は調印の意あるや否とに關らず、現在の儘の條約に調印せざる可からず」と警告し、「然らずんば倫敦を立ち去るを可とす」と勸告したりき、此强硬なる壓迫無くんば、和約の運命は殆んど知る可からざりし也、顧みるに先きに黑山國がスクタリ占有を主張するや、墺獨伊之に反對し、露佛は多少黑山に同情するの姿たり、爲めに列强の協同破綻せん形勢ありたるに、能く其間に處して之を調和し、遂に露國を動かして、スクタリ撤去を黑山國に勸告せしめたるものは、サー、グレーの功績なりき、然るに今回の和約成立、亦たサー、グレーの盡瘁に基く、誰か此昭々たる事實に接して、英國外交の活動に驚歎せざるものぞや。

二

然かも此和約の成立は、未だ巴爾幹問題を解決し得たるものにあらず、他無し、土耳其及巴爾幹關係を規定せるものは一八七八年の伯林條約たり、是れ英露獨墺以下列强參加決定せる所あるを以て、之が變更を意味する行動は、一切列强の同意を得ざる可からざるを以て也、然らば即ち此和約は列强大使會議のアルバニヤ、クリート、エジアン海諸島問題決定と巴里財務會議の決議とを待ちて、全部綜合列國間の一大條約と化す可きと、略ぼ豫想するに難からざる也。

左れど此事業も決して困難ならずとせず、而して之

を成功せしむるの責任は、重に露國の雙肩に懸るの感あり、何ぞや、今後の難問題は勃牙利對希臘、塞爾比の新領土分配にあれば也、顧みるに刻下勃希塞三國の領土爭ひは太だ激甚の狀に在り、今外紙の所報に依りて其現狀を紹介せん。

△希臘對勃牙利　希臘は昨年サロニカ攻擊の際、兩三日間勃牙利に先んじてサロニカを占領し得たる故を以てサロニカは勿論、其東南地方をも獲得するの權利ありと主張す、勃牙利は之に反對し希軍のサロニカ占領を不完全となすのみならず、戰爭中に於ける羅馬尼亞中立の代償として自國領土たるシッストリア地方を羅國に割讓する事となりたるを以て、之が代償を他の聯合諸國より受くるの權利ありとし、サロニカ市をのみを希臘に讓るにせよ、其東南地方は是非勃國領にせざる可からずと主張す。

△塞爾比對勃牙利　塞爾比は當初アルバニヤを占領せんことを希望したりしも、アルバニヤ獨立州の建設の爲め此希望空しきに至りたる爲め、昨年三月勃塞マセドニヤ分割密約中に「所屬未定」の部に入れられたるクマノウオ、ウスクブ、チブラ等は勿論勃牙利領と內定せる一二地方をも自己の領域とし、以て其埋合せをなさんことを主張す、勃牙利は之に反對しアルバニヤの變動は自己の羅馬尼亞賠償に對する塞國の義務を相殺す可しと主張す。

此爭議は近來益ゝ紛糾し爲めに六月中旬勃牙利ゲシヨフ內閣沒落しダネフ內閣之に代るあり、又塞爾比パシチ內閣も辭職するに至りし也、然るに露國は勃希塞諸國と人種宗教を同うするのみならず、最近政治的援者たりし關係あるを以て、自ら三國間の仲裁に當らんとす、而して三國も略ぼ此仲裁を承諾せりとの報を聞く、是豈サゾノフ外相が大に奮勵畫策すべき時にあらざらん哉。

若し此巴爾幹內訌にして決定せんか、恐らくは其他に多大の面倒なかる可し、何となればアルバニヤに野心ありと云ふ墺伊兩國の如きも、差當り露骨なる要求を提出す可しとは思はれざるを以て也。

三

和約成立は亦た他方に於て土耳其の內訌を激烈にするに至れり、顯著なる現象は、宰相セフケット、パーシャの暗殺是也。

六月十一日、宰相セフケット、パーシャ、自動車に乘じ政廳に向ふの途中、二名の兇漢現はれ「我國は滅

びたり」と連呼しつゝ銃を擧げて宰相を射殺しぬ、次て元老政治家サイト、パーシャ臨時宰相に任命せられ、兇漢亦就縛したりと雖も、土耳其の前途は必らず困難を極む可きを疑はざる也。

前宰相の遭難は是非も無し、蓋し本年一月キヤミルパーシャの對外軟を攻撃し、アドリアノープル割讓す可からずと叫びたるは宰相なれば也、部下將校連を教唆し、陸相ナジム、ベイ等を殺害せしめ、自ら政權を掌握したるも、宰相なれば也、而して事の實際を見ん乎、今回の和約に於ける土耳其の屈辱は、キヤミル、パシーシャ時代以上と言はざるを得ず、狂熱的軍人等が奮然蹶起、奸賊斬る可しと絶叫するに至れるも、土耳其の國柄としては、怪む可きにあらざる也、

然かも過去は說くも詮無し、今後の土耳其は如何なる可き乎。

吾人は切に其前途の困難を思はざるを得ず、亞細亞土耳其に於ける諸民族の自治熱、獨立熱は已に前號に縷述せるが如くなるに、歐洲土耳其に於て失職せる土耳其官吏二萬餘は。亞細亞土耳其に其職を求めざるを得ざらんとす、之が處分は政府が苦心す可き問題の一也、或は恐る、其處分宜しきを得ずして、不平黨、慷慨家を増加し、國政を面倒にするとあらざるかを、次ぎにシリヤは佛國の勢力强く、メソポタミヤは英國の地盤たり、バグダット鐵道地帶は獨逸の權力隆々たり、列强の角逐斯くの如きの地に於て、能く久しく國家的存在を維持するを得可き乎、吾人は同じく東洋人として大に其前途を憂へざるを得ず、本年四月故セフケツトパーシャは英國新聞記者と會見し、盛んに日本を賞揚して曰く、吾人も亦た日本の跡を追ひ、白人種ならぬ文明國を造らんとすと、吁嗟セ宰相が逝去の如く、此希望も亦同じく消失する如きとあらざる乎。

加奈陀と濠州

最近、最も注目を惹くものを加奈陀及び濠州の政局となす。

顧みるに加奈陀首相ボーデン氏は、海軍費七千萬圓を投じドレッドノート型戰艦を英國に寄附するの案を建て、昨秋之を加奈陀議會に提出したるに、下院は已に之を通過したりしも、上院は三十日、二十七對五十一の多數を以て之を否決したりき、此否決には重大の意義あり、何ぞや、由來加奈陀に於ける佛人血統の人

民は英國との接近を欲せず、海軍を造る可くんば、獨立の加奈陀海軍を創設す可しとの主張を固持したりき今回の海軍案の否決は、則ち此種論者の勢力、侮る可からざるを證明せりと言ふ可き也、是に於て乎、吾人は大に英國及殖民地關係の將來を變へざるを得ざる也。

次ぎに濠州聯邦下院總選擧(五月三十一日)は、勞働黨議員三十七對自由黨三十八の結果を収めたりき、一九一〇年四月の總選擧に在りては勞働黨四十四、聯合黨(自由及保守)二十九名、獨立自由黨二名の當選を見、爲めにフイツャー氏の現勞働黨内閣の組織を見たりしが、今や形勢一變す、恐らくは内閣變動の時機遠きにあらざる可きか、況んや勞働黨が主張せるレフエレンダム制採用案の如き、一般選擧民の贊成を得ざりしと言ふに於てをや。

獨帝即位二十五年祭

獨帝即位二十五年祭、六月十六日擧行せらる、國民の欣躍狂喜、亦何の怪む可きことか之あらん。

兎角の非難はあり乍らも、彼や一世の偉傑也、巧みに墺伊を操縦して歐洲の指導者となれるのみならず、國内文物藝術の發達、天下比倫を見ず、是豈翩々たる輕薄才子(彼の非難者が説く如き)の能くする所ならんや。

然かも彼や無疵の人にあらず、其無疵ならざるは、是却て其前途琢磨の望ある所以也、齢正さに五十五、其事業は寧ろ今後に在り、吾人が其即位五十年を祝するの時、彼の人物治績大に見る可きものあるを疑はざる也。

排日外交難

排日問題交渉は頗る困難を極めつゝあるに似たり、其原因や他無し、米國中央政府の態度一變是也。

五月十九日午前十一時三十分加州々知事ジヨンソン氏排日的土地法の裁可調印を斷行するや、我政府は直ちに珍田大使をして第一回抗議を提出せしめ、六月四日第二回抗議を提出せしめたりき、而して之に對する米國々務省の回答は「日本政府の主張する如き條約違反の事實を認めずと雖も、加州の措置につきては遺憾千萬に感ずる所あるが故に、之が解決に盡力するを辭せず」と言明せるものなるが如し、然かも已に條約違

反の事實を認めずとせば、是れ排日土地法の有效なるを承認するものに外ならず、加ふるに中央政府は條約違反にあらざる州法に對しては、干渉する權能をも、機會をも有し得可きにあらず、以て米國政府が急に逃げ腰となりたるを見る可き也。

知らず、我が霞關の外交家は、如何なる妙策を以て敵の遁腰に處せんと欲する乎。

新刊批評と紹介

△生の要求と文學　　片上伸著　南北社發行

見渡したところ今の我文壇に於いて、氏の如き誠實な態度を以て人生に面してゐる人はあるまい。忠實な真摯な而して冷酷な批判を自己の上に下して、氷るやうなメスで自分自らを切刻んで行かうとする痛烈な態度は慥に何人の尊敬にも値するものがある。此書は氏が痛ましい努力に依つて生れた論文「生みの力」「現實を愛する心」「母の眼」「告白と批評と創造と」「生の要求と藝術」等三十餘篇を輯めたものである。一度物質の力に慴伏せられて、不可抗的な運命の前に人間の意力を無視したナチュラリズムの時代から、内に燃ゆる已み難き生の力に促されて更に眞の意味における批評的精神に歸らうとする今日の時代に、眞の生を生きんとして努力する最も痛切な最も熾烈な氏の態度が遺憾なく現れて、讀者をして同感と同情と時に戰慄と恐怖とを味はしむるものがある。眞面目なる生の愛好者にとつては無二の知己となり、又なき慰藉者ともなるであらう。敢て文學同攻者の必讀を薦める。(定價壹圓貳拾錢)

△櫛　　鈴木三重吉著　春陽堂發行

内容は「櫛」「凶兆」「穴」「辛」「伯母とお濱」「黒蜻蛉」「鳥」の諸篇を收む。蓮葉の絲を引張つたやうな細い線で以て痛ましい感情の顫動を讀者の胸に響かせる氏一流の長所が遺憾なく發揮せられて何れも此れもとり〴〵に興味深いものがある。(定價壹圓)

△女鳩　　鈴木三重吉著　濱口書店發行

「女帰」「金魚」「病間」「人形」「靑い眼の女」「氷」「大伯母」「馬車の出來る間」「留守」「命靈花」の十篇を輯む。（定價壹圓）

△微風

島崎藤村著
新潮社發行

藤村氏が洋行前に殘されたる短篇集にして緑蔭叢書の第四篇である。「出發」「岩石の間」「死の床」「沈默」等外數篇を收む。例に依つて親切なる製本。（定價七拾五錢）

△武器と人

坪内逍遙
市川又彦共譯
早稻田大學出版部發行

原作はショーの傑作中の傑作と稱せらるゝものにして、ショー一流の皮肉を以てあらゆる虛僞の假面を剝離して、似而非愛國主義軍人氣質高等戀愛等を嘲笑し罵倒し飜弄し去る處實に痛快を極む。譯筆亦敬服に値す。（定價六拾錢）

△女の一生

森田草平著
春陽堂發行

「狂言」「小狗」「妾」「留守の間」「戀愛の後」「女の一生」「岡崎日記」「女の良人」の八篇を收む。ついて著者の特長を見るべし。（定價壹圓）

△ペレアスとメリサンド

島村抱月譯
現代社發行

譯者は本書の首めに言つてゐる。『「ペレアスとメリサンド」は純粹な戀愛悲劇として題材は必ずしも此著者を須たないものであるが、其取扱方は徹底的にマーテルリンク式で、しかも其肉となり筋となつて見はれる外形の豐富場面の美さは著者の作中他に類の尠い劇である。著者特有の重さ深さ靜さの上に劇的要素を加へた作の好例と信ずる』と。それに「七王女」を加へて近代劇本叢書の第三編として發行せられたるものである。（定價四拾錢）

△櫻の園

瀨沼夏葉譯
新潮社發行

原作はチエホフの傑作。イプセン等の劇本とは大いに其面目を異にし日常茶飯事を平面的に寫し出して、そこに人生の機微を促へたるもの。女史の筆亦此原作の妙味を傳ふるに適す。（定價六十錢）

△涙痕

原阿佐緒著
東雲堂發行

女らしい情緒の漲つた、輕い皮肉や鋭い神經のきらめいた詩集である。「吾がために死なんと云ひし男らのみなながらへぬおもしろきかな」「誰のごと勿忘草のかんざしを母が前にもほこりけるかな」等を載す。（定價五拾錢）

△かぶと蟲

岡田實麿譯
北文館發行

世界的文學者エドガー・アラン・ポーの傑作「甲蟲」「渦卷」「沒落」の三篇を譯したものである。三者孰れも彼の天才の各方面を代表したる傑作であつて、今日此譯文を我國に見るを得たるは歡ぶべきである。（定價五拾五錢）

△新理想主義の哲學

波多野精一
宮本和吉共譯
内田老鶴圃發行

本書はオイケンの「精神的生活内容の爲めの戰」を譯したものである。此書はオイケンの著作の中に於いても其新理想主義の哲學を最も根本的に宣明したるものであつて、新しい精神生活に生きんとする者の見遁すべからざる良書である。殊に我邦に於いて新理想主義を說くに最も相應しい波多野博士の共譯を得たるとは讀書子の最も感謝すべき所であらう。

(定價貳圓五拾錢)

△幼年教育百話

田村直臣著
警醒社發行

著者が十年以前から幼年教育の目的を以て發行した雜誌「幼年教育」に載せた少年文學を此度び一冊に纏めて出版したものである。少年の爲めに面白くて爲めになる種類の敎訓「新聞賣子」以下百題。一般家庭に備へて子弟を敎育するに好參考書たるべきものであらう。(定價壹圓貳拾錢)

△此一筋

沼波瓊音著
丙午出版社發行

大正文庫の第二編として發行せられたるもの。俳諧茶話といつたやうな種類の面白い而して高尙な讀物である。(定價金七拾錢)

△化學工業廢物利用

中島德太郎著
東亞堂發行

近來學制の進步は、從來無用若しくは有害の廢棄物として棄てゝ顧みられなかつた物質から、有益不可缺の物を製出するやうになつた。著者は此書により其等廢物利用の法を論じて國家の富源を作らんとしたもの普く工藝家の必讀すべき良書である。(定價金壹圓貳拾錢)

△藤田翁言行錄

岩下清周著
(非賣品)

長州より身を起して實業界に投じ、本邦屈指の富を致したる藤田男の言行錄也。流石にあれだけの仕事を爲た人だけあつて、其言行按排の模範たり參考たる處多い。翁の面目風丰は此書に依つて遺憾なく窺はれる。

△作歌練習法

金子薰園著
新潮社發行

如何にして一首の歌を纏めるかといふ問題を丁寧親切に敎へてある。内容形式の練習から、敍景抒情寫生、人事を寫し感じを表す練習に至るまで、例を擧げて說明してある。初學者は勿論一般和歌を嗜む者にとつて此上なき指南車であらう。(定價金參拾錢)

△武士道

足立栗園編
壬子出版社發行

此書は我武士道の眞髓を事實上より知らしめん爲めに名將勇士義人烈婦の美談佳話を摘抄したるものである。精神修養の一助として靑年諸子の一讀すべきものであらう。(定價五拾錢)

△遲日

籾山仁三郞著
籾山書店發行

籾山書店の主人仁三郞氏の著である。町中の庭、霞、かすてら、耳食等の隨筆やら小說のやうなものが蒐めてある。江戶趣味の憧憬に生きようとするやうな享樂的な處が隨處に見られる。文章も巧みになされてゐる。(定價金壹圓)

△虛子文集

高濱虛子著
實業之日本社發行

近い頃の寫生文「死絕えた家」外九編を集めたものである。虛子氏の寫生文は世に定評がある。いかにもさらさらとして氣持よく筆が運ばれてゐる。銷夏の讀物としても蓋し絕好の物であらう。(定價金四拾錢)

△學界の賢人愚人

藤原喜代藏著
文敎會發行

著者一流の筆を揮つて敎育界學問界の人物を論評して餘す處なし。由來敎育界學問界は政治界と異り、其人物評論も亦精彩華麗の趣きに乏しけれど、眞面目に其人を知らんとする者は一讀するの要あるべし。(定價金壹圓八拾錢)

△海軍々政要覽　矢野常太郎著　東亞堂發行

本書は海軍現行組織の梗概を知悉せしめ、海軍思想養成の一助たらしめん爲め其一斑を記述せるもの也。（定價金壹圓五拾錢）

△光を慕ひて　小山勝浦著　覺醒社發行

眞に生きんが爲めに、生の意義と價値とに徹底せんとして煩悶し努力し健鬪して終に信仰を得たる著者が實驗の告白である。眞面目に悶え苦しんで光を慕ふ所、そこに已に吾々を壓する敬虔的情調の溢れてゐるものがある。小册子なりと雖此書や必ず世の闇にさすらへる多くの者に一道の光を投げ與ふるであらう。（定價參拾錢）

△英話商賣用會話　富田源太郎著

商賣上に必要な會話は殆ど殘らず集めてある重寶な書である。（定價六拾五錢）

△青鞜小說集　青鞜社編　東雲堂發行

青鞜創刊以來一年餘の同誌に載せられた小說を集めたものである。野上彌生子の「京之助の居睡」外十七篇の小說を收む。閨秀作家の創作的手腕と婦人界の思潮とを知るに適當な書である。（定價金八拾錢）

△戀になやみし乙女の自白　（定價四拾五錢）　花島恭子著　盛文館發行

△決鬪　昇曙夢譯　博文館發行

現代第一流の露國作家たるクープリンの原著を譯したるものにして「西洋文藝叢書」第一篇として發行せられたるもの也。强ひて深酷がらず又努めて神秘がらず、寧ろ平明にして淡々たる敍述の中に、精細なる世態人情の觀察あり、結構着想亦整然として一絲紊れず。流石に大家の筆なる哉と感歎せしむ。何人にも愛讀せらるゝの價値あるを疑はず。附錄の「生活の川」亦極めて面白し。（定價金壹圓）

△生さぬなか（上中下）　柳川春葉著　金尾文淵堂發行

久しく文壇の中心より遠ざかれる觀ありし柳川氏の復活の大作にして氏の特色なる穩やかにして滋味ある情調を遺憾なく發揮したる好家庭小說也。此作一度「大阪毎日」に掲載せらるゝや好評嘖々數萬の家庭に愛讀せられ、今又單行本となつて江湖の需要殆んど盡くる所を知らざるの觀ありといふもの決して其理由なきにあらざる也。（定價各册金九拾五錢）

△來世の有無　新佛教徒同志會編　丙午出版社發行

雜誌新佛教が來世の有無に關する意見を我國諸名家に求めて、そを蒐錄編纂したるもの。有りと言ひ無しと言ふも要するに其人の面目、宗教も哲學も皆其中に自ら表るゝありて面白し。（定價七拾錢）

△經濟財政横議　堀江歸一著　實業之日本社發行

著者が一年の外遊より歸るや、嘱に依り東京日々新聞紙上に連載せられたる財政經濟に關する時事論にして、桂、西園寺、山本三内閣の財政策を論評し、社會政策、勞働問題より國際經濟問題に及ぶ我國刻下の緊要事項を研究して餘す處無し。（定價壹圓貳拾錢）

△星亭　伊藤痴遊著　東亞堂發行

星亭は未だに疑問の人である。只エナーゼチツクな人であつた事だけ

は疑ひない。疑問の人であるだけ其傳記には興味がある。エナーゼチックな人であつただけ其活動の舞臺は廣い。何れよしても明治の巨人としての是は幾多の劇的資料を有してをる。此書の面白い所以であらう。

(定價壹圓五拾錢)

△正傳眞田三代記　　臼田亞浪著　石楠書店發行

精確な史料に據つて眞田三代の悲壯なる歷史を敍したるものである。文章暢達。亦好個の歷史的讀物たるを疑はず。(定價壹圓六拾錢)

△通人物語 趣味の東京　　湯朝竹山人著　鈴木書店發行

此書は現代の嗜好に投じたものと言つて可からう。通人物語だの新吉原物語、藝者稼業裏表、藝者の情合と言つた風に此社會の情實を描いてある。蓋し讀むなと言つても今の青年の好んで讀むやうな書である。

(定價六拾五錢)

△赤門生活　　南北社編輯部發行

本書は帝國大學の構造と輪廓とを紹介した處のものである。赤門の學風から各分科生活、敎授の品評、大學院の組織から、裸かにした戀の赤門に至るまで忌憚なく大學生活の內容を描いてある。參考として何人も一讀すべきものであらう。(定價八拾錢)

△お醫者論　　青風白雨樓主人著　東亞堂發行

現代社會の中流に存在し、仁術を口にして盛に賣藥を商ふ醫師なる者を捉へて八方之を論評して餘す處無し。近來の快書と謂ふべし。

(定價七拾錢)

△袁世凱　　關矢越山著　實業之日本社發行

一代の怪傑袁世凱を論評したるものを本書となす。去歲革命の大亂起るや能く國家の權威を維持して、今や共和政治の中心に彼の怪腕は遺憾なく發揮せらる。其面目風丰此書に依つて目覩するが如し。

(定價壹圓)

△芭蕉句選講話(春之卷)　　沼波瓊音著　東亞堂發行

芭蕉の春の句に親切な註解を施したもの。俳諧研究者にとつて喜ぶべき指南車である。(定價六拾錢)

△世界の新しい ふらんす女　　青柳有美著　東亞堂發行

「肉慾の都巴里とは如何なる都市か、巴里をして肉慾の都たらしむる其女や如何」。之れ著者の紹介せんと努めたる所にして「女の巴里」「暗中の巴里」二篇共に面白し。著者の言一見すれば極めて奇矯を衒ふ如く思はるゝも、其根柢には必らず科學的研究によれる精確なる事實の存するあり。眞に之を讀めば益を得ること少からざるものあれども、世の嘖々者流只其外觀によつて之を危險視するは笑ふべき也。(定價七拾錢)

△淪落の女　　松崎天民著　磯村甲陽堂發行

天民氏の文世已に定評あり。一字一句のソツなき其暢達流麗の筆を以て、薄倖の運命を泣くいろ/\の女と共に痛み哀む所、殆んど氏の獨壇場にして決して他人の追從を許さず。本篇の本誌にあらはれ初むるや頗る江湖の喝采を博し、之を單行本として再び世に問ふや、僅々半年に充たずして已に五版を重ねたりといふもの、亦宜なりといひつべし。(定價

五拾五錢)

△七擒八縱

中野耕堂著
東亞堂發行

今次の政變にてメッキリ男を上げたるものは中野耕堂氏なり。一般文藝の著しく發達せる今日に於て、獨り論文家の缺乏を憂ひつゝありし讀書界は氏の出現に向つて少からざる期待を囑したるものゝ如し。勿論其思想文章餘りに漢學臭を帶び、且つ多少稚氣を脱せざる所あるを遺憾とするも、兎に角堂々として中央論壇に乗り出せるは一種の偉觀也。此書氏が桂公、大隈伯、原氏、犬養氏、尾崎氏、青年政治家、浪人組、政商、政友倶樂部等に與ふる書十篇を蒐めたるものにして氏の意氣の壯なるを窺ふに足れり。(定價七拾錢)

△歐洲美術遍路(上卷)

石井柏亭著
東雲堂發行

本書は著者が歐洲漫遊の土産にして、埃及土耳古伊太利亞及佛京の見聞記を此度び上卷として發行せられたものである。「エムエム船中」「ナイルの上流」「羅馬と水繪」等十九篇隨筆紀行の類もあれば評論もある。著者自作のスケッチと泰西新古の美術品と合せて無慮六七十葉も挿まれてある。氏は夙に一家の識見を以て我畫壇の一角に眞面目な新しい試みの筆を創作に將た評論に揮つてをる。今や我美術界革新の先驅者たる氏が、一度び歐洲の風物に接していかに其詩才を發揮し見聞を弘めたるか。我國美術界の代表者の眼に映じたる歐洲を知る上に於ても亦興味深き書である、挿畫に至つては著者の趣味好尚並びに藝術上の主張を窺ふヿを得る。記者は此の眞面目なる努力の結晶を推奬せんと欲するものである。

(定價貳圓)

相馬御風著
春陽堂發行

△峠

「峠」「仙人の話」を收めた文藝叢書の第廿三編である。峠は新聞に連載せられた當時已に好評を得たもので、創作家としての氏の手腕の決して尋常でないヿを證するに餘りあるものがある。(定價貳拾五錢)

佐藤正著
東亞堂發行

△日本人長所短所論

各方面より日本人の長所短所を研究して餘蘊なし。一讀を薦む。

(定價壹圓四拾錢)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



(中付三の一)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

刻下の大問題

前陸海軍教授
中央新聞記者 鷗公 酒卷貞一郎先生著

支那分割論
附 袁世凱

全一冊菊版七百頁上製美本函入
定價貳圓郵稅十二錢臺樺三十錢

著者は嚮に海軍兵學校に於て外交史の講義を擔任し東方の問題は特に深き趣味を以て研究する玆に年あり去歲支那の革命起るや筆を提げて武漢の地に赴き親しく戰況を視察し講和談判の始まるや上海に下りて仔細に其經過を注意し又交を革命黨の諸名士に結び支那問題に就ては造詣頗る深し今や支那最近の政況に憤慨する所あり勃然として此書を著はす所論時弊に適中し鑿々として肯綮に當る東亞の大局を知り支那の將來を察せんとするものには必讀の書也附錄袁世凱は姦雄の本體を說破して殆んど完膚なし快讀不可禁

發行所 東京市日本橋區本銀町三丁目 振替東京壹貳〇五五番 株式會社 啓成社

（中付三の二）



（詳細目次郵券二錢を要す）

永く保存家の
日本名勝寫生紀行
東海道の巻上下完結發賣

上の巻　定價金四圓也（内地送料金十二錢）

岡野・中澤・山本・小林・跡見　五畫伯の合著

挿畫着彩木版四十四葉・寫眞版二十七葉・四色版十六葉

本文小間書入全巻二色刷三〇〇頁・四六判　金縁洋装函入

第五冊　東海道下の巻　金三圓五十錢
第三冊　京都の巻　金四圓五十錢
第二冊　利根川銚子房總半島箱根舊道伊豆方面金三圓五十錢
第一冊　日光榛名妙義淺間善光寺諏訪木曾路等金二圓五十錢

各冊送料内地金十二錢

五冊一組　特價拾四圓五拾錢（内地送料金廿四錢　但八月中旬締切）

版元　東京市神田駿河臺下　振替東京二八一六番　中西屋書店

（中付三の三）



鮫島大浪氏著

初版再版賣切 三版

別れたる女の日記



ある女の大膽なる告白

小說以上の小說

破天荒の快著述

四六版本綴裝幀艶麗無比

定價四拾五錢郵稅四錢

（どこの本屋でも取つぎます）

發賣元

東京々橋區西紺屋町

艮明堂

振替東京一四七〇

（中付三の四）

浮名

長田幹彦

秋風に寂しく暮れたある夜のことである。一力の奥の廣間には今宵もまたその頃祇園で成駒屋の力彌と綽名にまで唄はれた三條の素封家津川のぼんち清三郎のほつそりした處女のやうな美しい顔が見られた。正面の大床から紙襖際まで顔見世狂言の舞臺でも見るやうに風情よく置きならべられた五六臺の紙燭は時とゝもにじりじりと燃え落ちて、ほの暗いその光が喘ぐたびに、あるかなきかの陰影が何處からともなくたゆたふやうに間うちに搖曳して來る。黒光りのする天井も、古めかしい紅殻色の壁も、煤けた紙襖の金泥も、みな一様にしつとりとしたその薄明りのなかに溶けて、銅壺に生けた紫苑の花を背にした清三郎の白い横顔までが其處になくてはならぬ繪模様のやうにくつきりと浮きあが

つた輪廓をみせてゐる。

清三郎の周圍にはいつものやうに四五人の舞妓が雛壇から降りて來た人形のやうな婉麗な化粧を凝らして、各〻思ひおもひの姿態をしながら右ひだりに居並んでゐる。老妓の仙吉は三味線の棹を横へずらして、今まで唄つてゐた小唄の跡を追ふやうにうつとり撥で調子をとりながら空を細かく刻んでゐる。少しさがつて燭臺の傍には眉を落とした若い仲居が黯んだ紅前垂れを膝のわきに引きそばめて行儀よく坐つてゐる。清三郎はそのなかで脇息に片肱もたせかけながら、沈着いた顔容をして黒塗りの小さな膳から盃をとりあげては少しづゝ濃い酒を啜つてゐるのである。

「なあ、へ、川はん。どうぞお願ひどすさかい、また何ぞ面白いお話しを聞かしとくれやす。」舞妓の吉彌は待ち兼ねてゐたやうに口紅の光る脣を綻ばしながら云つた。

「また話しかいな。あかんなあ。」と、清三郎は盃を置いて、厭でもなさゝうに微笑みながらさう云ふ吉彌の顏をしげしげ見た。清三郎が舞妓達を集めて多愛もない遊びに耽る時にはいつでもその「お話し」が附きものゝやうになつて座興を助けた。人並すぐれて讀書癖のある彼はさまざまな小說や、物語りのなかゝら解り易いものを選つてはよく彼等に話して聞かせた。はじめは罪のない童話のやうなものから、漸次と人情話しに移つて、今では聽きての耳も心も相應に發達してきたので時々は鏡花の作物の荒筋などを摘撮んで話すこともあつた。舞妓達も彼の美しい顏をみる以外に、その面白い物語りを聞くことを樂しみにして大抵の座敷は貰つてても彼の行つてゐる茶屋へ集まつて來るのであつた。

清三郎はぢつと紙燭の光を見つめながら考へてゐたが、やがて、
「そやけど、今夜は頭が怪體になつて、ひとつも思ひ出せんぜ。もう種が盡きたんかも知れへん。」
「いけずやなあ！」なかても一番美しい眼をもつた久勇は拗ねるやうに肩をゆすつて、「そなこと云はんと、お云ひやはいな。どないに短うても大事おへんさかい、云ふとくれやすな。」
「そやかて、思ひ出せんものは仕様がないやないか。」
「思ひ出せんちう筈がおへんわ。なあ、吉彌はん。あなこつちふて私らを嬲らはんにやわ。ほんまに惡いお方やなあ。」
「ほんまにいな。この頃はえゝひとがお出來やしたさかい、あんたはん頼りないお方におなりやしたわ。一遍きついめに云ふて上げんならん。」
「はゝゝ。こらまたきつい氣やな。」清三郎は笑ひながら急に當惑らしい顏つきになつて、「そないにいふけど、此頃は忙がしうて本ちうやうなもん讀んでゐる暇があらへんのやがな。」
「そらさうどすやろ。私らには聞かしとお呉れやしまへんやろ。松勇はんやつたらさらのえゝ話しをたんとたんと聞かしとあげすやろけどなあ。」今まで默つてゐたおうめは清三郎の方へ肩を傾けて、眞顔になつて口をいれた。それと一緒に舞妓達はどつと笑ひ崩れて、
「ふわッきつい氣、どうえ。」と、云ひながら稚けない嫉みをみせた瞳て、彼は方をとりどりに瞻つた。
清三郎はそれを聞くとてれたやうに、

「なんてそれが。」と、口籠つて、眼尻から頬へ若々しい血を波だゝせながら側を向いてしまつた。
仙吉も一座の容子をみると面白さうにくすくす笑ひ出して、
「この頃の舞妓はんはほんまに恐らしやの。」と、云ひながら仲居のおさだと顔を見合はせた。
やがて吉彌はまた詰るやうな調子で、
「なあ、へ、川はん。あんたはんえらう松勇はんを好いとゐやすちう噂どすが、ほんまどつか？、ほんまにあの人好いとゐやすか？」
「阿呆らしい。誰れがそなこと云ふてるえ。」
「誰がて、皆して云ふてやはりますがな。えらい評判どつせ。」
「阿呆やなあ。そなこと嘘や。私はなあ、舞妓はんやつたら誰かて好きや。」
「おう、おう、えゝやうに云ふて呉れやはる。」と、吉彌は信じ難いやうに唇だけて笑つて、「よんべもなあ、私と小菊はんと、松勇はんと、それから久勇はん、あんたもおゐやしたえなあ。みんなして大榮はんて縁結びしたんどつせ。ほしたらな、二度ともあんたはんと松勇はんとひつつかはつた。私、もうてれくさうなつて來てな、えゝつちうて引割いて縁側から川へ投げてしまうたんどつせ。」
「さうどしたえなあ。姐はん。」久勇も眼を据ゑながら小さな嫉妬を體に現はして、「私、もうあんなんやつたら叶はんわ。」
「ほんまにいな。川はんもよう考へとみやす。餘りやおへんか。」一番年の下な雛子までませた口をきく。

仙吉は默つて口々に訴へるその樣を眺めてゐたが、やがて年寄りらしい口調て、
「そんなことお云ひやすけど、あんたはんがたも皆我儘やないか。なんぼ云ふたかて、川はんがお好きのものは仕樣がないやないか。さうやろ。あんたがたかてほんまに好きとお思ひるお方がある時にな、そのお方のことを端から喧ましう云ふたかてあかんやろ。」
「そやかて、姐はん。そんなんやつたら賴りないわ。こないして皆仲好う寄せて貰ふてんのに、たつたひとり松勇はんばつかりお好きやすちう法かないわ。誰かてみんな好いて欲しいわ。」久勇は鼻を鳴らしながら拗ねるやうに云ふ。
「ほゝゝゝ。やゝこしいえなあ。もうちよつと賢うおなりんか。」仙吉は細いのべの煙管をとり出して笑談のやうに煙を吐きながら、「そやけど、川はんも難義どすえなあ。こないにたんと好いて吳れる人があつてはなあ。ほゝゝゝ。それこそほんまに賴りなうおつしやろ。」
淸三郎は恥かしさうに薄笑ひを洩らずばかりで返事をしようともしなかつた。
一體、年頃から云つても、趣味性から云つても彼はもう旣に成熟した立派な男になつてゐながら、どういふものか彼には鑑賞的な、非現實的な處があつた。現實に接着して、そのなかに沒頭してゆくことはどうしても彼には出來なかつた。出來ないといふより、さう云ふことをするのがひどく厭はしかつた。ひとつには傳統の多い大家に育つたせゐてもあらうが、反面からみると、それは放縱てゐながら、何處か打破り難い因襲の網に絡められてゐる消極的な京都の生活がその性格の底に重い礎石を置いてゐるの

てあつた。つまり一言にして掩へば彼も趣味生活を唯一の道徳とする京都人の一人てあつた。

彼は異性に接する機會の多い遊蕩の巷に出入してゐながら、此の年になるまて全く女といふものを知らなかつた。そして遊ぶにしてからが、若い藝妓などを招び集めて色つぽい華美な遊び方をするのが嫌ひて、いつもかうした地味な、趣致の多いしかたて遊んだ。美しい舞妓達を集めて、紙燭の光にそむけた横顔や、紅いだらりの帶のゆらぎや、罪のない言葉の綾のなかに身を置いて、それを唯一の嘆美の對象とした。それてゐて今迄に彼には戀ひの事件がないのかといふと、決してさうてはなかつた。彼の美しい容貌と、貴族的な優しい擧止とは若い藝妓や、舞妓の心を捕へずには置かなかつた。彼を戀ひ慕ひ彼に情を訴へて迫つた女も今迄に一人や二人てはなかつた。併し、そんな場合に途端ばになると彼は自分から無理にもその女の腕を振拂つて遁げた。そしてもう二度とふたゝびその女に近づかなかつた。

今年の春にもさうした事件が彼と舞妓の小千代との間に起つた。二人の仲はもう去年の秋頃から祇園ては人々の口の端に上つてゐた。たとへ最後には遁げをうつにしても、その間際までは女の心を誘ひ、惹きつけてゆくことに興味をもつてゐる彼のことゝて、彼は酒席に集つて來る妓達の前ても、その時は小千代との間柄を公言して憚らなかつた。山科の茸狩、白朮詣りの夜歩きといふやうな本筋を辿つてその關係は漸次と開展していつた。よそめにも可笑しいほど二人は熱していつた。そして到頭、今年の春もう東山に緑も色づいて、そろそろ圓山の樹蔭にも行樂の人影がしげくならうとする頃になると、彼等はお互に情緒の絶巔に到達して、何うにかしなければそれから先、各自の道を歩いてゆくことが出來な

じやうな處までのぼりつめてしまつた。――少くとも周圍のものゝ眼にはさう映つたのであつた。

最初に二人の仲を取りもつた大利の女將は丁度それをいゝしほに思つて、二人の間に最後の關係を結ばせやうとした。殊に小千代の母親といふのが頗る因業な女で、爲めになる旦那筋の客をとらないと云つてひどく彼女を責めたてゝゐる最中だつたので、女將はそつちの方ともよく談合して、都踊の時、番がふさがつてゐないのは一流の舞妓の恥ぢになるからといふやうな巧みな口實のもとに小千代を自分の持ちものにすることを淸三郎に强ひた。

丁度、あと四日ほどで祇園名代の都踊が始まらうといふ日のことであつた。二番の踊りに太鼓の出番をつとめる筈の小千代は一日稽古を休んで、大利の女將に連れられてそれとなく宇治へ行つた。前からの打合はせて淸三郎もその日の午過ぎから宇治川の淸瀨に望んだ古めかしい旅籠屋で彼等に出逢ふことになつてゐた。そして彼等は他人交ぜずの親しげなまとゐをつくつて、浮舟の洲に思ひ草を摘みに出たり、まだ肌寒い河瀨の風を平等院の釣殿に避けたり、面白くその半日を遊び暮らして、灯ともし頃になつてやつと旅籠屋の奧の離座敷に落着いた。そして咽ぶやうな寂しい河瀨の音をきゝながら夕餐の膳に向つたが、その時はもう二人ともすつかり心の底から理解し合つたやうな嬉れしさうな眼いろをしてゐた。

大利の女將はその夜、恥かしさうに口籠る小千代の言葉を聞き捨てゝ、ひと足さきに京へ歸つた。あとは思ひ合つた二人ぎりの世界だと思つて女將は汽車のなかでひそかに北叟笑んだ。そして京へつくと

その儘小千代の屋形へ寄つてさも安心したやうに事の顛末を主人に物語つたあとで、さて家へ歸つてみると、彼女は思ひもかけぬ出來事に驚ろかされた。今頃は宇治で初めて結ぶ仇枕の甘い夢を貪つてゐるとばかり思つてゐた小千代が、何うしたものか何時の間にかたつたひとりで歸つてきて、女將の居間の隅にしよんぼり坐つてゐた。驚いて譯を訊ねると、小千代は急に涙聲になつて女將の乘つた次の汽車で歸つて來たといふばかりで、その儘しくしく泣き出してしまつた。

清三郎はそれからばつたり大利へ足ぶみをしなくなつてしまつた。それのみか小千代さへも其ののちは一度も知らせなかつた。偶に座敷などで出逢ふことがあつても、相變らず親しい言葉はかけてゐながら妙に冷たい擧動をみせて、決して傍へ寄せつけなかつた。………

今日この頃、舞妓達の間で清三郎と浮名の立つてゐる松勇は祇園で名うての温なしやかな舞妓だつた。「あの妓(ひと)は一日ものも何にも云はんとちんと坐つてやはりまつせ。」など、朋輩からも笑はれるほどの無口な女だつた。夢みるやうな睫毛の長い眼をすゑて、ぢつと坐つてゐる處に彼女の全幅の價値があつた。舞ひはさして巧みでもなかつたが、そのかはり小鼓が人に優れて堪能だつた。伏眼がちに瞳を落として、紅の懸緒と肩から友禪の長い袂に垂らしながら流れるやうな纖やかな手先で一調をしらべる彼女の姿は、纖細な美を好む京の畫家の筆に幾度か寫しとられたのであつた。

清三郎は彼女との浮名を早くから薄々耳にしてゐた。何うした機會に、どんなことからそんな噂がたちそめたものか少しも知らなかつたが、それを知らないだけに彼の好奇心は平常よりもより強く動いた。

彼は默つて宙に彼女の姿を描いてみる時、必ず胸の底に淡い歡びが燃えあがつて來て、胸が輕く喘ぎさへもした。そして此れから先彼女との間柄がどう云ふ風に發展してゆくだらうといふことが、彼にとつては深い興味を與へた。その興味はかうして舞妓達の間に取圍まれながら遊んでゐる間にも刻々に增大してゆくのであつた。

「えらうひつそりして來ましたな。ちつと何ぞ云ひまへうか。」仙吉は一座が妙に白けて來たのをみて、また三味線をとりあげながら云つた。

「おほきに。」淸三郎は漸次と寂しい顏容になつて、「そやけどもう宜ろしいわ。何やしら怪體な氣になつて來た。山へてもあがつて來うか。」

舞妓達はひとりもそれに答へるものはなかつた。

吉彌は隅の方の燭臺の陰から淸三郎の横顏をちつと瞻つてゐたが、やがて急に氣をかへて、

「おさだはん姐はん。松勇はんはえらう遲うおすなあ。何をしとゐやすのやろ。」

「私もさつきにからさう思ふて、せいぜい急いて貰ふてんのやけど、お客はんと一緒に京極へいたゝら云ふて、どうしても逢うて貰へんのどつせ。」仲居のおさだはもちまへの細い聲をときらせながら云つた。

「京極へ?　怪體な人やなあ。京極やつたらいつかて行けるのになあ。」と、久勇は吉彌の顏をみながらもどかしさうに云つた。

「ほんまにそや。川はんがこないにしゆんどゐやすのになあ。」
一座はまた話がふつりと途斷れてしまつた。仙吉は皆の氣を讀むやうな老巧な眼つきをして一人ひとりの顏を順々に偸み見ながら押默つてゐたが、一座がますます沈んで來るので、急に可笑しくもなさゝうに笑ひだして、
「こらどもなりまへんな。舞妓はん達までそないにひつそりしてしまうては私らどないにしていゝか分らしまへんがな。」と、氣をひきたてるやうに云つたが、すぐにまた調子を變へて、「ほんならえゝ、今夜は川はんのかはりに私が面白い話しを聞かしてあげうか。そのかはり恐い話え。聞いとお呉れやすか。」
「へ、おほきに。どうぞ云ふとくれやす。」久勇はその顏をみながら氣の乘らない聲で云つた。
仙吉はそれと一緒に三味線を傍へずらして、また煙管をとりあげながら、
「あんたはんがた、昔この万亭はんにゐやはつた化猫の話し知つてるか？」
「知りまへん。」雛子は無邪氣な顏をしながら答へる。
「さうやろなあ。今は餘り云はん話しやさかい。……」と、眼を落して、靜かに柔らかな煙を吐きだしながら、彼女はやがてその化猫の無稽な物語をしはじめた。
それはまだ仙吉が若い舞妓だつた時分のことである。この一力に年古く住み馴れた一疋の猫がゐた。不思議と全身手足まで眞黑て、體の小さな割りにまるで可愛い氣のない猫だつた。いつも人を恐れるやうな、蔑むやうな意地の惡い眼つきをしてゐて、滅多に人の傍へ近寄るやうなことはなく、いかさま乘

てもしさうな柄のよくない猫だつた。

その猫が或日、突然かき消すやうに姿を隠してしまつた。前にもさう云ふことは度々あつたが、大抵その翌日か翌々日には再び歸つて來るのが常だつた。それにその時はどうしたものか三日經つても、四日たつても歸つて來なかつた。て、家ぢうのものは誰れも彼も皆不思議がつて、仲居達から出入する藝妓や舞妓に至るまで寄るとさはるとその噂て持ちきつた。と、それから幾日か經つた或晩のこと、ふと舞妓達の小さな心を慴えさせるやうな出來事が起つた。……

「その晩はなんとなしに陰氣な雨夜やつた。私はな、よう知つてるお客はんて寄せて貰うて、今の吉次はん姐はんな、あの人やおしげはんやたらみんな一緒に來てた。おう、そや、このお座敷や。私は久勇はんが今坐つとゐる邊にやつぱりそないにして坐つてたんえ。とな、もう夜が更けてから、着物を換へさせて貰はう思ふてな、ふつと立つと、その時何やしら庭の方て螢のやうにぴかりと光るものがあんの。まあ、怪體な、冬のことやさかい今頃螢の出る譯はないし、何やろと思ふてぢつと見ると、私ははッちうて喫驚して突如お客はんのねきへ飛んでいて顔を隠してしまうた。……」

「まあ、厭らしやの。姐はん、そら何どす？ 私もう恐わうなつて來たわ。」と、久勇は少しづゝ清三郎の方へにじり寄りながら顔色を變へてゐる。

「それがな、あんたはん。姿を隠したちう猫やの。いつ歸つて來たんか、そこの御不淨の傍に石の手洗水鉢があるやろ。あの陰にこないになつてつくばふてな、座敷の容子をぢつと見てゐるのどすがな。私も

う恐わうて恐わうて、その時こそほんまにどないにせう思ふたか知れんのどつせ。」

「ふわッ雛子はん。厭やわ！」おうめはそのとき雛子が恐ろしさに思はず彼女の膝へ手をつかへたのに吃驚して、いきなり聲高に叫んだ。他の舞妓もその叫び聲てひやりとして、おうめと顔を見合はせながら肩をすくめたが、やがてまたしんと鳴りを靜めて片唾を呑みながら先の話に聞き入つた。

猫はその日からいろいろな奇怪をみせはじめた。晝のうちは死んだやうになつて何處かの隅へ潜んでゐて、夜になるとそつと忍び出て來て、家ぢうをのそりのそり歩きまはつた。食べものは何をたべてゐるのか、お座敷の餘りの魚などをやつても口もつけなかつた。そして不思議なことには鳴き聲といふものをまるて立てなくなつてしまつた。

それからといふものは毎日のやうに不思議な事が續いた。棚の上に載せてあつた白蠟か包紙だけになつてゐたり、大床の掛軸の面へ平つたい猫の足痕がついてゐたり、閉めて置いた雨戸が開かつてゐたりさまざまの異變が家のなかに起つた。なかても一番變なのは風もないのに紙燭の火がすうと息をひくやうに消えてゆくことてあつた。時過ぎになつて、さんざめいてゐたお客も妓達もひつそりと寢靜まつてしまふ頃になると、必ず何處かの紙燭が力なくはためいて、眼にみえぬ息吹きが來て吸ひとつてでもゆくやうにいつともなくすうつと消えた。

或夜のことてあつた。

江州から一力へ遊びに來る大盡が酒に醉ひつぶれて奥座敷にたつた一人て寢てゐた。丑滿時になつて

頻りに渇を覺えるのでふつと眼を覺ますと、今迄點つてゐた筈の枕許の行燈の火がいつのまにか消え落ちて何處かでぺちやぺちやといふ異樣なもの音がひそかに聞えてゐる。不思議に思つてよく眼をとめて見ると、欄間からさす薄明りのなかに眞黑な猫の姿が朦朧とみえた。後足ですつくと立つて、背たけの延びるだけ體を延ばして、行燈の火口から頻りに燈油を甜めてゐるのである。その話しがぱつと家ぢうにひろがると同時に、今迄の異變は全くその猫の業ときまつて、誰れいふともなく妙な因緣話しが口々に傳へられた。主人をはじめ仲居達まで氣味惡がつて、到頭そのことのあつた翌日、その猫の體に魔除けの護符を結びつけて、東福寺の近くにある猫が辻へ捨てさせてしまつた。・・・・

「それからちうものはもうこの万亭はんへ寄せて貰ふのが恐わうてな、婢衆さんが逢ひに來やはる度に、どないにせうちうてよう姐はんを困らせましたえ。今から思うてみれば怪體な話やけど、その頃はそれ汽車やたら電信やたら云ふせうむないものがない時分どつしやろ。それよつてにそれてよう通じたんどすな。」仙吉はまたゆるやかに煙を吐きながら、昔を懷かしむるやうな眼色をして話をきつた。

「ほんまに恐い恐い話どすえなあ。」と、久勇は脣の色まで失つて、胸苦しさうに歎息をつきながら云つて、「行燈のとこまでいたときには、この先どないになるのやろと思ふて、私もう息もなにも出來んやうに恐わうおしたえ。」

「もう云はんとおいとくれやす。思ひ出しても寒うなるわ」雛子は圓らな眼を細めて哀願するやうに云つた。

「そやけど、油をねぶるところをとつくりおみやしたそのお客はんの氣はどうどしたろ。どのお座敷や、知らんけど、ちよつと考へてみてもぞうつとするえなあ。」おうめは久勇の方を顧みて云つた。
「ほんまにいな。私らやつたらきやッちうてそのまゝ死んでしまうたかも知れまへんえ。」
と、その時まで仙吉の後に坐つてぼんやりしてゐた春菊は面白さうに口を入れて、
「私やつたらぱつと電氣をともして、しつちうて追ふたるわ。」
「阿呆らしい。電氣もなにもない昔のことやわ。今まであんたはん何を聞いとゐたんえ。私もう春菊はんの顔みてると、てれくさうなつて來るわ。」久勇は春菊の寢惚けたやうな筋のゆるんだ顔をみると、耐らないやうにくすくす笑ひだした。一座はその聲に煽られてやつとまた少しづゝ氣が浮きたつて來た。
と、みると、縁側の障子には話に氣をとられてゐる間に、いつしか下椽のうへの處まで冴え返つた月光が一面に射しかゝつてゐた。處々に濃い庭樹の陰を倒して、濕氣を含んだ蒼白いその光からはしつとりした秋の夜寒が犇々と迫つて來るやうに思はれた。そして庭の面には啜れ細つた頼りなげな蟲の聲が斷えだえに聞えて、表座敷の方から漂つて來る遠い絃歌のさんざめきに縺れながら、大寺の庫裡のやうな廣間の壁に云ひ知れぬしめやかな情趣をひゞかせてゐるのである。
　何處か遠くの方て、婢衆たちが纖細い聲をそろへて、「はあい〳〵……。」と、言葉尻を長くながく引きながら手の鳴る座敷の方へかすかに返事をした。廊下を滑つてゆく足音も少時の間杜絶えて、花見小路の方からは思ひがけない燒栗賣りの聲が聞えて來る。

建仁寺の鐘がもうそろそろ鳴りはじめる頃である。

いつまて待つても松勇が顔をみせないので清三郎はいつになく焦れだした。彼は今夜ほどもどかしい思ひをして松勇を待つたことはなかつた。自分でも何う云ふ譯とも覺えずに唯彼女が姿をみせないのが無上に寂しかつた。しまひには到頭いつもの節制を失つて、突然歸るといひだした。

仲居をはじめ舞妓達までいろいろに言葉を盡して止めてみたか、彼はそれてもどうしても聞き入れなかつた。彼は自分で羽織をとつて着て、妙にいこぢな顏をしながらずたすた玄關口の方へ出て行つた。

「どうぞまたお早うお越しやしとくれやす。」玄關まて送り出した仲居は式臺に手をつかへて仕方がなさうに云つた。

あとから出て來た舞妓達は仲居の周圍に集まつて、

「さいなら。」

「さいなら。」

と、透きとほるやうな聲て口々に別れを告げた。

「おほきに。また寄せて貰ひますわ。」と、清三郎はわざと笑顏をつくりながら改まつた調子てそれに答へて、澁染めの暖簾をくゞつてその儘ついと戸外へ出た。

四條通りはまだ宵の口のやうな賑はひて、兩側の店から溢れ出る明るい店明りのなかには、道往く人

の姿が櫛の歯を挽くやうに流れてゐた。丁度座敷の出替りになる時刻なので、その間には箱を苧姆にも持たせた若い藝妓や、舞ふやうな格好をして戯れながら歩いてゆく舞妓の後姿も見えた。そして東山の眞正面からさし渡す月光がすべての物象の上に濃く淡く溶けてゐるので、一筋の町の色彩がしつとりとした夢のやうな感觸をもつてゐる。

清三郎は引き入れられるやうな果敢ない寂しさを覺えながら首を垂れて、そのなかを四條の大橋の方へ歩いて行つた。平常は何となしに興味を唆る妓樓々々のほの暗い出入口やさまざまの店の飾窓が、今夜は顧みるさへ厭はしかつた。

南座の前まで來かゝると、彼はふと行くての橋の上に苧姆につれられた一人の舞妓の姿をみた。青みがかつた艶やかな座敷着に、燃えたつやうな龜甲模様の紅いだらりをゆらめかしながら漸次と此方へ歩いて來る。彼等はやがて電燈と、繪看板の映り返へしして明るく照らしだされた芝居の前ではたと行きあつた。とみるとそれは思ひがけもない松勇だつた。清三郎ははッとして胸が破れるやうに踊つて來た。

松勇は伏眼がちに首垂れながら歩いてゐるので、五歩と距たゝらぬ間近に清三郎がゐるのを少しも氣付かないらしかつた。その儘靜かに木履を踏み鳴らしながら行き過ぎてしまつた。

清三郎は後を振顧りざま聲をかけやうとして、松勇といふ名が脣まで込みあげて來たが、周圍に歩いてゆく人顔をみると、妙に氣恥かしくなつてその儘ぐつと呑み込んでしまつた。そして四五歩橋の方へ歩みつゞけたが、到頭思ひ切れなくなつて、くるりと踵をかへしてまたもと來た道を一力の方へ引返

べしながら見え隱れに彼女の跡をつけて行つた。

人込みの間に、緋鹿の子のかけものを入れた京風の髷が浮いたり沈んだりしてゆく。ある時は明るい店明りのなかに紅い襟の出た肩から、だらりの片側だけがちら／＼と見えることもある。清三郎はそのつどにわくわくして胸を壓し狹まめられるやうな歡びともつかず、苦悶ともつかぬ異樣な感じに心を浸しながらついて行つた。

花見小路の角まで來ると、松勇が一力へ入ることが分つたので、彼は思ひきつてつゝッと足早に歩み寄つて、

「松勇はん。」と、後からそつと聲をかけた。

その聲で松勇は後を振顧つたが、格別顔いろも動かさず、

「ほ、川はん。」と、云つたぎりそこへ立留つた。

「あんた何處へいくのえ?」清三郎は彼女の傍へ歩み寄りながら、そわそわした聲できいた。

「万亭はんへ寄せて貰ふのどすえ。」

「さうか。ほんならもう行たかて駄目や。」と彼は態ととつてつけたやうに笑ひながら、「今迄待つてたけど來やへんよつてに、今歸るとこやな。」

「さうどつか。ほんなら知らしとくれやしたのはあんたはんどしたかいな。」

「ふん。私や。」

「まあ、まあ。ほんまにえらい濟まんこと。家からせいぜい急いて來たんどつけど、お客はんがどないにしても往なしとお呉れやしまへんもんどすかい………」と、細い聲て口籠りながら云ふ。

「京極へ行てたんやてな。えゝこと。」淸三郎は稍ゝ落着きを取りかへして、言葉の調子をかへながら揶揄ふやうに云つた。

「私、行きたいことはないのどつけど、さん子はんや、君蝶はん姐はんが喧ましう云はゝるもんやさかい、……ほんまに濟まんこと。どうぞ惡う思はんとおいとくれやすや。」

淸三郎は優しい申譯のやうなその言葉をきくと、その儘口を噤んでしまつた。ぢつと眼を据ゑて薄明りのなかに立つた松勇の姿をまじまじみてゐたが、やがて、

「これから何處ぞへお花に行くのやろな。」

「私、どうや知りまへん。」

「まあ、えゝわ。長うは引留めんさかい、そこらまで一緒に行つてえな。」

松勇は默つて合點いた。そして亭姆に一力の方を斷らせて、すぐ家へ歸る由を云ひ含めて歸へしたあとて、彼女は淸三郎と肩を竝べてぶら〳〵祇園社の方へ歩いて行つた。

途々、ふたりの間には格別とり留めた話もなかつた。時々淸二郎が何か云ひかけると、松勇は言葉少なに熱のない返事をするばかりて、浮名のたつやうな情緒が彼女の胸に燃えてゐるらしい兆候は微塵もみられなかつた。何かしら淡い豫期をもつてゐた淸三郎は、それをみると相手がたつた一人きりてゐる

だけに、ひどくもどかしい失望を覺えない譯にはいかなかつた。そしてそれと同時にさまざまな疑惑が胸に湧いて、自然と氣の塞まるやうな沈默に落ちて行つた。

石段を上つて、祇園社の境內へ入ると、月の光は葉陰に遮られて石舖きのうへには斑のやうな美しい斑點が數限りもなく零れてゐる。眞暗な樹下道には常夜燈の光が濕んだ眼のやうに點つて、木履の音はその奧でかすかな木魂をよんでゐる。枯れ落ちた木の葉の匂ひがじめじめと何處からともなくほのかに匂つて來る。

「ほんまに寂しいえなあ。」と、清三郎は心の底からさう感じてゐるらしく呟いた。松勇はその聲でちよつと顏をあげたばかりて、返事をしなかつた。

祠を右にみて、裏道を廻ると、やがて廣々とした圓山の公園へ出た。爪先あがりに東山の山腹へ展がつてゐるなだらかに傾斜には人影も絶えて、眞晝のやうな明るい月光ばかりがわがもの顏に一面に射し渡つてゐる。樹々の葉末や芝草の上にはもう露がきらきら光つて、吹く風もないのに夜寒が袖口から森森としみ渡つて來る。

「寒いな。歸らうか。」清三郎は松勇の方を顧みて云つたが、また何か思ひついたやうに、「どうせ此處まて來た序や。一遍智恩院へあがつて、ほして歸らう。」と、云ひながらずんずん先へ立つて歩きだした。

高い石段を息せき登つて、二人はやがて智恩院の境內へ入つた。こゝも一山闃として、月の光ばかりが徒らに寂しさを添へてゐる。宏壯な本堂の扉はもう悉く盲ひたやうに閉ざゝれて、大屋根の庇かその

面に異黑な陰影をくつきりと印してゐる。耳をとめて聞くと、水盤から水の滴り落つる音が忍びやかに聞えて、限りなく展がつた幽寂の底に一脈の深秘を響かせてゐるのである。

二人は本堂の階段の下へ歩み寄つて、砂塵を拂ひ落しながらそこへ腰を下ろした。濟三郎は今ごろ何か松勇の胸にしみじみと應へるやうなことを云つて、彼女の心を喚かさなければならぬと思ひながら、四邊の靜けさに氣壓されていつかその言葉さへ思ひ出せないやうになつてしまつた。唯折々瞳を据えて半面に月光を浴びた美しい松勇の姿をつくづくと眺めつくすばかりであつた。

少時すると、何處からともなく異樣なもの音が響いた來た。靜けさの底から律を刻むやうにそのもの音は絶えず同じ間隔をおいて陰々と響いて來る。よく耳を澄まして聞くと、それは廣縁を傳つて來る足音で、やがて本堂の曲角から一人の背の高い僧がぬけてたやうにふうわりと月光のなかへ姿を現はして來た。異黑な法衣から白襟と、下着の裾だけがくつきりみえて、宙に浮んで居るやうに漸次と此方へ近寄つて來る。そして大前まで來かゝると、そつと立止つて、珠數を爪繰りながら閉ぢられた扉に額を押しつけるやうにして少時の間默禱した。それが濟むと今度は階段を二三段下りて、氣味惡さうに顏を背けてゐる二人の姿を後からぢつと見入つてゐる容子であつたが、やがて不意に若々しい聲をだして、

「あんたはん瀧川はんやおへんか？」と、臆面もなく訊ねた。

濟三郎はびくりとして振顧つた。よくみると、それは本家の隱居所へ法要ごとに出入りする本山の若僧だつた。

「ほう、浮念はんでしたえなあ。えらい失禮を。」

と、彼はその儘立ち上つて丁寧に挨拶をした。

「こら惡いところへ來ましたな。丁度お邪魔をしに來たやうなもんどすなあ。はゝゝ。」と、若僧は氣のよさゝうな笑聲をたてゝ、「此頃は大分よ祇園町へ凝つとゐやすちう噂は聞いてましたけど、御盛んで羨ましうおすなあ。」

「阿呆らしい。」と、清三郎はどぎまぎして、「餘り月がえゝもんどすさかいに、つい浮かれてこゝまで上つて來たまでのことどつせ。」

「さうどつしやろ。どないにしてお月見ちう風に見えませんなあ。はゝゝ。」と、若僧は柄にない捌けた調子で輕い皮肉を弄する。

「てんがう云はんとおゝきやす。そやけどあんたはん、今頃お勤めどつか。」清三郎は仕方なしに語をそらさない譯にはいかなかつた。

「さうどす。毎晩十時にこないにして山を見廻はるのが私の役目どすがな。叶ひまへんな。これから大方丈、小方丈を廻つて、大師堂から御廟のうへまで上らんなりまへん。」と、若僧は月光のなかに片手だけ出して、白い指先で珠數を弄びながら云つたが、やがて何と思つたか、「どうどす。これから一緒に大方丈をお廻りになりまへんか？夜はしんとしてゐてそらほんまに宜しいえ。」

「おほきに。さぞ宜しうおつしやろなあ。」と、清三郎はひどく好奇心を唆られたやうな調子で答へたが

「いて見度うおすけど、女連れどすさかい……。」
「ほんなら舞妓はんも一緒に連れといてやす。もう誰れもゐやしまへんさかい、大事おへん。」
清三郎はそれを聞くと急に行く氣になつて、俯向いてゐる松勇の方を顧みて、
「どうえ？いてみるか？外に誰れもゐやはらんちやはるさかい、だんないやないか。」
松勇はまた默つて合點いた。
やがて二人は下駄をぬいて階段の裏へ隱して、その儘若僧の後に從つて廊下傳ひに奥へ入つて行つた。はじめは誰れかに後見られるやうな氣がしてびくびくしてゐたが、幸ひにほかの僧にも出逢はなかつたので、その杞憂は少しづゝ消えて行つた。
本堂から執行所へ入ると、人氣のない大廊下には處々に鐵骨の古風な行燈が掛けてあつて、朧ろげな光に彩られた四邊の氣勢がみるから大寺院らしい嚴かな感じを與へる。執事溜りや、彼方の大臺所の部屋部屋もひつそりと更け靜まつて、柱時計の音ばかりが寂しく時を刻んでゐる。そして大廊下を行き盡して幾曲りかすると、ほの暗い行燈の陰に常侍局と書いた札の下つた入口があつて、そこから右へ入るともう大方丈だつた。
大方丈はそれこそあやめも分かぬ眞暗がりだつた。四方に取り廻はした内廊下を手探り足探りにこつそり通つてゆかなければならなかつた。闇の底からは何處からともなく冷たい風が頸筋へ絡はるやうに忍び寄つて來て、古めかしい木の香や、しめつぽい香の匂ひがすうつと鼻を打つ。そして足音を忍べば

忍ぶほど鶯張りの床が聲高く鳴り響いて、何となく陰森とした氣が足許から湧き上つて來るやうに思はれた。

通ひ馴れた若僧はずんずん先へ歩いて行つて、二十歩に一度ぐらゐづゝ立止つては後から來る二人を待つた。清三郎も松勇も俄盲人になつたやうに障子の面や、板戸の面を撫でまはしながら、薄氷を踏むやうな思ひでやつと一歩一歩足を運んだ。

「此處が鶯の間どつせ。こないにして毎晩廻つて歩いてゐると、杉戸に描いてある繪に觸つてみたゞけて、何の間やちうことがよう分りまつせ。」と、若僧は得意らしく事もなげに云つた。

成程、さう云はれてみると間によつて杉戸の手觸りが少しづゝ違つてゐる。元信や、永德の筆によつて描かれた名畫は、顏料は消えても、木の面だけはくつきりと盛りあがつて、匂やかな筆勢の痕を殘してゐる。暗闇に脅威された神經はいやがうへに指の尖端へ働いて、その微妙な構圖の變化が針のやうになつて胸の底まで滲み入つて來る。

「ほう、こゝが菊の間や。」などゝ呟きながら若僧は杉戸の處へ來る度に立止つた。そして闇のなかゝら眼を瞬つて此方を瞻つてゐるやうな調子でひそひそとあらぬことまで說明して聞かせた。

そのうちに闇が漸次と視覺に馴れて來て、廊下の構造がそれとなく呑み込めて來ると、清三郎は何がなしに急に氣が變つて、かうした人眼のない暗がりのなかで、松勇の柔らかな體に手を觸れてみたくて耐らなくなつて來た。それとなく機會を伺つてゐると、やがて彼女はふと敷居を跨ぎそこなつて、ごとり

と音をたてながら彼の腕へ手を投げかけた。それをきつかけに彼は到頭、「危いよっ」と、云ひながら、冷たい白絹のやうな手觸りを持つたその手をしつかりと握りしめた。彼女は初めは避けるやうに柔らかな力でそつと振りきらうとしたが、少時たつと、もう默つて彼のなすがまゝに任せてゐた。清三郎はほんのりした温みの通つて來る小さな肩の觸感や、媚びるやうに漂つて來る白粉の香に引入れられて、氣が遠くなるやうな快感に胸を躍らせてゐた。

「その彼方が御前樣の御居間どつせ。」と、若僧は突然小聲で云つた。その聲があんまり耳近く聞えたので、清三郎はひやりとして、突如松勇の手を離した。そして思はず顔を振りあげると、外戸の上の明り窓にはほのかな燈火の光が映つてゐる。何處から射して來るのか、その光の影はぼんやり幻のやうにゆらめいて、何とも云へぬ神々しい色に見えた。若僧はその儘、彼等の身近に立つて、拜でもするのか、珠數の音をかすかにさらりと鳴らせながら、少時の間身動きもしなかつた。

それから後は何となく妙に氣が焦だつて、再び松勇の手を握らうとする度に、電氣にでも打たれるやうな小刻みな戰慄が清三郎の四肢に走つた。もとのやうに肩は近づけてゐても、暗闇のなかの何處かに彼等を凝視してゐる恐ろしい瞳があるやうに思はれて、指先を松勇の手に觸れることすら何うしても出來なかつた。そのうちに彼等は到頭大方丈から小方丈へ通ふ渡廊下の處へ出てしまつた。

そこは戸がさしてないので、眼の覺めるやうな銀色の月光が一面に射し込んでゐた。庭の面には雪のやうな白砂が敷いてあるので、その反映が庇裏まで明々と照らし出してゐる。その明るみのなかへ、鼠

ひがけもなくすつと立つた松勇の姿はまるで此世のものとは見えないほど美しかつた。髪のかゝりから衣裳や長帶まで現實の姿とは似てもつかぬ妖艶な色彩をみせて、眩ぶしさうに半ば瞑つた眼や、きつと結んだ唇が名匠の鑿に刻まれた處女の姿のやうに輝いてゐた。清三郎は貪るやうにその横顔を凝視してゐたが、歡びに充ちた感激はやがて漸次と胸の底に殺到して來て、この女ばかりは永遠に自分のものにしなければならないやうな強い強い慾望が燃えて來た。

歸途、祇園社の暗闇から賑やかな四條へ出ると松勇はどうしたものか急に口數をきくやうになつて、四邊を見廻はしながら、

「もう遲うおすやろなあ。」と、訊いた。

「まだそないにもないやろ。さつきから一時間も歩るいてゐやへんぜ。」

「さうどつしやろか。」と、彼女は疑はしさうに云つて、つくづく厭だといふやうに歎息をつきながら。

「私、これからまたお花にいかんならん思ふと、ほんまに厭になつて來るのどつせ。」

「そないに云はんとおゝき。えゝ人がたんと待つてるやろ。」清三郎ははじめて揶揄ふやうに云つた。

「まあ、好かんこと。私にえゝ人てあらへんわ。」と、彼女は無邪氣に云つて、拗ねるやうに肩を落した。

そして、少時の間默つてゐたが、急に親しげな調子になつて、

「私の好きな人はあんたはんどすやないか。せんどな、女紅場で温習會のお稽古があつた。その折にな

皆して私に誰れが好きや云はゝるさかい、私は川はんが好きや云ふたんどつせ。ほしたらな皆してきつう嬲らはつてな、何處へいたかてあんたはんの好きやんは川はんや云ふて喧ましう云ふて呉れやはるのどつせ。私もう晴れがましうて晴れがましう叶はんわ。」

清三郎はそれをきくと心持ち顏を赧めながら側を向いて、

「あんたがそなこと云ふさかいや。そやけどあんたも迷惑なゝあ。」

「迷惑ちうことはおへんけど、……」と、云ひ澱んでゐたが、やがてまた急に氣を變へて、「なあ、へ、川はん。この頃に一遍何處ぞ遠い處へ連れていて欲しいわ。」

「そらえゝな。何處がえゝやろ。」淸三郎もその言葉と一緒に浮き立つて云つた。

「さうどすな、あんたはん何處がえゝとお思ひやす。」

「あんたの好きな處やつたら何處でもえゝやないか。」

「ほんなら嵯峨にしまほか。私嵯峨がいつち好きどつせ。こんな月のえゝ晩やつたら、ほんまにようおつしやろなあ。」

「嵯峨もえゝな。」と、淸三郎は考へてゐたが、やがてそれと決めたらしく、「明日の晩方から行かうか。」

松勇はそれを聞くと嬉れしさうに笑つて

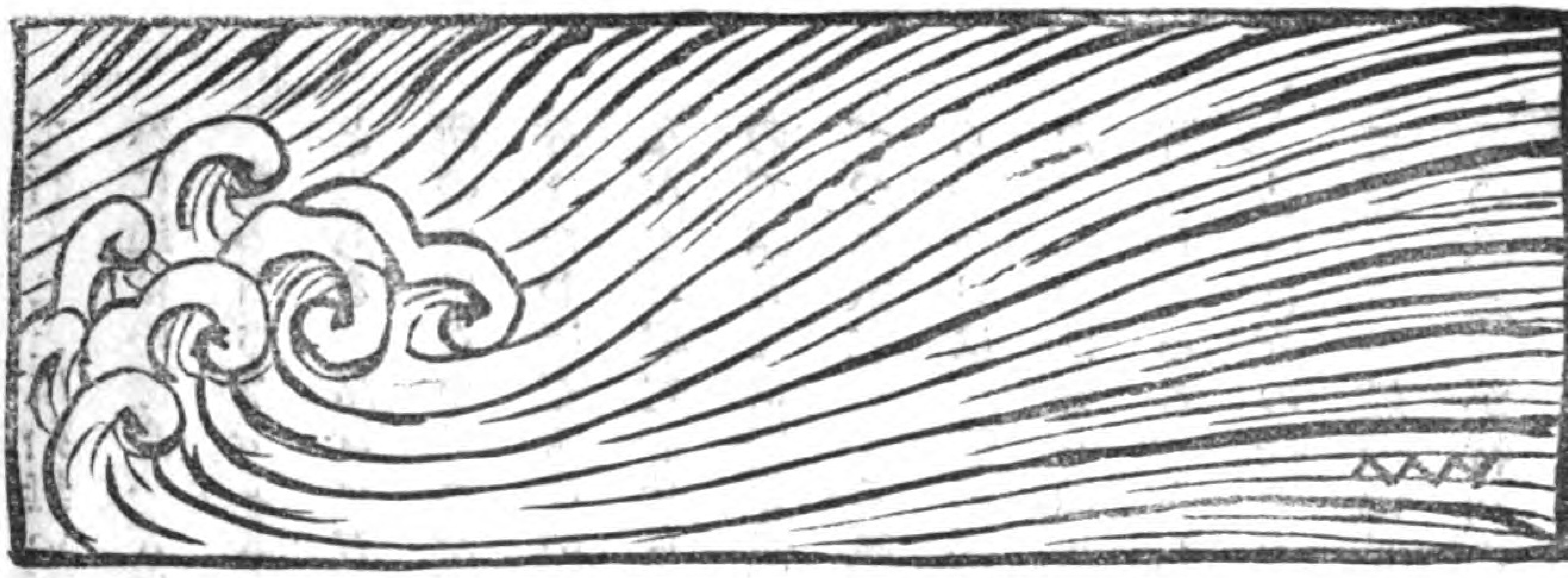
「ほんまどつか。ほんまに連れつとくれやすか？おほきに。それやつたら私明日朝からちんと支度して待つてまつせ。」

「さうおしやす。月のあるうちやないと嵯峨も面白うないさかいなあ。」
「さうどす。光葉はん姐はんな、あの妓今夜お客さんと一緒に連れつておくれやしたんどつせ。私羨ましうて羨ましうて叶はんのどすがな。」と、彼女は嬉れしさに胸が躍るやうな眼眸をしてぢつと清三郎の顔を見た。今迄にないその打解けた容子を見ると、彼は一段と深い或ものを彼女の瞳の底に發見したやうに思はれて無上に胸が込みあげて來た。
こんな話をしながら歩いてゆくうちに彼等はいつのまにか、末吉町の方へ曲る角まで來てゐた。松勇の家はそこから右に折れた橫町にあるので、淸三郎も一緒にその角を曲つた。と、その時、向ふから賑やかな木履の音が聞えて、座敷踊りらしい舞妓が三人ほどひとかたまりになつて、何ごとか笑ひ興じながら薄暗のなかゝらついと出て來た。
彼等は出遇ひがしらに松勇の顔をみると、驚いたやうに立止まりながら、
「ほ、松勇はん。」と、呼びかけて「何處へお行きたんえ？」と、口々に訊いた。
と、松勇は餘り突差のことなので恥かしさうにどきまぎしながら、
「万亭はんへいてた。」と答へて、その儘先へ行きすぎやうとした。と、一人の舞妓はまた眼早く淸三郎の姿をみつけて、
「ほ、川はんどすやないか。いけずやなあ。」と、大きな聲で云つて、皆と一緒に聲をそろへてくすくす笑ひ出した。それを聞くと淸三郎は何か惡いことでも犯したやうに肩をすくめて、何の考へもなくすた

すた足早に彼等の群から遁げていつた。そして先へ行つた松勇のあとを追ひながら少時經つてそつと後を振顧つてみると、舞妓達はまだ角の煙草屋の店明りのなかへ立塞がつてゐて、眼ひき袖ひき笑ひながら此方を見送つてゐた。

　明日はまたいろいろな浮名が彼等の唇から方々へ語り廣げられるのかと思ふと、清三郎はその刹那、却つてぞくぞくするやうな嬉れしさが五體に漲つて來るのを覺えた。そして嵯峨野の月夜に、二尊院あたりの樹立の陰で蟲の音を聞いたり、嵐山の欄間で水に碎ける月影をみたりしながら松勇とふたりで話し合ふことの出來る明日の樂しみは心に描いてみるさへ胸が割けるやうに思はれた。彼は、急に素氣なく默り込んで一足さきに首垂れた儘歩いてゆく松勇の白い襟脚のところをみつめながらうつとり夢のやうな氣持ちになつてとぼとぼと隨いてゆくのであつた。

（をはり）



鎚一下

鷗外

己が新橋へ人を送りに往くことは度々である。少くも平均一週間に二度位は往くだらう。己に送られる人には、特別列車乘つて立つ人もある。併し一等室に乘り込む人が、先づ最多數を占めてゐる。二等客となると、大ぶ稀である。多くの場合には其人の東京を離れるのを、數日前から新聞が吹聽してゐる。當日には警官が停車場の内外を見廻つてゐる。場内には見慣れた或る憲兵科の佐官の顔が見える。石畳は綺麗に掃除して、如露で打水がしてある。其人が特別に高貴な方だと云ふと、プラットフォオムの入口まで氈を敷いて、それから先きへは普通の旅客を入れぬやうにしてある。

送られる人と己との關係には親疎種々の別がある。全く面識の無い人を送つ

て行くことは殆無いが、語を交へたことは一度か二度に過ぎぬ位疎遠な人をも送つて行くことがある。殊に地位の極高い人には蔭ながら敬意を表して、己は山を賑はす枯木の一本としてそれを送るのである。

或る日さう云ふ人を送りに往つた時、こんな事があつた。其人は只一度食卓を共にして語を交へたことのある、高貴な方である。それが汽車の出るより早く停車場に着いて、休憩所に入られた。己は休憩所の外に立つてゐた。するとその人の前に進んで暇乞をするものがぽつ〳〵ある。己は特別に入懇にせられたわけでもないので、差し控へてゐた。その時己の隣に己より階級の低い人が立つてゐて、己に「あなたもお暇乞をせられてはどうですか」と囁いた。「さあ」と云つて、己は躊躇した。なる程同じ階級のもので、暇乞に出たものも、それまでに二三人あつた。己は繼子根性のやうに誤解せられたくは無い。そこてつひ暇乞をする氣になつて、二三歩進み出た。忽ち一人の男が己の右の肩尖に手を掛けて押し戻しながら、「今日は一般の謁見はありません」と云つた。己は驚いて一歩下がつた。そしてその男と顔を見合せた。其男は知らぬ男である。併し或る團體の或る階級の服装をしてゐる。己も或る團體の或る階級の服装をしてゐる。そして其男の階級は己のより低い。

己は自分の修養の足らぬことを告白しなくてはならない。己は一瞬間怒を發して其男と相對して立つてゐた。一般の謁見の無いことは己も知つてゐる。併し同じ階級のものが二三人出た跡である。そしてその二三人が特別の用務を帶びてゐなかつたことは、周圍の狀況から判斷することが出來る。己の出さうにした時、其男の拒んだのは、發車の時間が次第に近づいて來た爲めもあらう。又暇乞に出る人數が

餘り多くなるのを憚つた爲めもあらう。時間を斟酌し、人數を制限するのは、高貴な方の隨員たる其男が、職務を執行する上に於いて、當然の事であらう。併しなぜ己の肩尖を衝いたか。己は高貴な方の前へ驅け寄りはしない。徐かに歩いてゐる。言語を以て抑留するに、十分の餘裕がある。若しそれをも間だるく思ふなら、なぜ己の前に立ち塞がらない。なんの必要があつて肩を衝いたか。

己は告白しなくてはならない。それは己が其男と相對して立つてゐた瞬間に、二つの概念が己の寫象の前を掠めて過ぎた事である。一つは「城鼠社狐」と云ふ概念であつた。これは漢文で書いた歴史を讀ませられた時、己の意識の上に黏り附いた套語から出てゐる。今一つは「決鬪」といふ概念であつた。これは西洋の本を讀むやうになつた後に己の受けた印象から出てゐる。勿論侮辱とか復讐とか云ふことは、どの國にもあるが、功利主義の一時盛んになつた頃に人となつた己は、洋行した後に始て Point d'honneur などと云ふものに支配せられてゐる社會を、目のあたりに見て、やう〳〵決鬪と云ふものを自分の身邊に存在する事實として認めたのである。

併し己の肩を衝いた男と相對して立つてゐて、そんな事實が己の意識に上つたのは、眞に一瞬間の事である。一體己は何事によらず、意志の第一發動を其儘行爲として現したことが無い。これは怯懦かも知れない。若しこれに沈着と云ふやうな美德の名を附けたら、それは文飾であらう。兎に角利害關係から見れば、己は此性質のために屈辱を甘んじ受けることが多い。そこで右の場合にも、意志の第一發動はたわいもなく消えてしまつて、己は忽ち反省した。そして己の怒を發したのは、かの高貴な方に對して

己の持つてゐなくてはならぬ尊敬が、まだ十分でなかつたのだと悟つた。

己はさう思つてからは、二目と其男を顧みなかつた。そして幸な事には其男の顔が己の記憶の中から全く消えてしまつた。事によつたら今日互に名を知り合つて、語を交してゐる人達の中に、其男が交つてゐるかも知れない。そして其男は己を怯懦な人間として記憶してゐるかも知れない。併しそんな事はどうでも好い。

又或る日矢張目上の人を送りに往つた時、こんな事があつた。其人は顯要の地位に居る人である。餘り階級の懸隔した人なので、公用では毎日のやうに語を交へてゐても、今日のやうなはれ〴〵しい日になると、己は努めて近所に寄らずにゐる。己はけふも隅の方に立つてゐた。すると隣に或る皮肉家がゐて、己に囁いた。「どうだい。皆物欲しげな顔ばかりだなあ。」己はこれを聞いて只無意味に微笑した丈でおつたが、實は心中に強い刺戟を受けた。此詞は魔の杖の如くに、己の周圍の紳士淑女を獸の姿にしたのである。なる程さう云はれてから見ると、どの男もどの女も、今日立つて行く人に何物をか求めてゐるらしく見える。それから己は自分を顧みて見た。實際今日立つて行く人には、まさか己を生かしたり殺したりすることは出來ぬが、少くも己を浮ばせたり沈ませたりすることは出來る。そして其人に睨まれたくないと云ふ情は、慥に己の心のどこかに潜んでゐる。して見れば、己も獸の群の中の獸である。己はむねが惡くなつた。このむねの惡い己の心持は、停車場を出た後まで殘つてゐた。

己はこんな事を書く積で今日筆を把つたのでは無い。己はけふ珍らしい人を送りに新橋へ往つたので、その記念を書いて置かうと思つて紙に臨んだのである。

此人は己のためにはけふまで未見の人であつた。己はけふ新橋で初對面をして、其儘別れたのである。此人と云ふのはH君である。己がH君の名を聞いたのは、四箇月程前の事であつた。己は年來交際してゐる牛込の男爵の家を訪ねて、書齋で話をしてゐた。すると執事の老人が男爵に電話を取り次いだ。それがH君の自分で掛けた電話であつたか、それとも誰やらがH君の事を傳へた電話であつたか、己には分からずにしまつたが、兎に角執事はH君の名を口にした。男爵は執事に何事か命じて置いて、己にH君の事を話した。

話はかうである。長門國に秋吉と云ふ所がある。そこから大理石が出る。併しその採掘は利益が少いので、企業家が手を着けても持續して行くことが出來ない。Hは現にそれを採掘してゐる。そしてそれを採掘するのに、尋常の企業家のやうに、勞働者を使つてゐるのでは無い。Hは多くの不遇の青年を諸方から集めて、基督教の精神を以て、同胞として彼等を待遇して、自分も一しよになつて勞働してゐる。或る年Aと云ふ人がその仲間に這入つた。Aは非常な癇癪持で、それがために官を失ひ獄に下つたことがある。その後どこにゐても折合が惡かつたのを、Hがとう〳〵引き受けた。二年程一しよにゐるうちに、Aは新しく仲間に這入つた青年と爭論をして、そしてHにその青年を放逐することを要求した。Hの細君が傍からAを諫めて云つた。ここは世の人が惡いと云ふ青年を入れる所だから、わるいからと云

つてこから出すことは出來ない。どうぞ人を責めずに己を責めて下さいと云つた。Aは持前の癇癪を起した。そしてHが默つて細君に詞を盡させたのを責めて、出刃庖刀で切つて掛かつた。庖刀にHには中らないで、Hの細君の腕に中つた。その時細君は死を決して、讃美歌を誦した。Aは驚いて、夢の醒めたやうになつて、自殺しようとした。周圍のものがそれを止めた。それからはAもHの眞の同胞のやうになつて、現に或る慈善事業に盡瘁してゐると云ふのである。

己は男爵の話を聞いて、ひどく感動した。それには昔の獻身者の物語に似た事を、現に生存し活動してゐる人の上として聞いた、好奇心の滿足も加はつてゐるに相違ない。又その獻身者のやうな夫婦が大理石を掘つてゐると云ふことが、一種の象徵のやうに、己の感受性の上に作用した所もあるに相違ない。なんとか云ふドイツの女の詩にこんな句があつた。「われは鍛匠を羨む。鎚の一下を以て日々の業を始む。」己は此句を昔一度讀んで、今に忘れずにゐる。H君夫婦はその鎚の一下を以て日々の業を始めてゐるのである。基督教嫌のニイチエは、既に人に片頰を撃たれて、更に今一方の頰をも撃たせようとする道德は、奴隷の道德だと云つた。その奴隷の道德を奉じてゐる人達が、鎚の一下を以て日々の業を始めてゐるのである。

併しおもに己を感動させたのは、其事ではなくて其人である。己の男爵に聞いた物語めいた事實は、譬へば斷えず流れてゐる水が偶〻石に激せられて沫を飛し、斷えず燃えてゐる火が偶〻風に煽られて燄を閃かしたに過ぎない。爰に社會から虐待せられつつ育つて來た青年の一人と交る人があるとする。其人

の生活は決して平穏ではあるまい。さう云ふ青年が寄り合つて出來た集團の中央に、幾年の久しい間身を置いて、その一人一人に人間としての醒覺を與へようとしてゐるＨ君の生活は、實に驚くべきものではないか。己の感動したのは、Ｈ君の此日常生活を思つて感動したのである。

己はすぐにかう云ふ事を思ひ立つた。それは己も物を書く人間になつてゐて見れば、いつかこんな人の生活を書いて見たいと云ふのである。己は此心持を男爵に話した。そして間もなくＨ君と手紙を取り交す間柄になつた。多分男爵も己の名を先方に傳へてくれた事であらう。

それから己はＨ君の上に就いて、なるべく多くの事を知らうと努めた。己は今も猶それを努めてゐる。己は種々の事を問ひに遣つて、Ｈ君の回答を煩はした。Ｈ君の書いた物、話した事の筆記などを借りて讀んだ。Ｈ君は己に寫眞を贈つてくれた。

扨己がけふ日々勤めてゐる役所に出てゐると、葉書が二枚屆いた。二枚共署名者はＨ君で、一枚には火急の用事があつて上京したから、暇を得次第逢はうと書いてある。今一枚には秋吉からの電報に接して、午後三時五十分に新橋を發する、遺憾ながら逢はれないと書いてある。後の葉書は速達にして出したもので、丁度午頃前の葉書と同時に己の手に屆いたのである。

己は非常に嬉しかつた。いつもより早く役所の用事を片付けて、發車時間の十五分前に新橋停車場に往つてゐた。

己はこれまでの通信の結果として、H君が財産を作つてゐないことを推察してゐる。H君は十一年前大理石を採掘し始めた。七年前に工場の大擴張をする機會があつたのに、H君はそれがために秋吉が婬靡な土地にならうかと恐れて、わざとその機會を逸してゐる。六年前にH君は一旦破産して、五年前に漸くその負債を銷却してゐる。四年前に外國へ積み出した石が碎けて、H君は再び破産し、工場を人手に渡して、又やう〳〵それを取り返してゐる。さうして見るとH君は財産を作つてゐる筈が無いのである。併し己は考へた。H君は兎に角全國の官業民業の大會社と取引をして、外國へも石材を輸出してゐる大工場の主人であるから、縱ひ苦痛を忍んでても體面を取り繕つて、一等客として旅行しはすまいか。いや〳〵。H君の人物を思へば、どうもさうでないかも知れない。平氣で三等客として旅行するかも知れない。己はかう思つて先づ三等の待合室を物色した。H君はゐない。それから一、二等の待合室に往つて見た。そこにもゐない。

ふとプラットフォオムの方を見ると、もう三時五十分發の汽車に人を乘せてゐる。己は急いで埒の外へ出た。急行列車の長い連鎖が、長い石壘の左側を殆ど全く占領してゐて、そこにもここにも見送の人が群をなしてゐる。勳章を佩びた將校の群に送られる人もある。社會の上層に位する紳士淑女の群に送られる人もある。學校生徒らしい青年の群に送られる人もある。己は一つ〳〵汽車の窓を覗いて見ながら、H君らしい人を搜した。寫眞を貰つてゐるので、風采を想像することが出來たのである。

食堂車の繫いである邊の窓の前に、看護婦らしい女子大勢に見送られてゐる人がある。己は若しやと

思つて其の窓を覗いた。それは救世軍の帽を被つた人てあつた。

己は遂にあらゆる群を背にして進んて、もう前には機關車に接續した三等車が二箱ばかりしか無くなつた。此邊は石壘の上が殆空虛になつてゐる。己はそこに僅に徘徊してゐる二三の人を仔細に視た。

一番目立つたのは、ずつと前の機關車の側に、白髮白髯の老人が羽織袴に紺足袋、日和下駄と云ふ、老書生染みた風をして屹立してゐるのてあつた。これは名高いM君て、草鞋掛て全國の產業を見て廻る人てある。

それから少し離れて手前の方に、背廣を着て折鞄を腋挾んだ人が、身なりの質素な、圓髷の婦人と話をしてゐる。その背廣の人が寫眞のH君らしい。

己は側へ歩み寄つた。「H君てはありませんか。」H君は己を誰とも判斷し兼ねた樣子て、暫く顏を見てゐた。己は自分の名を言つた。

H君は己の逢ひに來たのを丁寧に謝した後、圓髷の婦人を顧みて己に言つた。「長女てす。」圓髷の婦人が己に會釋した。

「そんなら武子さんてすね」と己は云つた。

己はH君に言つた。「大そう急な用事て御上京になつたのださうてすね。」

「えゝ。矢つ張周圍の窘迫を受けてゐる青年の事て。」

「はゝあ。思想問題てせうね。」

「さうです。むづかしい時代です。」
「どうも目上のもののそれに對する處置が、一般に宜しきを得ないのですから。」
H君は頷いた。「舊思想を強ひようとするのは駄目です。」
「片附きましたか。」
「此汽車に載せて一しよに連れて歸るのです。」
話はここに盡きた。
暫くしてH君は己に問うた。「M君を御存じですか。」
「えゝ」と己は答へた。これはM君がどんな人だと云ふことを知つてゐると云ふ意味であつて、交際があると云ふ意味ではなかつた。後に氣が附いて見れば、H君は己をM君に紹介してくれようと思つたのだから、己は肯定するより否定した方が好かつたのである。
H君は武子さんをM君に紹介した。
己はM君に自分の名を言つた。
M君は己に「秋吉に往つて御覽でしたか」と問うた。
「まだ往きません。併しいつか往つて見たいものです。」
己の背後には矢張H君を送りに來た人が今一人ゐた。背の低い、頒白の老人である。H君はそれを己に紹介した。丁度己が其人に挨拶してゐると、埒の方から日傘を持つたお婆あさんが一人驅けて來て敬

車前に間に合つたのをひどく喜ぶらしく、H君の耳に就いて何事をか囁いた。H君を送るものは武子さん、M君、背の低い老人、日傘を持つたお婆あさん、それに己を合せて五人てある。

發車の信號が響いた。H君は凝立して何か深く考へてゐるらしく、車に乘らうともしない。「H君、早く乘り給へ」と、己が催促した。H君が乘つた時には、車はもう徐かに動き出してゐた。M君が先づ此場を立ち去つた。武子さんは汽車の出て行く方に向いて立つて、首を垂れてゐる。祈禱をしてゐるのてはあるまいかと思つて、己は暫く猶與してゐたが、餘り久しくなるので、暇乞をして歸つた。

己が新橋の停車場て送つた人の數は多い。併しけふH君に初めて逢つて、すぐにそれを送つたやうに、己のために意義のある出來事として記憶すべき場合は、これまて極めて少かつたのてある。此記事は少し長いのて、己はそれを日記に書く代りに、別の紙に書いた。

H君の生活を書かうと思ひ立つた己の望は、いつ遂げられるか知らぬ。事によつたら昔ギヨオテがグレエトヘン悲壯劇の筋を話すのを聞いて、それを先に書いた人があるやうに、此記事を見て、先にH君の事を書く人が出て來るかも知れない。若し今日文壇て老耄者を以て過せられてゐる己よりも、それを先に書く人が旨かつたら、ギヨオテの先例とは反對に、己は安んじて初め書かうと思つた事を終に書かずにしまふかも知れない。(一九、一三、六、一三)

七月十五日に發行すべき本誌臨時增刊

婦人問題號

の豫告は本號卷頭の折込廣告に詳かなり

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田表神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但清國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　本鄕西片町十番地反省社　と指定し拂渡局を　東片町局　と指定あれば途中盜取の憂なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込　をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし
　一金一圓迄　金五錢
　一金三圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢
　（集金委托料及送逵料）
一受領證請求　は必ず返信料金を要す

大正二年六月廿八日印刷納本
大正二年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
反省社
電話下谷一九一九
振替東京三十四番
電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
[illegible]六月[illegible]八日印刷納本

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す